一般国道10号線

中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書(4)

伊藤田遺跡群

1992年3月

大分県教育委員会

一般国道10号線

中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書(4)

伊藤田窯跡群

1992年3月

大分県教育委員会

調査地域空中写真（東方向から）－平成３年12月撮影－

草場窯跡全景（南方向から）

序

大分県教育委員会は昭和57年から昭和59年にかけて、建設省九州建設局大分工事事務所の委託を受け、中津バイパス建設予定地のうち中津市洞ノ上～野依に所在する伊籐田窯跡群の調査を実施しました。この報告書はその発掘調査の記録です。

この地域はかねてから東九州有数の古代窯業地の一つとして知られています。今回の調査により、その実態について多くの成果をあげることができました。本書により多くの学術研究者また県民の皆様にあらためてこの地域に生きた先人たちの営みを振返り、また将来に守り伝えるべき歴史遺産の一つとして埋蔵文化財を御理解いただく契機となれば幸いです。

最後に、調査の御指導をいただきました諸先生方をはじめ、調査に御協力いただきました関係各位及び地元の方々に対し、深く敬意を表すと共に、厚くお礼を申し上げます。

平成 4 年 3 月

大分県教育委員会

教育長　宮　本　高　志

例　　言

1　本報告書は一般国道10号中津バイパス（小平～野依間）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、建設省九州地方建設局大分工事事務所の委託事業として大分県教育委員会が実施した。

3　本書の執筆者は次のとおりである。

第１、２、３、４、６章　　小林　昭彦

第５章　自然科学的調査の結果

1　伊籐田窯跡群の熱残留磁気による地磁気年代　　時枝克安・伊藤晴明

2　伊籐田窯跡群および各遺跡出土須恵器の蛍光Ｘ線分析　　三辻　利一

3　草場窯跡出土炭の樹種　　城井　秀幸

ＳＵＭＭＡＲＹ

4　遺物の実測、トレース、写真撮影などの作業は、小林、吉武牧子、阿部みゆき、安倍聡子が主体になり、あるいは補佐して行った。又、草場の中世墓出土鉄器については宇佐歴史民俗資料館の主任研究員山田拓伸氏に依頼した。

英文要旨については、和歌山県今福教会の Fr. Leonard R. Lavallee に訂正、加筆など全面的な指導を受けた。

5　本書の編集は、小林が行った。

目　　次

第1章　調 査 の 概 要 …… 1

1　調査に至る経緯 …… 1

2　調査の組織 …… 3

3　調査の経過 …… 5

4　調査の方針と方法 …… 7

第2章　調査遺跡の立地と歴史的環境 …… 8

1　伊藤田窯跡群と周辺の遺跡 …… 8

2　伊藤田窯跡群の立地と構成 …… 11

第3章　発掘調査の成果 …… 15

1　草場窯跡 …… 15

2　夜鳴池窯跡 …… 53

3　踊ヶ迫窯跡 …… 72

4　瓦ヶ迫窯跡 …… 76

第4章　遺構と遺物の検討 …… 140

1　遺　　構 …… 140

2　遺　　物 …… 141

第5章　自然科学的調査の成果 …… 153

1　伊藤田窯跡群の熱残留磁気による地磁気年代 …… 153

2　伊藤田窯跡群および各遺跡出土須恵器の蛍光X線分析 …… 161

3　草場窯跡出土炭の樹種 …… 176

第6章　ま　と　め …… 179

SUMMARY

図 版 目 次

巻頭図版１　調査地域空中写真
巻頭図版２　草場窯跡全景
図版１　草場窯跡全景
図版２　草場窯跡遺物出土状態
　　草場窯跡開析断面
図版３　瓦ヶ迫窯跡全景
図版４　瓦ヶ迫窯跡遺物出土状態
　　瓦ヶ迫窯跡開析断面
図版５　草 場 窯 跡(1)　遺跡空中写真
図版６　草 場 窯 跡(2)　発掘前全景、窯跡全景
図版７　草 場 窯 跡(3)　焼成部遺物出土状態
図版８　草 場 窯 跡(4)　焼成部―燃焼部遺物出土状態
　　同　　燃焼部棒状製品出土状態
図版９　草 場 窯 跡(5)　土坑１全景、灰原主軸方向土層断面
図版10　草 場 窯 跡(6)　灰原主軸方向土層断面
　　同　　灰原主軸直交方向土層断面
図版11　草 場 窯 跡(7)　中世墓、土坑２
図版12　夜鳴池窯跡(1)　窯跡遠景、発掘前全景
図版13　夜鳴池窯跡(2)　窯跡全景、窯跡開析状態
図版14　夜鳴池窯跡(3)　灰原近景、灰原遺物出土状態
図版15　夜鳴池窯跡(4)　工房跡全景、工房跡完掘時全景
図版16　夜鳴池窯跡(5)　工房跡排水溝全景
図版17　夜鳴池窯跡(6)　工房跡排水溝近景、工房跡西壁粘土出土状態
図版18　夜鳴池窯跡(7)　その他の遺構（甕棺、土坑１、３、14、18）
図版19　踊ヶ迫窯跡(1)　灰原北半部近景、灰原南半部近景
図版20　踊ヶ迫窯跡(2)　灰原北部土層断面、灰原中央部土層断面
図版21　踊ヶ迫窯跡(3)　灰原南部土層断面、調査区南地区土坑全景
図版22　瓦ヶ迫窯跡(1)　窯跡空中写真
図版23　瓦ヶ迫窯跡(2)　窯跡遠景
図版24　瓦ヶ迫窯跡(3)　窯跡全景、窯跡開析状態

図版25　瓦ヶ迫窯跡(4)　焼成部土層断面
図版26　瓦ヶ迫窯跡(5)　焼成部遺物出土状態
図版27　瓦ヶ迫窯跡(6)　灰原全景、灰原東半部
図版28　瓦ヶ迫窯跡(7)　灰原主軸直交方向土層断面
　　同　　灰原主軸方向土層断面
図版29　瓦ヶ迫窯跡(8)　灰原主軸方向土層断面、溝２東半部
図版30　草場窯跡出土遺物(1)
図版31　草場窯跡出土遺物(2)
図版32　草場窯跡出土遺物(3)
図版33　草場窯跡出土遺物(4)
図版34　草場窯跡出土遺物(5)
図版35　草場窯跡出土遺物(6)
図版36　草場窯跡出土遺物(7)
図版37　草場窯跡出土遺物(8)
図版38　草場窯跡出土遺物(9)
図版39　草場窯跡出土遺物(10)
図版40　草場窯跡出土遺物(11)
図版41　草場窯跡出土遺物(12)
図版42　草場中世墓出土遺物
図版43　夜鳴池窯跡出土遺物(1)
図版44　夜鳴池窯跡出土遺物(2)
図版45　夜鳴池工房跡出土遺物および甕棺
図版46　瓦ヶ迫窯跡出土遺物(1)
図版47　瓦ヶ迫窯跡出土遺物(2)
図版48　瓦ヶ迫窯跡出土遺物(3)
図版49　瓦ヶ迫窯跡出土遺物(4)
図版50　瓦ヶ迫窯跡出土遺物(5)
図版51　瓦ヶ迫窯跡出土遺物(6)
図版52　瓦ヶ迫窯跡出土遺物(7)
図版53　瓦ヶ迫窯跡出土遺物(8)
図版54　瓦ヶ迫窯跡出土遺物(9)
図版55　瓦ヶ迫窯跡出土遺物(10)
図版56　瓦ヶ迫窯跡出土遺物(11)

図版57　瓦ヶ迫窯跡出土遺物(12)
図版58　瓦ヶ迫窯跡出土遺物(13)
図版59　瓦ヶ迫窯跡出土遺物(14)
図版60　瓦ヶ迫窯跡出土遺物(15)
図版61　瓦ヶ迫窯跡出土遺物(16)
図版62　瓦ヶ迫窯跡出土遺物(17)
図版63　瓦ヶ迫窯跡出土遺物(18)
図版64　瓦ヶ迫窯跡出土遺物(19)
図版65　瓦ヶ迫窯跡出土遺物(20)
図版66　瓦ヶ迫窯跡出土遺物(21)
図版67　瓦ヶ迫窯跡出土遺物(22)
図版68　瓦ヶ迫窯跡出土の杯ヘラ記号(1)
図版69　瓦ヶ迫窯跡出土の杯ヘラ記号(2)
図版70　瓦ヶ迫窯跡出土の杯ヘラ記号(3)

挿図目次

第１図　路線内および周辺遺跡分布図 …… 10
第２図　伊藤田窯跡群および周辺窯跡分布図 …… 12,13
第３図　草場窯跡遺構分布図 …… 18
第４図　草場窯跡実測図(1) …… 19
第５図　草場窯跡実測図(2) …… 20
第６図　草場窯跡灰原土層断面位置図 …… 21
第７図　草場窯跡灰原土層断面図 …… 22
第８図　土坑１，２実測図 …… 23
第９図　土坑３，４，５，６実測図 …… 24
第10図　中世墓実測図 …… 24
第11図　草場窯跡出土遺物実測図(1)　―窯内― …… 30
第12図　草場窯跡出土遺物実測図(2)　―窯内― …… 31
第13図　草場窯跡出土遺物実測図(3)　―窯内― …… 32
第14図　草場窯跡出土遺物実測図(4)　―窯内― …… 33
第15図　草場窯跡出土遺物実測図(5)　―窯内― …… 34
第16図　草場窯跡出土遺物実測図(6)　―窯内― …… 35
第17図　草場窯跡出土遺物実測図(7)　―窯内― …… 36
第18図　草場窯跡出土遺物実測図(8)　―窯内― …… 37
第19図　草場窯跡出土遺物実測図(9)　―窯内― …… 38
第20図　草場窯跡出土遺物実測図(10)　―窯内― …… 39
第21図　草場窯跡出土遺物実測図(11)　―窯内― …… 40
第22図　草場窯跡出土遺物実測図(12)　―灰原― …… 41
第23図　草場窯跡出土遺物実測図(13)　―灰原― …… 42
第24図　草場窯跡出土遺物実測図(14)　―灰原― …… 43
第25図　草場窯跡出土遺物実測図(15)　―灰原― …… 44
第26図　草場窯跡出土遺物実測図(16)　―灰原― …… 45
第27図　草場窯跡出土遺物実測図(17)　―灰原― …… 46
第28図　草場窯跡出土遺物実測図(18)　―灰原― …… 47
第29図　草場窯跡出土遺物実測図(19)　―土坑１― …… 48
第30図　草場窯跡出土遺物実測図(20)　―土坑２，３― …… 49

第31図　草場窯跡出土遺物実測図㉑ …… 50
第32図　草場窯跡出土遺物実測図㉒ …… 51
第33図　中世墓出土遺物実測図 …… 52
第34図　夜鳴池窯跡遺構分布図 …… 55
第35図　夜鳴池窯跡実測図 …… 56
第36図　夜鳴池窯跡灰原土層断面図 …… 57
第37図　夜鳴池工房跡実測図 …… 58
第38図　甕棺墓実測図 …… 59
第39図　土坑実測図(1) …… 60
第40図　土坑実測図(2) …… 61
第41図　夜鳴池窯跡出土遺物実測図(1)　―灰原― …… 65
第42図　夜鳴池窯跡出土遺物実測図(2)　―灰原― …… 66
第43図　夜鳴池窯跡出土遺物実測図(3)　―灰原― …… 67
第44図　夜鳴池窯跡出土遺物実測図(4)　―灰原― …… 68
第45図　夜鳴池工房跡出土遺物実測図(1) …… 69
第46図　夜鳴池工房跡出土遺物実測図(2) …… 70
第47図　夜鳴池工房跡出土遺物実測図(3) …… 71
第48図　踊ヶ迫窯跡位置図、灰原・土坑実測図 …… 74
第49図　踊ヶ迫窯跡出土遺物実測図―灰原― …… 75
第50図　瓦ヶ迫窯跡遺構分布図 …… 78
第51図　瓦ヶ迫窯跡実測図(1) …… 79
第52図　瓦ヶ迫窯跡実測図(2) …… 80
第53図　瓦ヶ迫窯跡灰原土層断面位置図 …… 81
第54図　瓦ヶ迫窯跡灰原土層断面実測図 …… 82
第55図　溝２実測図 …… 83
第56図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(1)　―窯内― …… 93
第57図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(2)　―窯内― …… 94
第58図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(3)　―窯内― …… 95
第59図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(4)　―窯内― …… 96
第60図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(5)　―窯内― …… 97
第61図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(6)　―窯内― …… 98
第62図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(7)　―窯内― …… 99
第63図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(8)　―窯内― …… 100

第64図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(9)　―窯内―　…… 101
第65図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(10)　―窯内―　…… 102
第66図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(11)　―窯内―　…… 103
第67図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(12)　―窯内―　…… 104
第68図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(13)　―窯内―　…… 105
第69図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(14)　―窯内―　…… 106
第70図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(15)　―窯内―　…… 107
第71図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(16)　―窯内―　…… 108
第72図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(17)　―窯内―　…… 109
第73図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(18)　―窯内―　…… 110
第74図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(19)　―窯内―　…… 111
第75図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(20)　―窯内―　…… 112
第76図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(21)　―窯内―　…… 113
第77図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(22)　―窯内―　…… 114
第78図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(23)　―窯内―　…… 115
第79図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(24)　―窯内―　…… 116
第80図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(25)　―窯内―　…… 117
第81図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(26)　―窯内―　…… 118
第82図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(27)　―窯内―　…… 119
第83図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(28)　―窯内―　…… 120
第84図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(29)　―窯内―　…… 121
第85図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(30)　―窯内―　…… 122
第86図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(31)　―窯内―　…… 123
第87図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(32)　―灰原―　…… 124
第88図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(33)　―灰原―　…… 125
第89図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(34)　―灰原―　…… 126
第90図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(35)　―灰原―　…… 127
第91図　杯ヘラ記号拓影集成図(1)　…… 128
第92図　杯ヘラ記号拓影集成図(2)　…… 129
第93図　杯ヘラ記号拓影集成図(3)　…… 130
第94図　杯ヘラ記号拓影集成図(4)　…… 131
第95図　杯ヘラ記号拓影集成図(5)　…… 132
第96図　杯ヘラ記号拓影集成図(6)　…… 133

第97図　杯ヘラ記号拓影集成図(7) …… 134
第98図　杯ヘラ記号拓影集成図(8) …… 135
第99図　杯ヘラ記号拓影集成図(9) …… 136
第100図　杯ヘラ記号拓影集成図(10) …… 137
第101図　杯ヘラ記号拓影集成図(11) …… 138
第102図　杯ヘラ記号拓影集成図(12) …… 139
第103図　瓦ヶ迫窯跡のヘラ記号分類 …… 146
第104図　草場窯跡の残留磁気方向 …… 159
第105図　瓦ヶ迫窯跡の残留磁気方向 …… 159
第106図　各窯跡の残留磁気の方向と西南日本の地磁気永年変化曲線 …… 160
第107図　城山1号窯体内および灰原出土須恵器の相互識別(K,Ca,Rb,Sr 因子使用) …… 165
第108図　城山1号窯と2号窯の相互識別（K,Ca,Rb,Sr 因子使用） …… 166
第109図　瓦ヶ迫窯と城山2号窯の相互識別（K,Ca,Rb,Sr 因子使用） …… 166
第110図　中津群の須恵器の Rb－Sr 分布図 …… 167
第111図　柚木出土須恵器の Rb－Sr 分布図 …… 168
第112図　中津群と柚木窯の相互識別（K,Ca,Rb,Sr 因子使用） …… 168
第113図　柚木窯と瓦ヶ迫窯の相互識別（Ca,Fe,Rb,Sr 因子使用） …… 168
第114図　桐ヶ迫窯出土須恵器の Rb-Sr 分布図 …… 169
第115図　中津群と桐ヶ迫窯の相互識別（K,Ca,Rb,Sr 因子使用） …… 169
第116図　柚木窯と桐ヶ迫窯の相互識別（K,Ca,Fe,Rb 因子使用） …… 170
第117図　桐ヶ迫2号墳出土須恵器の Rb－Sr 分布図 …… 170
第118図　県内遺跡出土須恵器の産地推定（K,Ca,Rb,Sr 因子使用） …… 170
第119図　大阪陶邑と推定されたものの Rb－Sr 分布図 …… 171
第120図　中津群産と推定されたものの Rb－Sr 分布図 …… 171
第121図　産地不明となったものの Rb－Sr 分布図 …… 172

表　目　次

第１表　伊藤田窯跡群および周辺窯跡群一覧表 …… 14
第２表　伊藤田窯跡群の器種構成 …… 143
第３表　瓦ヶ迫窯跡　杯ヘラ記号の数量 …… 147
第４表　草場窯跡出土杯形状表 …… 148
第５表　瓦ヶ迫窯跡出土杯形状表(1) …… 149
第６表　瓦ヶ迫窯跡出土杯形状表(2) …… 150
第７表　柚木窯出土須恵器の分析値 …… 172
第８表　桐ヶ迫遺跡出土須恵器の分析値 …… 173
第９表　県内遺跡出土須恵器の分析値 …… 174
第10表　出土した炭の樹種同定結果一覧 …… 176
付　遺物観察表 …… 183

中心杭の座標一覧

草場窯跡　　（単位：km）

No.	X	Y
No.248	60.9694728	22.5641284
No.254	60.9757185	22.6839656

夜鳴池窯跡

No.281	61.0074691	23.2229485
No.282	61.0103157	23.2427445

踊ヶ迫窯跡

No.290	61.0464788	23.3984700
No.293	61.0636736	23.4559532

瓦ヶ迫窯跡

No.310	61.1114966	23.7904987
No.315	61.1004023	23.8898491

この座標は、公共座標第II系に基づくものである。

第１章　調査の概要

１　調査に至る経緯

中津バイパス建設に伴う埋蔵文化財調査は、北九州市から大分市に至る北大バイパス路線のうち下毛郡三光村から宇佐市山下までの間を対象としたものである。中津バイパスは交通体系整備事業の一貫として設計された高規格道路で、宇佐道路、宇佐別府道路とつづき九州横断自動車道と合流する。中津バイパス建設に伴う調査は、昭和55年度から開始し、平成２年度に笠松遺跡の一部まで終了した。

本報告の伊藤田窯跡群の調査は、昭和57年度から昭和59年度までの３カ年間にわたり実施したものである。

伊藤田窯跡のこれまでの調査についてみてみると、昭和33年に賀川光夫氏が行った「伊藤田瓦窯跡」の調査がこの地域の窯業遺跡の解明に先鞭をつけたものといえる。窯の位置は分明でないが、本報告の踊ケ迫窯跡と同一丘陵に所在する（大字伊藤田字踊ケ迫）。伊藤田瓦窯跡は無段の登窯の構造をもつ。瓦と須恵器が同一の窯で焼成されたものである。瓦は女瓦で凸面に同心円の「当て具」で叩き締め、凹面に布目をもつ。共伴した須恵器からみると、６世紀末、７世紀初頭の時期が考えられる。これはわが国で初めて瓦が焼かれた大和飛鳥寺瓦窯とほぼ同時期となり極めて古い瓦窯となる。ことは瓦生産の初源に関わる重要な問題であり、伊藤田窯跡群の性格を考える上で伊藤田瓦窯の位置付けは等閑視できない。また瓦の供給先については明確でないが、福岡県新吉富町の中桑野遺跡から出土した例がある。この後、調査は暫く中断する。

昭和50年代に至ってようやく窯や須恵器・瓦に関心が向けられるようになった。一方で地元有志の地道な分布調査も効果がみられた。このような活動は、６世紀～８世紀代の窯の存在を想起させる成果を挙げており窯跡群の展開を知る上で大きな示唆となった。ホヤ池周辺では鴟尾、鐙瓦、宇瓦などの瓦類が採取された。採取された瓦類のうち、百済系鐙瓦は中津市相原廃寺に同笵例があり、瓦の系譜と需給関係を示すものとして知られている。このような状況は伊藤田窯跡群を７世紀以降の瓦生産地と認識させる要因となった。

昭和57年には中津バイパスに伴う伊藤田窯跡群の調査が開始された。昭和58年、中津市教育委員会は伊藤田窯跡群の西部地域支群の１つ城山窯跡群の調査を行った。こうして伊藤田窯跡群の本格的な発掘調査が実施されるようになった。

九州の古代窯跡は、旧筑前国の太宰府、大野城、春日、筑紫野各市にまたがる牛頸窯跡群、

旧筑後国の八女市塚ノ谷、中尾谷、菅ノ谷窯跡群、それに東九州地域の旧豊前国にあたる北九州市の天観寺山窯跡群が従来から大規模な例として知られていた。伊藤田窯跡群は旧豊前国に属すが、天観寺山窯跡群よりもさらに南35kmにあり、古墳から続く窯跡群としては最も南に位置する。この窯跡群の分布状況は規模において、天観寺山窯跡群に匹敵するものであり東九州有数の窯跡群といえる。今回の調査は窯の具体的な知見の一端を示したものといえよう。

2　調査の組織

昭和57年度

調査主体	大分県教育委員会
調査指導員	賀川　光夫（別府大学教授・県文化財保護審議会委員） 小田富士雄（北九州市立歴史博物館主幹・県文化財保護審議会委員）
調査員	田中　良之（九州大学医学部第二解剖講座）
総括	手嶋　誠一（教育長）、藤澤　清(管理部長)、原尻　実(文化課長)、 堂園　徳昭（同主幹兼課長補佐）
庶務	橋本　淳一（文化課主幹兼庶務係長)、橋本　勝見（同主査）
調査主任	後藤　宗俊（文化課文化財専門員）
調査員	清水　宗昭（文化課埋蔵文化財係主任)、村上　久和・西　哲弘(同主事)、 吉留　秀敏・橋本　孝生（同嘱託）
調査補助員	木村　明史・土居　和幸（別府大学学生)、北条　芳隆・田中　裕介・藤井　克昌（岡山大学学生)、吉田　寛（山口大学学生)、松永　幸男（九州大学大学院生）

昭和58年度

調査主体	大分県教育委員会
調査指導員	賀川　光夫（別府大学教授・県文化財保護審議委員） 小田富士雄（北九州市立考古博物館館長・県文化財保護審議会委員） 水野　正好（奈良大学教授)、西谷　正（九州大学助教授)、伊藤　晴明（島根大学教授)、時枝　克安（同助教授)、西村　康（奈良国立文化財研究所）
調査員	田中　良之（九州大学医学部第二解剖講座）
総括	手嶋　誠一（教育長)、藤澤　清（教育次長)、秋吉　辰郎（文化課長)、 後藤　光（同主幹兼課長補佐）
庶務	橋本　淳一（文化課主幹兼庶務係長)、伊藤　正行（同主任）
調査主任	後藤　宗俊（文化課文化財専門員）
調査員	清水　宗昭・村上　久和（文化課埋蔵文化財係主任)、西　哲弘・小林　昭彦（　同　　主事） 城戸　誠・橋本　孝生・友岡　信彦（　同　　嘱託）
調査補助員	土居　和幸・前田　達男（別府大学学生)、吉田　寛（山口大学学生）

昭和59年度

調査指導員　賀川　光夫（別府大学教授・県文化財保護審議委員）
小田富士雄（北九州市立考古博物館館長・県文化財保護審議委員）
水野　正好（奈良大学教授）、伊藤　晴明（島根大学教授）、時枝　克安（同助教授）

調　査　員　田中　良之（九州大学医学部第二解剖講座）

総　　括　手嶋　誠一（教育長）、佐藤　典雄（教育次長）、高塩　至（文化課長）、塔鼻勝人（同主幹兼課長補佐）

庶　　務　橋本　淳一（文化課主幹兼庶務係長）、伊藤　正行（同主査）

調査主任　後藤　宗俊（文化課文化財専門員兼埋蔵文化財係長）

調　査　員　清水　宗昭（文化課埋蔵文化財主査）、西　哲弘・小林　昭彦（　同　主事）
城戸　誠・橋本　孝生（　同　嘱託）

調査補助員　田中　裕介（岡山大学学生）、吉田　寛、高下　洋一、柏本　秋生（山口大学学生）、原田　昭一（同志社大学学生）、平嶋　文博（別府大学学生）、杉本　和子（京都府立大学学生）

上記関係者の他に、次の方々には現地指導および有益なご助言をいただいた。記して謝意を表す次第である。

佐原　真・西　弘海（奈良国立文化財研究所）、石野博信・今尾文昭（奈良県立橿原考古学研究所）、池上　悟（立正大学）、佐田　茂（出光美術館）、河原純之・伊藤　稔（文化庁記念物課）、亀田修一（岡山理科大学）　（敬称略）

又、胎土分析試料の提供を頂いた中津市教育委員会、宇佐市教育委員会に対しても深く感謝したい。

3　調査の経過

発掘調査は既述の調査組織の編成下で行った。以下、窯の調査を主体とした経過を年次ごとに示す。

昭和57年度調査

調査は窯跡存否確認を目的として実施したものである。

７月上旬　夜鳴池窯跡の確認調査を開始。

調査は、北方向に開口する谷を挟んで東西斜面にトレンチを設定して行った。西地区では、トレンチ調査の結果、斜面下半に灰原の１部を確認した。灰原から６世紀後半～末の蓋杯を検出した、。しかし窯本体は確認されていない。

11月上旬　草場窯跡の確認調査を行った。

草場窯跡は夜鳴池（西地区）窯跡の西方５㎞に位置する。調査地区は南東へ開く支谷の北東向き斜面で、極めて緩い傾斜であった。調査区に２ｍ×10ｍのトレンチ５本を設けて遺構の確認を行った結果、灰原とピット群を確認した。灰原から多くの須恵器が出土した。出土した杯には６世紀末、７世紀後半の２時期に属するものが混じっていた。

昭和58年１月　夜鳴池（東地区）窯跡、踊ケ迫窯跡、野依遺跡周辺の確認調査を行った。夜鳴池（東地区）窯跡では斜面裾付近に、２ｍ×15ｍのトレンチ２本を設けて土層を観察した結果、灰原と思われる範囲、溝１条を確認した。窯跡は試掘調査では確認されていない。

踊ケ迫窯跡は、夜鳴池東地区と同一丘陵の東向き斜面にあたる。調査区の南東にトレンチを設定して遺構の確認を行ったが、窯の存在は確認されなかった。確認した遺構としては土坑４がある。

野依遺跡周辺地区は、伊藤田窯跡群の調査範囲の中では東に位置する。窯跡の確認調査は、北へ伸びる丘陵の北向き斜面東部に等高線と平行するトレンチ２本を設定し行った。

明確な遺構は認められていないが、灰原の１部を確認しており窯の存在が想定された。

調査は昭和58年１月に本年度分を終了した。

昭和58年度調査

本調査は瓦ケ迫窯跡、夜鳴池東・西地区窯跡の２か所、確認調査は踊ケ迫窯跡について実施した。

昭和58年６月　瓦ケ迫窯跡では、昨年度確認調査を実施し灰原、遺物の散布を確認していたため調査対象範囲5800㎡全域について発掘を行った。調査の結果、須恵器窯跡１基、溝２条、土坑、ピットなどを検出した、窯跡の時期は６世紀後半代であった。調査範囲内で確認した窯跡は１基であったが、この丘陵の西側にある山田池の縁辺付近には多くの須恵器が散布してお

り、複数の窯跡が築かれているものと思われる。自然科学的調査として、瓦ケ迫窯跡の考古地磁気年代測定を行った。

10月　夜鳴池東・西地区窯跡の本調査と踊ケ迫窯跡の確認調査を行った。

夜鳴池東地区では昨年度の確認調査結果を受けて、当該範囲830m²について詳細なトレンチ調査を行った。調査の結果、須恵器破片数点を採取したのみで遺構はなかった。

夜鳴池窯跡西地区では該当範囲の斜面下半部の発掘調査を行った。この調査において窯跡1基、灰原を検出した。灰原出土の須恵器には7世紀初頭の特徴をもつ小型品が多くみられた。踊ケ迫窯跡では、昨年度に引き続き確認調査を行った。調査範囲には窯の存在を確認していないが、調査区外の北東部に断面を露呈している窯1基がある。また発掘調査に先立ち、磁気探査を行った。

調査は昭和59年1月に本年分を終了した。

昭和59年度調査

本調査は草場窯跡、踊ケ迫窯跡、夜鳴池窯跡西地区の3か所について実施した。

昭和59年4月　踊ケ迫窯跡では昨年度の確認調査を踏まえ、窯の存否確認を行った。調査範囲内に窯は確認されなかった。しかし調査区外の窯に伴う灰原の1部が斜面下に検出できた。

7月　夜鳴池窯跡西地区では昨年度の残余範囲について調査を行った。調査の結果、斜面上部分に須恵器工房跡が確認された。工房跡は本県初例と注目された。このほかに土坑、弥生中期の甕棺などが検出された。

8月　草場窯跡の調査を実施した。草場窯跡は城山窯跡群の位置する丘陵の東側に広がる低丘陵に築かれている。調査範囲には1基確認されていた。この範囲には灰原も残っていた。また窯に伴う土坑や中世墓が検出された。また草場窯跡の自然科学的調査として、考古地磁気年代測定を行った。

調査は昭和59年12月に終了した。

窯跡の調査は、昭和57年7月から昭和59年12月までの3か年にわたり4か所について実施したものである。遺構の種類と数は、窯3基、灰原1か所、工房1基が主なものである。

このほかに弥生時代の甕棺、中世墓、溝や土坑などが調査範囲内に分布していた。

4　調査の方針と方法

中津バイパス路線予定地の内、丘陵地帯における窯業関係遺跡の検出を主要目的とした詳細な調査を行い、当地域の須恵器、瓦生産の実態把握に努めた。

窯の調査方法として、1）丘陵の裾部における灰原、須恵器散布の確認、2）窯想定地のトレンチ調査、3）窯の確認、4）窯主軸を基準した調査地区の設定、5）窯、灰原の発掘。6）窯関連遺構の調査、という手順をとった。

個別の遺跡ではそれぞれの条件に適したより具体的な方法も採用した。

草場窯跡では非常に緩い傾斜地に築かれているため、灰原の広がりをもとにトレンチを設定。窯体の確認を行い、窯の主軸を基準に全域の調査用基準方眼を設定した。窯本体の調査は、主軸と直交する層位観察畦を焼成部、燃焼部、焚口に残し、掘り下げを行った。掘り下げが窯底まで達した段階で、天井部、壁の崩落状況を記録、焚口を除く層位観察畦を除去、さらに窯床面の遺物を露呈した。窯の改修・補修あるいは操業回数を確認するために、床面、壁の断割り調査を実施した。

灰原調査は、窯主軸に沿って基盤層までの掘り下げを行い灰層の形成状態を観察。同様の調査を主軸と直交する位置においても行った。

瓦ケ迫窯跡では、地形に即したトレンチを設定し、窯体確認と灰原の検出を行った。これは地形の変化を基準に設定したトレンチで窯を確認したものである。窯の平面形を露呈させた後、窯の主軸を基準にして同一斜面全域に100m、10m、2mの大、中、小方眼を組んだ。

窯体調査は、主軸と直交する層位観察畦を焼成部、燃焼部、焚口に残し、掘り下げを開始。掘り下げが窯底まで達した段階で、天井部・壁の崩落状況を記録した。焚口を除く層位観察畦を除去し、窯床面の遺物を露呈した。

窯の改修・補修状況を確認するために、床面、壁の断割り調査を実施した。

夜鳴池窯跡西地区では、灰原の広がりを手掛かりにトレンチを設定し窯の確認を行った。ここでは窯の規模や残存状況から調査区の基準方眼は地形に沿って任意に設定した。

このほかに窯の位置する丘陵では、斜面裾部から頂部に至るまでの全域について排土を行い工房跡を検出した。

また自然科学的調査では、磁気探査、残留磁気年代測定を行った。

第 2 章　　調査遺跡の立地と歴史的環境

1　伊藤田窯跡群と周辺の遺跡

伊藤田窯跡群の所在する中津市は大分県北部の山国川を挟んで福岡県新吉富村と対峙し、周防灘に面し海岸部から沖代平野など肥沃な可耕地をへて南部の丘陵部にいたる広範で変化に富む地形環境に恵まれている。

伊藤田窯跡群は南部丘陵地域のうち、北に向かって樹枝状に複雑な開析を受けた標高50m程度の低丘陵に位置する。その範囲は伊藤田から野依地区、一部宇佐市木部にかかる東西2.7kmにおよぶ。

周辺遺跡の分布状況をみると、旧石器時代から近世に至る各時代の遺構・遺物が平野部、河岸段丘、丘陵部に多く確認されている。

旧石器時代の遺跡は洞ノ上、大池南、才木遺跡などに断片的な資料が確認されている。

縄文時代の遺跡として、犬丸川流域の水田地帯に形成された微高地に、早期の落とし穴遺構が調査された黒水遺跡、後期のボウガキ遺跡、植野貝塚が知られている。

弥生時代では、前期～後期の遺跡として森山、樋多田、福島遺跡がある。とくに森山遺跡は水田面との比高が約40mの丘陵上に立地し、前期後半～後期初頭の集落が形成されていた。

古墳時代の遺跡をみると、前期では三光村岡崎遺跡で調査された石棺墓、土坑墓がみられる程度である。後期に多くの遺跡がみられる。集落跡としては前田、大坪遺跡がある。墓地遺跡には、森山、岩井崎、城山、寺迫横穴などの横穴墓群、城山、野依古墳などの古墳群がこの伊藤田周辺の丘陵崖面や丘陵上に分布している。また西部には山国川の河岸段丘崖面に100基位集中する５世紀後半～７世紀初頭に営まれた上ノ原横穴墓群が位置する。

古墳時代後期（６世紀後半）には伊藤田窯群が操業を開始する時期である。

古墳時代は横穴墓について地域的な特徴ある展開がある。加えて、須恵器窯の開窯と操業は当地域の生産活動の動向と背景を示す大きな画期といえる。

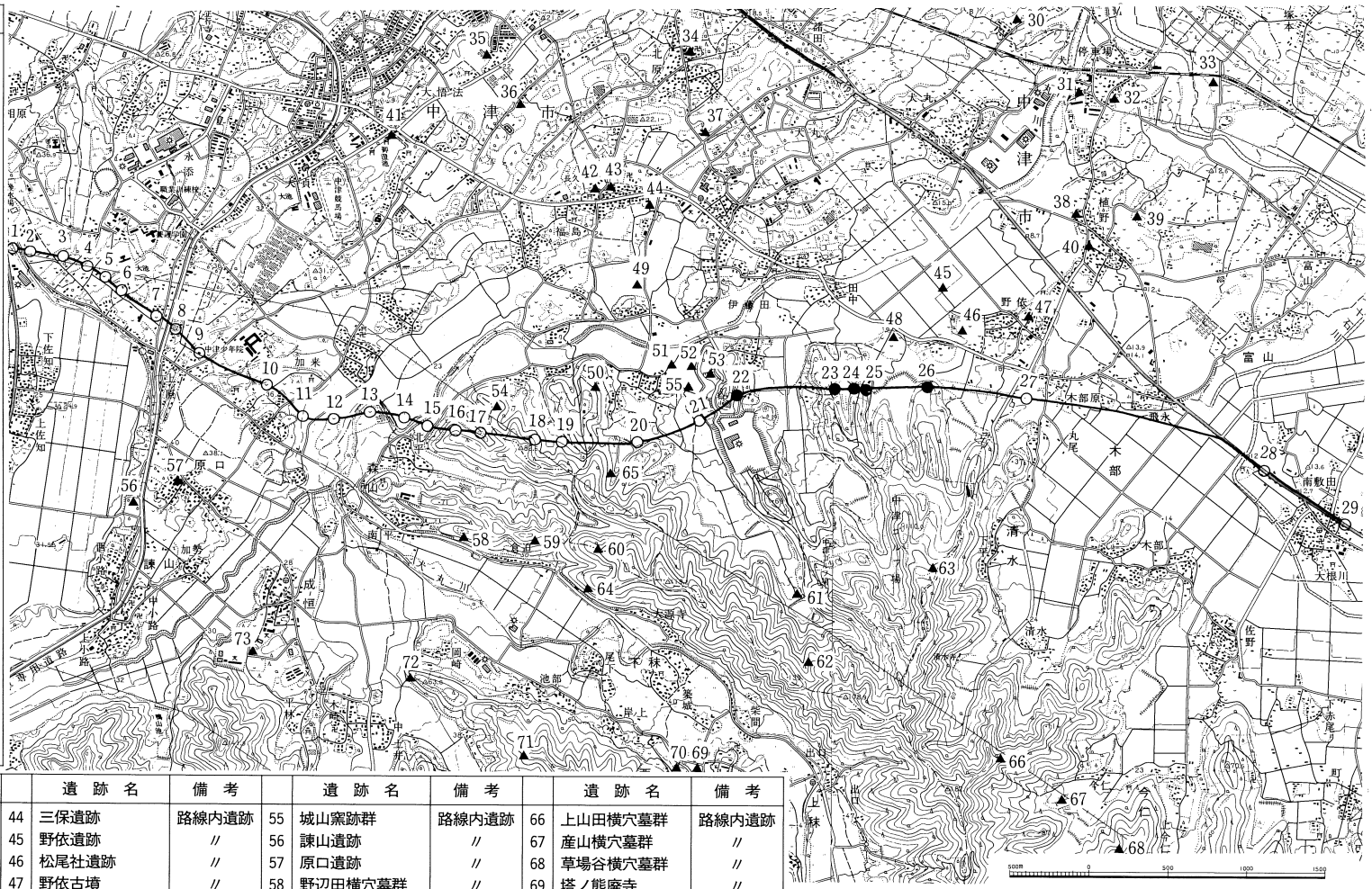
歴史時代の遺跡は、奈良時代の三光村塔ノ熊廃寺、勘助野地遺跡の火葬墓があり、平安時代では寺迫遺跡の火葬墓などがある。

中世には前田遺跡のように水田経営のあり方を示唆する遺構群の存在も注意すべきであろ

う。近世では、中津市街地の水道遺構などは近世都市の形成に関わる重要な意味をもつものと理解される。

このように遺跡の性格には、生活遺跡、生産遺跡、墓地など様々なものがあり、立地に応じた営みを窺うことができる。

	遺　跡　名	備　考
1	上ノ原横穴墓群	路線内遺跡
2	勘助野地遺跡	〃
3	柳ヶ迫池東遺跡	〃
4	六畝町遺跡周辺	〃
5	六畝町遺跡	〃
6	大池南遺跡	〃
7	市ノ沢遺跡	〃
8	加来原遺跡	〃
9	清水郎原西遺跡	〃
10	清水郎原東遺跡	〃
11	黒水遺跡	〃
12	大坪遺跡	〃
13	散布地	〃
14	樋多田遺跡	〃
15	権現島遺跡	〃
16	森山遺跡	〃
17	森山横穴	〃
18	散布地（横穴）	〃
19	寺迫遺跡	〃
20	安平遺跡	〃
21	居屋敷遺跡	〃
22	草場窯跡	路線内遺跡 本報告
23	夜鳴池西窯跡	〃
24	夜鳴池遺跡	〃
25	踊ヶ迫窯跡	〃
26	瓦ヶ迫窯跡	〃
27	木部遺跡散布地	路線内遺跡
28	大根川遺跡	〃
29	向野遺跡	〃
30	赤迫遺跡	〃
31	若旗墳墓群	〃
32	中須遺跡	〃



第１図　路線内および周辺遺跡分布図

	遺　跡　名	備　考		遺　跡　名	備　考		遺　跡　名	備　考		遺　跡　名	備　考
33	停車場遺跡	路線内遺跡	44	三保遺跡	路線内遺跡	55	城山窯跡群	路線内遺跡	66	上山田横穴墓群	路線内遺跡
34	北原第２遺跡	〃	45	野依遺跡	〃	56	諫山遺跡	〃	67	産山横穴墓群	〃
35	大悟法遺跡	〃	46	松尾社遺跡	〃	57	原口遺跡	〃	68	草場谷横穴墓群	〃
36	土木遺跡	〃	47	野依古墳	〃	58	野辺田横穴墓群	〃	69	塔ノ熊廃寺	〃
37	北原第１遺跡	〃	48	是則塚	〃	59	倉迫遺跡群	〃	70	八面山東部遺跡	〃
38	植野貝塚	〃	49	城土遺跡	〃	60	倉迫三ッ塚古塚群	〃	71	地神城跡	〃
39	植野伽藍遺跡	〃	50	洞ノ上横穴墓群	〃	61	大谷窯跡群	〃	72	岡崎遺跡	〃
40	植野南遺跡	〃	51	前田遺跡	〃	62	ゴンゲ遺跡	〃	73	瑞雲寺廃寺	〃
41	御澄池築提	〃	52	城山横穴墓群	〃	63	野依烽火台跡	〃			〃
42	田丸城跡	〃	53	城山古墳群	〃	64	天神原横穴墓群	〃			〃
43	福島貝塚	〃	54	北平横穴墓群	〃	65	洞ノ上窯跡	〃			〃

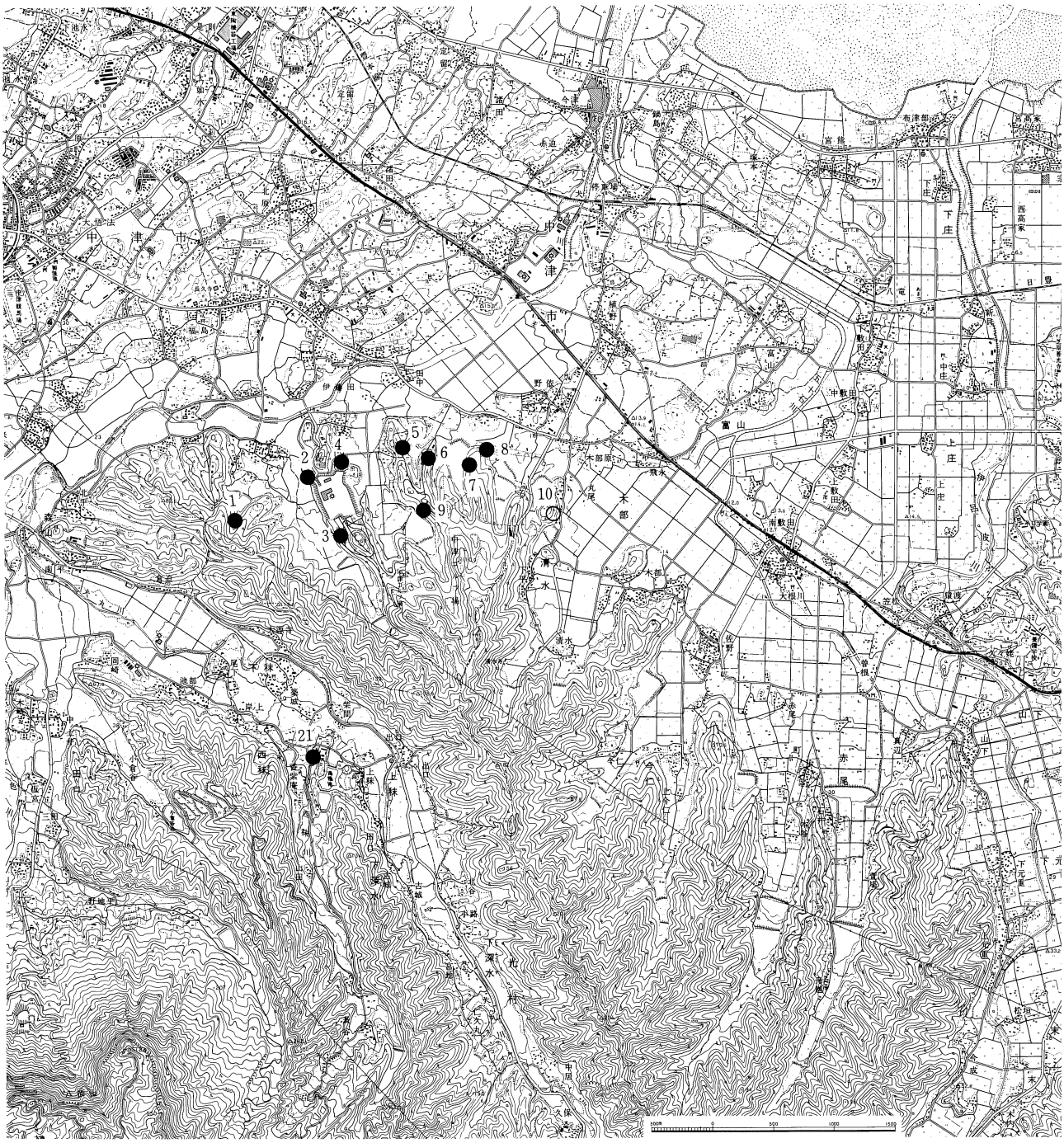
2　伊藤田窯跡群の立地と構成

伊藤田窯跡群の呼称については、谷ごとに形成されている窯跡支群を包括する中津市南部丘陵地帯窯跡群の総称としたい。これは伊藤田地区に窯の分布が最も集中することや学史的にもはやくから使用されていたことなどを理由とする。

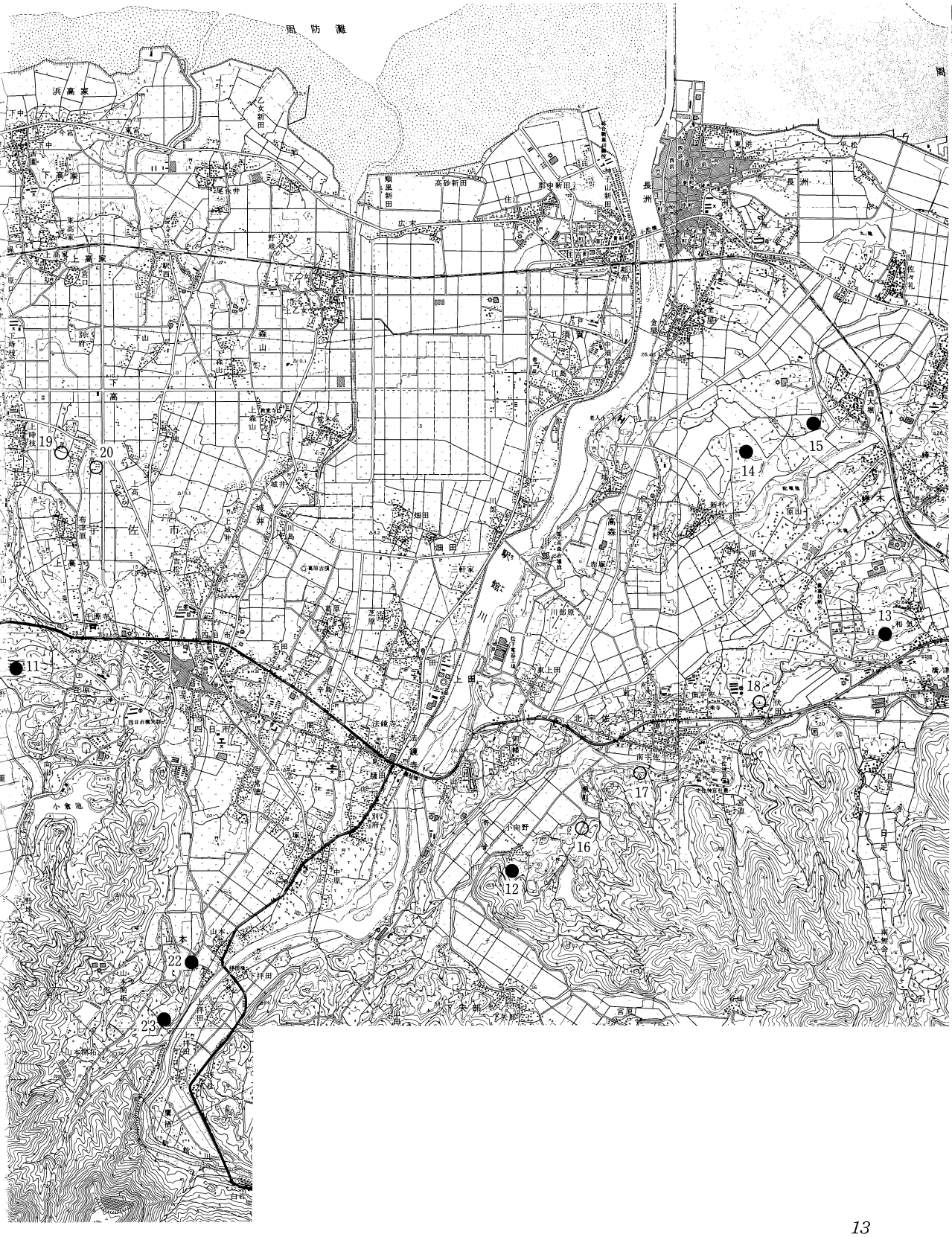
伊藤田窯跡群の立地する中津南部は、八面山など500m級の急峻な丘陵が形成されている。又、本耶馬渓町、三光村、宇佐市を含む広い範囲に樹枝状の低位丘陵が展開しており通称下毛原丘陵と呼称されている。下毛原丘陵は大きく北方向へ開析された谷が3本みられる。これらの谷はさらに東西に派生する支谷が多数ある。谷を望む斜面は概ね緩やかな傾斜をもつ。

伊藤田窯跡群は、西部、中央部、東部の大きく3地区に分けられる。西部地区は洞ノ上～城山地区を範囲とする一群である。洞ノ上窯は東向き斜面に窯壁融着の須恵器が確認されており、7世紀前半代と思われる。城山窯跡群は洞ノ上窯と谷を挟んで東側丘陵のやや奥部に位置する支群であり、6基調査されている。さらに谷の奥に8世紀代の大谷窯跡が確認されている。中央地区は2本目の谷が城山窯跡群の所在する丘陵の東側を北方向に大きく開いた東西斜面部をさす。この谷の西側に草場窯跡が位置する。草場窯跡は城山窯跡と同様に丘陵の先端よりもやや奥に確認されたものである。周辺における窯の分布は多くない。この丘陵では先端から中ほどまでは明確な窯の分布は知られていないが、奥部のホヤ池周辺に瓦類が採取されているホヤ池窯跡などがあり、一支群が形成されているものと考えられる。この丘陵の東側一体は狭い谷が多く派生しており、谷を単位とする窯の支群がみられ東部地区とした。夜鳴池窯跡は7世紀前半代の窯であるが、6世紀末頃の工房跡も調査されており、一定の時期幅をもつ窯跡群の形成が考えられる。夜鳴池窯跡の東側には踊ケ迫窯跡が位置する。現状では「伊藤田瓦窯跡」の位置は不明確であるが地形的にみて夜鳴池窯跡と同様の支群の形成を想起できる。踊ケ迫窯跡東方の谷には山田池があり、池の東岸に多くの須恵器が採取されている。この丘陵の先端に瓦ケ迫窯跡が位置する。窯の時期は6世紀後半であり、周辺で採取された須恵器も同時期のものである。丸尾窯跡は現在消失しているが、融着した須恵器が採取されている。この東側は大きな谷が湾入しており、西の丘陵とは地形の様相が異なる。

伊藤田窯跡群周辺における窯の分布は、東部の宇佐市に散在的にみられる。山下地区の桐ケ迫窯（6世紀後半）、小向野地区の恵良窯、和気地区の柚木窯（8世紀）、蜷木の新池窯（6世紀後半）、西大堀の野森窯が7世紀後半の窯として知られている。また最近調査された山本地区の虚空蔵寺瓦窯、切寄瓦窯は虚空蔵寺跡の供給窯である。これらの窯は虚空蔵寺創建期の7世紀末から8世紀初頭の時期と考えられる。南部では八面山の北裾部にあたる三光村西秣に塔ノ熊窯がある。遺構の残存状態は良くないが、瓦を焼成した登窯の構造をもつ。出土瓦から10世



第２図　伊藤田窯跡群および周辺窯跡分布図


風防灘
浜高家
下中
今宮
東島
下高家
上高家
高砂新田
住江
長洲
東原
佐々礼
西大潮
森山
上森山
高
佐
市
上高
城井
畑田
三軒家
芝原
石田
上田
法鏡寺
四日市
小食池
向山
小向野
北平佐
南平佐
川部原
高森
左尾
新村
蛇塚
宿山
和気
白足
中原
山本
下拝田
宮風
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
22
23

紀中頃の操業と考えられている。伊藤田窯跡群の窯の時期的な推移は、瓦ケ迫窯→草場窯→城山窯・夜鳴池窯の6世紀末～7世紀前半代となる。これに表採資料を加えると、7世紀後半のホヤ池窯、8世紀代の大谷窯と長期にわたる窯の展開が窺われる。

第1表　伊藤田窯跡群および周辺窯跡群一覧表

	遺跡名	窯の種類	所在地
1	洞ノ上窯跡	須恵器	中津市 伊藤田
2	城山窯跡	須恵器	中津市 伊藤田
3	大谷窯跡	須恵器	中津市 伊藤田
4	**草場窯跡**	須恵器	中津市 伊藤田
5	**夜鳴池窯跡**	須恵器	中津市 伊藤田
6	**踊ケ迫窯跡**	須恵器，瓦	中津市 伊藤田
7	山田池窯跡	須恵器	中津市 野依
8	**瓦ケ迫窯跡**	須恵器	中津市 野依
9	ホヤ池窯跡	須恵器，瓦	中津市 伊藤田
10	丸尾窯跡	須恵器	宇佐市 木部
11	桐ケ迫窯跡	須恵器	宇佐市 山下
12	恵良窯跡	須恵器	宇佐市 小向野
13	柚木窯跡	須恵器	宇佐市 和気
14	新地窯跡	須恵器	宇佐市 西大堀
15	野森窯跡	須恵器	宇佐市 西大堀
16	笛吹窯跡	須恵器	宇佐市 北宇佐
17	大善寺窯跡	須恵器	宇佐市 南宇佐
18	尻掛窯跡	須恵器	宇佐市 南宇佐
19	ホウロク窯跡	須恵器	宇佐市 下高
20	祭器焼窯跡	須恵器	宇佐市 上高
21	塔ノ熊窯	瓦	三光村 西秣
22	虚空蔵寺瓦窯跡	瓦	宇佐市 山本
23	切寄瓦窯跡	瓦	宇佐市 山本

第 3 章　　発掘調査の成果

1　草 場 窯 跡

草場窯跡は伊藤田窯跡群の中で西部に位置し、城山窯跡群の東側に伸びる低位丘陵上に立地している。

調査対象範囲6750m²について全面発掘を行い、窯１基、灰原、土坑、ピット、それに中世墓地が検出された。(第３図)

窯　　跡（第４・５図）

窯跡は調査区中央の極めて緩い斜面に等高線とほぼ直交して構築されていた。

窯跡は造園などで削平を受けており遺存状態はあまり良くなく、上半部では煙道付近と窯床の一部が欠失していた。天井部はすべて崩落し窯内に堆積していた。このような遺存状態ではあったが、窯の全容はほぼ把握できた。

窯の構造は半地下式無階無段登窯である。規模は現存長11.6mで、焚口から焼成部まで2.4m、焼成部8.2mである。幅は焚口で0.9m、最大幅は焼成部中央にもち1.4m、ほかの部位はほぼ1.3mである。窯床面の平面形は幅に変化の少ない長大な形状を呈する。主軸方位は北5.5度西を指向する。床面の傾斜は焼成部で14度～16度、焼成部はほぼ平坦である。

窯の横断面の形状は、焼成部において平坦な床がやや開き気味の壁に続くが、焼成部で平坦な床から直立する壁が徐々にドーム状に湾曲するものと思われた。

改造・補修は床および壁にみられた。床には３次の補修を確認できた。焼成部では３枚の床が重なっているが、部分的には最終時の床を貼る段階にⅠ・Ⅱ次床あるいはⅡ次床を掘り下げ粘土の補塡を行っている。壁は燃焼部・焼成部の１部には１次壁が残り、Ⅱ・Ⅲ次床に対応する一枚の壁がその上に重ねられている。焼成部の一部では一次壁を除去し、Ⅱ・Ⅲ次床に対応する新たな壁を構築している箇所がある。

床・壁の被熱状態は、燃焼の度合いによって異なるが、表面から還元焔焼成による青灰色・淡青色、半還元の黄色、酸化焔による赤色と変化することが一般的である。草場窯跡の場合は、３枚の床、２枚の壁ともに青色の還元層が明確である。Ⅰ次床•壁では、青、黄、赤色の酸化、還元の各段階の変化が観察できる。Ⅱ次床では１部に赤色酸化層がみられるもののほとんど青灰色、淡青色の還元層である。Ⅲ次床ではほとんど青色の還元層であるが、窯尻付近に黄褐色層が認められる。

また燃焼部には惰円形の舟底状の土坑がある。この土坑はⅡ・Ⅲ次床の貼り替えに応じて２

回掘り下げられている。規模はⅠ次堀り込みが1.9m×1m、Ⅱ次には1.9m×0.95m、深さ0.3mとなっている。燃焼部は窯内部で最も損傷を受け、かつ作業量の多い場所であり、このような施設が設けられたものであろう。

窯内部の遺物は床面に比較的多くの須恵器が残存していた。焼成部上半には焼台に使用された甕破片や破損品が散在していた。焼成部下半には杯の完形品が蓋・身セットで10点出土し、このほかにも高杯、壺、甕が集中していた。このなかの甕や礫には須恵器が融着しているものがある。上面を水平に保つ形状は焼台の機能をもつと考えられる。

焚口から燃焼部には多くの破片が集積していた。器種は杯、高杯、甕などであるが、特殊な例として棒状製品がある。

灰　原（第6・7図）

灰原は燃焼された燃料の残滓である灰の広がりと不良・廃棄品の分布範囲を含めて灰原と呼ぶ。灰層の範囲は窯を中心に扇状に形成されていた。その範囲は窯主軸方向に13m、最大幅13mであった。遺物の分布範囲はこれよりもさらに広がり南北に18m、東西17mである。

灰層の層序は表土、遺物を含む堆積層、焼土・窯壁・炭化材を含む灰主体層となっている。

灰層の堆積は20cm～30cmと浅く、操業の順序を示すような間層の存在はなかった。

また窯主軸方向には厚さ0.2mの灰層下に黄褐色土が堆積している。これは窯構築時の排土の可能生がある。

このように灰原層位の形成は緩傾斜の立地にありながらも貧弱であり、窯の操業が短期間であったことを示している。

土　坑（第8・9図）

土坑は窯の隣接地および東部に合わせて5基確認された。

土坑1は窯の東3mに位置している。平面形は4.5m×3.4mの不整円形を呈していた。深さは斜面上側で0.8mであった。底面は平坦で、壁は斜面上側が緩やかに立ち上がっていた。土坑内には底面付近に甕の破片が多く堆積していた。この土坑は須恵器の焼成に伴う不良品を廃棄するための施設と思われる。

土坑2は長さ8m、幅0.7m～1.2mの溝状の形態を示している。覆土中から若干の須恵器が出土している。

土坑3、4、5、6は重複状態で確認された。土坑5覆土中から8世紀代と考えられる土師器壺、鉢などが出土している。ただしこれらの遺物は流入した状況であり、遺構の時期を決める材料としては確実性に欠ける。

ピット

窯燃焼部周辺から灰原範囲に120個のピットを確認している。灰原範囲では窯主軸直交方向に2列纏まりを確認できるが、ピット総体に有為な配列をみることはできない。

中 世 墓（第10図）

中世墓は調査区東範囲の土坑３、４、５、６と一部切り合って確認された。灰原の断割り調査に伴って確認されたため、遺構上面をかなり削平してしまった。

平面形は長方形を呈するが、頭位にあたる北辺は若干広い。規模は北辺が土坑４との切り合いで不明確であるが、南辺0.5m、北辺復元長0.6m、東辺復元長1.3m、西辺復元長1.2mとなっている。底面は平坦である。墓坑内から青磁と刀子、鉄鉗などの鉄製品が出土している。

出土遺物

遺物は、窯内、灰原、灰原範囲の土坑から出土した須恵器および土師器について説明を行う。

遺物の出土量は、窯内においては655点で細片を相当量含む。このうち実測可能な315点を図示した。灰原では甕など大型品13511点、杯・高杯など小型品13443点の計26954点出土している。窯内と同様に大半が細片であり、同一個体の重複を避けるため確実個体315点を図示した。このなかには若干の土師器を含む。また灰原にはこの窯の製品以外に７～８世紀代の遺物が含まれていた。

窯内須恵器（第11～21図・第32図322・323）

出土須恵器は、ほとんど窯床面から出土したものである。

器種には蓋杯、高杯、瑞、提瓶、短頸壺、台付壺、壺、甕がある。また特殊なものとして棒状製品が出土している。

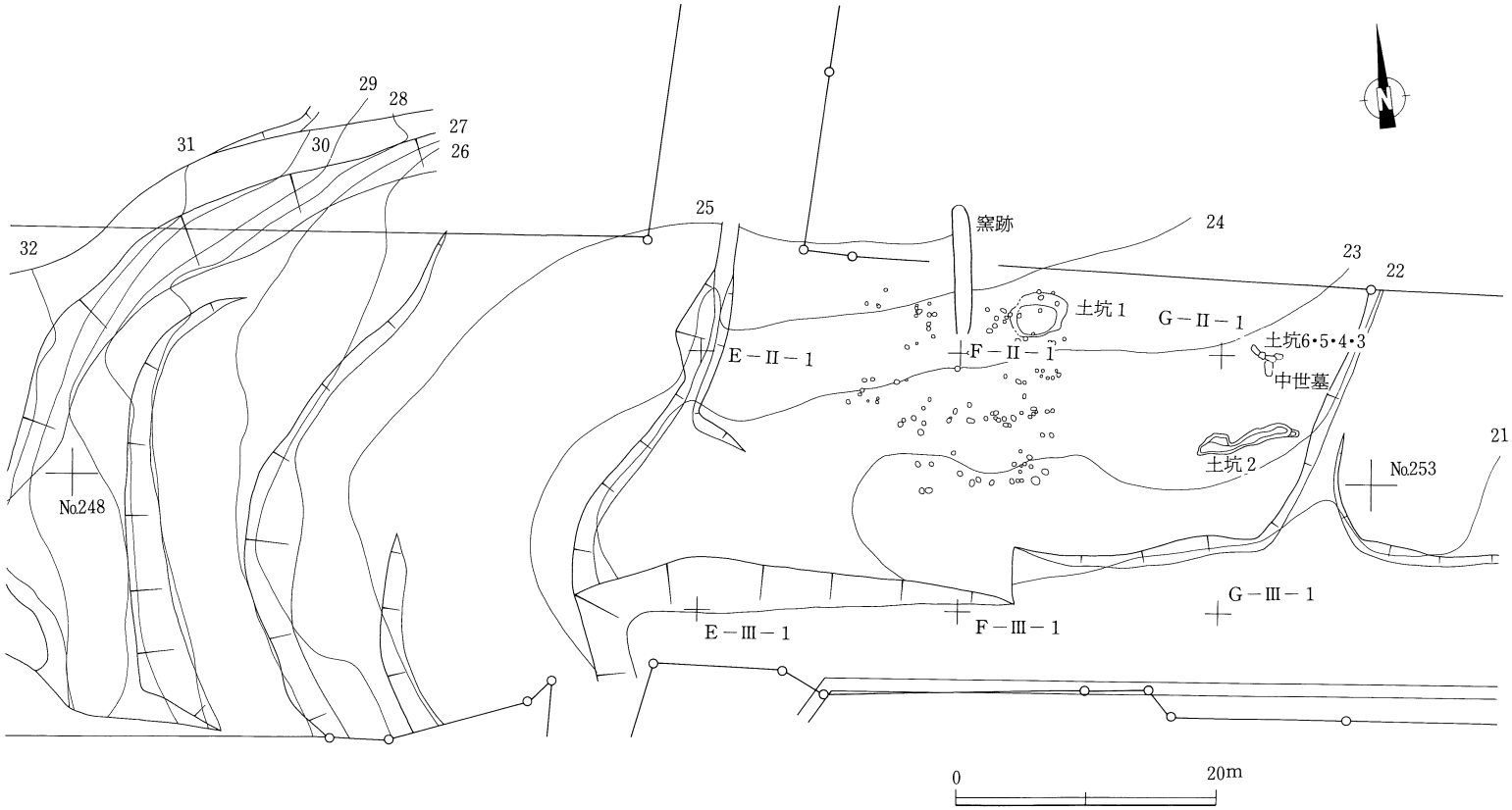
蓋　杯（１～118）

窯の焼成部から蓋と身が組み合って出土した蓋杯は10組ある（１～20）。蓋杯の形態は蓋・身ともに共通する特徴をもつ。

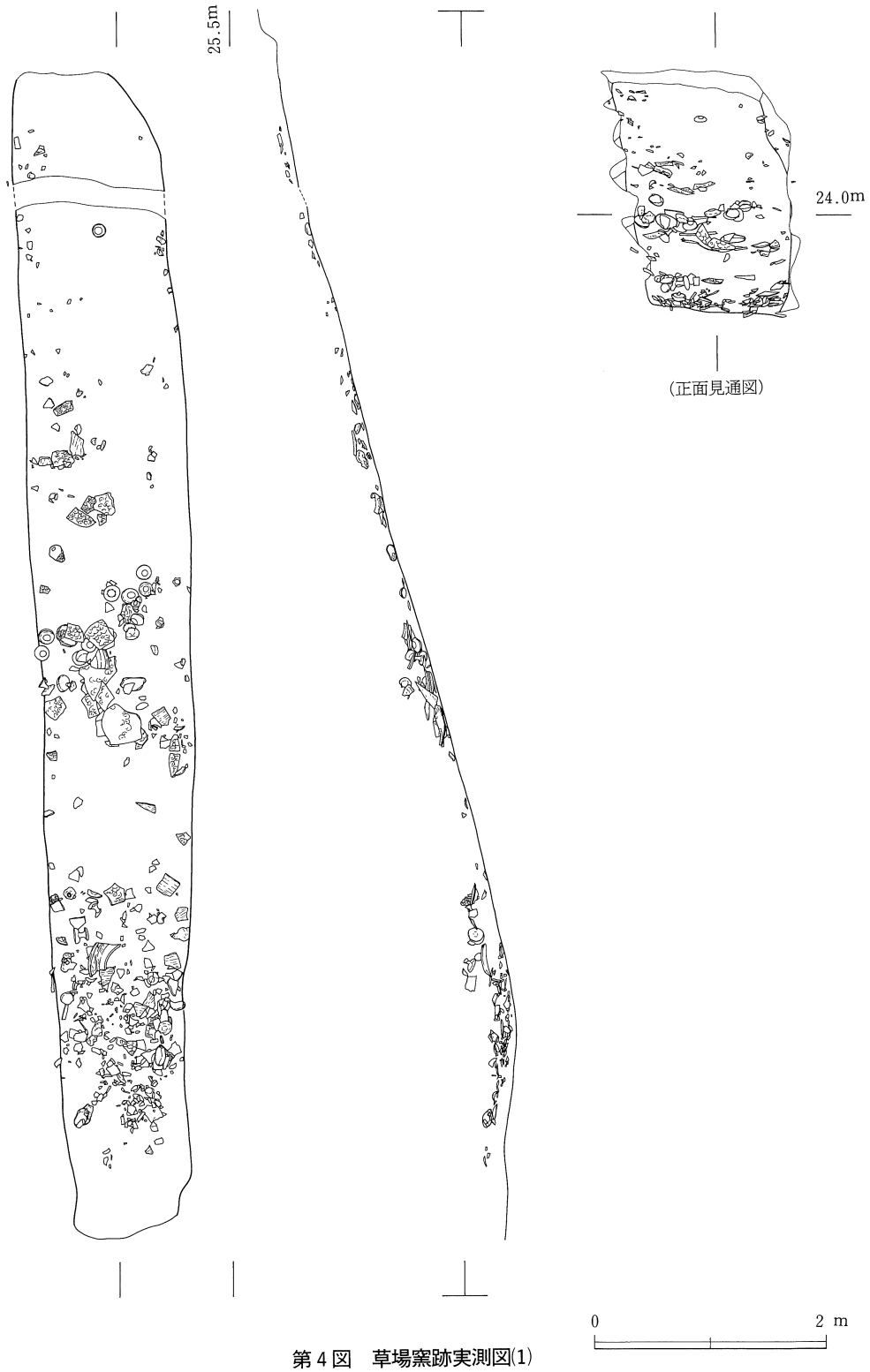
蓋は器高が口径に対してやや低い。口縁部は屈曲し、やや肥厚気味で丸みを帯びる。天井部は平坦であるが肥厚するため体部との境に段をもつ。整形・調整技法は天井部の切り離し技法が回転ヘラ切りで、後に若干のナデを施している。体部～口縁部は横ナデで仕上げられている。天井部内面は一方向のナデが施されている。

身は、蓋と同様に器高が口径に対して低い。受部から口縁部にかけて三日月状に反る。体部は直線的か緩い湾曲を呈しながらのびる。体部から口縁部は器厚が薄い。底部は平坦であるが肥厚するため体部との境に緩い段をもつ。整形・調整技法をみると、底部の切り離し技法が回転ヘラ切りで、後に若干のナデを施す。体部～口縁部は横ナデで仕上げられている。底部内面は一方向のナデが施されている。

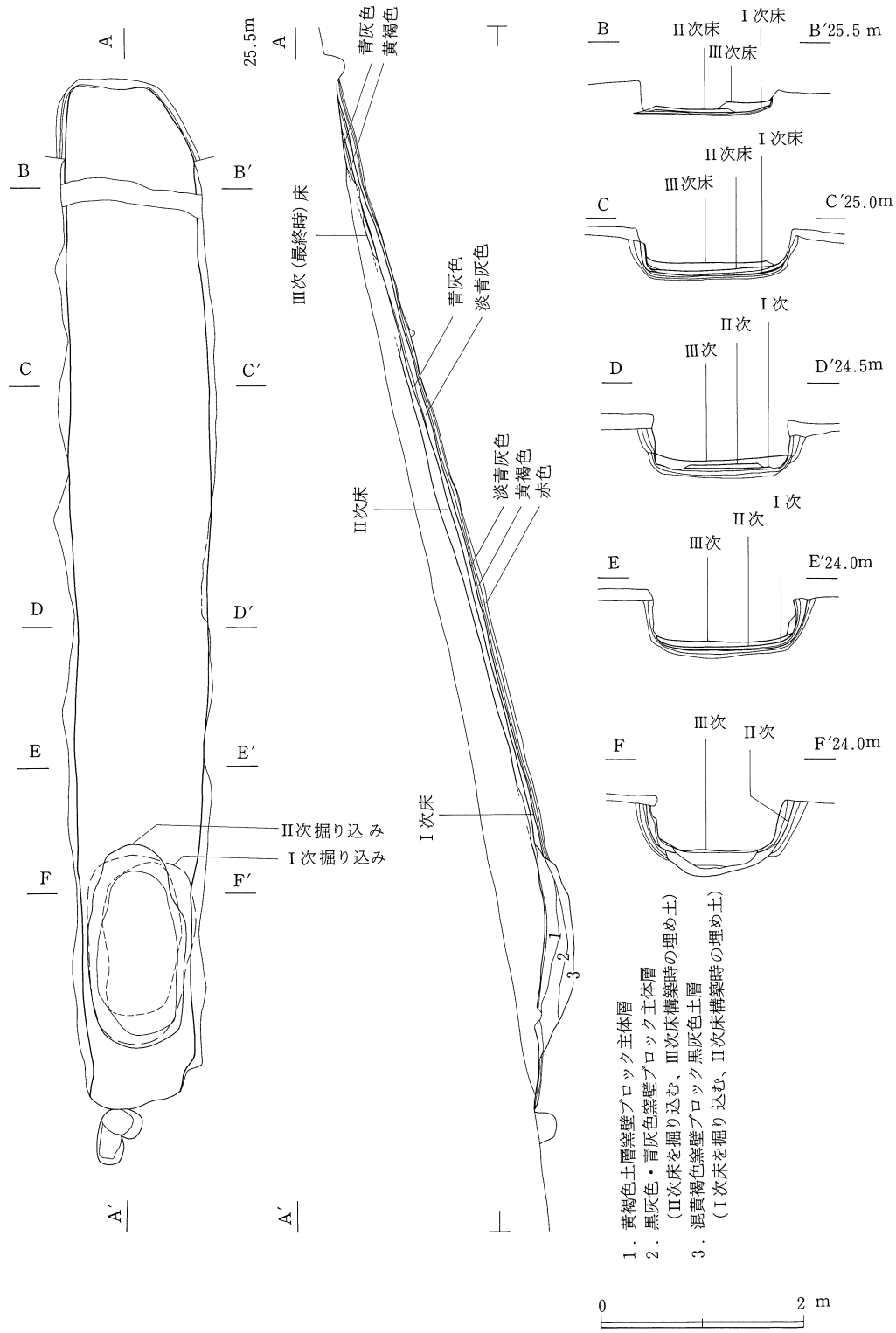
これらの杯の大きさは蓋が口径11.3cm～12.5cm、器高3.5cm～4.2cm、身が口径10.3cm～10.8cmが大半であり、器高3.3cm～4.1cmの範囲に包括される。



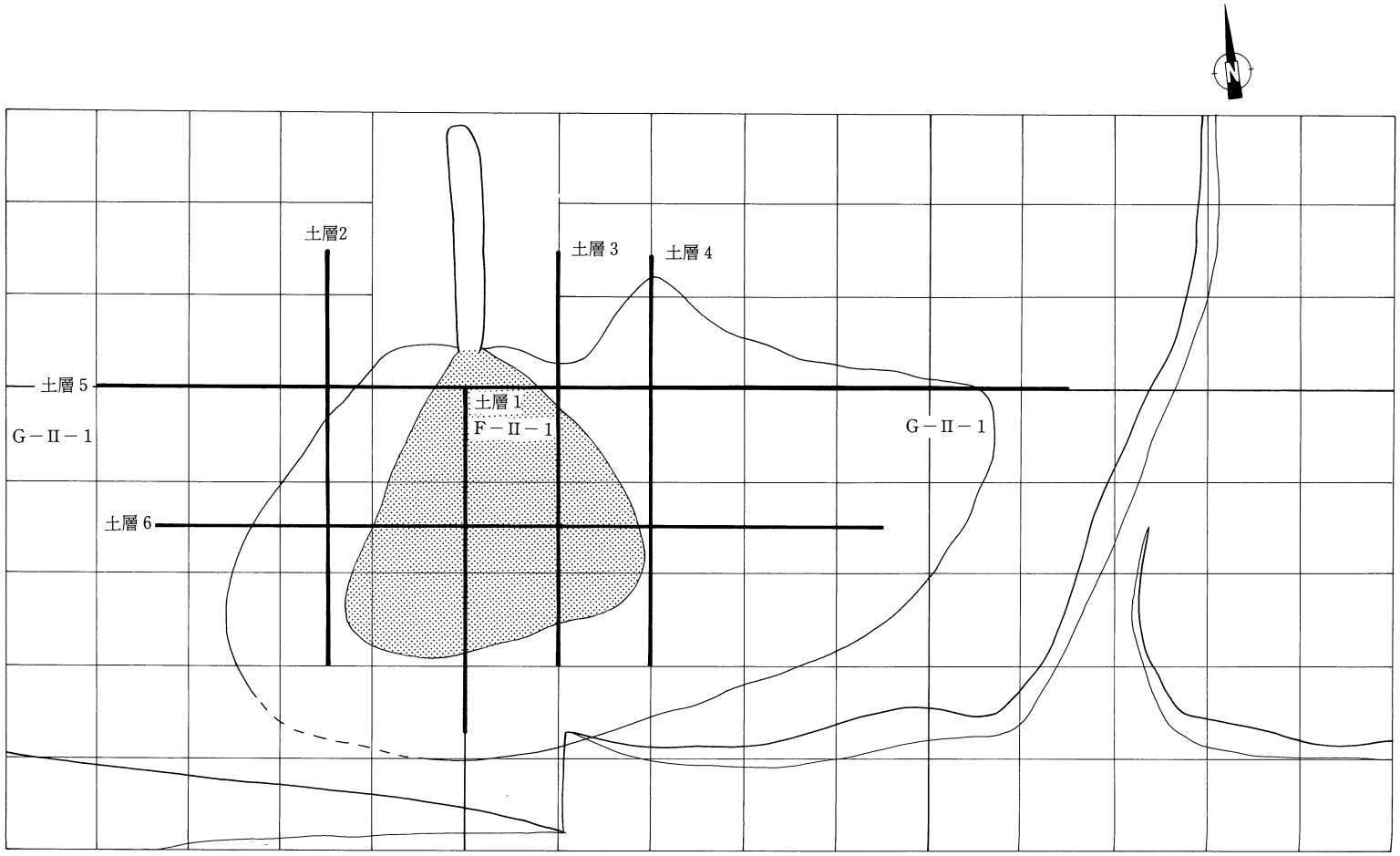
第3図　草場窯跡遺構分布図



第４図　草場窯跡実測図(1)



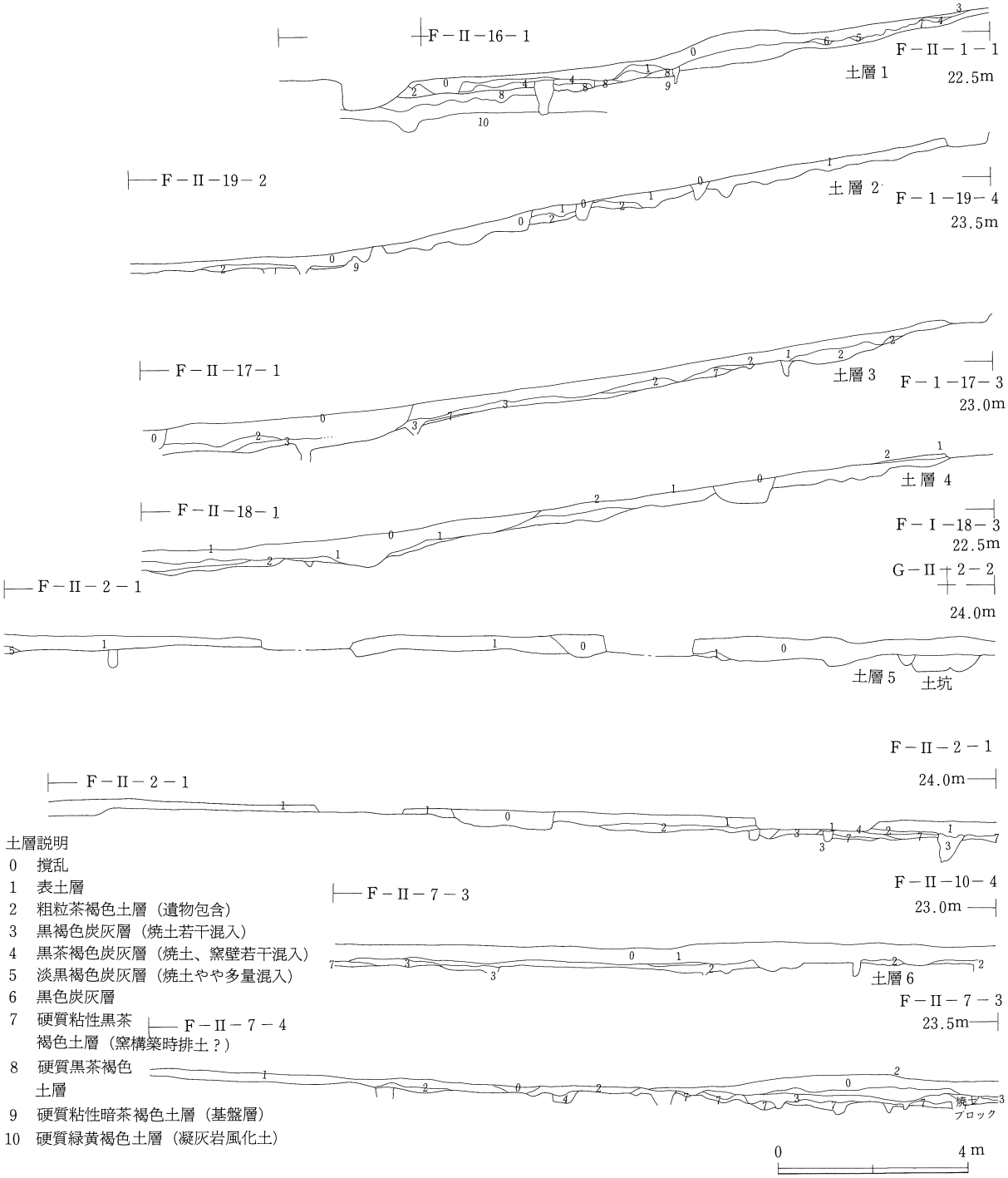
第５図　草場窯跡実測図(2)



※網かけ部分は
灰層範囲

0　10m

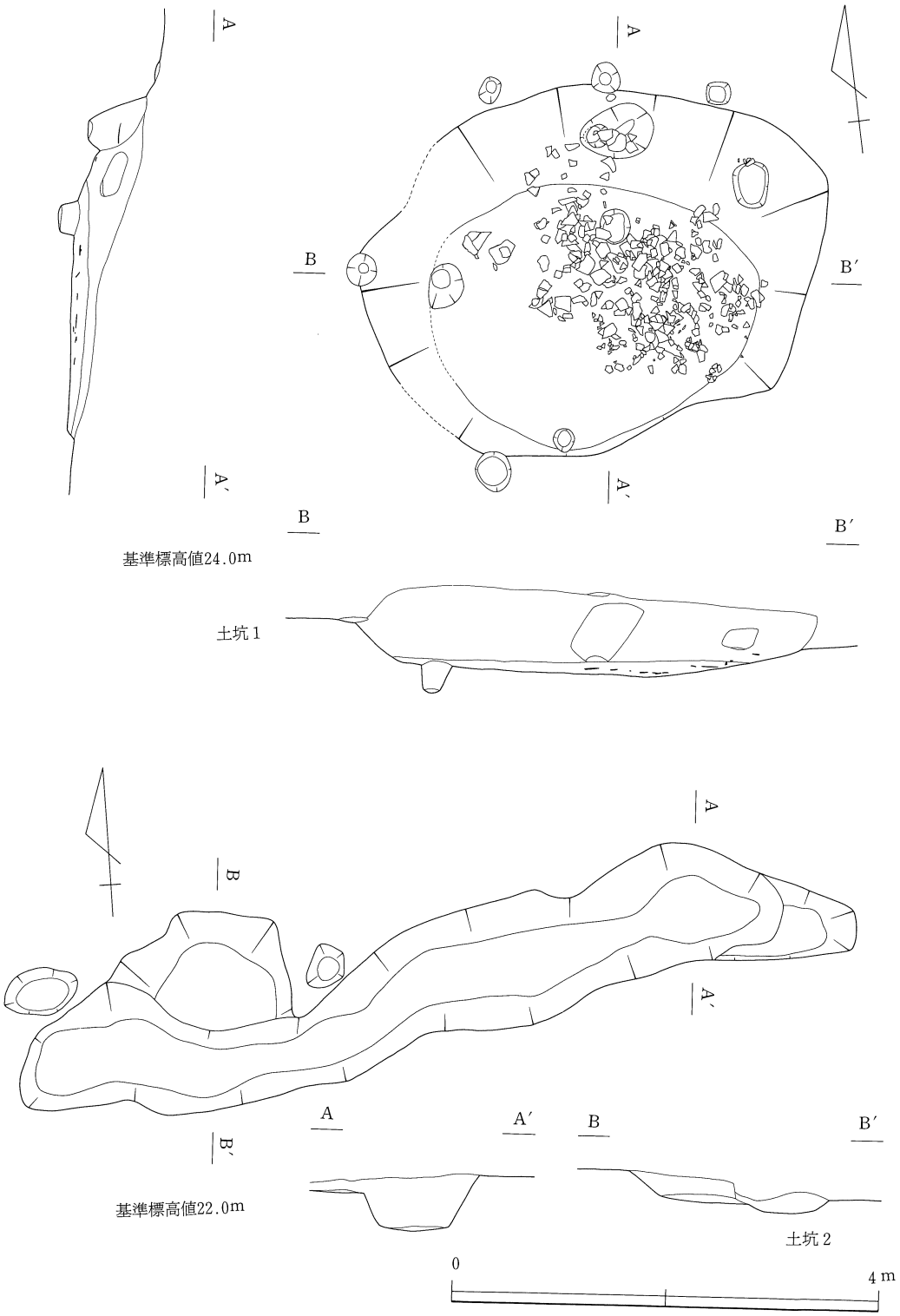
第6図　草場窯跡灰原土層断面位置図



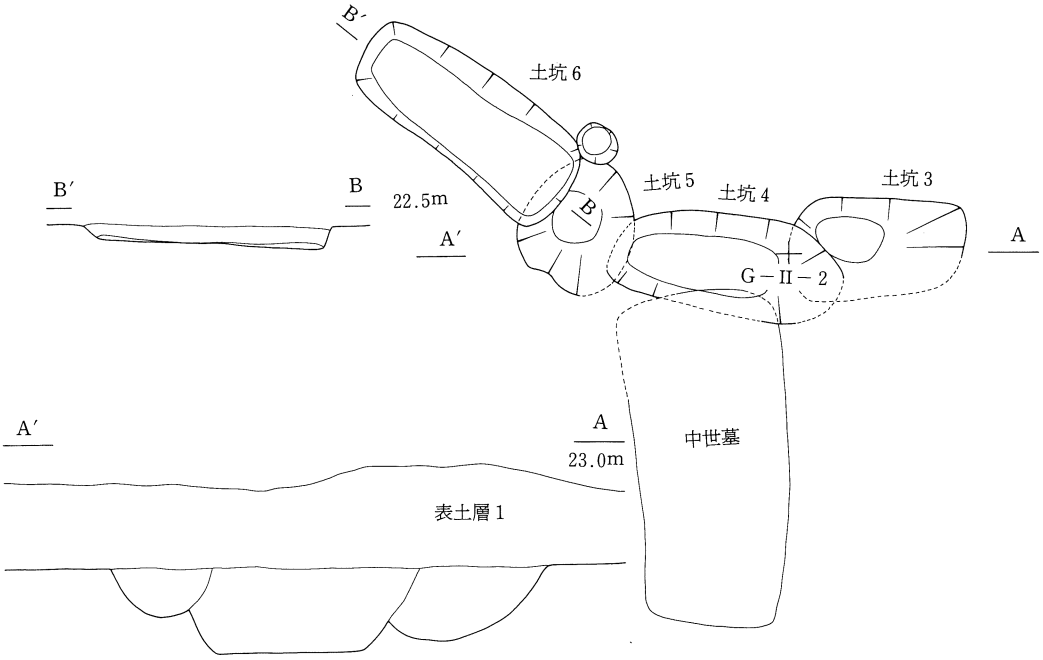
土層説明

0　撹乱
1　表土層
2　粗粒茶褐色土層（遺物包含）
3　黒褐色炭灰層（焼土若干混入）
4　黒茶褐色炭灰層（焼土、窯壁若干混入）
5　淡黒褐色炭灰層（焼土やや多量混入）
6　黒色炭灰層
7　硬質粘性黒茶褐色土層（窯構築時排土？）
8　硬質黒茶褐色土層
9　硬質粘性暗茶褐色土層（基盤層）
10　硬質緑黄褐色土層（凝灰岩風化土）

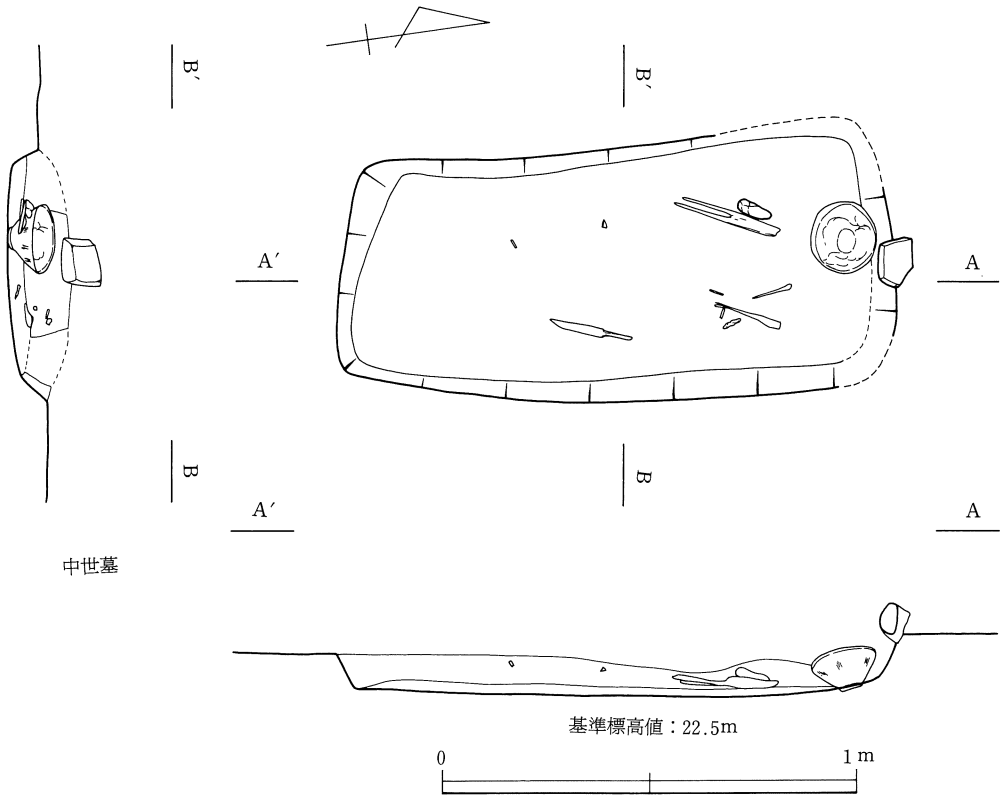
第７図　草場窯跡灰原土層断面図



第8図　土坑1，2実測図



第9図　土坑3，4，5，6実測図



第10図　中 世 墓 実 測 図

杯　蓋（21～69）

口縁部の屈曲をみると大きく２つに分けられる。１）口縁部が体部との境で屈曲するもので多くはこの形態を示す。２）天井部から緩く外傾気味にのびる（21、31、42）。

またほとんどがやや低平な器形であるが、とくに36、38は器高の低い例である。口縁部が肥厚する点は杯蓋の共通する特徴といえる。

蓋の大きさは口径11.2cm～12.7cm、器高3.1cm～4.2cmである。

調整技法は天井部回転ヘラ切り未調整、横ナデがみられすべての例に共通する。

杯　身（70～118）

身に器形の大きな差はない。しかし部位によって若干の特徴が見みられる。口縁部では三日月形が共通の形態となっているが、口縁部の矮小な例(74、106)、口縁部が受部に対して短く、その基部が厚い例（105～110、112、118）などがみられる。体部の立上がりは共通するが、とくに低平な例もある（97）。

身の大きさは口径10.0cm～11.4cm、器高3.0cm～3.8cmにほとんどが含まれる。

調整技法は底部回転ヘラ切り未調整、横ナデがすべての例に共通する。

蓋杯は器形、大きさからみて規格性の高いものである。

高　杯（119～148）

窯内から出土した高杯はすべて無蓋高杯である。

脚部の形態で２種に分けられる。１は細くやや長めの柱部をもち裾部から脚端にかけて低く広がる（119～131）。２は極めて低く八字状に広がる（132）。

１のタイプは杯部が浅く、杯蓋に似た形態を示す。脚端部はやや肥厚し丸みをもつもの（119～122、125、126、128～130）と上下に細く摘み上げられる例（123、124、127、131）の２種類ある。低脚の高杯はやや深めのは杯部をもつ。

脚　部（149～152）

壷類の脚部と考えられる破片である。150は外面に「⧺」のヘラ記号をもつ。152は長方形の透しをもつ。

瓶（153～162）

瓶は口縁部は頸部から内湾気味に大きく広がる。頸部は細く締まり短い。体部は偏平な球状をなす(153、154)。156～162は口縁部破片である。口縁部の形態は外へ開き直線的に伸びるものもあるが、概ね内湾気味に大きく広がる。また162の外面には２本一組の平行線が鋭角に交差するヘラ記号が刻まれている。

提　瓶（163～169）

頸部は直線的に伸びる。口縁部は直線的あるいは内湾気味に伸びる。

短頸壺（170）

口縁部が短く内傾する特徴をもつ。最大径は体部上半にある。

壺（171）

口縁部は短くやや外反し、端部が肥厚する。

甕（172～177）

口縁部の形態で２種に分けられる。１は口縁部が短く湾曲するものである(172、173)。２は口頸部が長く伸びるものである(174～177)。このタイプには口縁部が肥厚し断面矩形に仕上げられるもの（174)、肥厚した端部を上下に細く摘み上げたもの（175、)、さらに端部外面に段をもつ例（176、177）などがある。

特殊品（322、323）

322は一端を欠くが、緩く湾曲する形態をもち先端が細くなっており脚部の可能性がある。器面にはヘラ削りの整形痕が残る。現存長10cmである。323は全長23.3cmの棒状製品の完器である。形状は直線的であるが、両端がやや太く中央付近は端部に比較して細い。整形は丁寧なヘラ削りが施され、両端部にはヘラを用いた細かな面取りがなされている。これはほかの器種の部位ではなく、これ自体で製品と考えられる。

灰原須恵器（第22～28図・第32図316～321）

図示した須恵器は、灰原から出土したものである。

器種には蓋杯、高杯、提瓶、横瓶、擂鉢、壷、甕がある。また特殊なものとして硯、小型平瓶が出土している。

蓋　杯（178～230）

杯　蓋（178～198）

大きさをみると、口径10.8cm～12.4cm、器高2.7cm～4.0cmと幅がある。口縁部の形態は緩く口縁端部にいたるものと屈曲するものとがある。体部に比べ器厚が厚い点は共通する。天井部は平坦面をなし、体部との境に段をもつ例と丸く山形を呈する例がある（185、192)。180は器高が低く口縁部は外傾する。

出土した蓋杯は10組ある(１～20)。天井部の切り離し技法は、回転ヘラ切り未調整、あるいは切り離し後若干のナデを施す。また197、198は天井部外面に「×」のヘラ記号をもつ。

杯　身（199～230）

身の口縁部形態は受部から口縁部にかけて三日月状に反る例が大半であるが、口縁基部が厚く断面三角形を呈す202、207、矮小な203などがある。

高　杯（231～234、238～245）

231は杯蓋状の杯部をもつ。232～234は杯部の体部外面に段をもつ。232、234は小型品である。脚部の形態には端部が上下に摘み上げられるもの、丸く屈曲、嘴状を呈するものなどがある。

蓋（235～237）

有蓋高杯の蓋である。236は偏平なつまみをもつ。235、236は天井部にカキ目調整が施されている。236、237は天井部と口縁部の境に段をもつ。

長頸壺（246）

頸部の破片である。外面にカキ目調整が施されている。

提　瓶（247～249、255）

247は口縁部のみ残る。248、249、255は体部破片である。外面にカキ目調整が施されている。

壺（250）

口縁部が短く外反する特徴をもつ。最大径は体部上半にある。

横　瓶（251）

１側面が残る破片である。側面には回転ヘラ削りによる整形痕跡が残る。

甑（253）

口縁部から胴部上半の破片である。口縁部の屈曲は弱い。胴部外面に平行叩きの調整痕が残る。

摺　鉢（253、254）

253は1／2個体が残る。253、254ともに底部は厚い。

甕（256～261、263～268）

口縁～頸部の形態で大きく２種類ある。256～261は大きく外反し小型である。263～268は直線的にのび、中型、大型である。口縁端部は肥厚し段をもつ例と丸くなる２種類がある。265は口縁部に平行する連続する刺突文、口縁下に連続山形文が２列残る。263、264、266～268の頸部に櫛描波状文が巡る。

硯（316、317）

円面硯の残欠であろう。316については円面硯の可能性があるものと指摘するに留めたい。317は脚部の破片である。透しをもつ。

小型平瓶（318～320）

これらは水滴と考えられる平瓶の小型品である。肩部の破片のみ残っている。

硯、水滴は今回報告する草場窯跡の製品ではなく二次的に流入した遺物と考えられる。後述する新しい時期の遺物に伴うものであろう。

321は小型製品の底部残欠である。類品に焼台がある。

土坑須恵器（第29・30図）

土坑１からは甕（269～276）の破片が出土している。外面に平行叩き、内面に同心円の当て具痕が残る。土坑２から出土した遺物は278～281、283～289である。土坑３からは282、290が出土している。

蓋　杯（277～283）

杯　蓋（277、278）

山形状のやや器高の高い形状を示し、口縁部は肥厚する。天井部の切り離し技法は回転ヘラ切り未調整である。

杯　身（279～283）

口縁部から受部が三日月状になるもの、断面三角形をなすものなどがある。

𤮊（285、290）

口縁部の破片である。外に開く形態を示す。

短頸壺（289）

口縁部は直立し端部に向かい肥厚する。最大幅は肩部にある。底部は丸底をなす。

壺（285、290）

285は口縁部が直立気味に立上がり端部上面が平坦になっている。290は胴部下半の残欠であり、高台の欠落した痕跡が残る。

甕（286～288）

3点ともに口頸部が大きく外反する。

以上の遺物のほかに灰原や土坑から7世紀代と8世紀中葉の須恵器、土師器が出土している。

7世紀の遺物（第31図291～300）

遺物はすべて杯である。

杯　蓋（292～298）

292～295はつまみの破片である。宝珠状、偏平なボタン状をなすものがある。296～298は内面に返りをもつ。

杯　身（299、300）

299は口縁部が緩く外反する。300は長めで外へ開く高台をもつ。体部は外傾して立ち上がる。

8世紀の遺物（第31図301～315）

杯（301～307）

301、302、304～307は無台の杯である。306、307は小型品である。303、305は高台をもつ。

蓋（308、309）

308は杯の蓋である。つまみは低いボタン状をなす。口縁部は屈曲せず緩く端部にいたる。

309は壷類の蓋である。天井部から屈曲し器高が高い。つまみはもつが欠落している。

鉄　鉢（310）

鉄鉢型の須恵器である。口縁部は内湾し、端部は平坦面をなす。底部は尖る。

土師器（311～315）

311は杯の口縁部破片である。内湾気味の体部をもつ。313は盤の底部である。短い高台を体

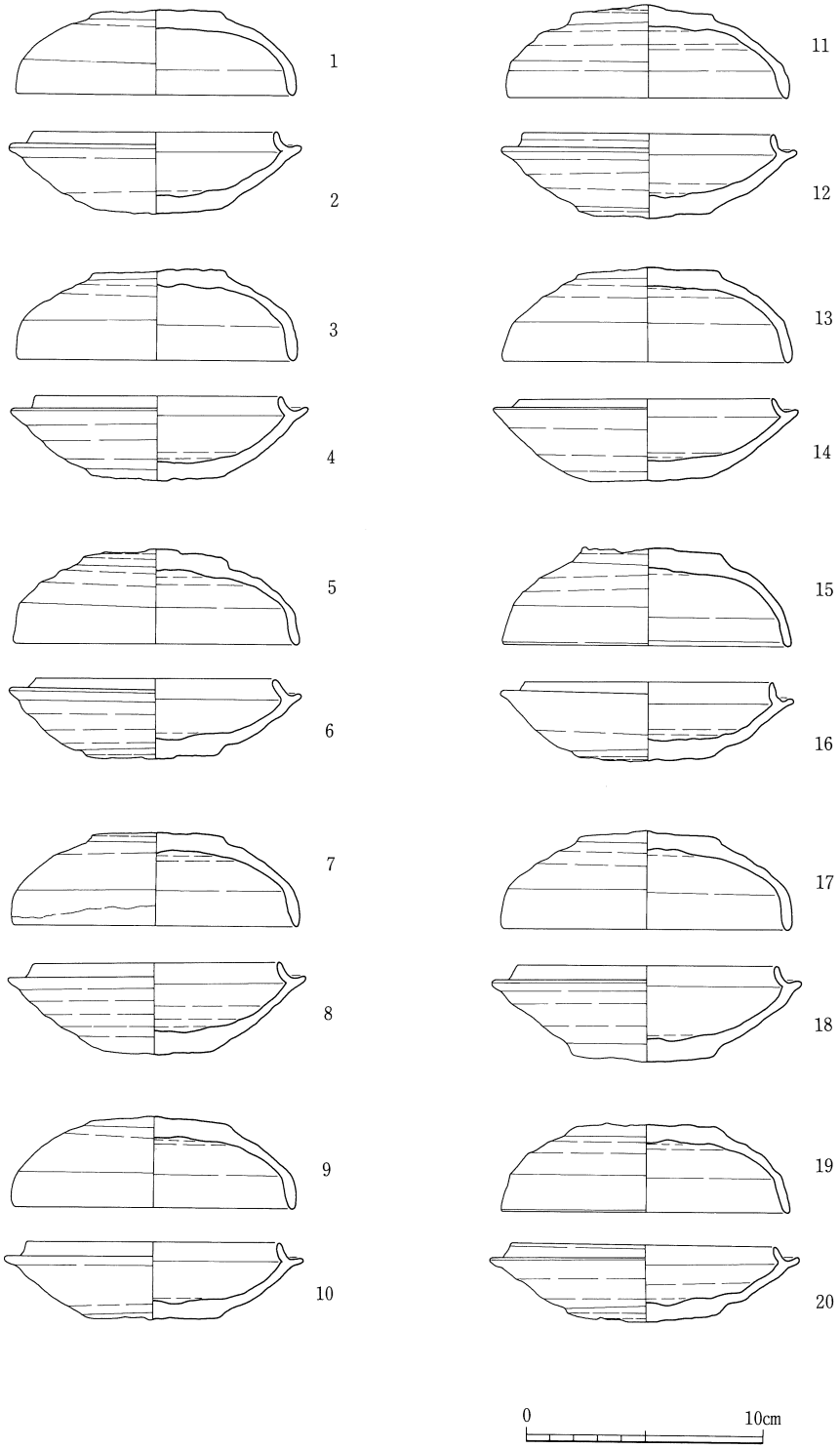
部下端寄りにもつ。314は壷の底部破片で、長めの高台をもつ。312・315は鉢である。312は丸い体部に外へ開く口縁部をもつ。頸部に円形の浮文が2個1組で対応する2か所に付されている。315は体部が丸く内湾し、口縁部は外へ強く屈曲する。

中世墓の遺物（第33図1～6）

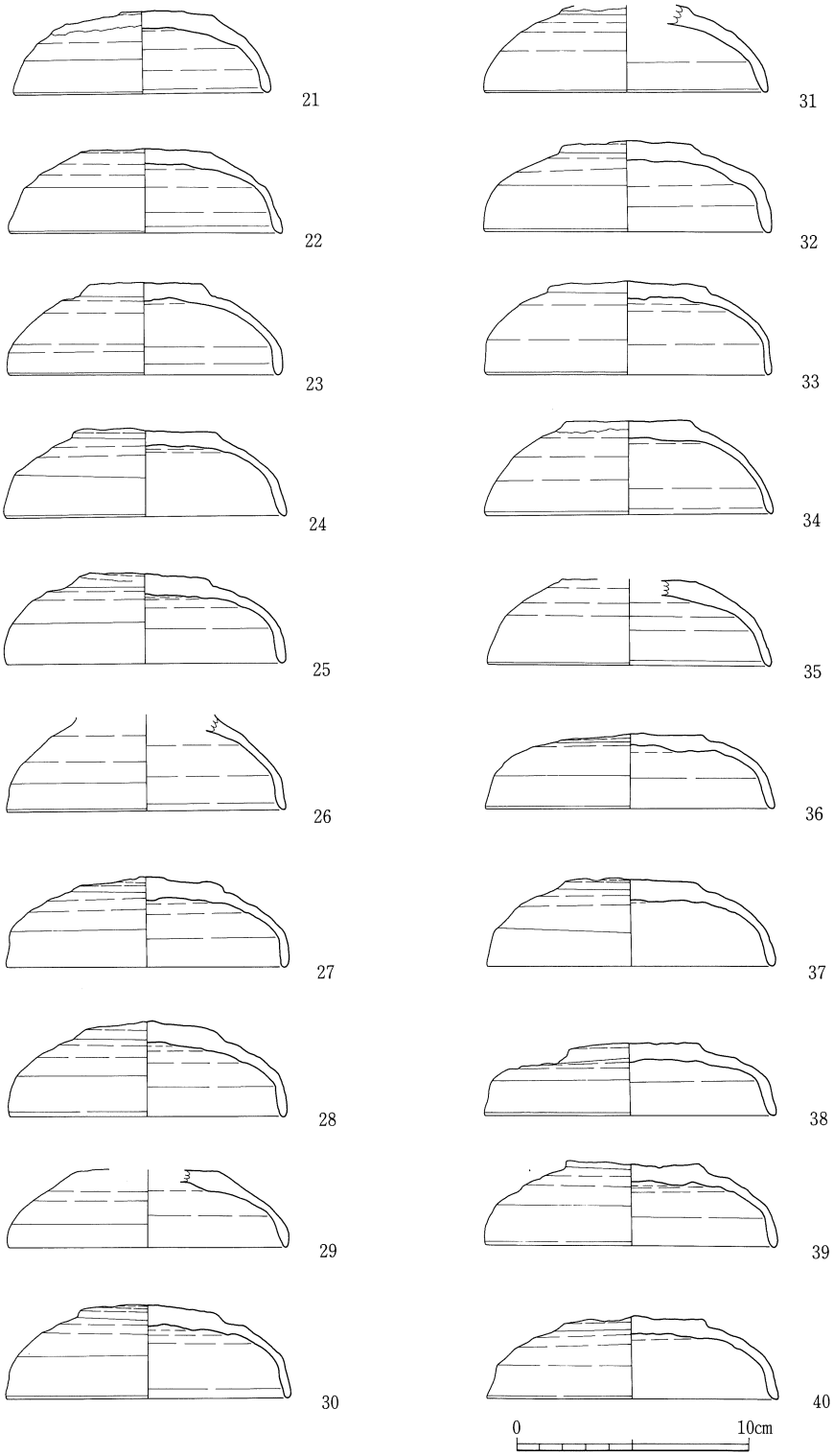
1は刀子で茎部の先端部分を欠く。大きさは現存長20.3cm、刀身長13.7cm、最大幅2.2cmである。2、3は鉄鉗である。2は片方の柄端部が失欠している。接合部分は円形の鋲で留めている。柄は直線的に伸びる。鉗部は先端で挟む形態である。全長は15.7cm、柄の長さ12.5cm、鉗部の長さ2.0cmである。3は片方の柄端部および鉗部を失欠している。2よりもやや大型で、全長24.3cm、柄の長さ20.3cm、鉗部の長さ2.2cmである。形態は2と同様である。2、3の断面形は柄が正方形、鉗部は横にやや長い長方形を呈する。

4は同安窯系の青磁椀である。高台は台形状で、体部は内湾気味に立ち上がる。外面には櫛目の施文がみられる。内面にヘラによる片彫りと櫛描のジグザグ文様が施されている。大きさは口径16.6cm、器高7.0cmである。釉は全体に薄くかかっている。横田・森田分類のⅠ—1に該当する（横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」九州歴史資料館研究紀要4、1978年）。時期は12世紀後半から13世紀初頭と考えられる。

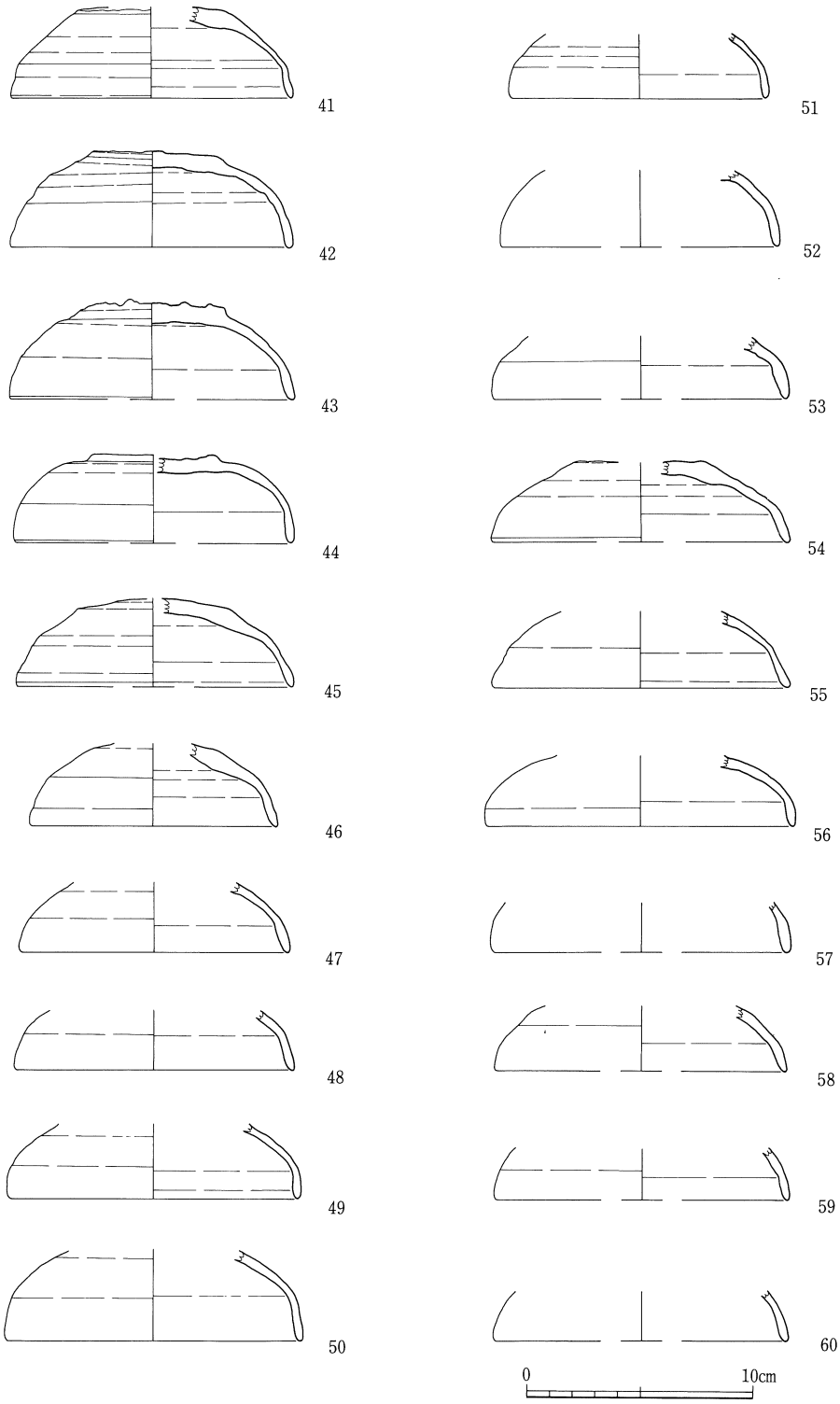
またこの鉄鉗は鍛冶道具の可能性が高い鉄製品であり、この墓の被葬者の性格を示すものであろう。



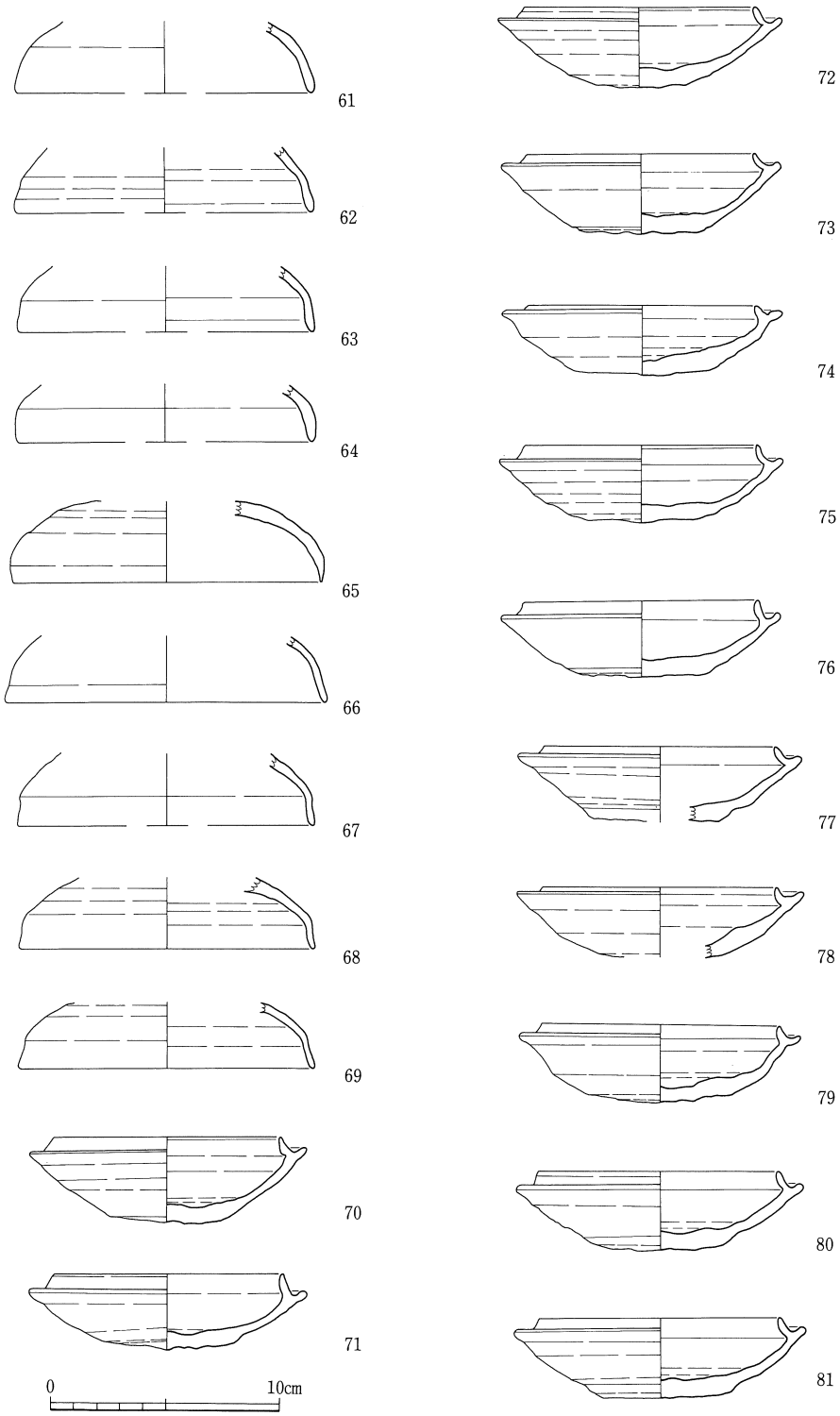
第11図　草場窯跡出土遺物実測図(1)　－窯内－



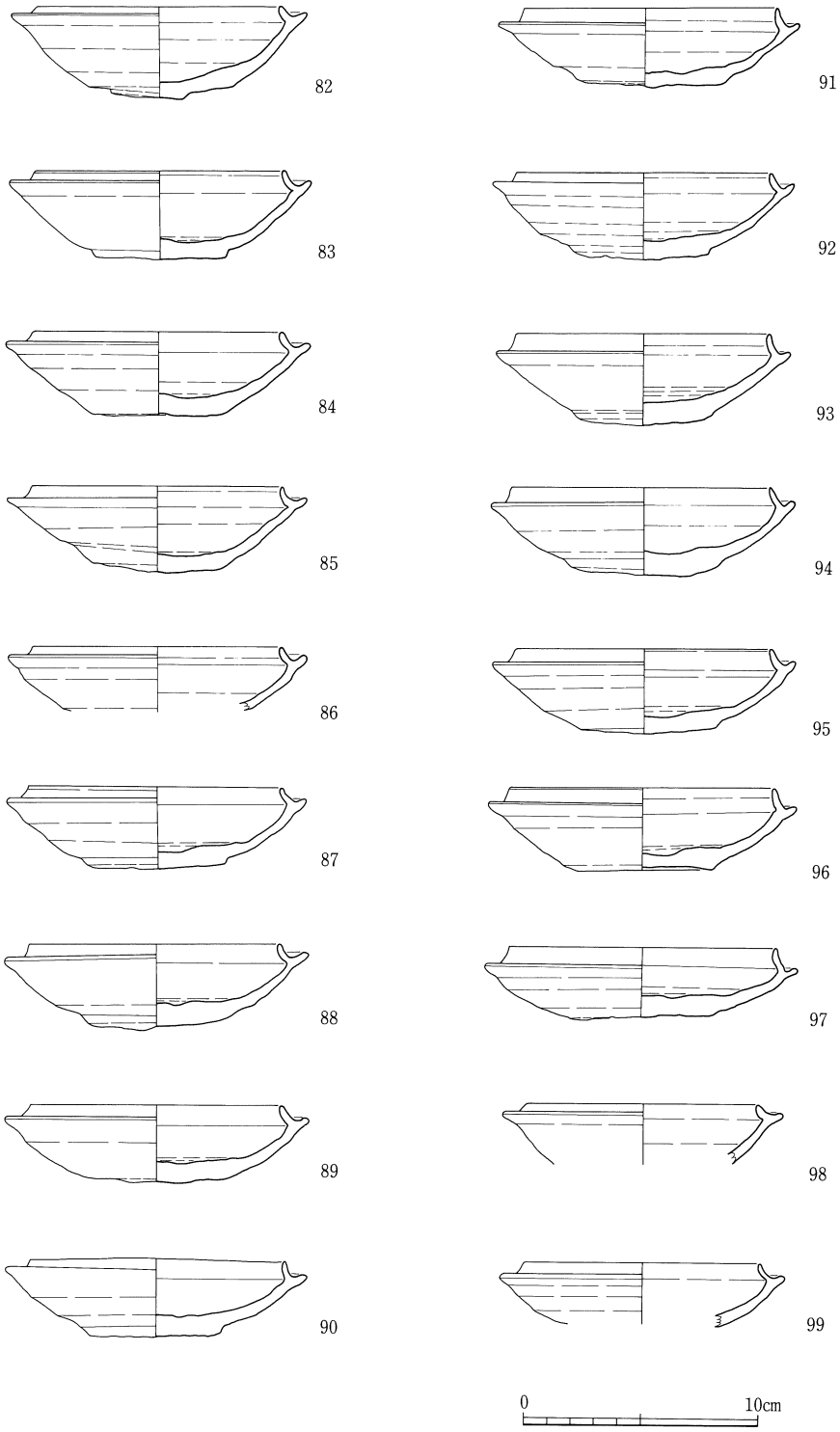
第12図　草場窯跡出土遺物実測図(2)　－窯内－



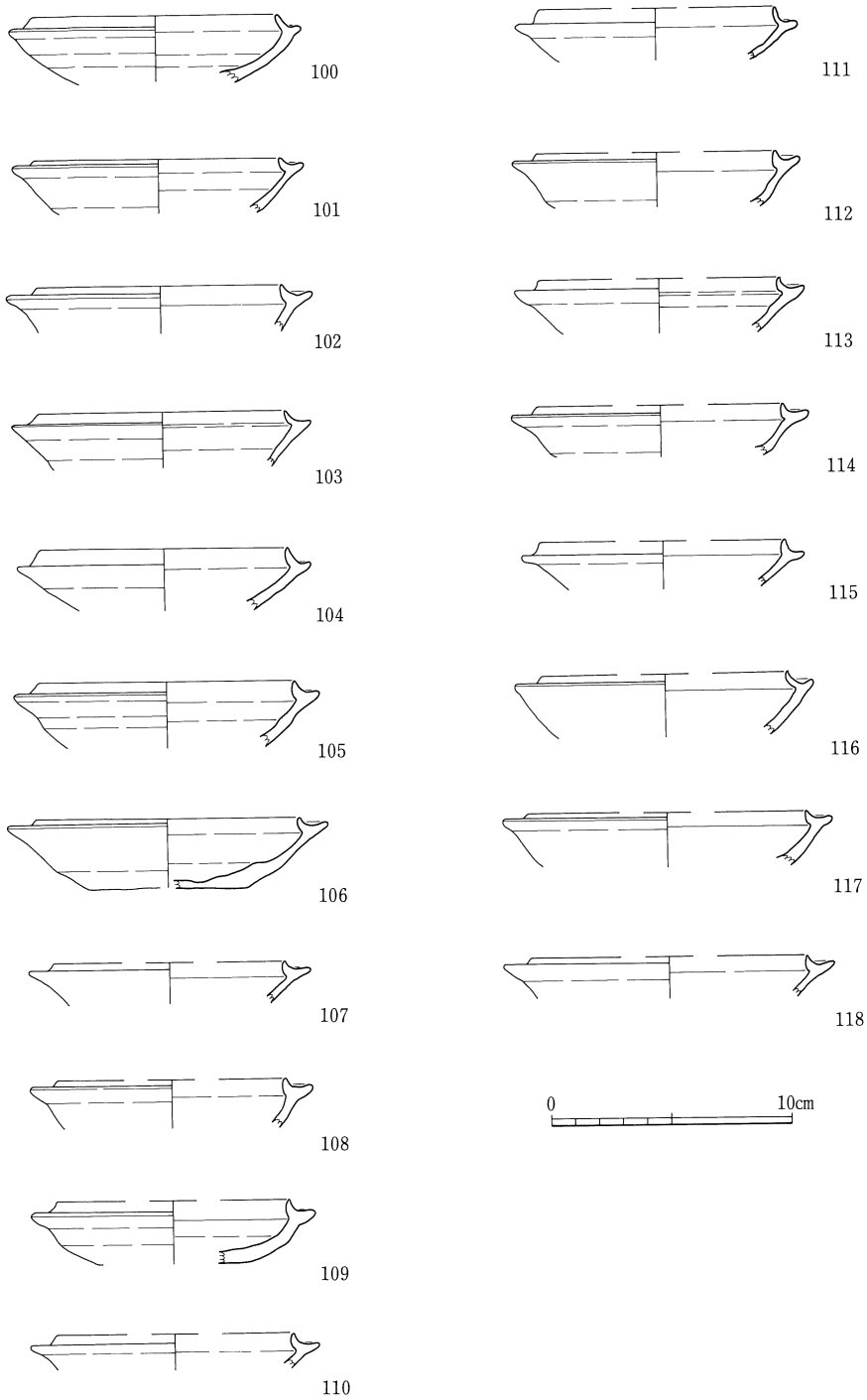
第13図　草場窯跡出土遺物実測図(3)　－窯内－



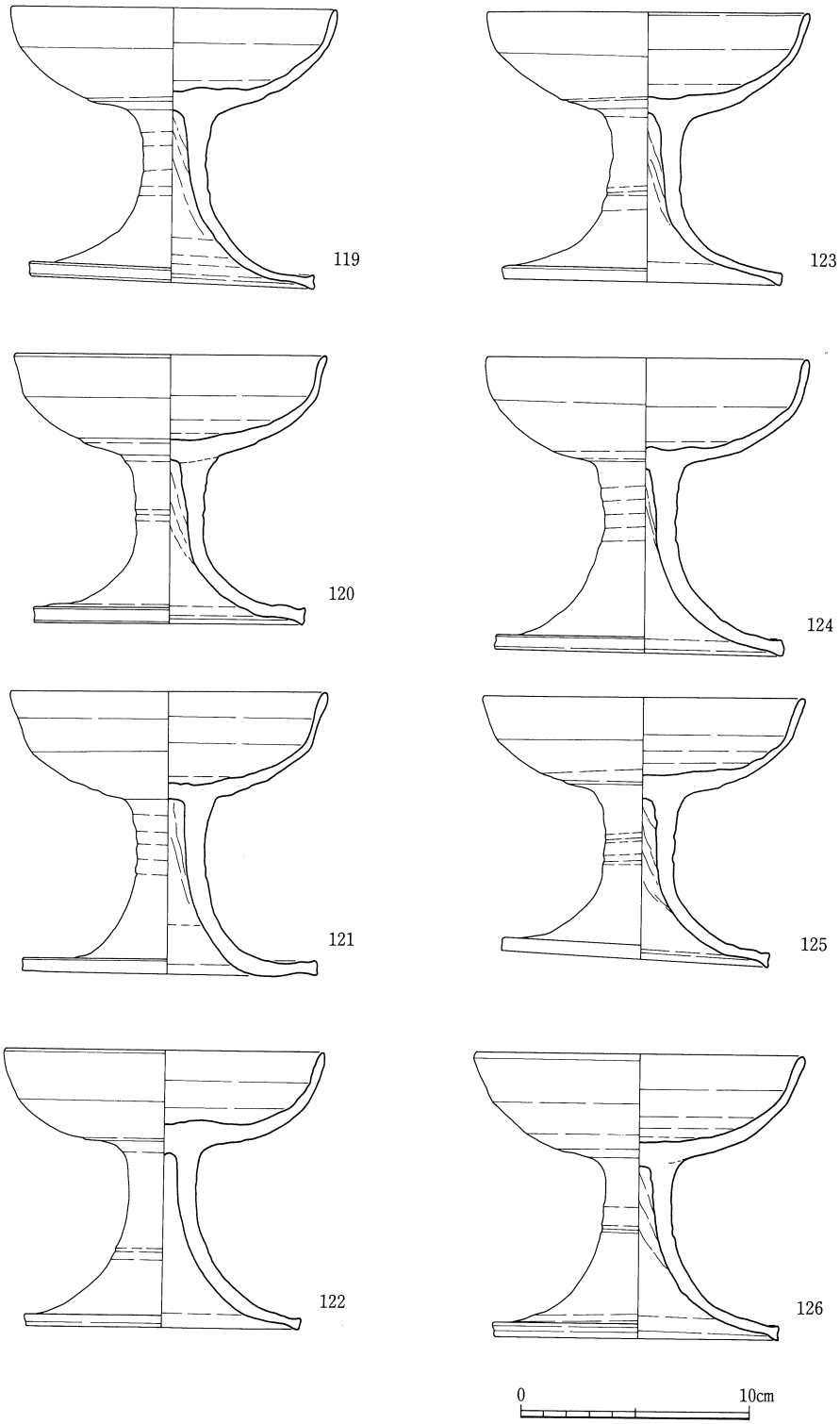
第14図　草場窯跡出土遺物実測図(4)　－窯内－



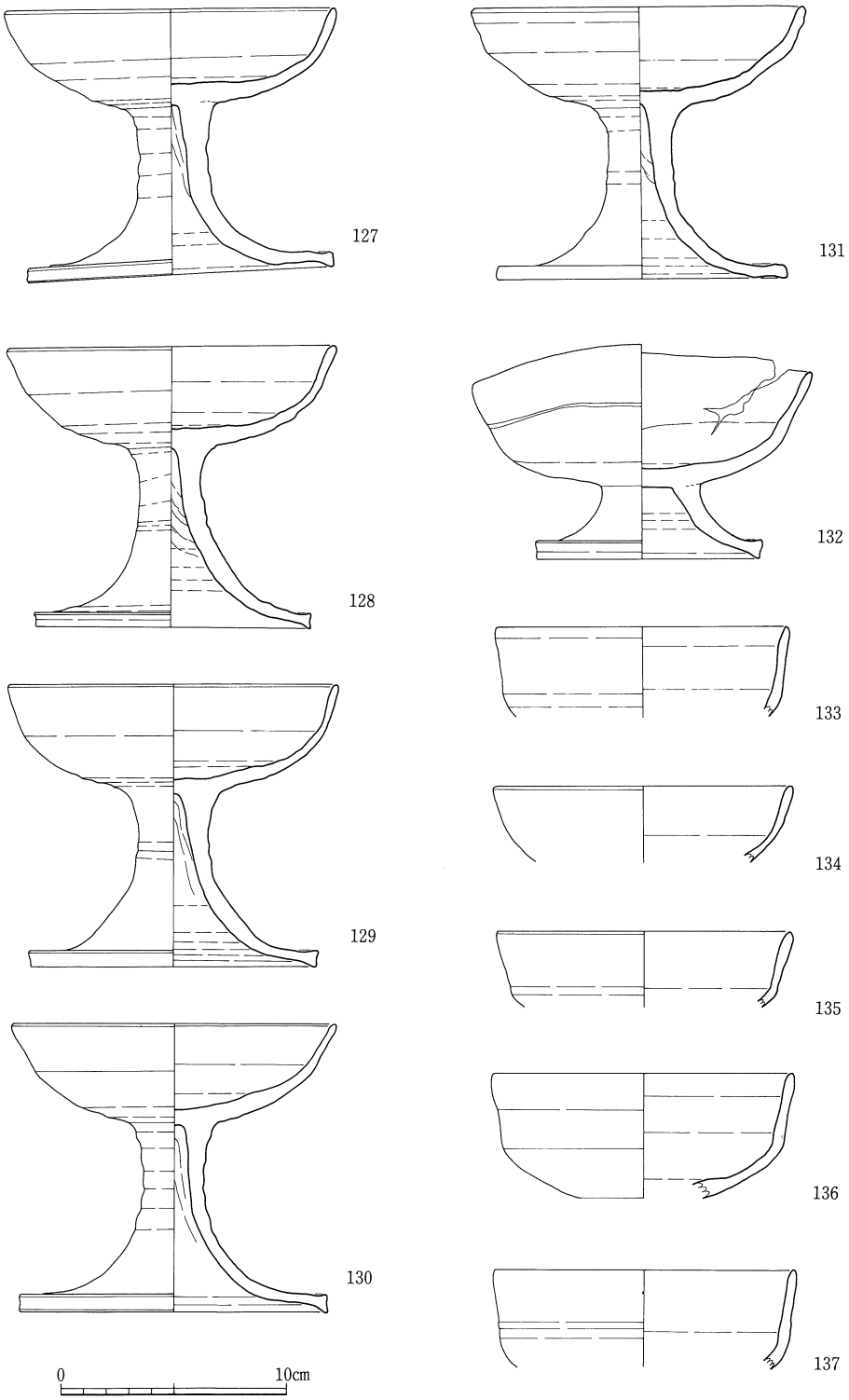
第15図　草場窯跡出土遺物実測図(5)　－窯内－



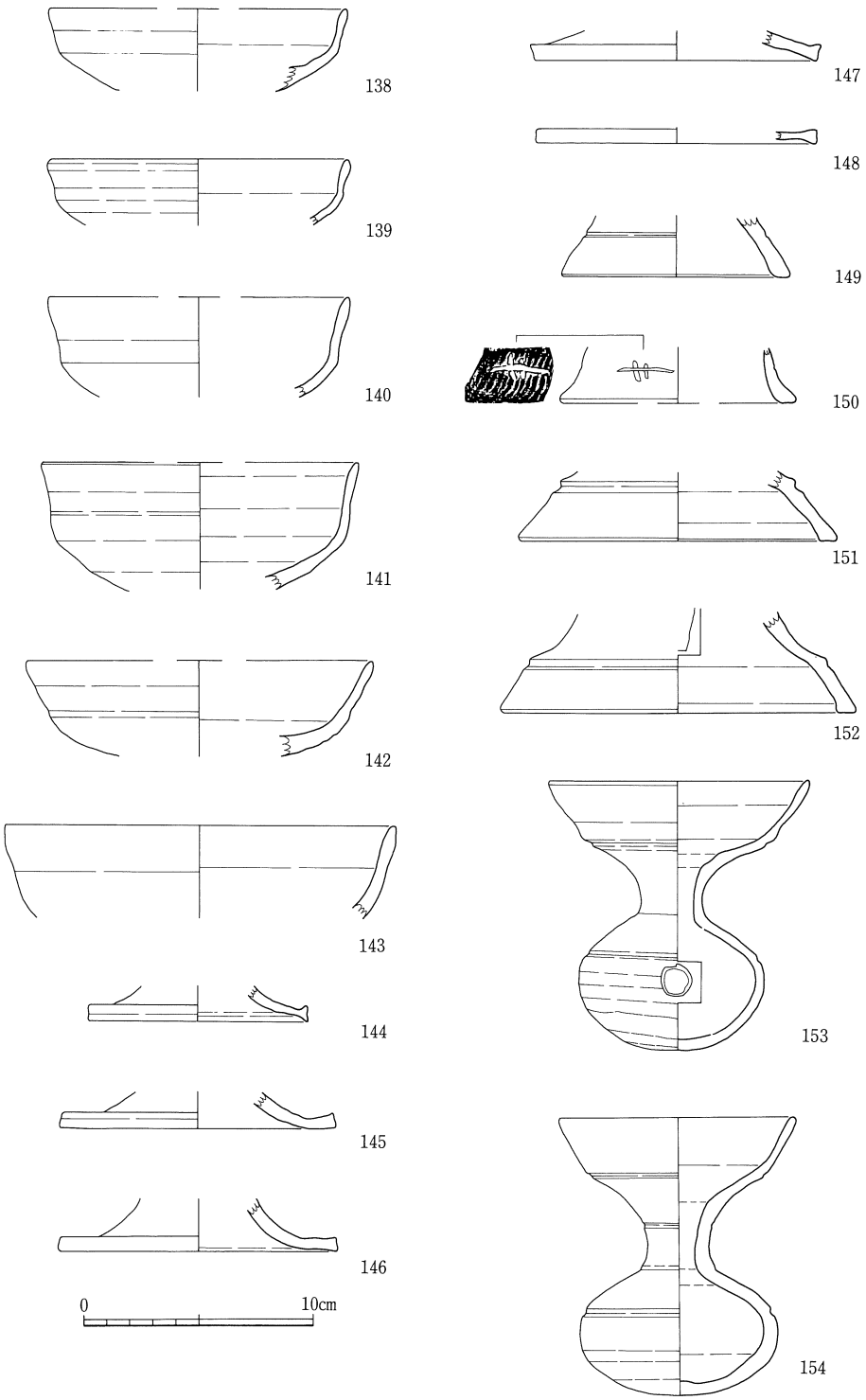
第16図　草場窯跡出土遺物実測図(6)　－窯内－



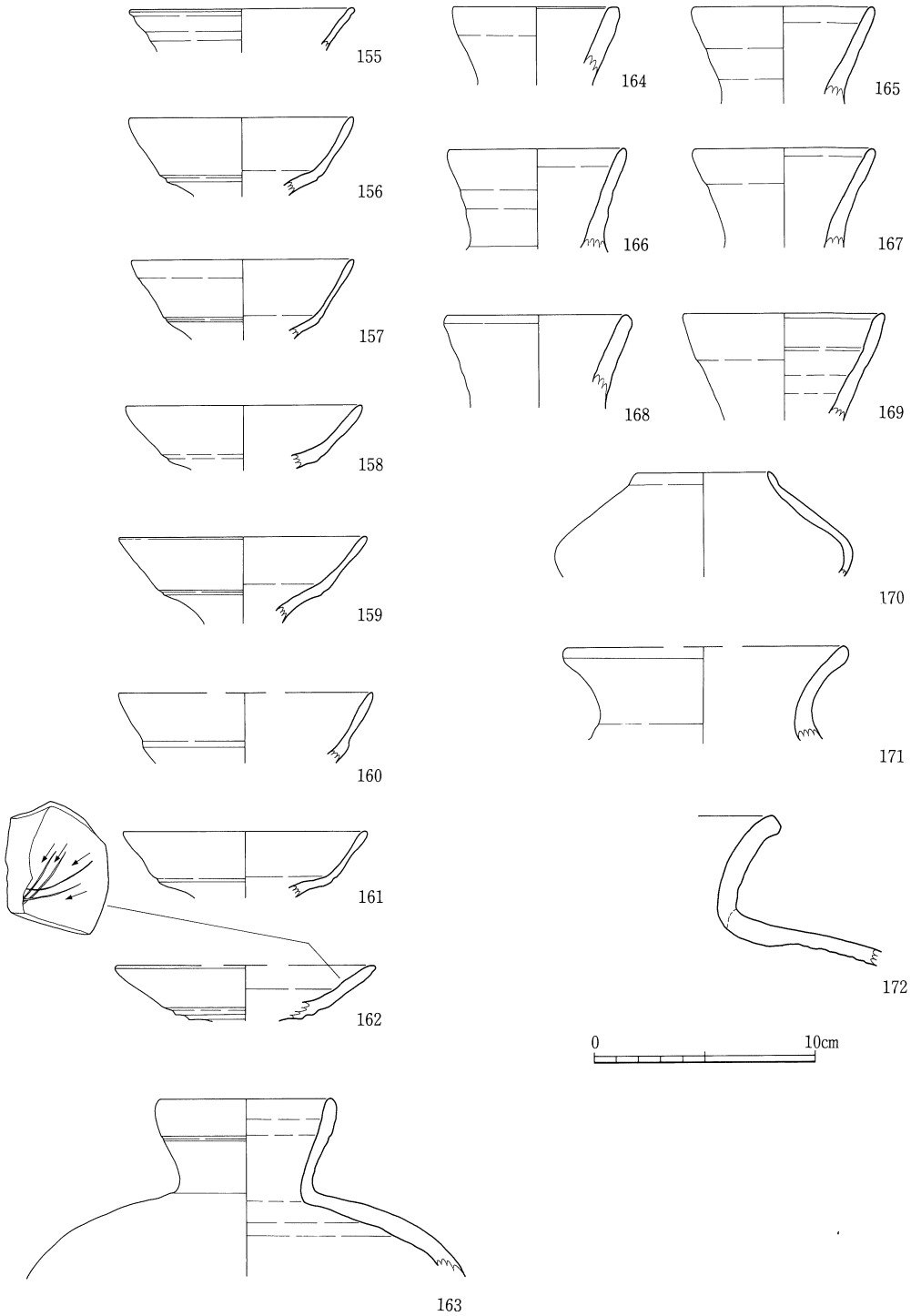
第17図　草場窯跡出土遺物実測図(7)　－窯内－



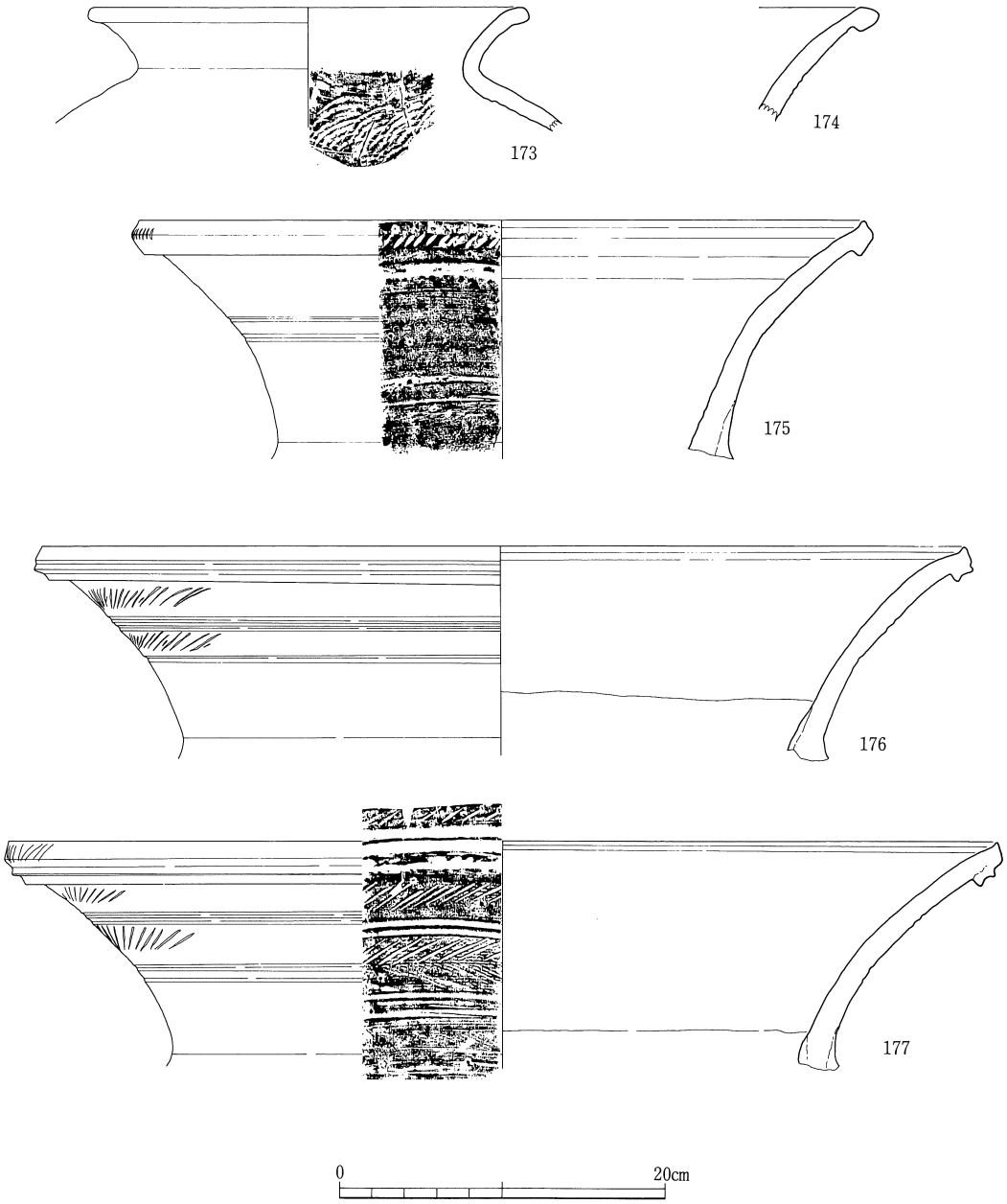
第18図　草場窯跡出土遺物実測図(8)　－窯内－



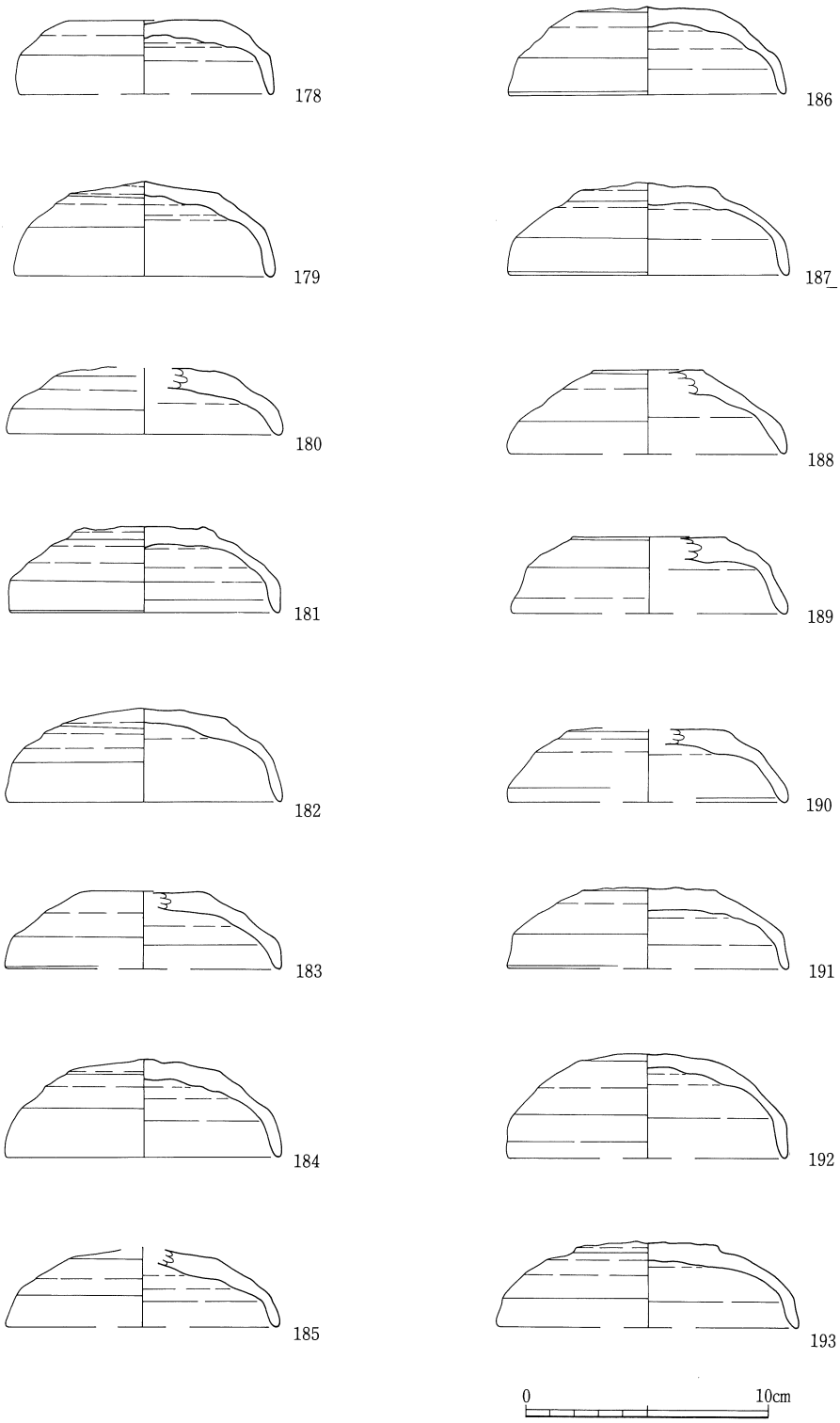
第19図　草場窯跡出土遺物実測図(9)　－窯内－



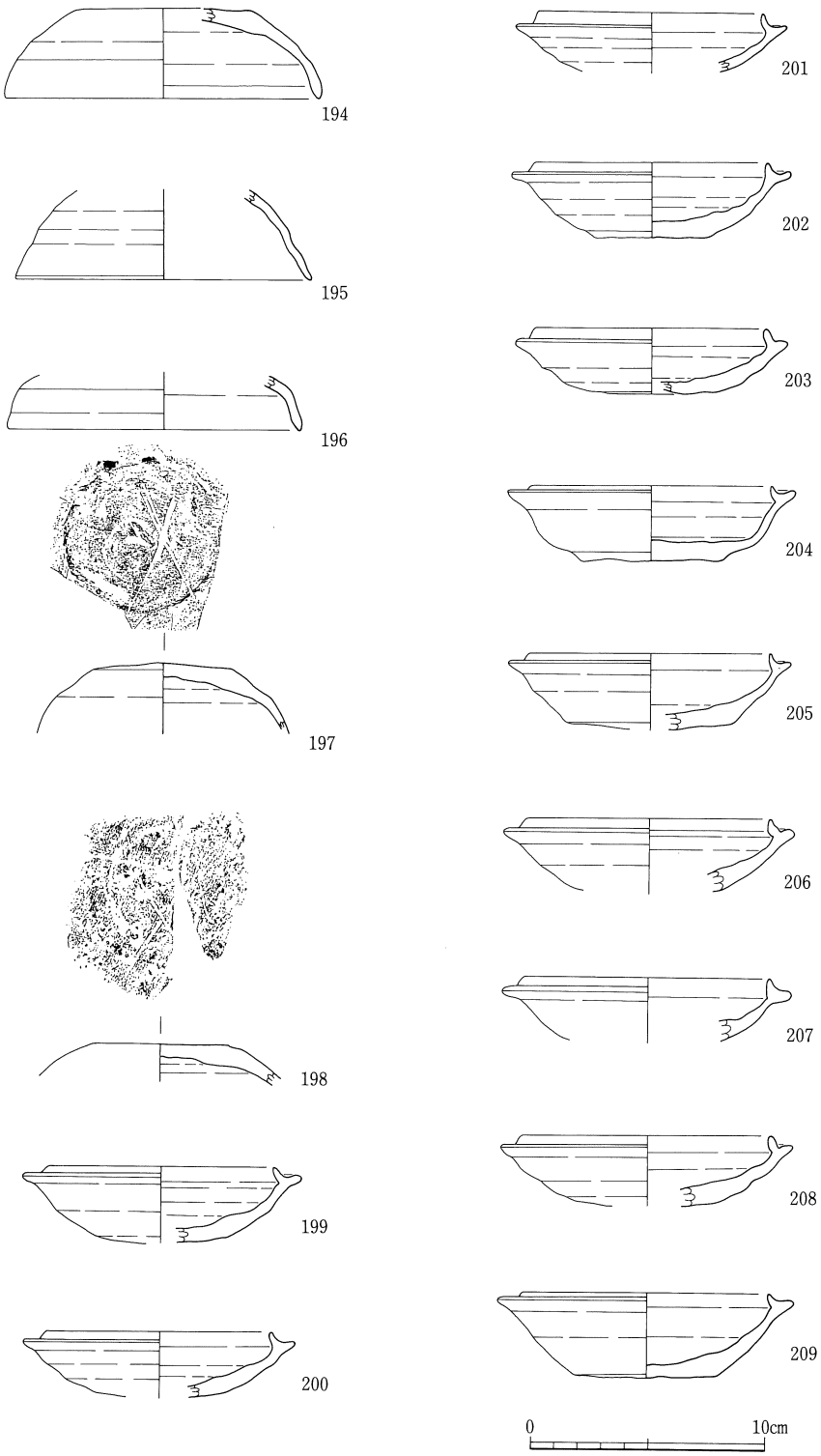
第20図　草場窯跡出土遺物実測図(10)　－窯内－



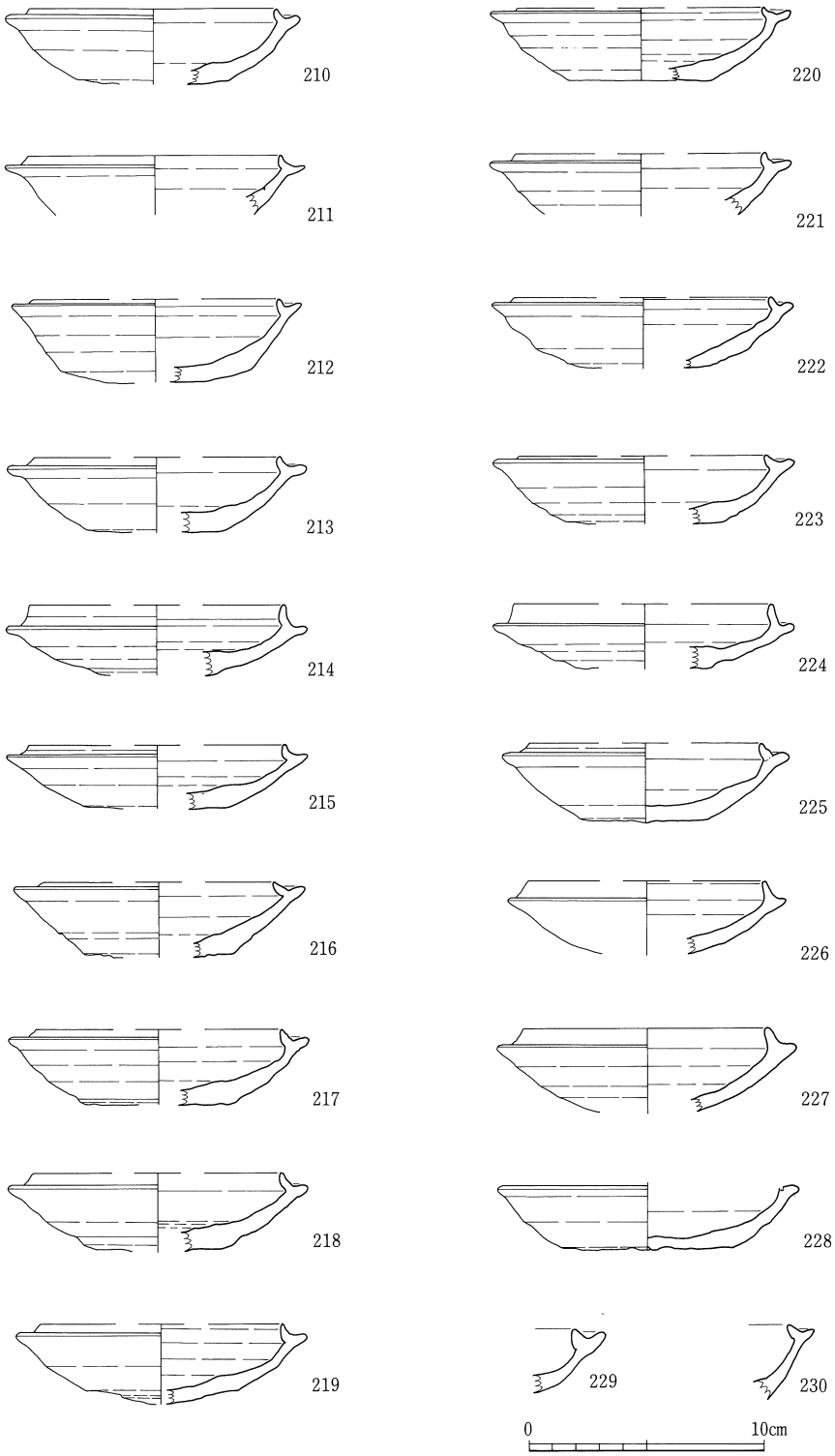
第21図　草場窯跡出土遺物実測図(11)　－窯内－



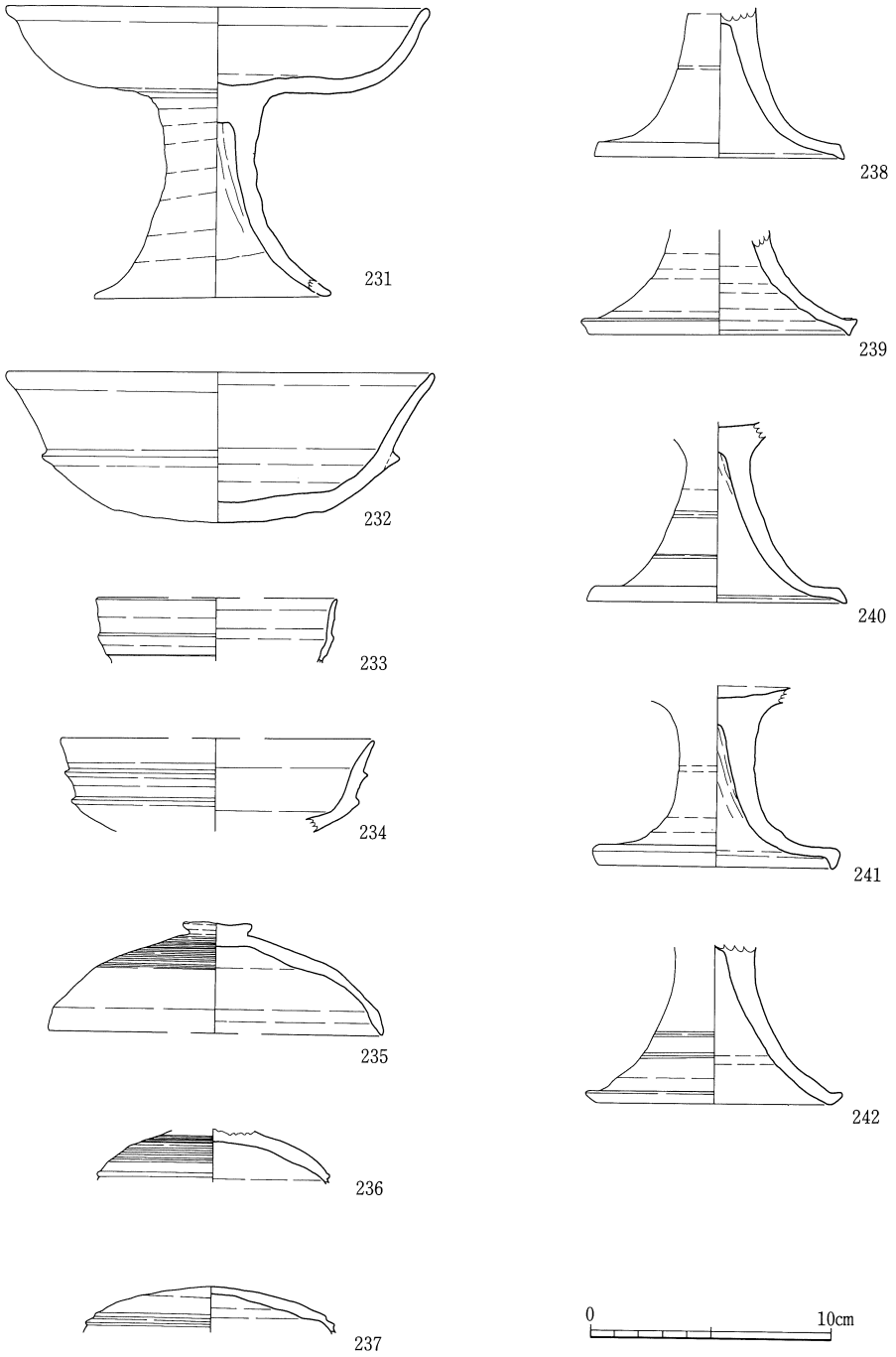
第22図　草場窯跡出土遺物実測図(12)　－灰原－



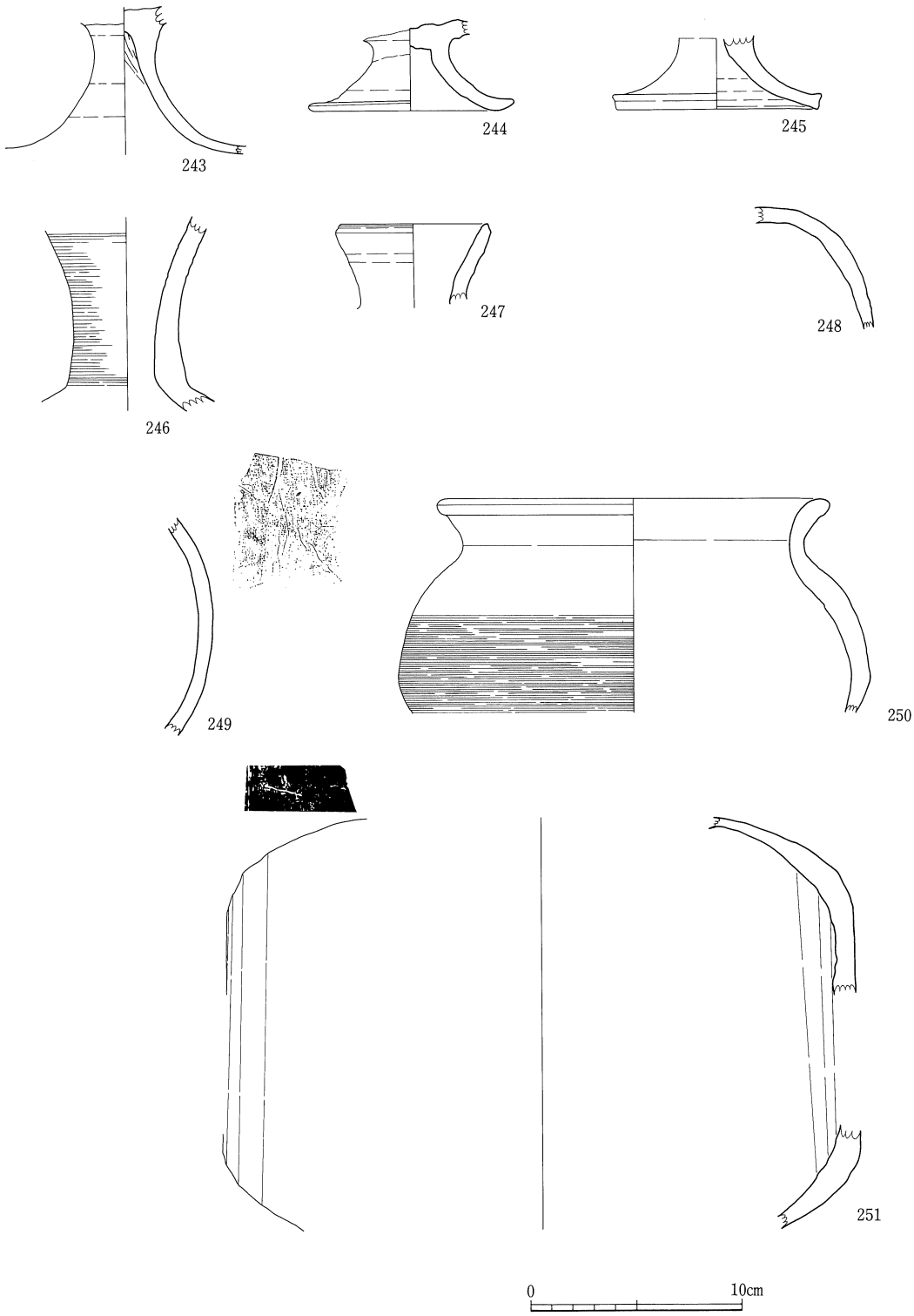
第23図　草場窯跡出土遺物実測図(13)　－灰原－



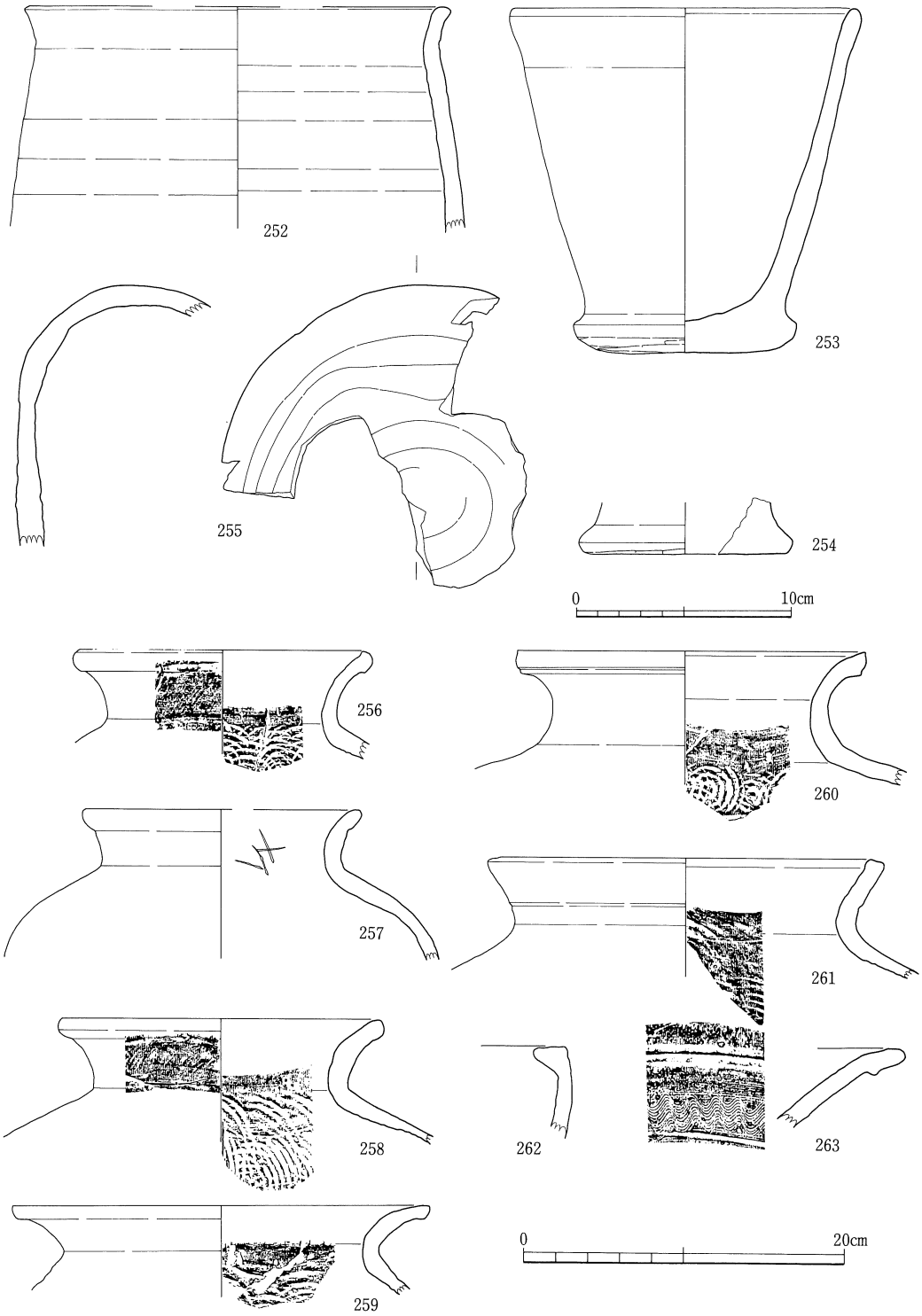
第24図　草場窯跡出土遺物実測図(14)　－灰原－



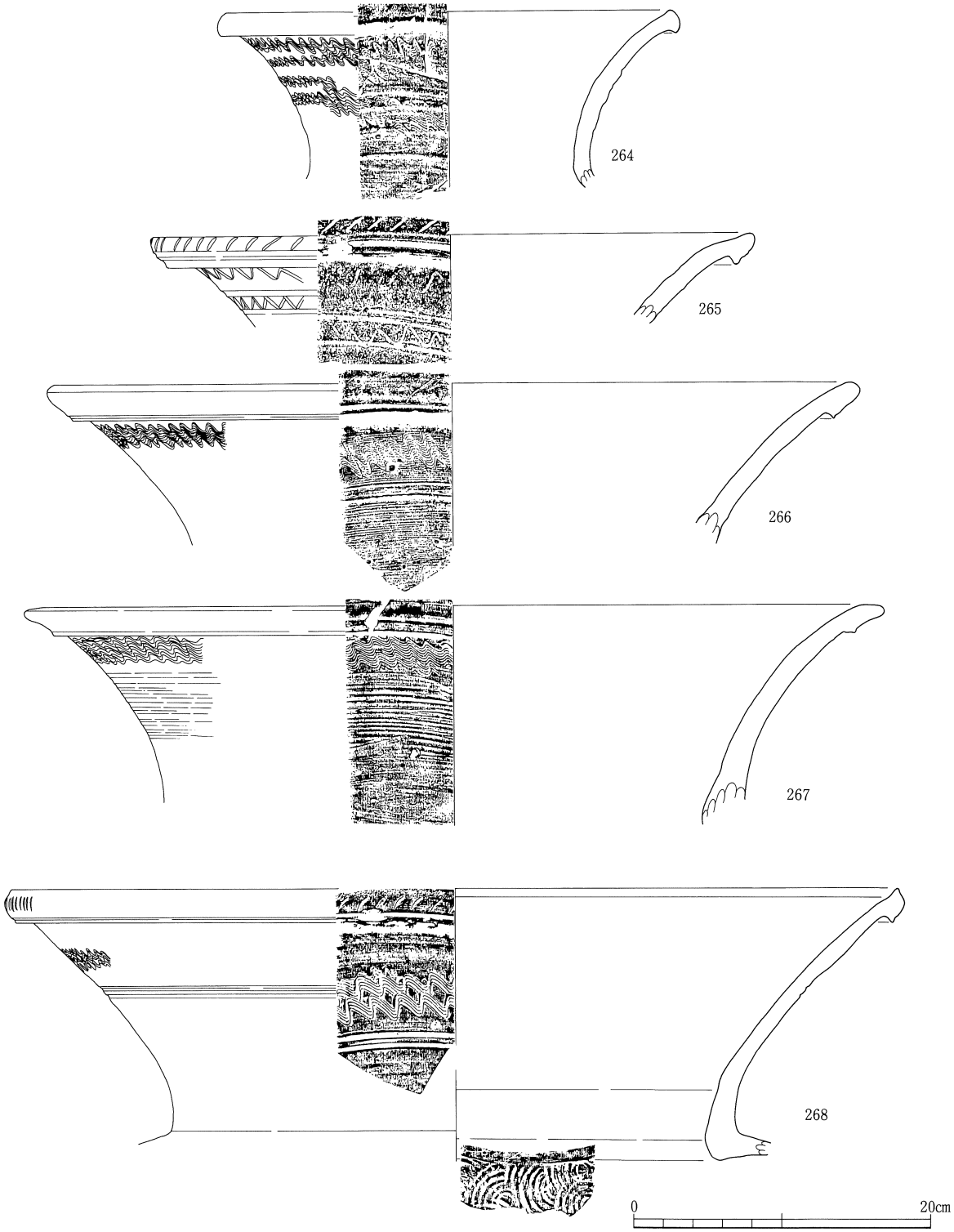
第25図　草場窯跡出土遺物実測図(15)　－灰原－



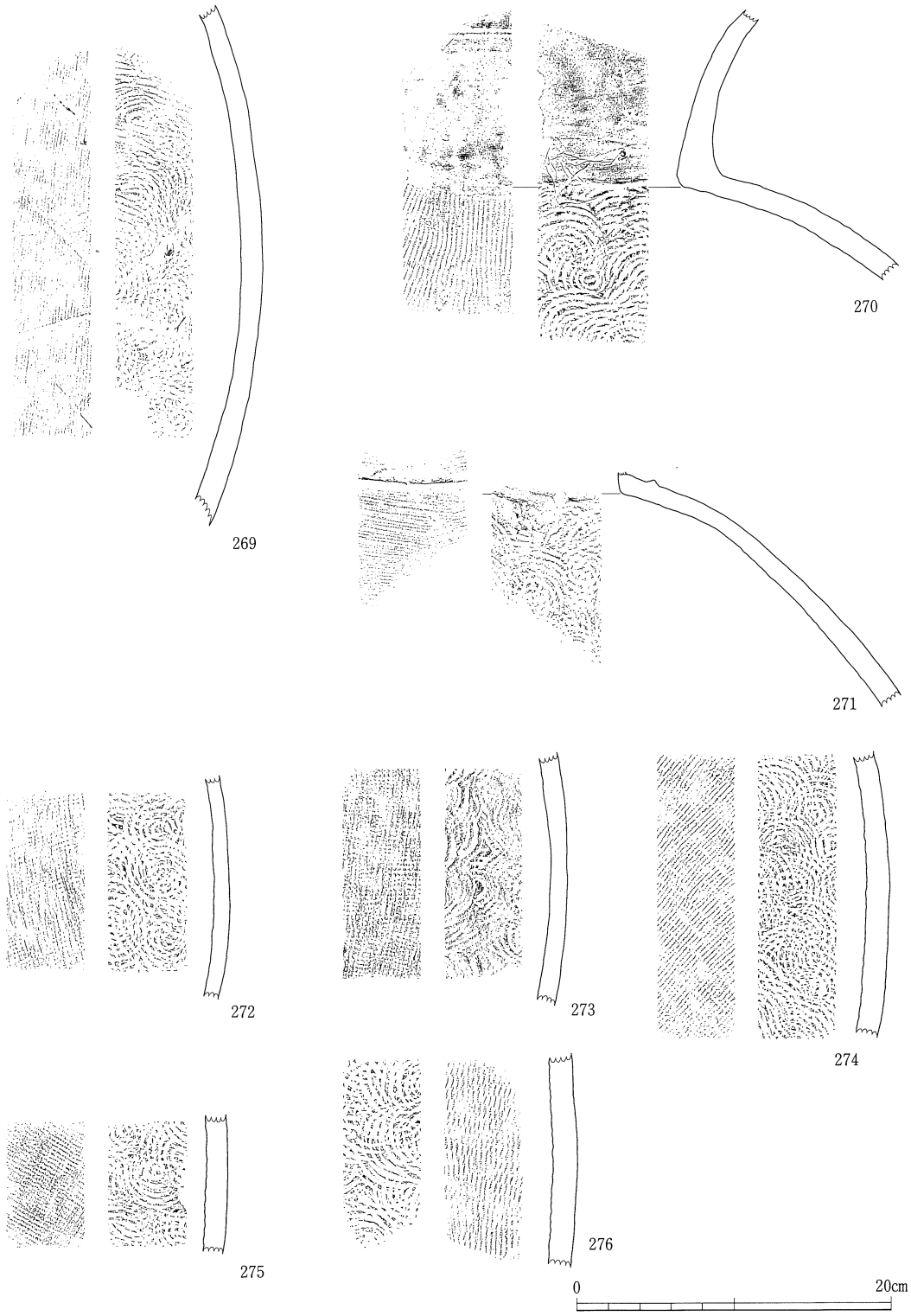
第26図　草場窯跡出土遺物実測図⑯　－灰原－



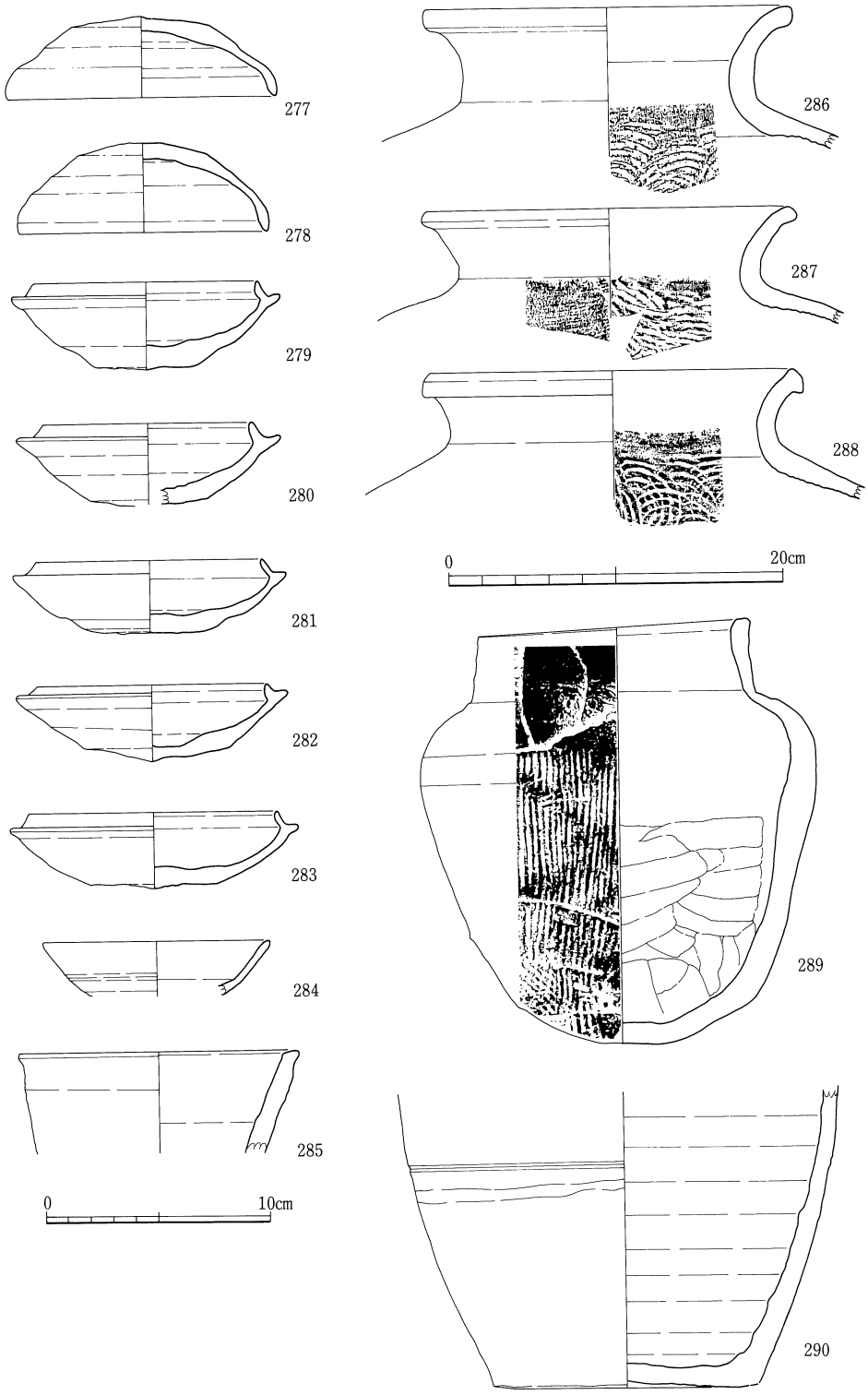
第27図　草場窯跡出土遺物実測図(17)　－灰原－



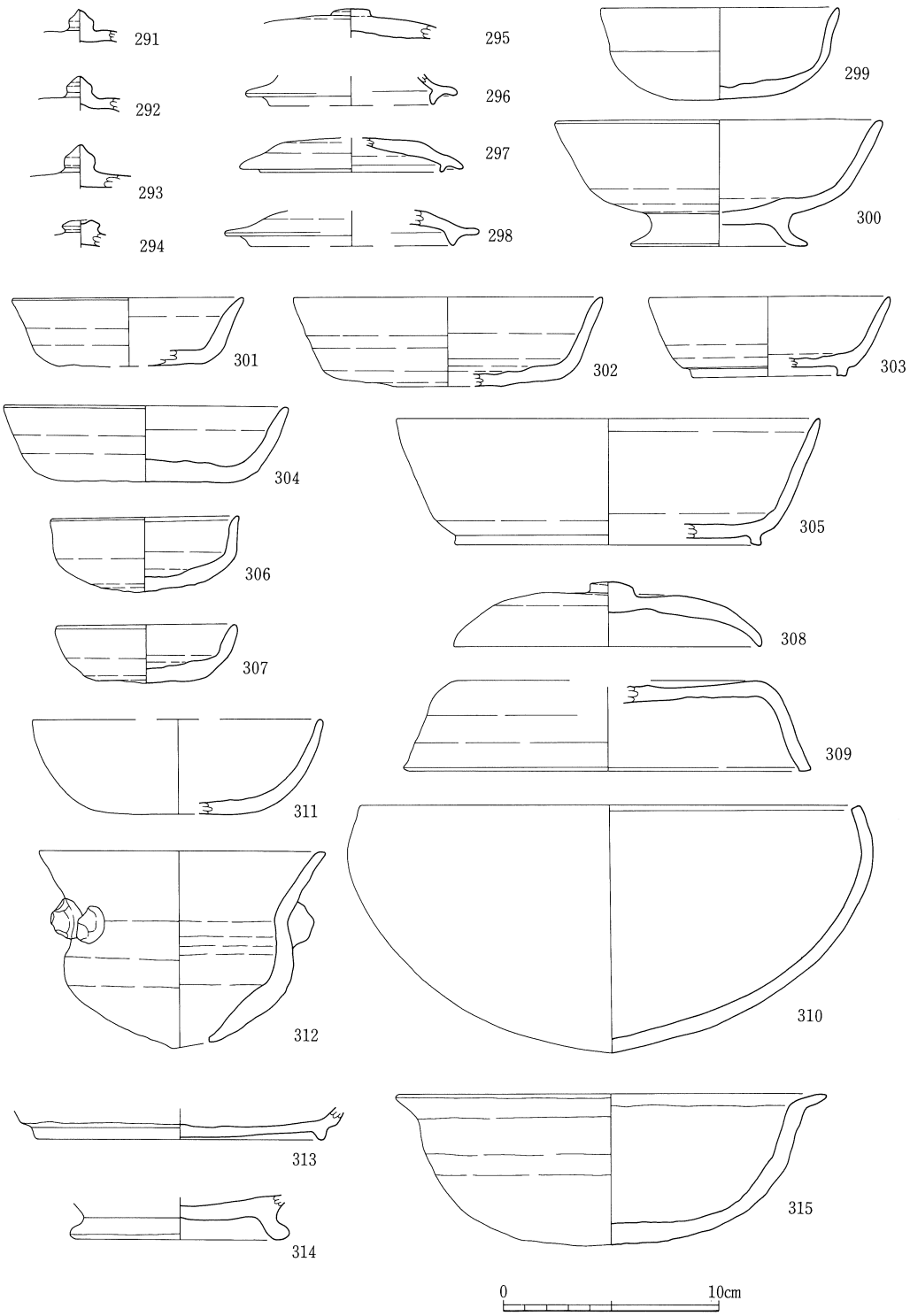
第28図　草場窯跡出土遺物実測図⑱　－灰原－



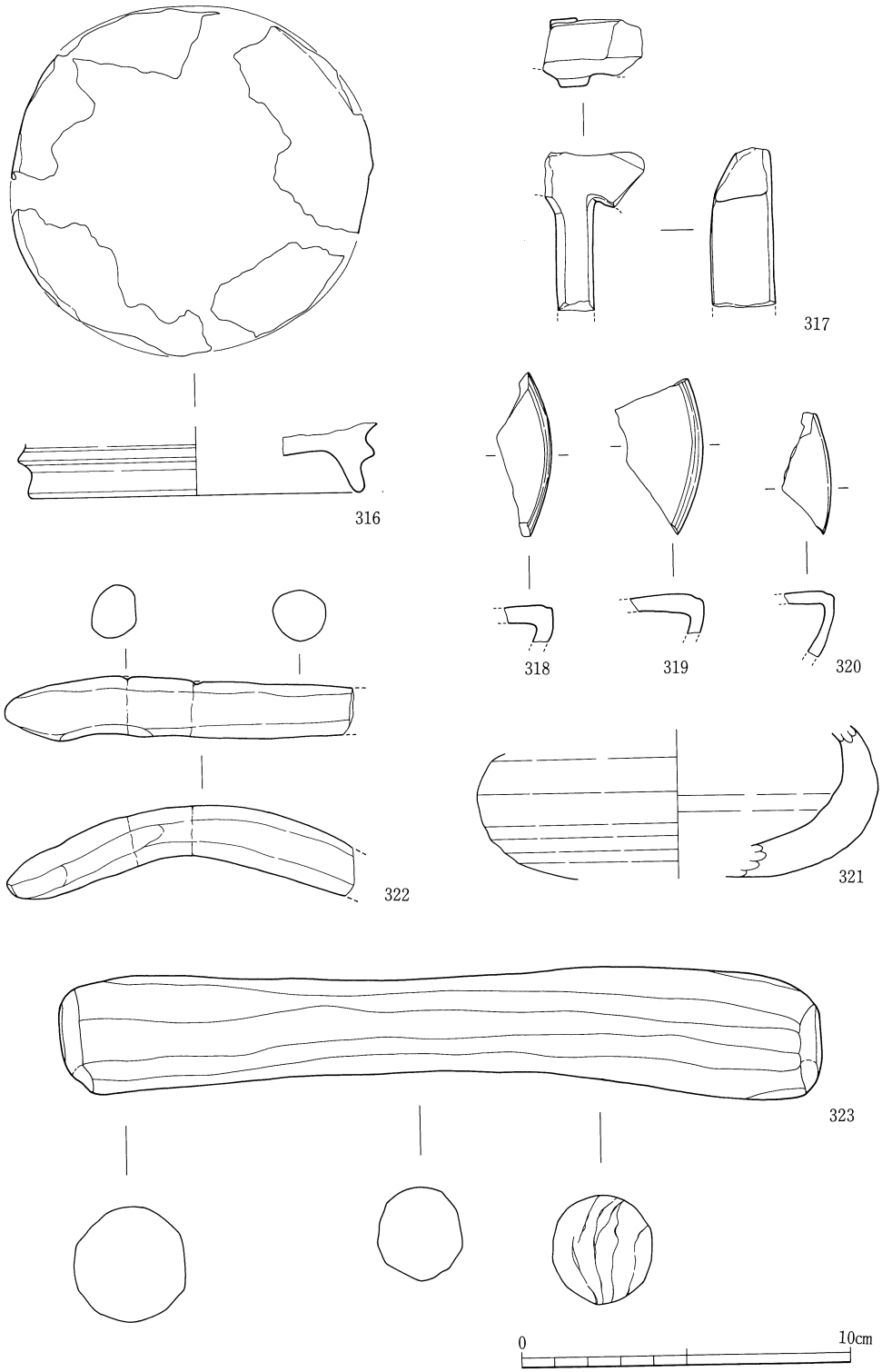
第29図　草場窯跡出土遺物実測図⑲　―土坑１―



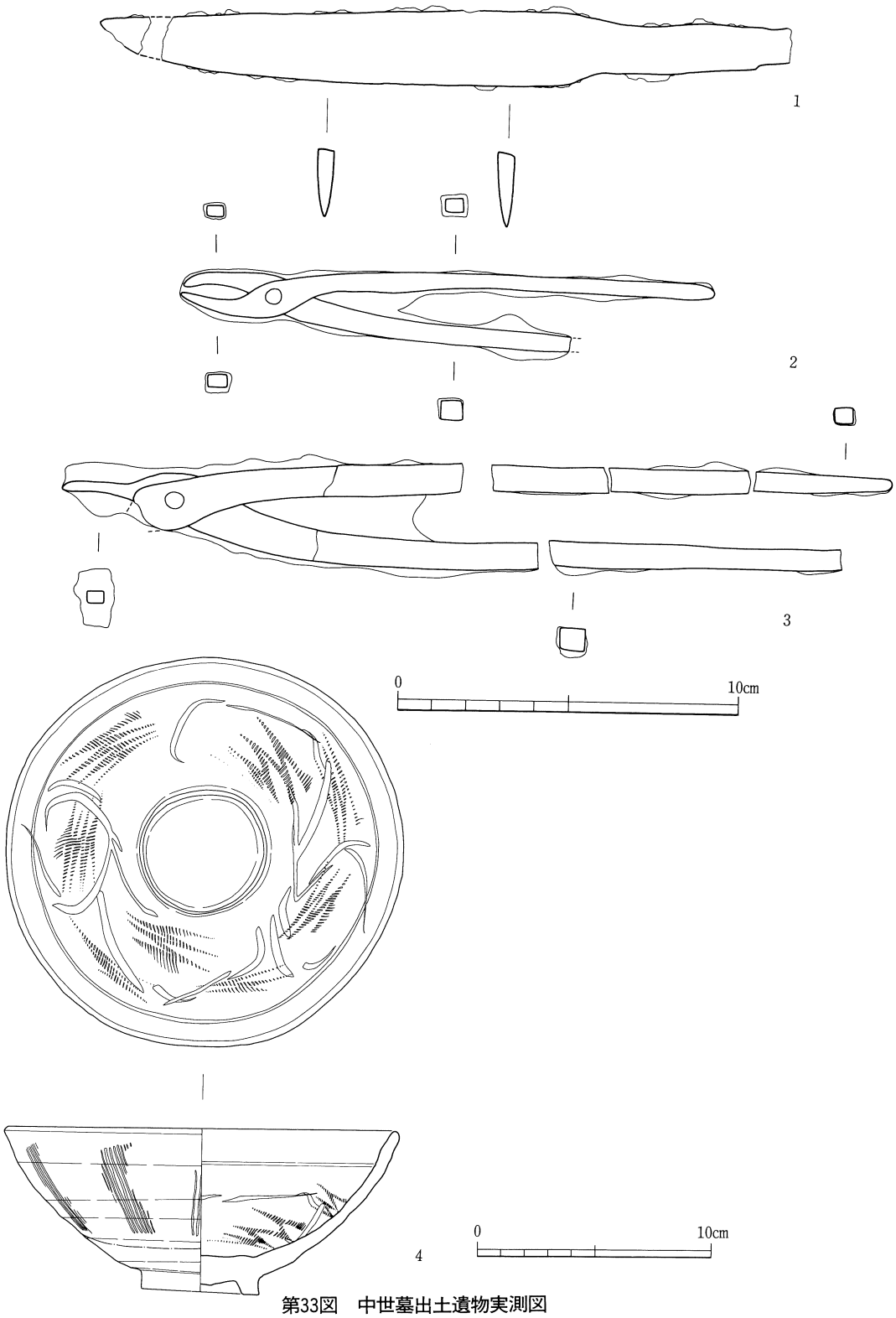
第30図　草場窯跡出土遺物実測図⑳　―土坑２・３―



第31図　草場窯跡出土遺物実測図(21)



第32図　草場窯跡出土遺物実測図(22)



第33図　中世墓出土遺物実測図

2　夜鳴池窯跡

夜鳴池窯跡は伊藤田窯跡群中のほぼ中央部に位置する。調査は北へ開析された細い谷の東西斜面を対象とし、それぞれ東地区、西地区に分けて行った。調査範囲の面積は東地区830m²、西地区1760m²である。調査の結果、東地区では遺構の確認はされなかった。西地区では窯１基、灰原、須恵器工房跡、土坑、甕棺が検出された（第34図）。

窯　　跡（第35図）

窯跡は調査区南辺の斜面に等高線とほぼ斜交して構築されていた。

窯跡の遺存状態は良くなく、焚口付近から燃焼部の一部が残るのみであった。天井部はすべて崩落し窯内に堆積していた。このような遺存状態であったため、窯の全容は不明である。遺存した部位の観察から、窯の構造は半地下式登窯の形状を示すと思われる。規模は現存長1.2mで、幅は焚口付近で0.4mである。主軸方位北11度東を指向する。床面の傾斜は残存する燃焼部で８度、焚口寄りはほぼ平坦である。

窯の横断面は、燃焼部において平坦な床がやや開き気味の壁に続く形状であった。

改造・補修は床および壁にみられた。床には２次の補修を確認できた。燃焼部の窯尻寄りでは凹状のⅠ次床にⅡ次床が重上げされていた。壁は燃焼部に床と同様にⅠ次壁が残り、Ⅱ次床に対応する１枚の壁がその上に重ねられていた。被熱状態はⅠ次床・壁において青色の還元層、赤色の酸化層、Ⅱ次床・壁では青色の還元層、黄褐色の半還元層と変化するものであった。

窯は極めて残りが悪く、全容は把握できないが小型の窯といえよう。また窯内に遺物はほとんど残っていなかった。

灰　　原（第36図）

灰層の残る範囲は焚口外と想定される一部範囲に限られていた。灰原は廃棄品の分布する範囲とした。該当範囲は調査区域の南北40m、東西20mであった。

灰層の層序は１表土層、２粘質黒黄褐色土層、３粘質黒茶褐色土層、４硬質粘性黒黄褐色土層、５硬質粘性黒茶褐色土層、６混硬質粘性暗黄褐色土、礫主体層、７硬質粘性暗黄褐色土層となっている。このうち２、３層には遺物が含まれている。灰層は斜面上部の窯に近い範囲に確認できた。斜面の下辺は岩盤が露出しており、その上に表土が堆積している状態であった。

このように灰原層位の形成は流出を考慮しても貧弱であり、窯の操業が短期間であったことを示している。

工 房 跡（第37図）

工房跡は窯から北西へ15m離れた同じ斜面の中腹に位置していた。周辺にはほかに工房跡や付属の施設などはみられない。遺構は竪穴の構造をもつ。壁は西壁、南北壁の１部を残し、東

壁は欠失していた。床は東半部が削平を受けていた。遺存する部分の観察では、西壁が長さ4.8m、高さ0.2mで、壁下に幅0.15m～0.3m、深さ0.03m～0.07mの溝を付設していた。床面施設としては排水溝がある。これは西壁のやや北寄りに壁溝と接し、斜面の下に向かって伸びていた。排水溝の上面は壷・甕の破片で被覆されていた。柱穴は全く確認されていない。

床面の遺物は西半部に須恵器破片が散在し、北西隅に土師器甑などが若干遺存する状態であった。また西壁付近に未加工の粘土塊が残っていた。

この竪穴遺構は、床面施設、素材粘土の存在や出土遺物からみて、須恵器の製作場としての工房と考えられる。

土　　坑（第39・40図）

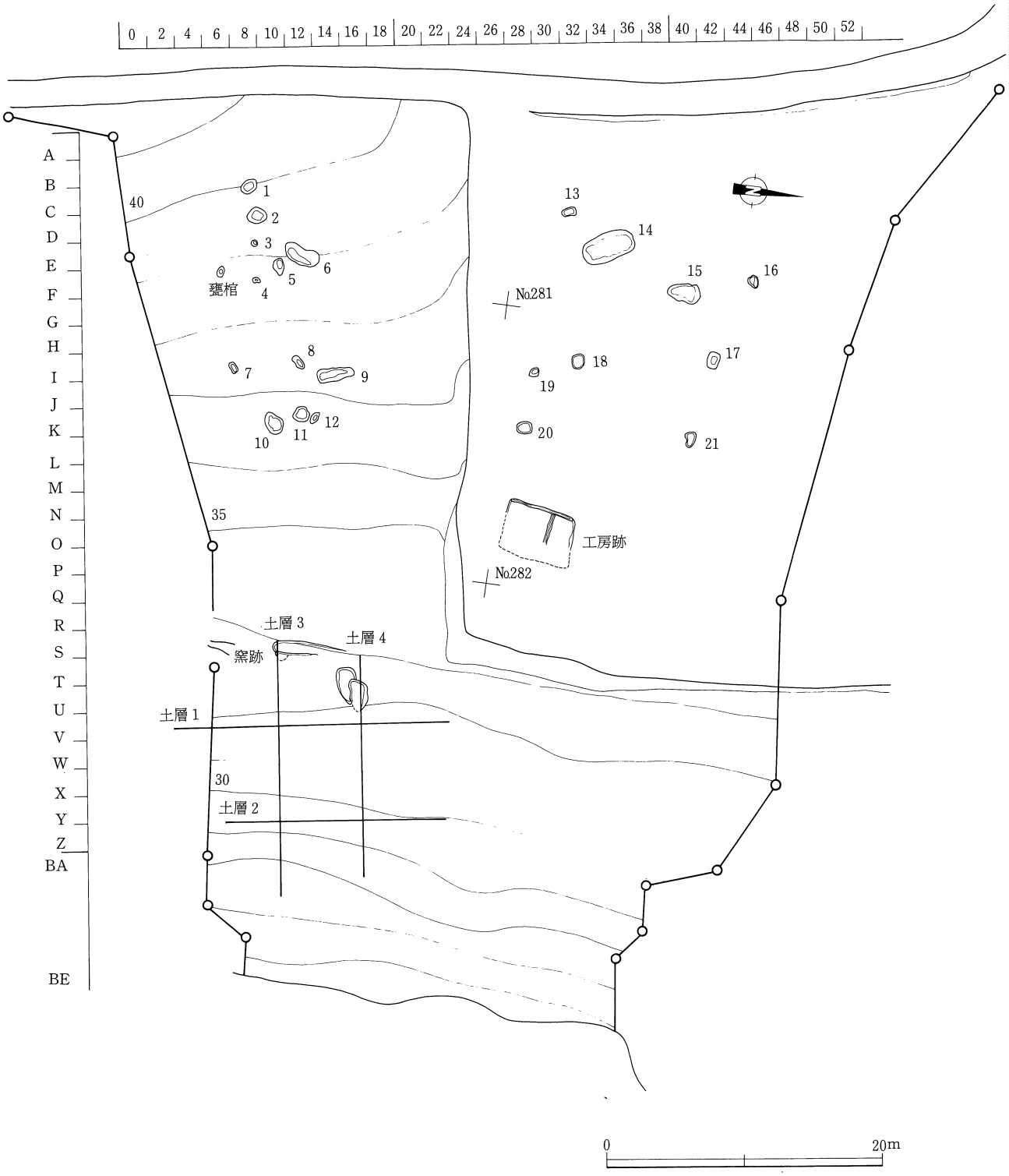
斜面の上半部には土坑が21基確認できた。分布状況はやや南に集中する傾向がみられるもののほぼ全域に散在するものであった。

大きさは長径0.2m～4m、深さ0.2m～0.6mと大小まちまちである。形態は円形、楕円形、方形と多種ある。土坑内からの出土遺物はほとんどない、時期や機能については不明である。ただ土坑内に被熱の痕跡が残っていたものが数例ある。

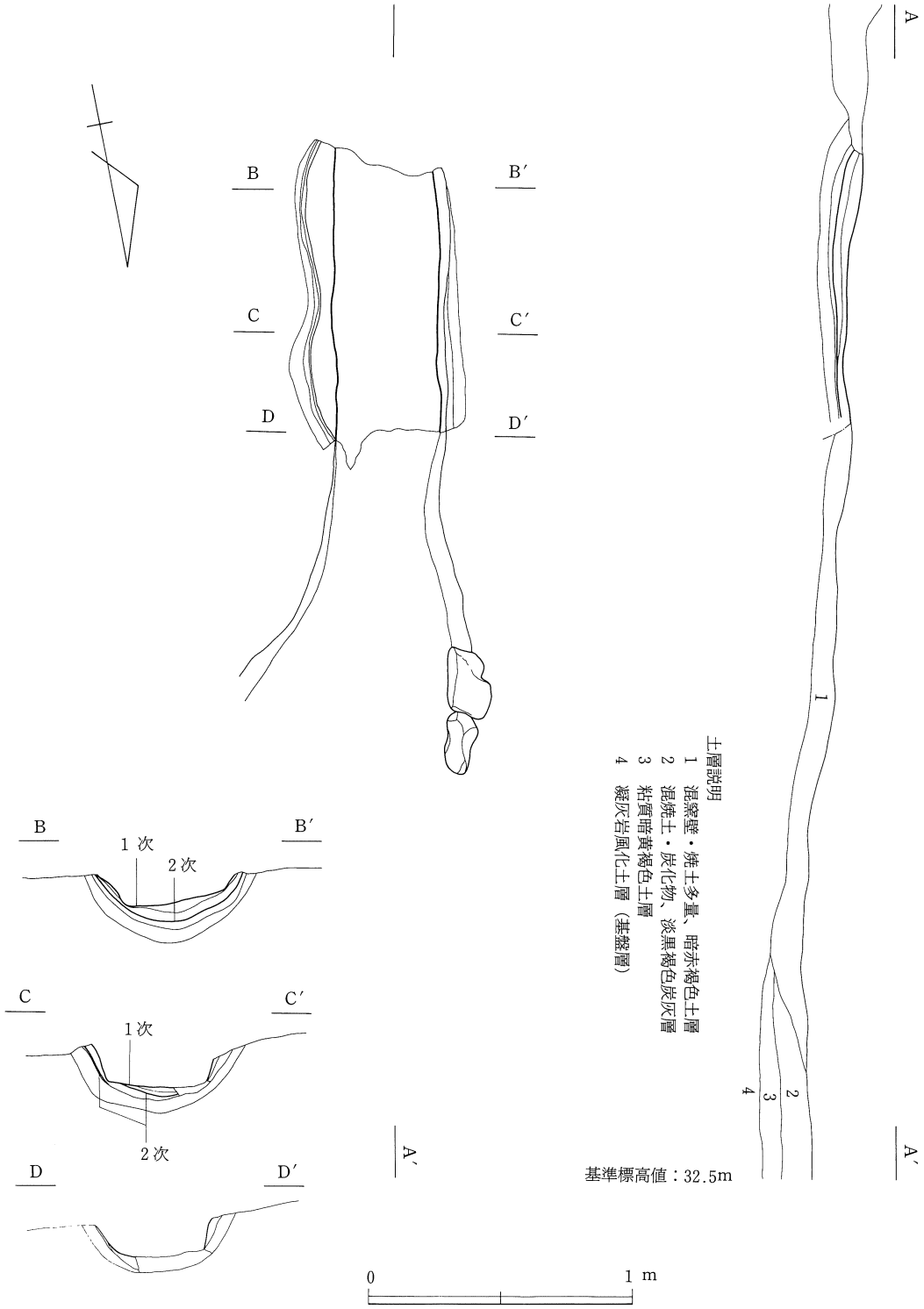
甕棺墓（第38図）

甕棺墓は調査区南西の斜面上部に1基確認された。墓坑は長さ0.9m、幅0.56m、深さ0.18mの偏楕円形を呈していた。甕棺は削平を受けており口縁部から底部の1／2を欠損していた。また甕棺は遺存状態からみて、墓坑内に横位で置かれたものと思われる。

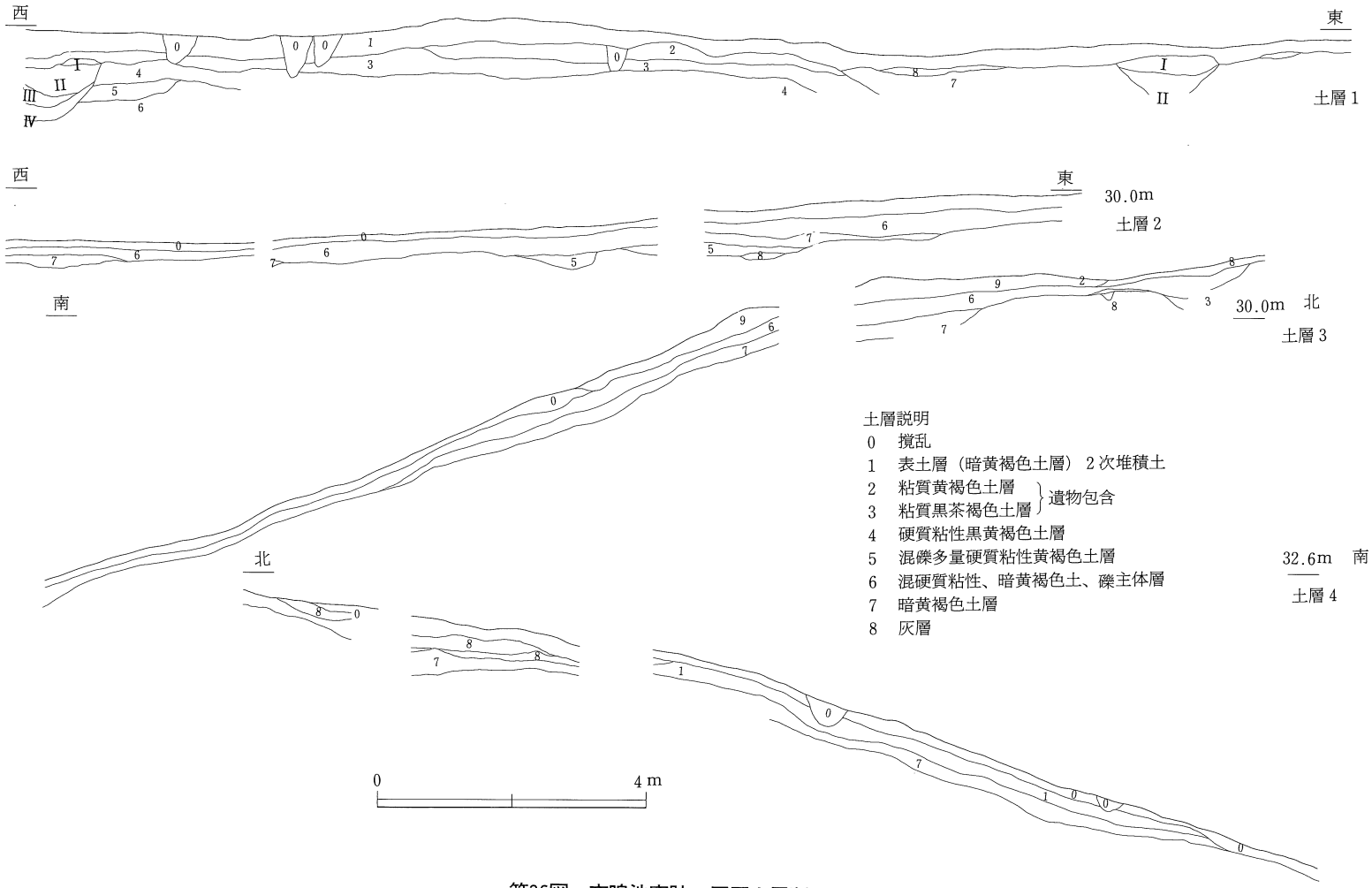
甕棺墓の時期は、甕の特徴から弥生時代中期後半頃と考えられる。



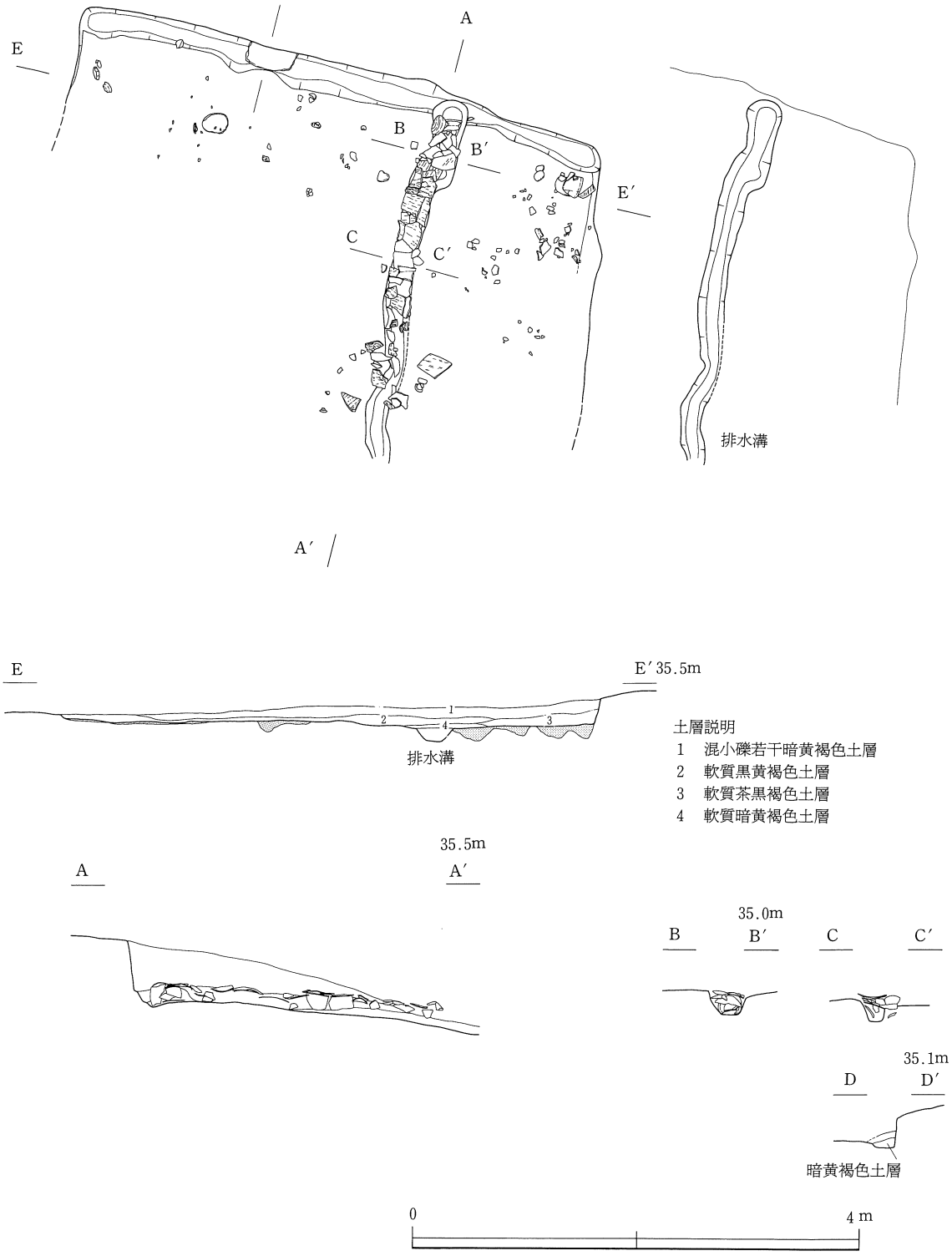
第34図　夜鳴池窯跡遺構分布図



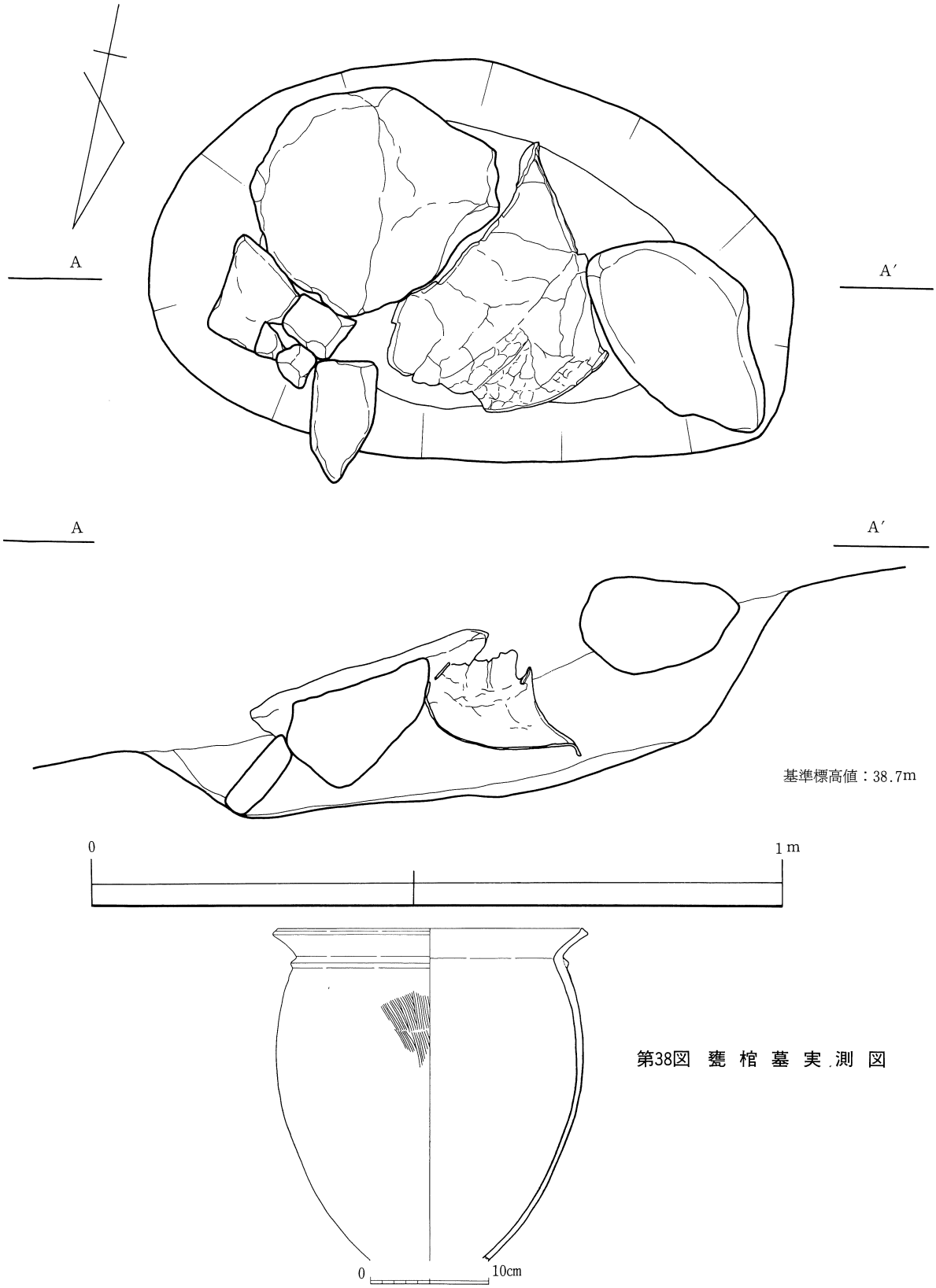
第35図　夜鳴池窯跡実測図



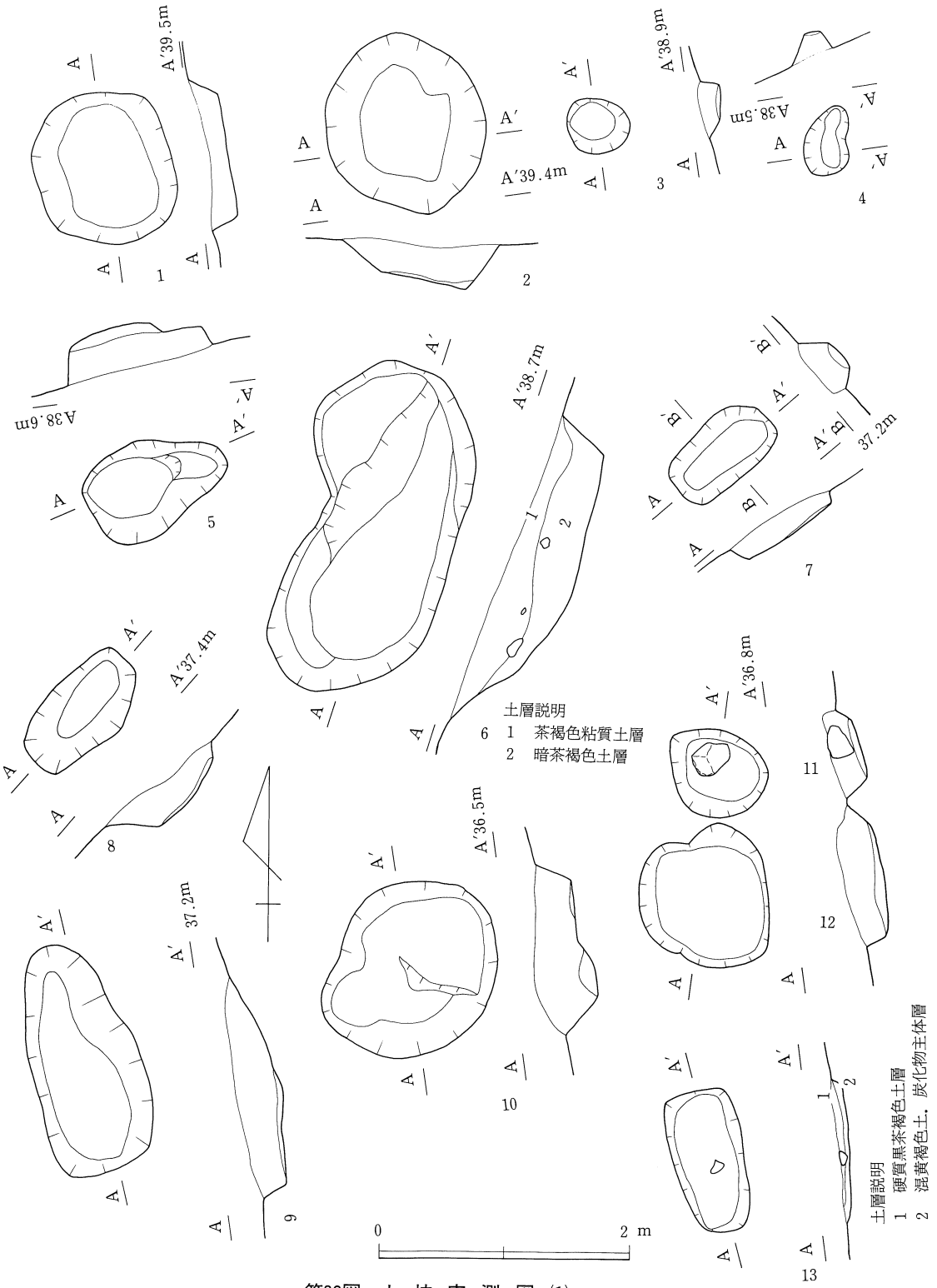
第36図　夜鳴池窯跡・灰原土層断面図



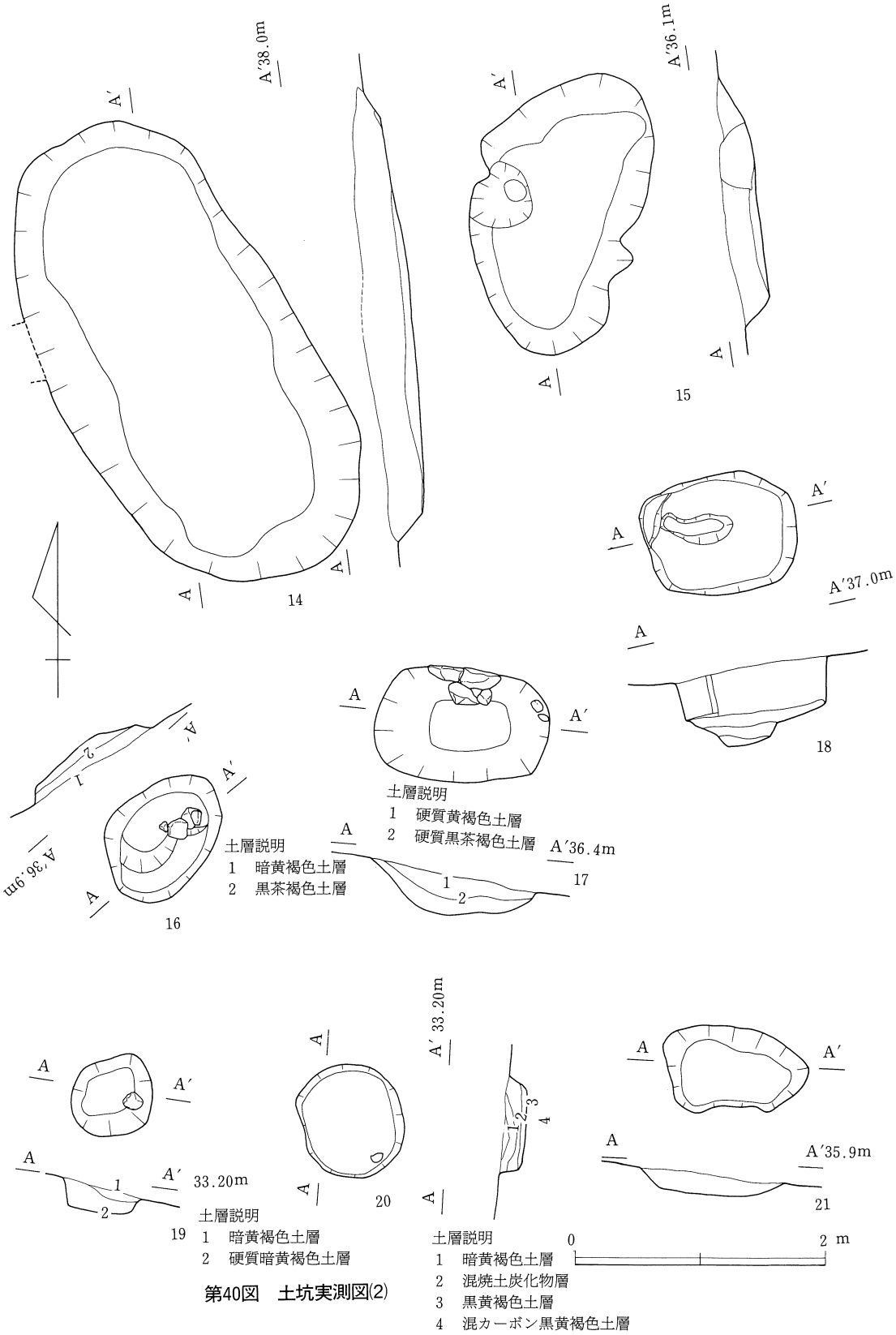
第37図　夜鳴池工房跡実測図



第38図　甕棺墓実測図


A'39.5m
A'39.4m
A'38.9m
A38.5m
A38.6m
A'38.7m
37.2m
A'37.4m
A'36.8m
A'36.5m
37.2m
土層説明
6 1 茶褐色粘質土層
2 暗茶褐色土層
土層説明
1 硬質黒茶褐色土層
2 混黄褐色土，炭化物主体層
0
2 m

第39図 土 坑 実 測 図 (1)


A′38.0m
A′36.1m
A′37.0m
A′36.4m
A′36.9m
A′35.9m
A′33.20m
33.20m
14
15
16
17
18
19
20
21
土層説明
1 暗黄褐色土層
2 硬質暗黄褐色土層
土層説明
1 硬質黄褐色土層
2 硬質黒茶褐色土層
土層説明
1 暗黄褐色土層
2 黒茶褐色土層
土層説明
1 暗黄褐色土層
2 混焼土炭化物層
3 黒黄褐色土層
4 混カーボン黒黄褐色土層
0
2 m

第40図　土坑実測図(2)

出土遺物

灰原出土遺物（第41～44図）

遺物は灰原から出土した須恵器である。

器種には杯、椀、高杯、甑、提瓶、短頸壷、長頸壷、蓋、土錘などがある。杯には蓋杯（杯A）と、内面に返りをもつつまみ付きの蓋と受部のない身が組み合うタイプ（杯B）の2種類ある。

杯　A（第41図・第42図21～26）

杯　蓋（1～10）

蓋は口縁部や天井部の形態に差がある。口縁部の形態では、天井部から緩く伸びるもの（1、2）、口縁部で肥厚するもの（3、6）、口縁端部が尖るもの（4）、短く屈曲するもの（5、9）、体部から屈曲するもの（10）などがある。天井部の形態は山形をなすもの（1、4、8）、上面が平坦で器高の低いもの（2、9、10）がある。9は天井部が厚く、段をなす。
大きさは口径10.8cm～12.5cm、器高3.2cm～4.1cmと幅がある。

調整技法は天井部回転ヘラ切り未調整で、ヘラ切り後ナデを加えるものがある。体部～口縁部には横ナデが施されている。また8の内面に川字状のヘラ記号が刻まれている。

杯　身（11～26）

各部位によって若干の特徴がみられる。口縁部～受部の形態をみると、受部が短く口縁部は長く立ち上がるもの（11）、口縁部がやや内傾し端部は丸みをもつもの（12、17）、口縁部が三角形状を呈するもの（16、20、23、24）、口縁部から受部にかけて三日月状に細く反るものなどがある。体部からに底部にかけてはほとんどが丸い形状である。ただ14、20、26は平坦で器高が低いものである。

調整技法は11のみの底部回転ヘラ削りで、他はすべて底部回転ヘラ切り未調整、後にナデが施されている。口縁部～体部は横ナデで仕上げられている。

杯　B（第42図27～46、第43図52～63）

杯　蓋（27～46）

頂部につまみをもち、内面に返りをもつ蓋である。全体に低い山形をなす。各部位の形態には差がみられる。27、28のつまみは偏平なボタン状を呈し周縁がさらに薄くなる形態である。口縁部では内面の返りに形態の差がみられる。形態には大きく3種類ある。その特徴は、短く先端が丸いもの（27、28、32、35、38）、断面が三角形に近い形を示すもの（29、36、42～44）、細長く三日月状となるもの（31、46）などである。

杯　身（52～62）

立ち上りをもたない椀状の身である。口縁部の形状に2種類ある。1は口縁部が短く外へ屈曲するもの（52、53）、2は体部から口縁部にかけてほぼ直線的に伸びるものである。

大きさは口径9.0cm～11.0cm、器高3.7cm～4.6cmと幅がある。

調整技法は底部に回転ヘラ削り、あるいは手持ちヘラ削りがみられる。口縁部～体部は横ナデで仕上げられている。

椀（78）

体部下端～底部の破片であるため不明確であるが椀と思われる。高台は長めで端部が外へ伸びる。

高　杯（63～68）

出土した高杯は短脚と長脚の２種類ある。短脚の高杯は無蓋である。短脚の高杯をみると、63は杯部下半～脚柱部が残っている。脚部は八字状に広がる。64・65は脚部破片である。脚部径はそれぞれ5.1cm、7.0cmと小さい。66は脚端が短く屈曲する。68は長く伸びる脚部破片で、脚端が短く外へ反る。

整形・調整技法は、65では杯部との接合面に放射状の凹凸がみられる。68の柱部内面にはシボリ痕が残る。器外面には横ナデが施されている。

甕　（69、70）

口縁部～頸部が残っている。70は端部が丸みをもち直線的に外へ伸びる口縁部である。71は短く細い頸部が口縁部との境で大きく開き、段をなし口縁部へ続く。口縁部は端部でやや内湾する。

平　瓶（71）

形態的に平瓶の口縁部と考えられる。口径は8.4cmと小さい。

提　瓶（72～73）

72は頸部～体部上部が残る小型の提瓶である。73は体部の平坦な１側面の破片である。この部分に回転ヘラ削りが施されており、湾曲する部分にカキ目がみられる。

短頸壺（74）

口縁部は短く内傾し、端部が丸く肥厚する。体部はやや偏平な球状を呈する。最大径は体部ほぼ中位にある。整形・調整技法をみると、体部では上半にカキ目状の調整が施され、下半に斜方向のヘラ削りが認められる。

長頸壺（75）

口縁部～頸部の小破片である。形状の特徴から長頸壷と考えられる。内面に「×」のヘラ記号が刻まれている。

壺（76、77）

76は口縁部～頸部が残ったものである。頸部は短く外反する。口縁部は端部で肥厚し段がつく。77は体部の破片である。体部上半に３条の沈線が巡る。

蓋（47～51）

壷類の蓋である。器高は低い。内面の返りは口径の1／2とかなり内面につき、形状は断面三角形の矮小なものである。つまみは47が柱状、48が偏平な擬宝珠、49は乳頭状をなしている。

土　錘（79）

土錘の完形品である。大きさは長さ3.6cm、最大幅は中央部にあって1.9cm、孔径0.4cmとなっている。この資料は今回の調査では初例である。

工房跡出土遺物（第45～47図）

竪穴の覆土、床面から出土した須恵器および土師器である。また排水溝を覆っていた須恵器などである。

杯　A（1、2）

1は杯蓋である。天井部が平坦なやや低い形状を示す。口縁部は天井部から緩やかに移行し端部は肥厚する。大きさは口径11.7cm、器高3.2cmである。整形・調整技法は天井部回転ヘラ切り未調整、体部、口縁部は横ナデで仕上げられている。

2の杯身は器高が高い。体部は直線的に伸びる。口縁部は細く内傾して立ち上がる。受部は細く短い。底部の切り離しは回転ヘラ切りで行い、未調整となっている。底部内面に一方向のナデが施されている。

高　杯（3）

無蓋高杯の1／2残欠である。杯部は器高に対して口径が大きい、浅い形態を呈している。脚部は低く八字状に大きく広がる。脚端部は上向きに短く屈曲する。

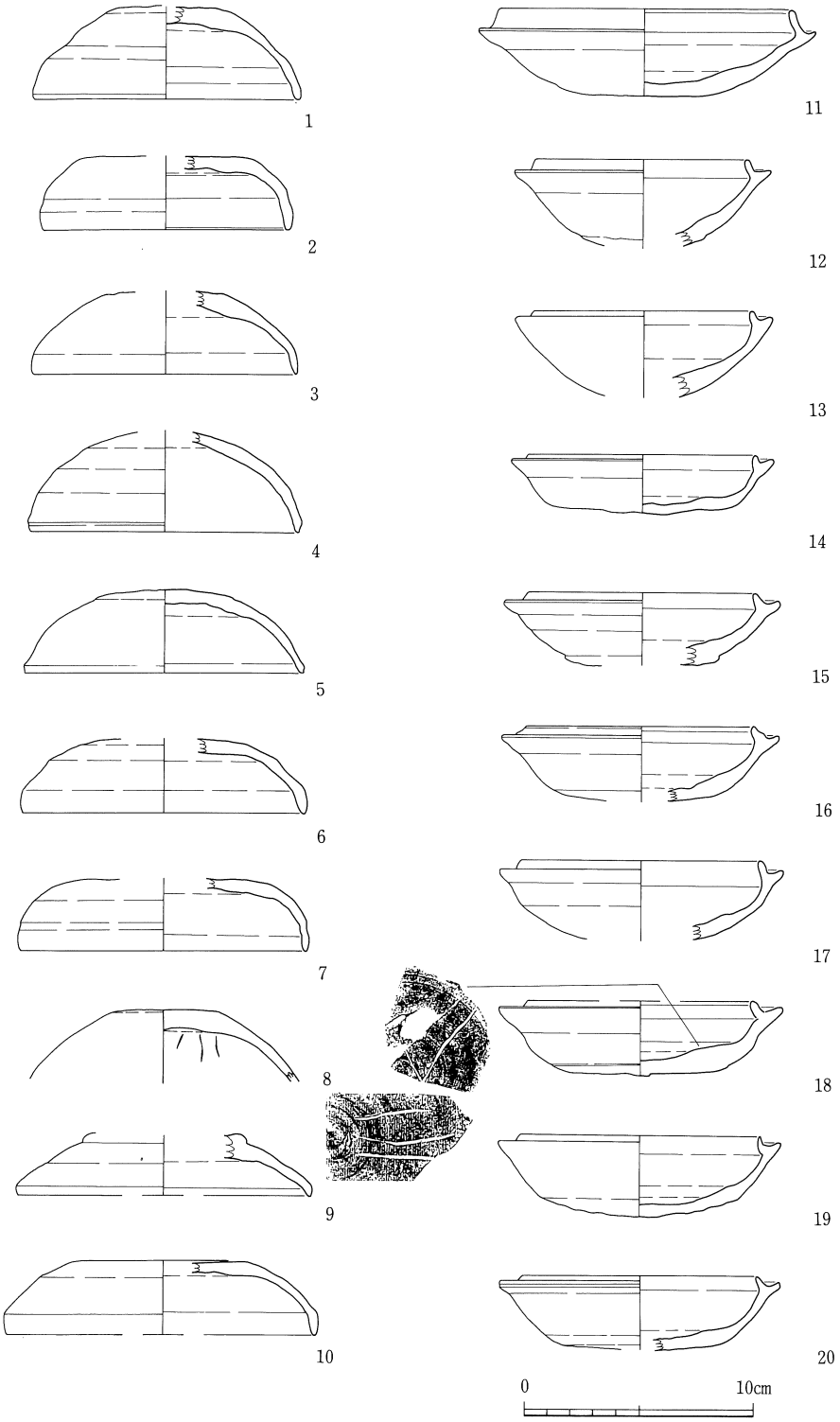
土師器甑（4）

工房跡の北西隅から出土したものである。この甑は鉢状を呈し、胴部が短い。口縁部が胴部から直線的に伸びる。底部の孔は筒抜けになっている。把手は胴部中位につく。整形・調整は外面に横方向のハケ目がみられ、内面中位に指頭による整形痕が認められる。

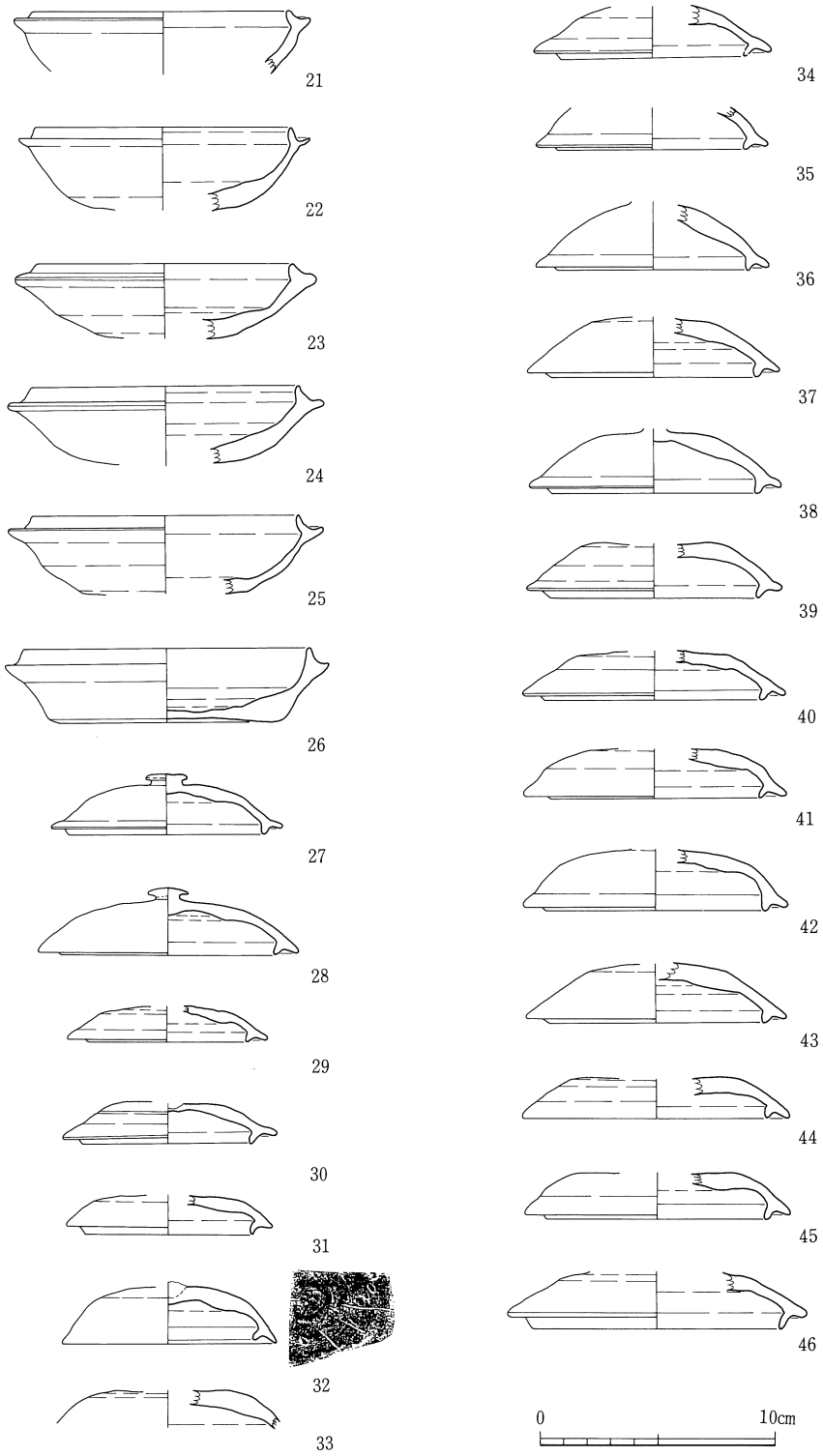
排水溝の土器（4～15）

排水溝を被覆していた須恵器である。恐らく10個体分に相当する須恵器が使用されたものと考えられる。器種には横瓶、壷、甕がある。

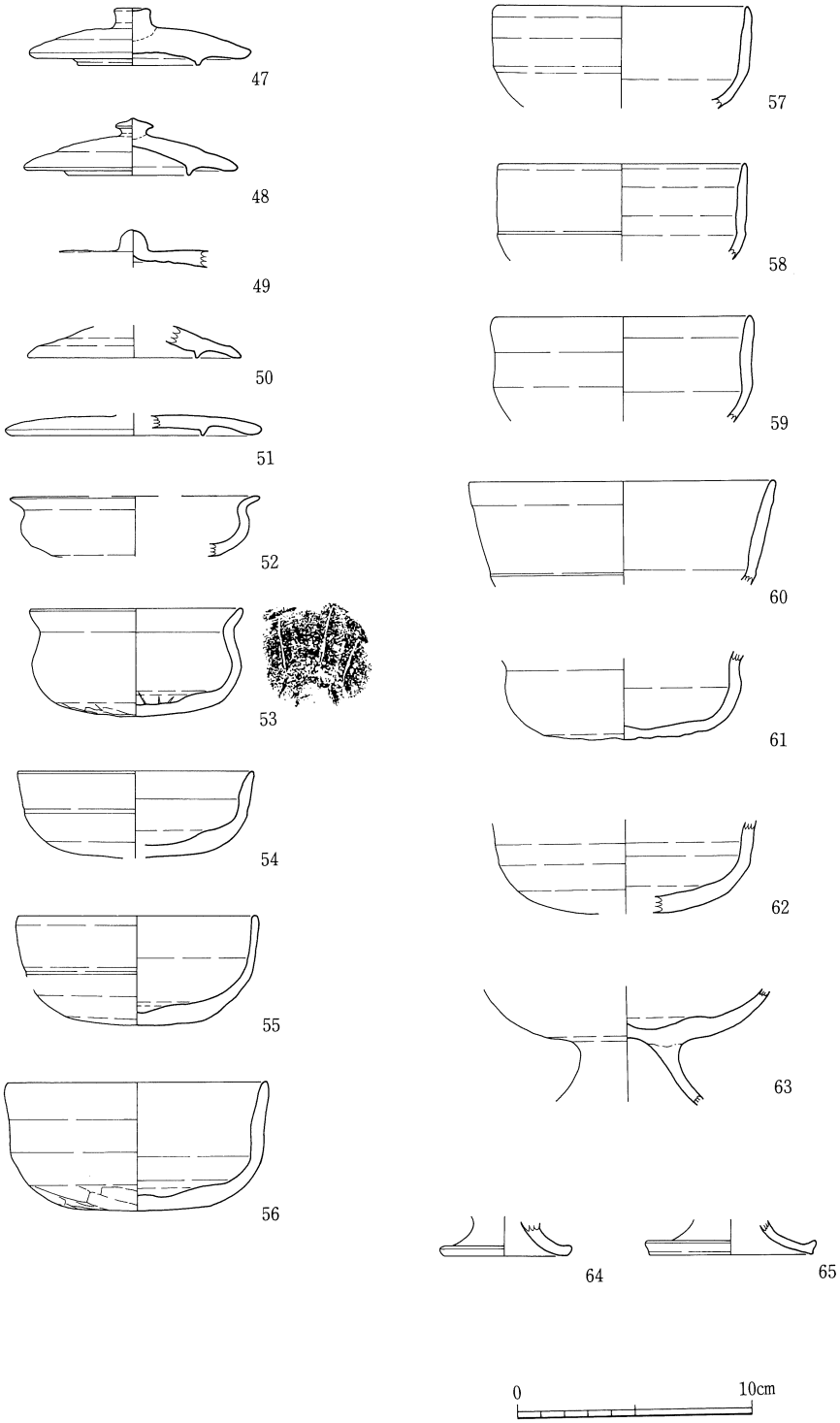
横瓶（5）体部側面の破片である。体部整形後の粘土円盤充填痕跡がみられる。外面にカキ目の調整、内面に同心円の当て具痕が残っている。壷（6～10、12、14）は6が短く外反する口縁部をもつ。肩部外面にカキ目が残る。9、10は口縁部破片で端部が若干下方へ伸びる。7、8、12は球体状に張る体部である。14はやや大型の胴部と思われる。外面には平行、木目直交タタキ、内面に同心円の当て具痕が残っている。甕（11、13、15）はともに胴部破片である。外面には平行タタキ、カキ目状の調整を施し、内面に同心円の当て具痕が残っている。



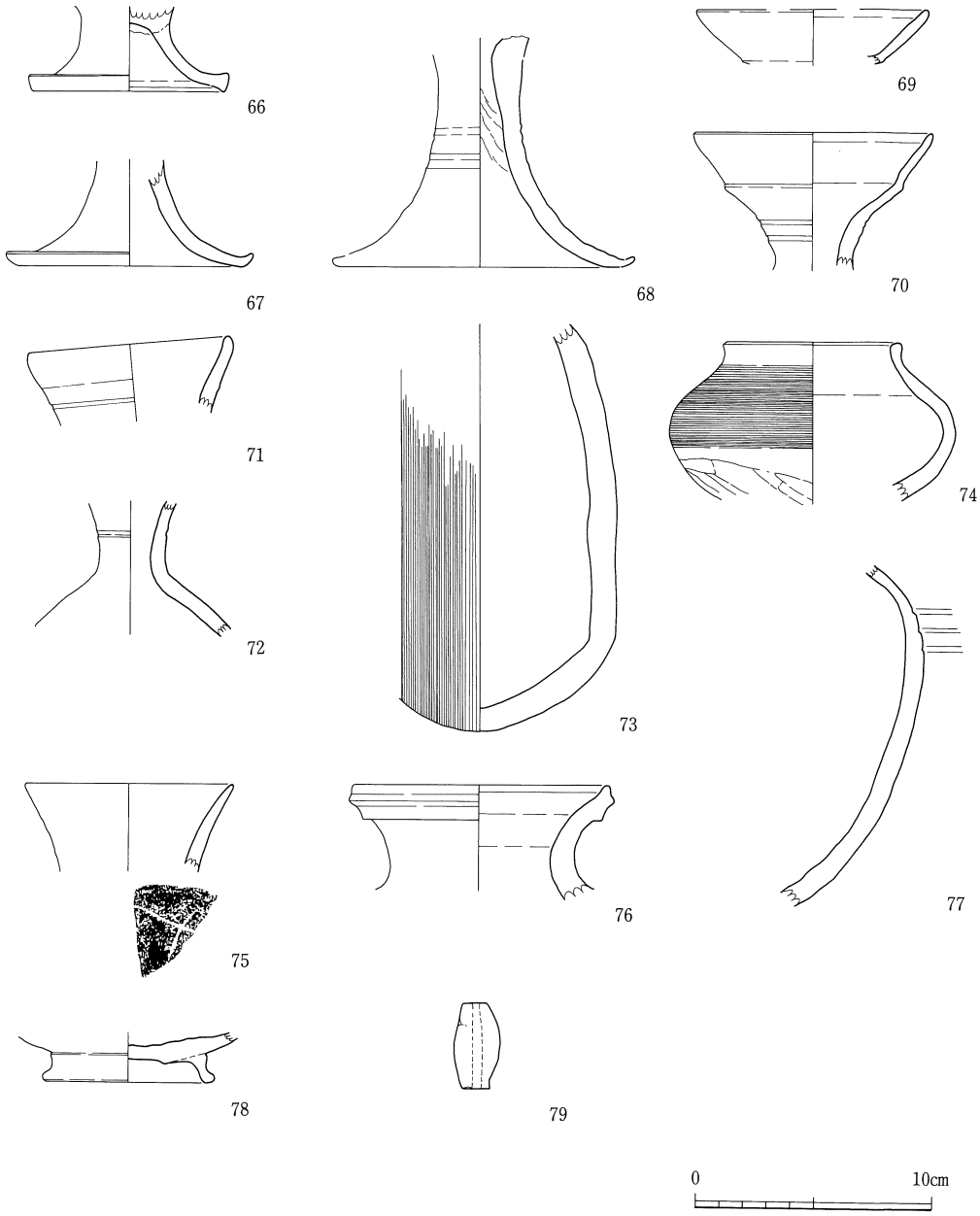
第41図　夜鳴池窯跡出土遺物実測図(1)　－灰原－



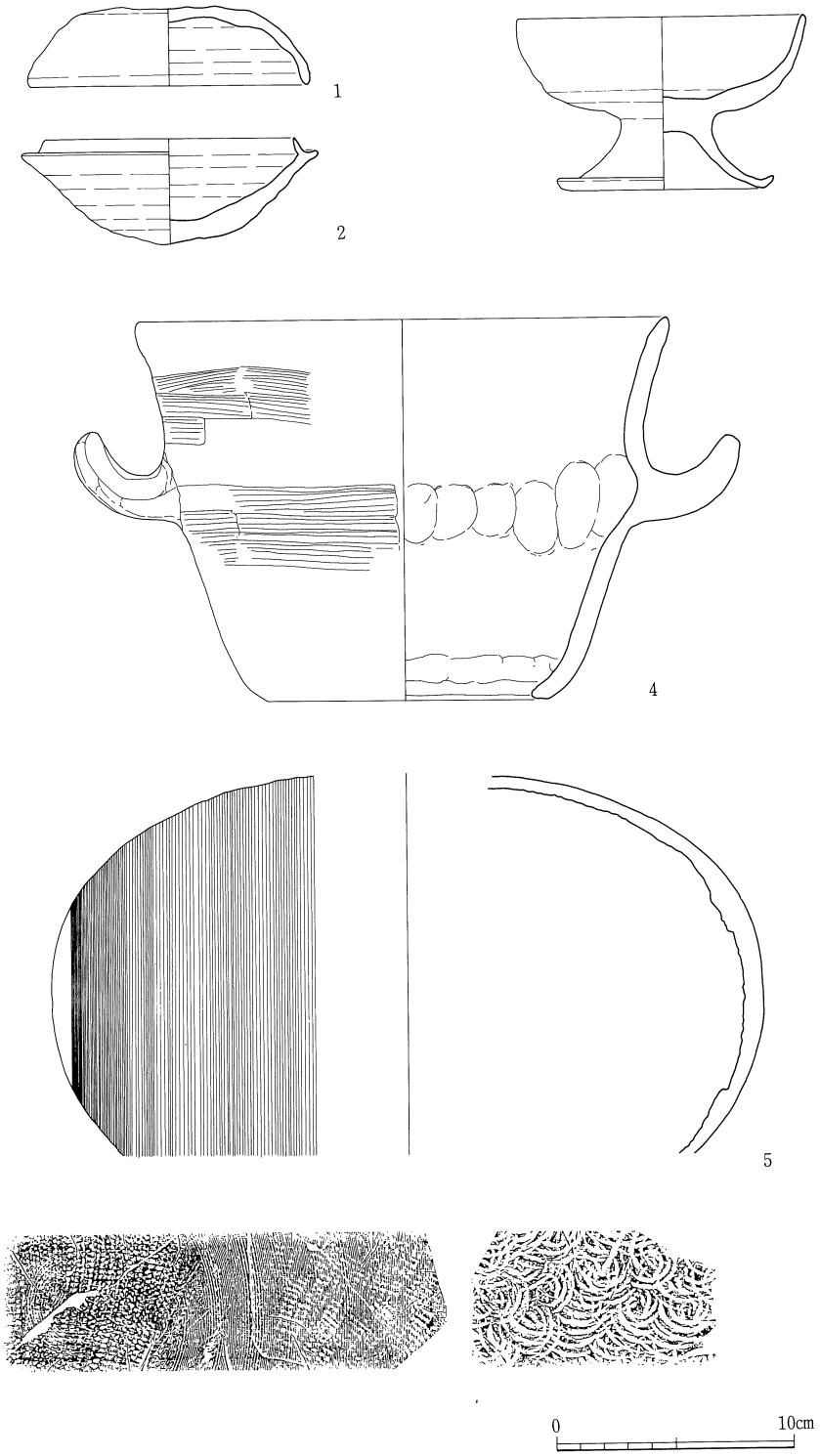
第42図　夜鳴池窯跡出土遺物実測図(2)　－灰原－



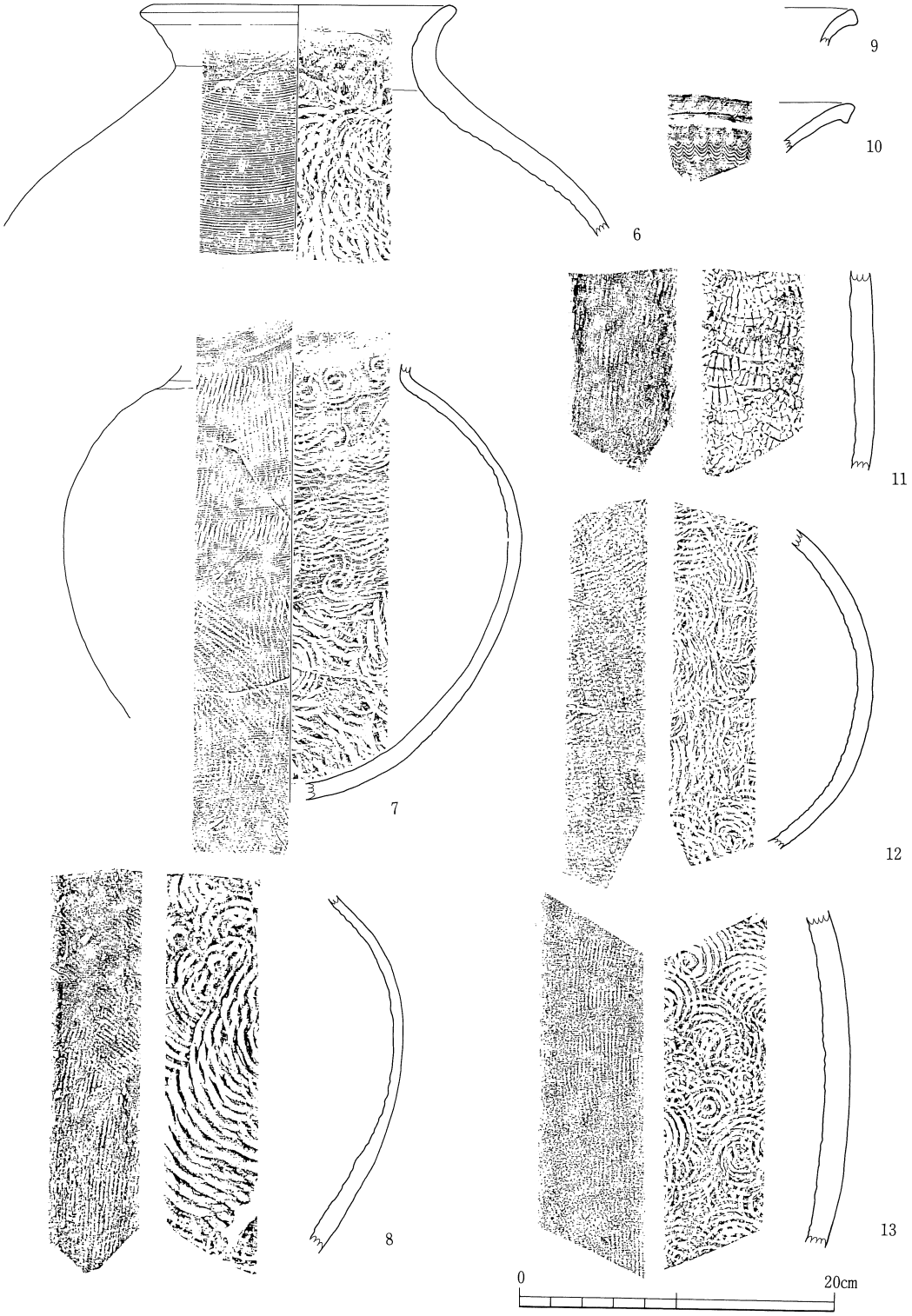
第43図　夜鳴池窯跡出土遺物実測図(3)　－灰原－



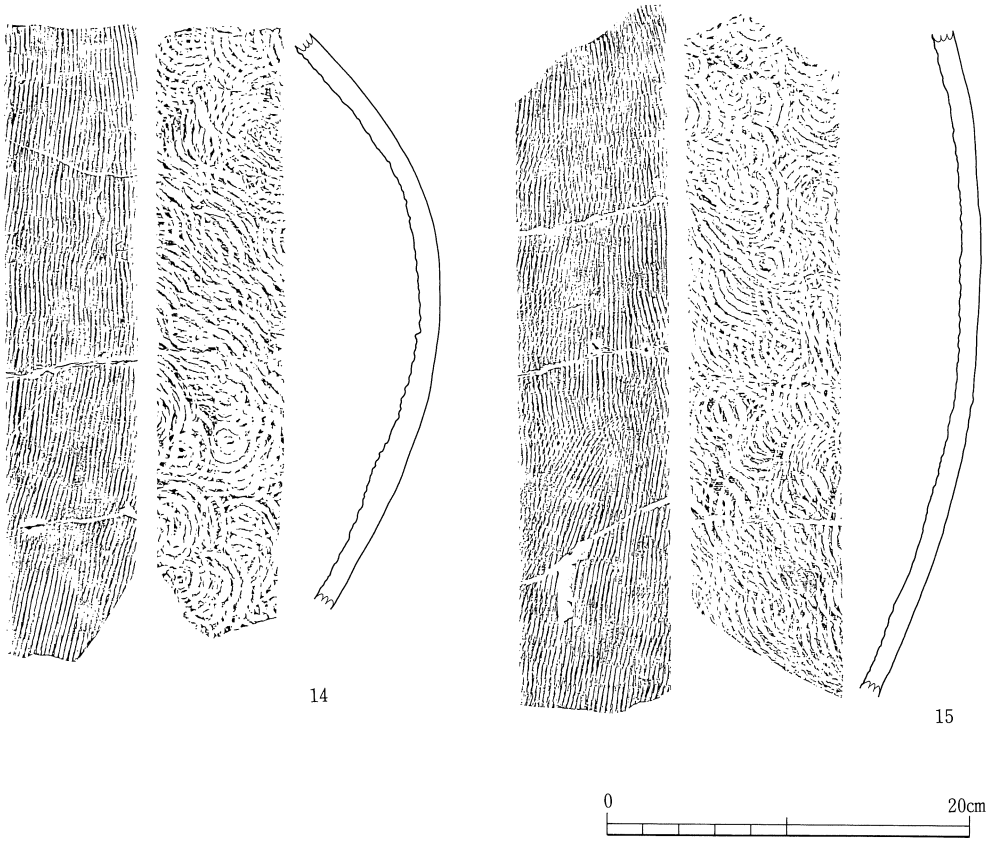
第44図　夜鳴池窯跡出土遺物実測図(4)　－灰原－



第45図　夜鳴池工房跡出土遺物実測図(1)



第46図　夜鳴池工房跡出土遺物実測図(2)



第47図　夜鳴池工房跡出土遺物実測図(3)

3　踊ケ迫窯跡

夜鳴池を挟んで東丘陵は夜鳴池東地区、その反対側の東向き斜面に踊ケ迫窯跡が位置する。

調査は斜面部および斜面下の水田面において行った。当該地区の面積は2200㎡である。

調査の結果、斜面下半に土坑４、水田に接する崖面に灰原を確認した(第48図)。この灰原は調査区外北部の斜面裾付近に位置する窯に伴うものと思われる。

土　　坑（第48図）

土坑は斜面下半の傾斜が緩やかになったところに４基確認された。土坑１は長方形の平面形をもつ。大きさは１m×0.75m、深さ１mである。土坑内部には礫が多量に堆積していた。

土坑２、３は不整形、土坑４は楕円形を呈していた。大きさは長径1.4m～1.8m、短径1.0mである。

灰　　原（第48図）

灰原は調査区東辺の崖面に確認された。確認した範囲は北から20m位の長さである。

灰原の層序は１盛土、２暗灰褐色灰層、３灰褐色灰層、４淡黒色灰層、５黒茶褐色土層、６暗茶褐色土層、７淡灰褐色土層、８硬質暗茶褐色土層、９灰白色凝灰岩（基盤層）となっている。このうち２～４層は灰層、５～７層は窯の操業に伴う堆積である。

出土遺物（第49図）

遺物はすべて灰原から出土したものである。器種には杯(A・B)、高杯、短頸壷、壷、提瓶、甕がある。

杯　A（１～６）

杯蓋（１）は口径に対し器高が小さい低平な形状を呈する。口縁部は内面に段をもち端部が細くなっている。天井部と口縁部の境に稜が残る。天井部はヘラ切り後、回転ヘラ削り調整を施している。杯身（２～６）は口縁部の形態で大きく２種類ある。立上がりが細長く伸びるもの（２～４)、基部が厚い断面三角形の立上りをもつもの（５、６）である。底部の切り離し技法は５に回転ヘラ削り調整を確認できる。

杯　B（７）

内面に返りをもつ杯蓋である。つまみは欠失している。

高杯（８）

脚部1／2が残存している。脚部は長脚をなすものであるが脚端部を欠く。内面にシボリ痕が残る。

脚　部（9）

台付壷の台部破片と思われる。端部はやや肥厚し外へ伸びる。

提　瓶（17）

体部破片である。整形・調整は外面にカキ目が施されて、内面に同心円の当具痕が残る。

短頸壺（10）

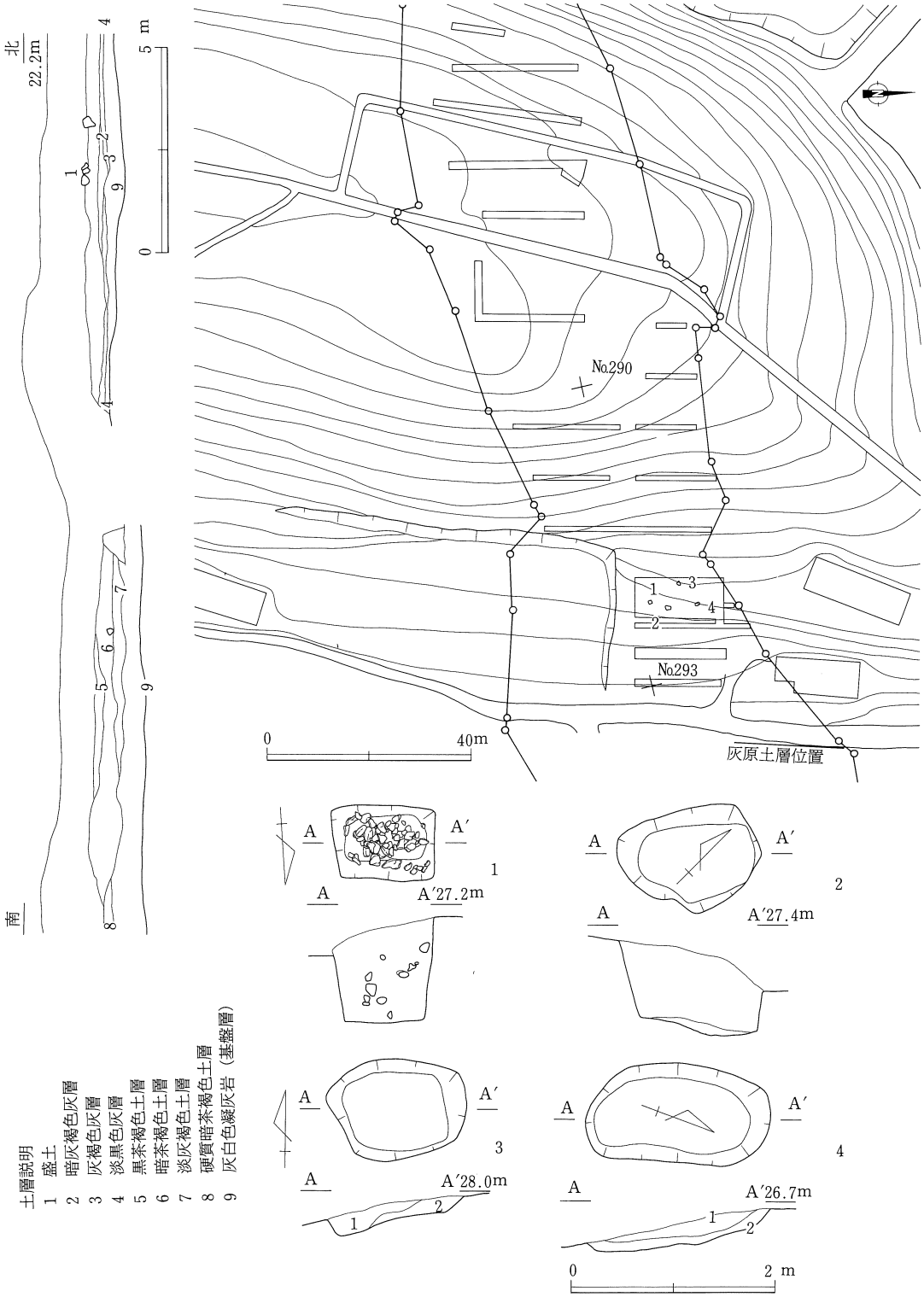
口縁部～肩部の破片である。口縁部は短く内傾する。

壺　（11～15）

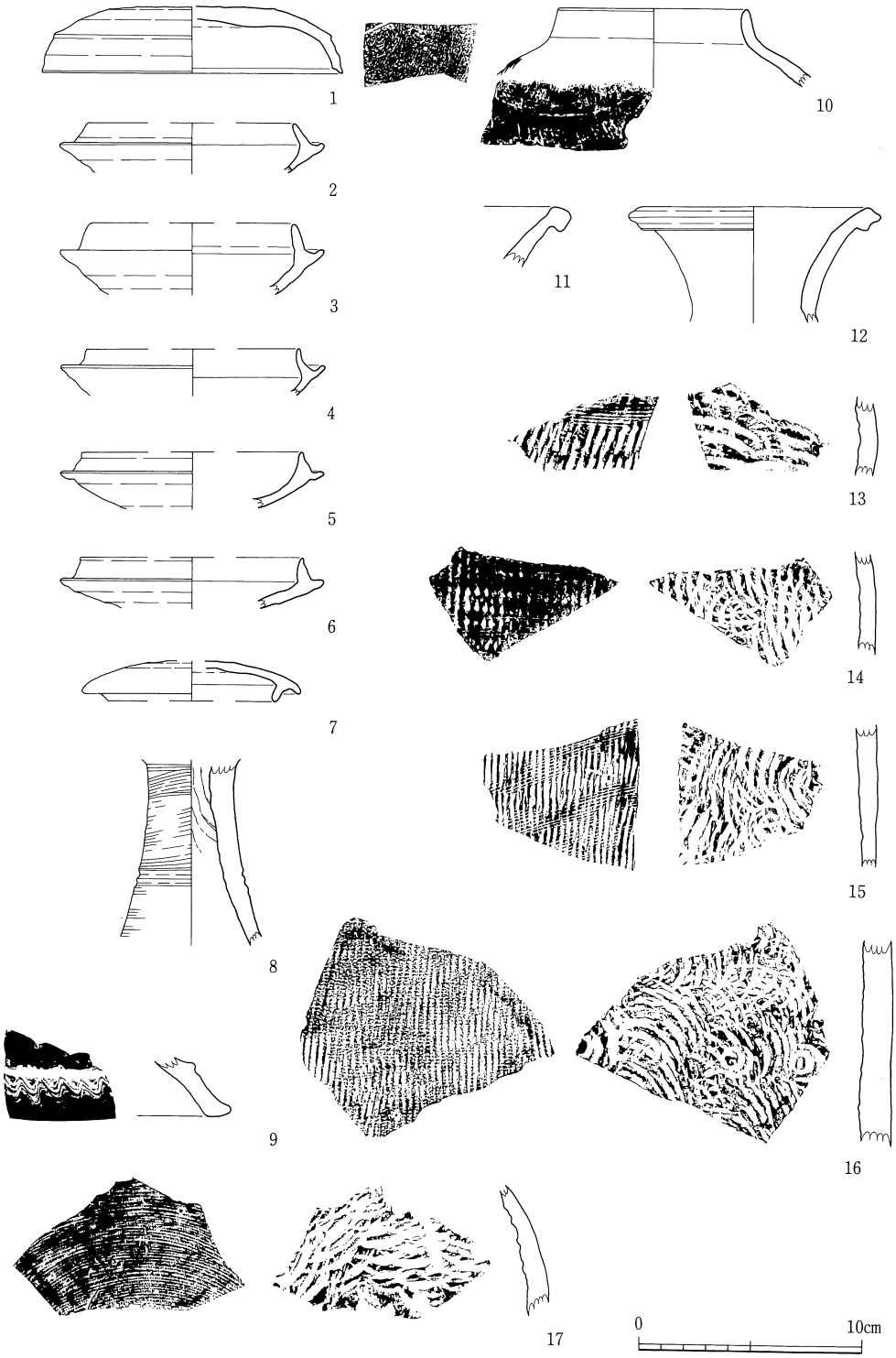
11、12は口縁部破片である。頸部は細い。口縁部は肥厚し断面矩形をなす。13～15は体部破片である。整形・調整は外面に平行タタキ、カキ目、内面に同心円の当具痕が残る。

甕　（16）

胴部破片である。外面に平行タタキ、カキ目、内面に同心円の当具痕が残る。



第48図　踊ヶ迫窯跡位置図、灰原・土坑実測図



第49図　踊ヶ迫窯跡出土遺物実測図　－灰原－

4　瓦ケ迫窯跡

瓦ケ迫窯跡は伊藤田窯跡群の中で最も東部に位置する。

窯跡は北へ伸びる緩やかな丘陵の先端に立地している。調査対象地は斜面の上部から裾部にかけての範囲5800m²について全面発掘を行った。窯１基、灰原、溝などが検出された(第50図)。

窯　　跡（第51・52図）

窯跡は調査区中央の北向き斜面の標高20m～25mに等高線とほぼ直交して構築されていた。窯跡は上半部の煙道付近が後世の溝などで掘削を受け欠失していた。天井部はすべて崩落し窯内に堆積していた。また焼成部窯尻側1／2は床外面の青灰色還元層が剝離していた。このように遺存状態は良好とはいえなかったが、窯の全容はほぼ把握できた。窯の構造は半地下式無階無段登窯である。規模は現存長11.6m、焼成部7.6m、燃焼部4.0mである。

幅は燃焼部～焼成部で1.7m、焚口外の掘り込み端部で1.9mである。窯床面の平面形は幅に変化の少ない長大な形状である。主軸方位は北４度東を指向する。床面の傾斜は焼成部で20度30分、燃焼部は最終時床（II次）で16度、Ｉ次床はほぼ平坦である。

窯の横断面の形状は、燃焼部、焼成部ともに平坦な床が直立気味に立ち上がる壁に続き、壁は徐々に湾曲しており、ドーム状の天井部を架構すると考えられる。焼成部で平坦な床から直立する壁が徐々にドーム状に湾曲するものと思われた。

改造・補修は燃焼部の床にみられた。補修は焼成部の１部を掘削し、他の部分ではＩ次床を残したまま粘土を補塡しII次床としている。

壁はII次床に対応する新たな壁を構築するものではなく、Ｉ次の壁をそのまま利用している。

床の被熱状態は、部分によって燃焼の度合いが異なる。焼成部中央と燃焼部寄りでは表面から還元焔焼成による青灰色、半還元の黄色、酸化焔による赤色と変化している。燃焼部下半では、青色の還元層と赤色の酸化層が観察できる。壁は燃焼部、焼成部ともに還元の青灰色、半還元の黄褐色、酸化焔による赤色の各層に変化している。

焚口では窯構築時に地山を掘り込み、新たに粘質黄褐色土を充塡して整形が施されていた。

窯内の状態をみると、遺物は床面に比較的多くの須恵器が残存していた。焼成部には焼台の置かれた痕跡や実際に使用された粘土が残っていた。焼成部下半には焼台に供した甕破片や礫が散在していた。

焚口から燃焼部には多くの破片品が集積していた。器種は杯、高杯、甕などである。とくに杯は約300個体分が出土した。

また焚口には操業最終段階の焼土・灰主体の黒黄褐色土層が堆積していた。

灰　　原（第53・54図）

灰原は灰の広がりと、焼土・窯壁・炭化材、須恵器の不良・廃棄品の分布範囲を含めて灰原とする。灰を主体とする灰主体層は窯焚口付近の小範囲にみられた。灰原の範囲は窯主軸方向に13m、裾部で最大幅30mであった。ただ調査範囲が斜面裾部までに限られたため、範囲外の水田については未調査であり灰原の限界は確認していない。

灰層の層序は表土、遺物を含む堆積層、焼土・窯壁・炭化材を含む灰主体層となっている。

灰層の堆積は10cm～40cmと浅く、斜面下辺に向かい深くなっている。

灰層は表土を排除した後の状態であるが、1カーボン・焼土粒を含む粘質黒黄褐色土層、2カーボン・焼土粒を含む粘質黒茶褐色土層、3硬質粘性暗赤褐色土層、4粘質暗茶褐色土層の堆積となっている。このうち1、2層は遺物が包含されておりここでいう灰層である。3、4は自然堆積土である。灰層の観察では、操業の順序を示すような間層はなかった。

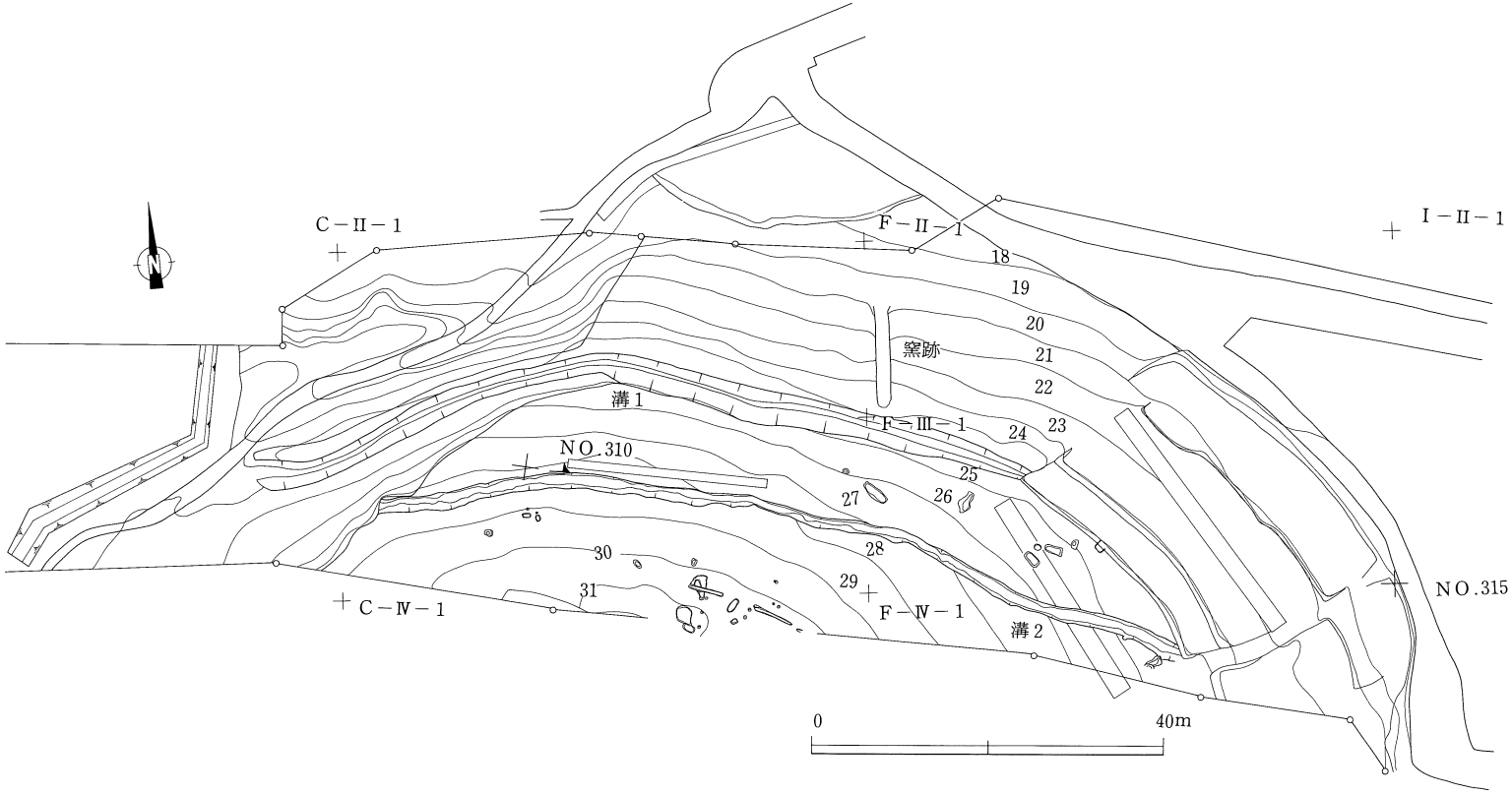
このように灰原層位の形成は比較的緩い傾斜の立地にありながらも貧弱であり、窯の操業が短期間であったことを示している。

溝（第55図）

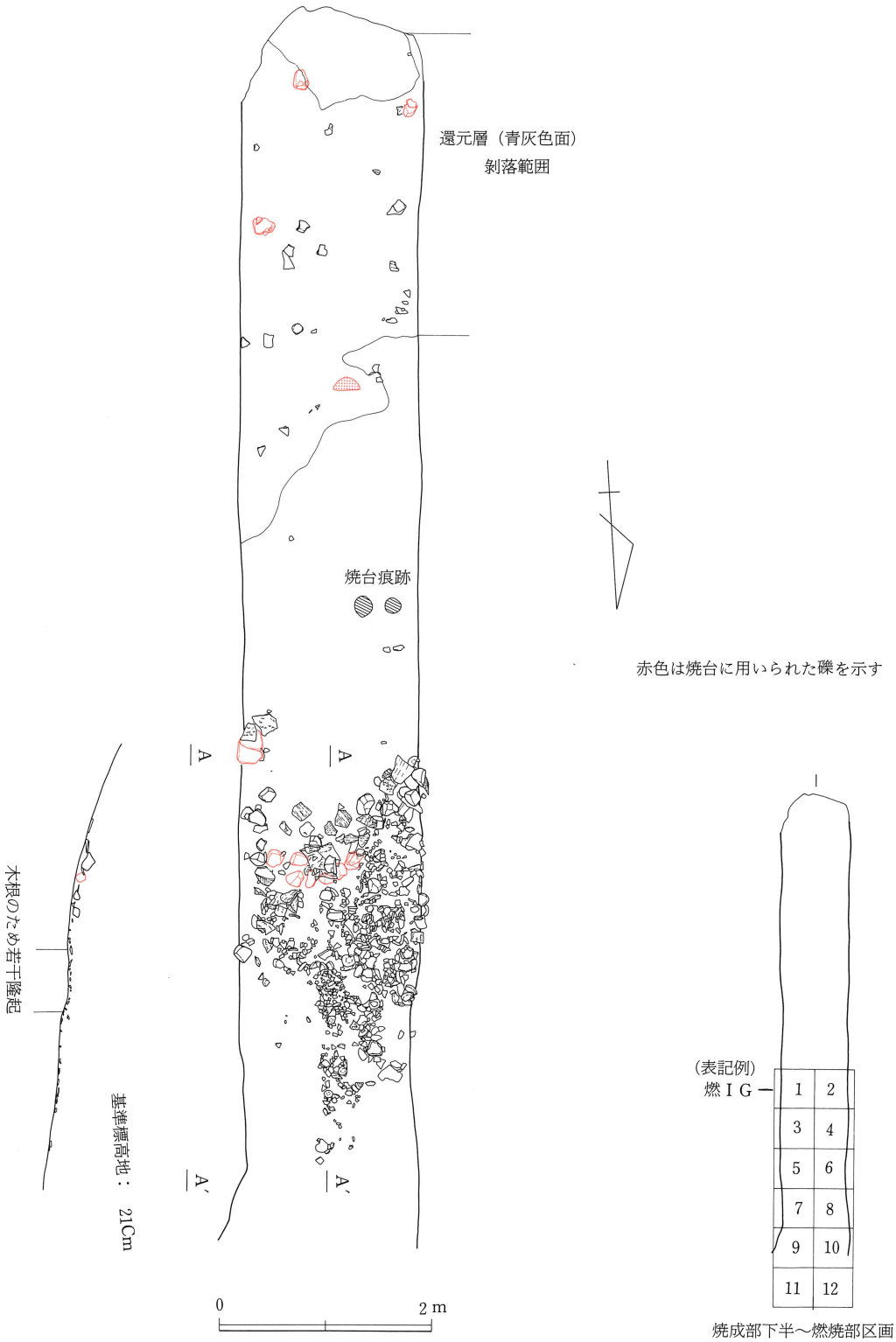
斜面上部に2条の溝を検出している。溝1は窯跡の煙道を切断しており、覆土の状態からみても近世以降に掘削されたものと思われる。この溝は等高線とほぼ平行し、東西方向に伸びている。東西端部は近年の道や畑で切られている。

溝2は溝1と平行してさらに上部に位置する。規模は長さ94m、幅0.8m～2.1m、深さ0.2m～0.4mである。溝は等高線に対しやや斜交し、東に向かって伸びている。

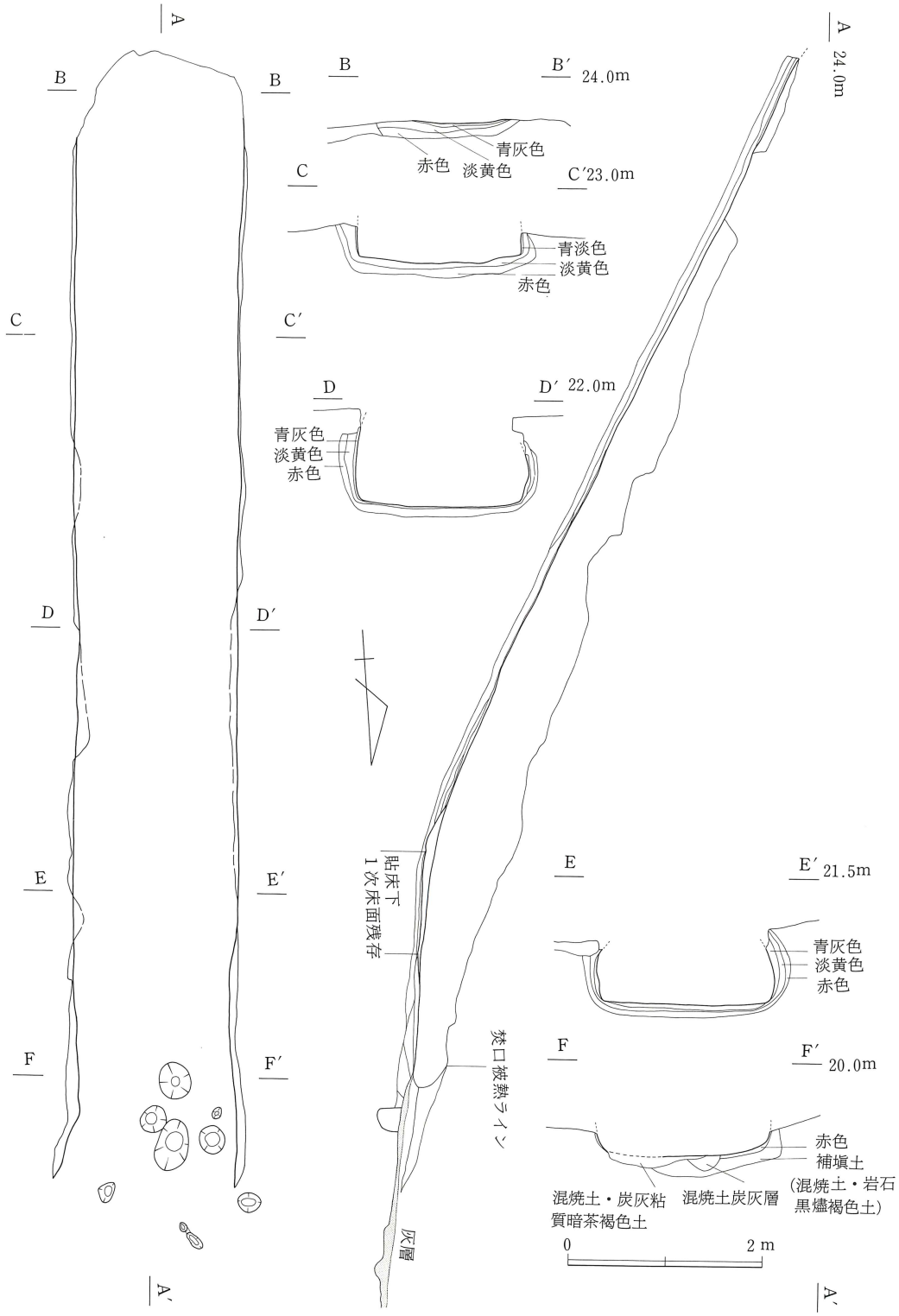
溝の覆土は上層から、1軟質粘性暗褐色土層、2黒褐色土層、3硬質粘性暗赤褐色土層となっている。



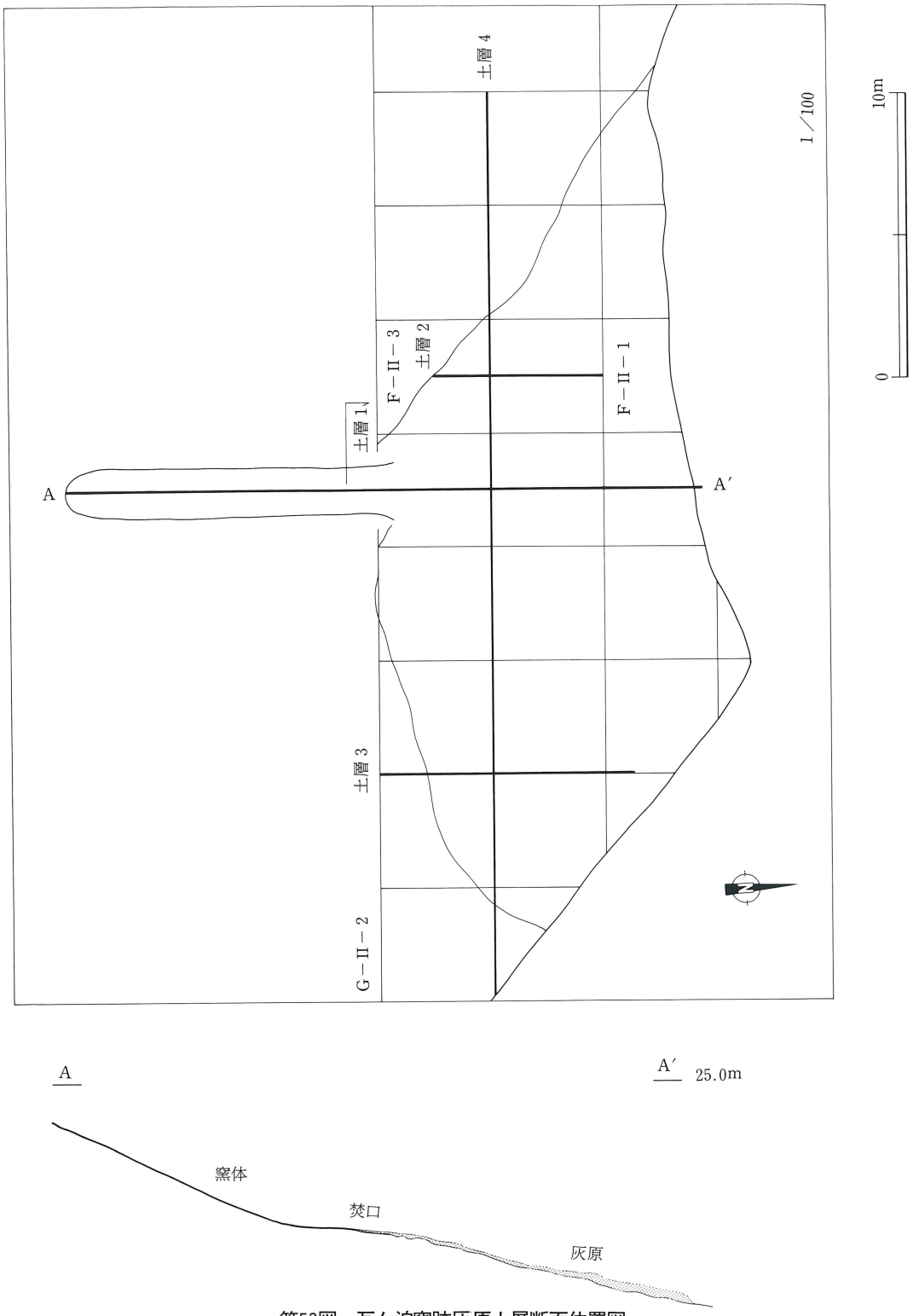
第50図　瓦ケ迫窯跡遺構分布図



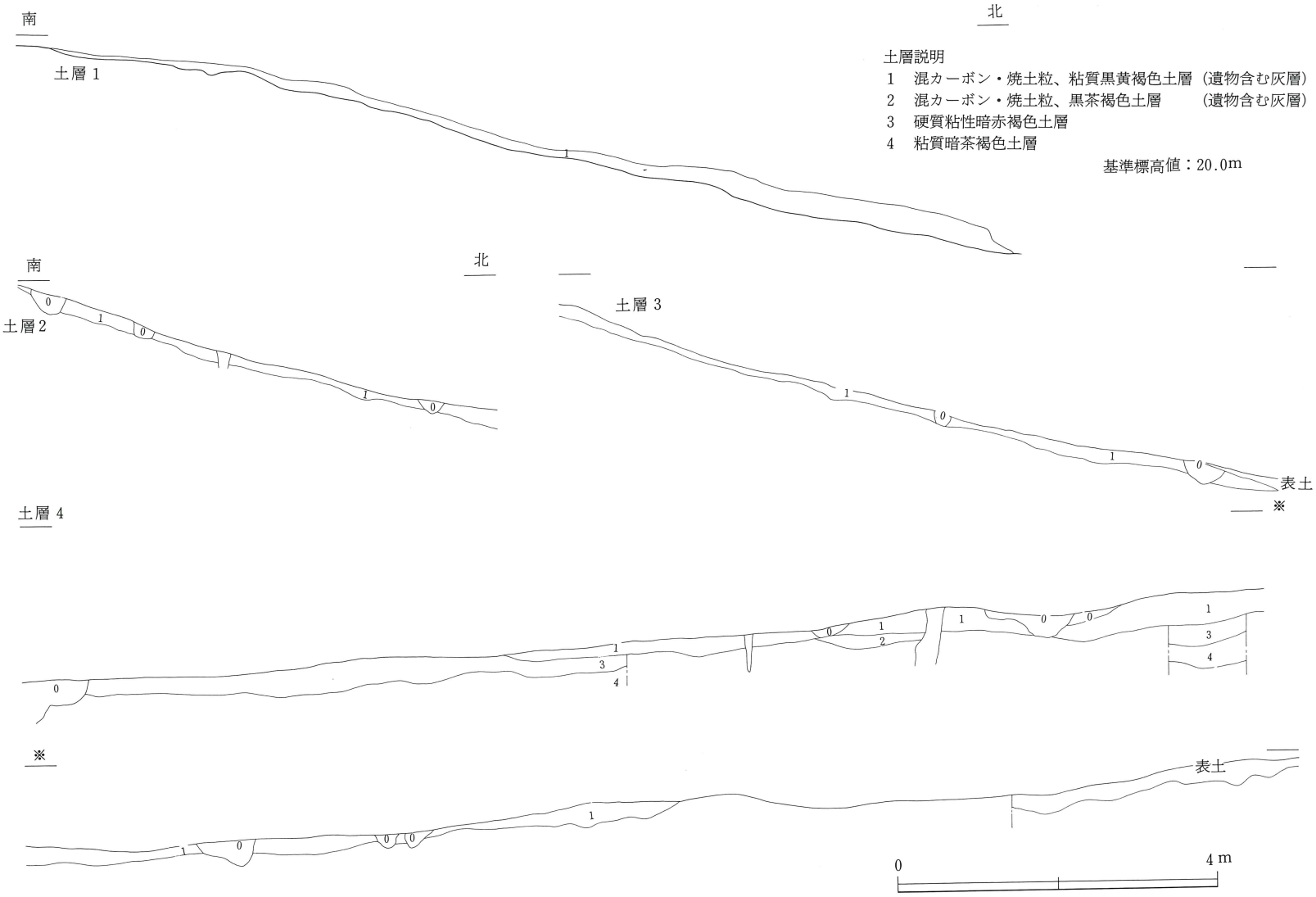
第51図　瓦ケ迫窯跡実測図(1)



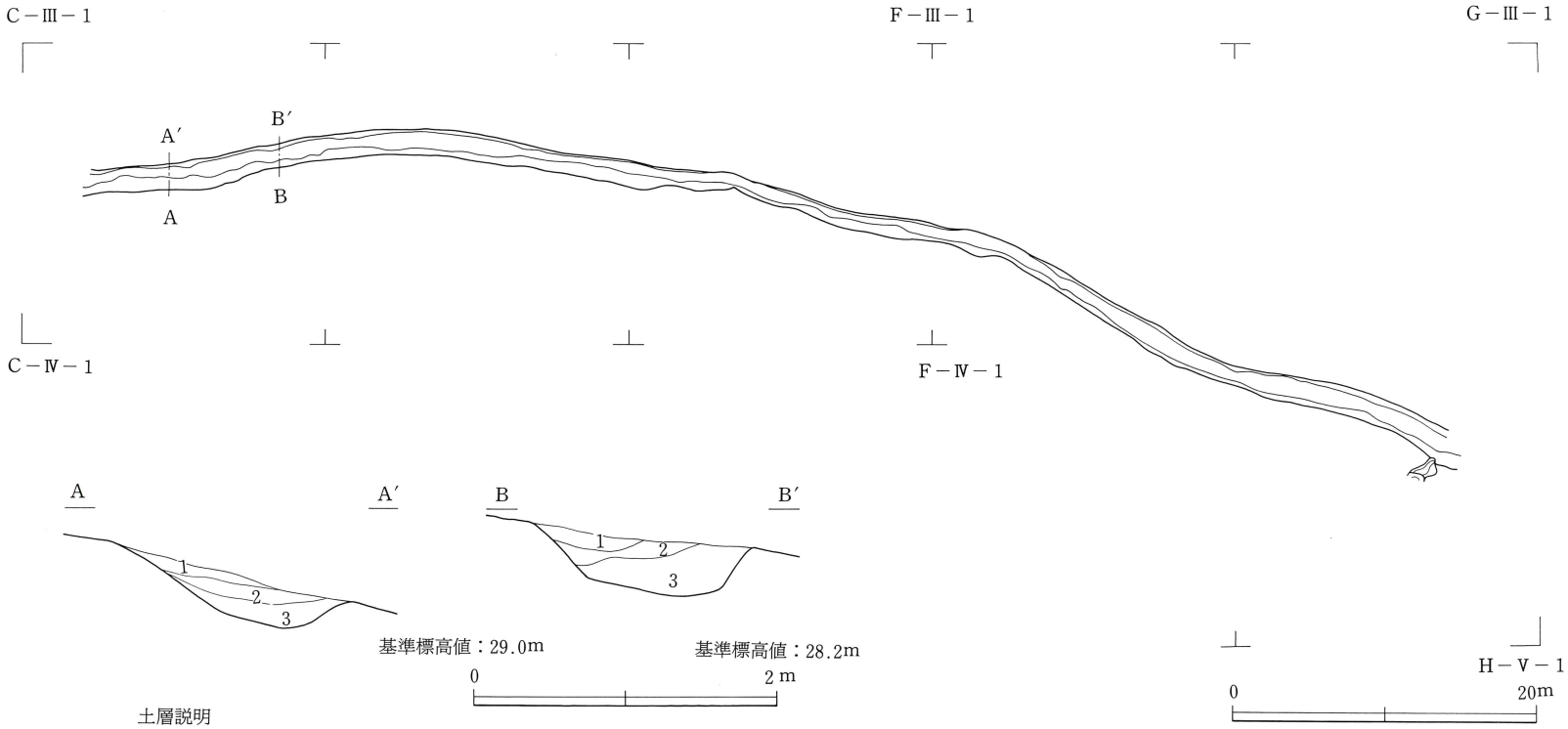
第52図　瓦ケ迫窯跡実測図(2)



第53図　瓦ケ迫窯跡灰原土層断面位置図



第54図　瓦ケ迫窯跡灰原土層断面実測図



土層説明
1　軟質粘性暗褐色土層
2　黒褐色土層
3　硬質粘性暗赤褐色土層

第55図　溝　2　実　測　図

出土遺物

遺物は、窯内、灰原から出土した須恵器について説明を行う。遺物の量は窯内では569点、このうち杯などの小型品は378点、壷・甕類191点の計569点出土している。このなかには小破片が多数含まれていた。したがって同一個体の重複を避けるための選別作業をしたのち、可能な限り実測を行い264点を図示した。灰原では小型品680点、大型品240点の計920点が出土している。灰原の須恵器については39点を図示した。

瓦ケ迫窯跡の窯内、灰原からはヘラ記号をもつ杯が多量に出土している。したがって、これらについてはヘラ記号と器形の分類に準拠して記述していきたい。ヘラ記号はⅠ～Ⅷ類の９種類に分類している。ヘラ記号の刻まれる位置は内面、外面、内外面の別がある。

窯内須恵器（第56～86図）

図示した須恵器は、焼成部床面と燃焼部から出土したものである。

器種には蓋杯、高杯、瑳、提瓶、短頸壷、蓋、脚部、甕がある。

ヘラ記号をもつ蓋杯（１～244）

焼成部から出土した蓋杯には身、蓋にそれぞれ蓋、身の一部が融着していたため、後の接合作業の段階で組み合うことが明らかになった例が24組ある（１～48）。

内面ヘラ記号

杯内面に刻まれるヘラ記号の種類はⅠ～Ⅲ類に限られる。

Ⅰ類―１

内面に直線３本の浅く、長い平行線で表現されるヘラ記号が刻まれる。

蓋・身セット（１～30）

この一群は大きさによって小、中、大の３種類に分けることができる。小型品は蓋の口径がほぼ11cm前後、身の口径9.3cm～10.0cmで１～12が該当する。中型品としては13～22を示すことができる。大きさは蓋の口径12cm台、身の口径10.8cm～11.4cmである。大型品の大きさは蓋が口径13cm台、身は口径12cm前半台となっている。23～30が該当する。器高は小・中・大ともに３cm～4.2cmの範囲内に収まり、深さに顕著な差は認められない。器形の特徴はほぼ共通している。まず蓋は器高が高く天井部は尖り気味で山形をなす。口縁部は天井部から緩く屈曲し、やや丸みを帯びて外傾する。器厚は天井部との境で一端薄くなり、口縁部で肥厚する傾向がみられる。このほかに口縁部が屈曲するタイプがみられる(15、19、21、29)。身は器高が高く底部は尖り気味で山形をなす。口縁部は直線的に立上がり、器厚の変化は少なく端部で丸くなる。受部は短く水平に伸び端部が細くなる。

このような特徴は身のほとんどに共通するものである。

天井部および底部は回転ヘラ切り後に、回転ヘラ削り調整が施されている。回転ヘラ削り調整は丁寧であり器面に段を残さない。

蓋（49〜65）

蓋は17点ある。形態や調整についてはセット例とほとんど同じである。ただ口縁部の特徴では僅小例であるが若干差がみられる。61、62は口縁部が天井部から緩く屈曲し、長めに伸びる。端部は細く外反するものである。

身（66〜76）

蓋と同様に形態や調整の特徴はセット例と共通している。

Ⅰ類一2

内面に直線3本の深く、短い平行線で表現されるヘラ記号が刻まる。

蓋・身セット（31〜42）

大きさによって小、大の2種類に分けることができる。

小型品は蓋の口径が11.2cm、12.8cm、身の口径10.2cm、11.1cmで31〜34が該当する。大型品としては35〜42を示すことができる。大きさは蓋が口径13cm台、身は口径12cm前後となっている。器高は小、大ともに4cm前後である。

器形には顕著な特徴がある。蓋は器高がやや低く、天井部は緩い曲線を呈する。口縁部は天井部から緩く細く伸び、外傾する。口縁部中程の内面に弱い稜をもつことが最大の特徴である。ただ37はやや内湾し稜をもたない。39は端部で外反する。身は器高がやや低く、底部は緩い曲線をもつものが主体をなす。口縁部は立上がりの基部で厚く、外面中程で緩い段をもち端部に向かって細く外反する。

整形・調整技法をみると。底部に回転ヘラ削り調整で、体部〜口縁部は横ナデで仕上げられている。底部内面にはナデが施されている。

蓋（77〜81）

細くやや長めに伸びる口縁部は共通する特徴といえる。口縁部内面の稜は77、80にはみられない。しかしほかの部位の手法は同じである。

身（82〜97）

器形の特徴は口縁部が立上がりの基部で厚く、外面中程で緩い段をもち端部に向かって細く外反する。受部は端部に向かって細くなりやや内側に反る。このような形態は程度の差こそあれ共通する。大きさは口径11.6cm〜12.6cmの範囲内にある。

Ⅰ類は蓋・身の口径差が1.5cm位にほぼ集中する。

Ⅱ　類

内面に「×」のヘラ記号をもつものである。

蓋・身セット（43〜46）

蓋は器高がやや低く、天井部は緩い曲線あるいは平坦に近い曲線を呈する。口縁部の形態は43・45が天井部から短く屈曲する。身は器高がやや低く、底部は緩い曲線をもつものと平坦に

近い形状を呈する。口縁部は細めで直線的に立上がり、器厚の変化は少なく端部で丸くなる。受部は細く、丸みをもつ。

整形・調整技法をみると、底部が回転ヘラ削り調整で、体部〜口縁部は横ナデで仕上げられている。底部内面にはナデが施されている。

蓋（98〜102）

口縁部の形態はａ．天井部から短く屈曲するもの(98)、ｂ．天井部から緩く伸びるもの(101、102)、ｃ．天井部から緩く屈曲し、端部に向かい細くやや外反気味になるもの（99、100）、の３種類ある。

身（103〜105，107）

器高がやや低く、底部は緩い曲線をもつものと平坦に近い形状を呈するものがある。口縁部は細めで直線的に広がり、器厚の変化は少なく端部で丸くなる。107はヘラ痕状の刻線を伴う。形態的には基部がやや肥厚し、受部がやや伸びる。

Ⅲ　類

身（108）

直線の３本の組み合わせ「＋」のヘラ記号が内面に刻まれる。

底部は平坦に近い形状を呈し低い形状をなす。口縁部は細く内傾しやや反り気味に立上がる。受部は細く、端部に丸みをもつ。整形・調整技法は、底部が回転ヘラ削り調整で、体部〜口縁部は横ナデで仕上げられている。底部内面にはナデが施されている。

外面ヘラ記号

杯の外面にヘラ記号が刻まれるものである。種類はⅡ〜Ⅶ類の６分類に分けられる。

蓋の109は外面にヘラ痕状の２本の刻線をもつもので、ヘラ記号の可能性がある。１点のみ出土した。器高は低く、天井部は平坦である。口縁部は天井部から緩く伸び明確な屈曲をもたない。

Ⅱ　類

外面に「×」のヘラ記号をもつものである。

蓋・身のセット（47・48）

蓋（47）は器高がやや低く、天井部は緩い曲線を呈する。口縁部は天井部から緩く伸び、天井部との境で肥厚、端部に向かって細くなりやや外反する。身（48）は口縁部破片である。口縁部は基部がやや厚く端部に向かい細くなる。

蓋（110〜118）

ヘラ記号は２本の直線が直交し「×」を呈する例がある（112〜114）。

器形は器高が低く低平である。天井部は緩い曲線を呈する。口縁部は天井部から緩く伸び、天井部との境で肥厚し、端部に向かい細くなって外反するものが基本的な形態である。大きさ

は口径13.4cm～14.0cm、器高2.5cm～3.8cmである。

身（119～122）

器高がやや低く、底部は緩い曲線をもつものと平坦に近い形状を呈するものがある。口縁部は、a．基部がやや厚く端部に向かい細くなるもの（119）、b．断面が三角形状になるもの（120～122）がある。大きさは口径が11.2cm～12.6cmと幅がある。器高は4cm前後である。

Ⅲ　類

直線3本の組み合わせ「⧺」のヘラ記号が外面に刻まれる。

身（134～137）

器形は器高が低く底平である。天井部は平坦に近い形状である。口縁部は細めで直線的に立上がる。大きさは口径12cm前半、器高3.5cm、3.7cmである。

Ⅳ　類

直線4本の組み合わせ「⧻」のヘラ記号が外面に刻まれる。

蓋（123～126）

形態は器高が低く、緩く平坦な天井部は低平な印象を与える。口縁部は天井部から緩く伸びる（123）と屈曲をもち端部が外反するものがある（124～126）。調整は天井部に回転ヘラ削りを施し、口縁部を横ナデで仕上げている。

身（137）

欠落部分が多く明確ではないが、137は該当するものと思われる。Ⅴ類の可能性もあるがここではこのヘラ記号としておく。口縁部は基部がやや厚く、端部に向かい細くなる形態をもつ。

Ⅴ　類

直線4本の組み合わせ「#」のヘラ記号が外面に刻まれる。

蓋（127）

口径に対し器高が低い形態を呈している。口縁部は天井部から緩く移行し、端部は細く外反気味になる。Ⅱ類の蓋に近似する形態である。

身（136・138・139）

ヘラ記号は井形である。136は交差する平行線の間隔がやや広いが、138は1組の平行線が一端で接するような角度に刻まれている。

器高が低く、底部は緩く平坦に近い形状を呈する。口縁部は、a．基部がやや厚く端部に向かい細くなる。口径12cm、器高3.5cm程度である。

Ⅵ　類

直線5本の組み合わせ「#」は外面に刻まれている。

蓋（128～131）

ヘラ記号は3本の平行線に対し、2本の平行線が斜めに交差する。

口径に対し器高が低い形態を呈している。口縁部は天井部から緩く移行し、端部は細く外反気味になる。II・V類などの蓋に近似する形態である。

大きさは口径が12.4cm～14.0cmと幅がある。器高は4cm前後である。

身（140～144）

3本と2本の平行線は斜交する（140，141，143，144）。142は2本線が人字状に一端が接して刻まれている。同じヘラ記号においても差がみられる。

器形の特徴をみると、器高がやや低く底部は平坦に近い形状を呈するもの（140，141）と、緩い山形状をなすものがある(140～141)。口縁部は断面が三角形状になるものが基本的な形といえる。139、140は口縁部は細い。受部は細く短いもので端部で丸く肥厚する。

大きさは口径が11.5cm～12.3cm、器高は4cm前後でる。

Ⅶ　類

直線6本の組み合わせ「卌」は外面に刻まれている。

蓋(132)の1点のみ確認されている。器形はⅥ類の蓋と基本的には同じで低平な形態をもつ。大きさは口径13.5cm、器高は3.5cmである。

Ⅷ　類

ヘラ記号が杯の内面と外面の両面に刻まれたものがある。

内面には「Ω」に1、2本の直線が伴うヘラ記号が刻まれる。外面には「×」が刻まれる。

このようなヘラ記号をもつ例は身にみられる。これと組み合う蓋は存在するものと思われるが、確認されていない。

身（150～155）

ヘラ記号は内面についてみると、「Ω」に「—」が交差するもの（151)、「Ω」に「＝」が交差するもの（153～155)、「Ω」に「×」が伴うもの（150、152）がある。

外面には「×」が刻まれるが、150以外では不明確である。このヘラ記号は単独で内面に付く例はなく、外面には必ず「×」が伴うものであろう。

器形の特徴は口縁部が立上がりの基部で厚く、外面中程で緩い段をもち端部に向かって細く外反する。受部は立上がり寄りで薄く、端部で丸く肥厚する。

大きさは口径11.5cm～12.1cm、器高は3.6cm～4.1cmと纏まりをもつ。

蓋　杯

ヘラ記号をもたない蓋杯については実測可能なもの88点を図示した。

蓋　（156～191）

器形の特徴によって大きく3種類に分類できる。

156～159は器高が高く山形状をなす。口縁部は天井部から緩く伸び、器厚の変化は少ない。大きさは口径が11.2cm～12.9cmと幅がある。ヘラ記号I類—1の杯蓋に近似する。

160～165は器高がやや低く、天井部は緩い曲線を呈する。口縁部は緩く屈曲する。大きさは口径が12.5cm～14.4cm、器高は3.6cm～4.0cmである。

166～191は器高がやや低く、天井部は概ね緩い曲線を呈する。口縁部は天井部との境で屈曲し、端部に向かって細くなり外反する。大きさは口径が12.5cm～14.4cm、器高は3.1cm～4.2cmである。

身（192～195、197～210、212～244）、**蓋**（196～211）

196～195は器高が高く、底部が尖り気味で山形をなす。口縁部は直線的に立上がり、器厚の変化は少なく端部で丸くなる。受部は短く伸び端部が細くなる。形態はヘラ記号Ⅰ類―１の杯身に近いものである。

大きさは口径が12.5cm～14.4cm、器高は3.1cm～4.2cmである。

197～210は器高がやや低く、底部は緩い曲線をなす。口縁部は立上がりの基部で厚く、外面中程で緩い段をもち端部に向かって細く外反する。203は立上がりが細く内傾する。大きさは口径が11.0cm～12.4cm、器高は4.0cm～4.4cmである。

197は196の蓋が一部融着しており、これとセットになる。

212～244は底部が概ね緩い曲線、あるいは平坦に近い形状をもつ。口縁部は断面三角形を呈し、端部に向かって細く伸びる。口縁端部で外へ反り気味になる例がある。受部は短く、口縁部寄りで薄く、端部で丸く肥厚する。大きさは口径11.1cm～12.8cm、器高は4.0cm～4.4cmである。

211は212の蓋とセットになる。

杯の整形・調整をみると、蓋の天井部、身の底部に回転ヘラ削りを施し、内面にナデ調整が認められる。口縁部、体部は横ナデで仕上げられている。このような技法は瓦ケ迫窯跡出土の杯に共通する。

高　杯（245～250）

高杯には有蓋と無蓋の２種類ある。

有蓋高杯（245～247）は３点確認している。245は浅い杯部をもち、恐らく長い脚部がつくものと思われる。246はやや低い脚部である。柱部に二段の長方形透かし一対がつく。柱部と裾部の境に突帯、二段透かしの間に沈線が巡る。脚端部はやや外反する。247は長めの脚部をもち、柱部は無窓となっている。柱部中央に沈線が巡り、柱部と裾部の境に段がつく。脚端部は大きく外反する。

無蓋高杯（248～250）は杯部２点、杯底部～脚上半部１点を図示した。248は小型品である。体部に二条の突帯が巡る。口縁部はやや肥厚する。249は口縁部と体部の境に段がつき、口縁部は外反する。250は杯部の底部に段がつく。脚の柱部には二段の長方形透かし一対がつく。透かしの間に二条の沈線が巡る。無蓋高杯の杯底部外面にはカキ目調整が施されている。

有蓋高杯の蓋（251～254）

251はやや器高の高いものである。つまみは251～253ともに頂部が平坦な薄いボタン状をなす。252、253は天井部と口縁部の境に段をもつ。口縁部は肥厚し、252～254の内面には沈線が巡る。蓋は4点ともに天井部にカキ目がみられる。大きさは251がやや小さく口径13.1cm、ほかのものは口径14cmほどである。

瓿（255）

口縁部の破片である。口縁部は頸部から大きく外へ開き、頸部との境に段をもつ。

提　瓶（256）

小型品の体部破片である。カキ目の調整痕がみられる。

蓋（257、258）

壷類の蓋と思われる。257は器高がやや高く、口縁部は直立し端部が細く外へ伸びる。つまみはもたない。口径12.1cm、器高3.8cmの大きさである。258は小型で偏平なつまみをもつ。口縁部内面の返りは長く直立する。大きさは口径9.3cm、器高2.7cmである。

脚　部（259）

脚付壷の脚部と考えられる。外反する脚部で中程に段が巡る。端部は外に反る。

甕（260～264）

260，261は口縁部が短く、頸部から大きく反る。口縁端部は断面が矩形を呈する。260の肩部にカキ目状の調整がみられる。胴部内面には同心円の当具痕が残る。262～264は頸部が長く伸びる形態をもつ。262、263は口縁部が内湾気味に反り、外面下端に稜をもつ。頸部には二条の沈線が巡る。口縁部から頸部上半にヘラ状工具を用いた施文がみられる。口縁部上部には短い刻み文、口縁部下部と頸部上半には斜格子の施文がみられる。器面の調整は263の頸部にカキ目が施されている。内面は横ナデである。264は口縁部が丸く肥厚する。頸部には二・三条1組の沈線が2段巡る。沈線で画された2区画間に櫛状工具による縦方向の平行線が施されている。整形の痕跡は胴部外面に木目直交の平行タタキ、内面には同心円の当具痕が残る。

灰原須恵器（第87～90図）

灰原から出土した須恵器のうち、実測可能なものは窯の至近地であるF－II－3、7、8にほぼ限られる。とくに焚口前方のF－II－3に集中していた。

ヘラ記号をもつ蓋杯（265～278）

内面ヘラ記号

II　類

内面に「×」のヘラ記号をもつものである。

蓋（265～267）

器形は器高がやや低く、天井部は緩い曲線あるいは平坦に近い曲線を呈する。口縁部の形態をみると、265、267は天井部から緩く伸び、266が天井部から短く屈曲し端部に向かって鋭角に細くなる。

大きさは口径が13.0cm～14.2cm、器高は4cm前後である。

身（268、269）

器形は器高がやや低く、底部は緩い曲線をもつもの（269）と平坦に近い形状を呈するもの（268）がある。口縁部はやや厚く、端部に向かって細くなる。受部は細く、端部で丸くなる。

大きさは口径が10.4cm、11.2cm、器高は3cm程である。

外面ヘラ記号

II　類

底部外面に「×」のヘラ記号をもつ。

身（270）

器形は器高がやや低く、底部は緩い曲線を呈する。口縁部はやや厚く、端部に向かって細くなる。端部はやや外反する。受部は細く伸び、端部で丸くなる。

大きさは口径が11.2cm、器高3.6cmである。

V　類

直線4本の組み合わせ「#」のヘラ記号が外面に刻まれる。

276は蓋の天井部か身の底部か判然としない破片である。

その他のヘラ記号

蓋・身セット（271～274）

I類－1の可能性もあるが、ここでは既設のヘラ記号分類から除外して取り扱う。ヘラ記号の刻まれている杯が完存していないため、2本の長い平行線で表現されるヘラ記号としておきたい。蓋は山形をなし、口縁部が天井部から緩く伸びる。身は端部に向かって細くなる口縁部と細く伸びる受部をもつ。大きさは蓋が口径12cm前半台、器高3.5cm、4.1cmである。身は口径が11cm前半台、器高4cm程である。

このほかに蓋と身がある。蓋（275、277）は器高がやや低く、天井部は緩い曲線あるいは平坦に近い曲線を呈する。口縁部は天井部から緩く伸びる。身（278）は器高が低く、底部はやや凹状をなす。口縁部は細くやや外反気味である。

蓋　杯

ヘラ記号をもたない杯の一群である。

蓋（279～285）

器形はやや器高の高いもの（279～284）と底平なもの（285）がある。口縁部は天井部から緩やかに伸びる。

大きさは口径13cm前後、器高には2.4cmと、4cmがある。口径に纏まりがみられる。

身（286～292）

形態は窯内出土の杯にみられる以外のものはない。概ね口縁部の基部が厚い。

大きさは口径11.2cm～12cm、器高4cm前後である。

杯の調整技法は窯の天井部、身の底部に回転ヘラ削りを施し、内面にナデ調整が認められる。口縁部、体部は横ナデで仕上げられている。

高　杯

高杯には無蓋高杯と有蓋高杯の蓋が出土している。

無蓋高杯（296、297）

杯部の破片である。

297は体部に二条の突帯が巡る。口縁部は体部の境から外反する。

有蓋高杯の蓋（293～295）

つまみは293に残っている。頂部が平坦で薄いボタン状をなす。294、295は天井部と口縁部の境に段をもつ。つまみは欠失している。294は天井部にカキ目がみられる。295は天井部に回転ヘラ削り、頂部にナデがみられる。つまみが欠落したものと思われる。

短頸壺（298）

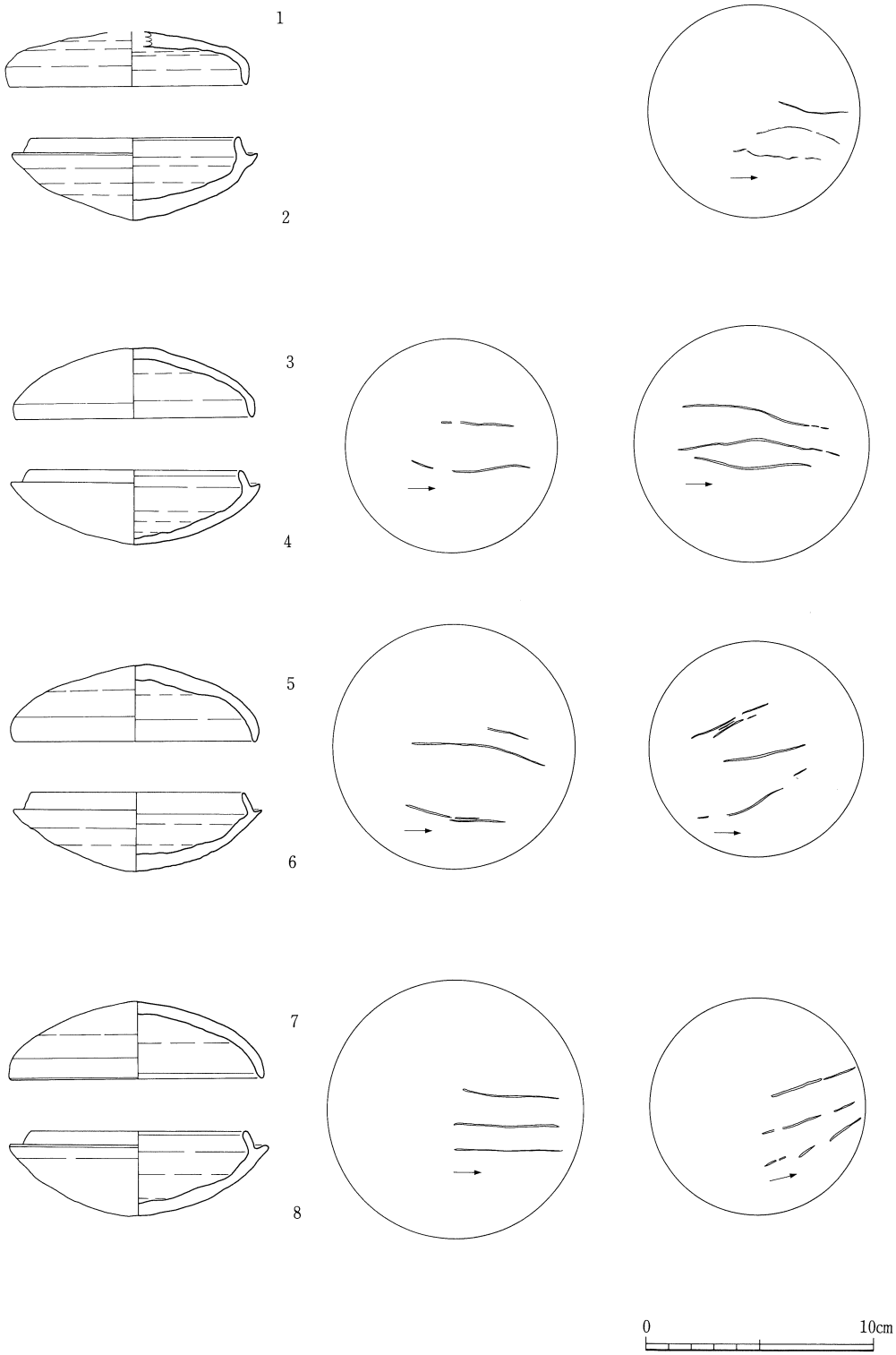
口縁部～肩部の破片である。器形は肩部がやや張ると思われる。口縁部は端部が細くなってやや外に反る。

脚　部（299）

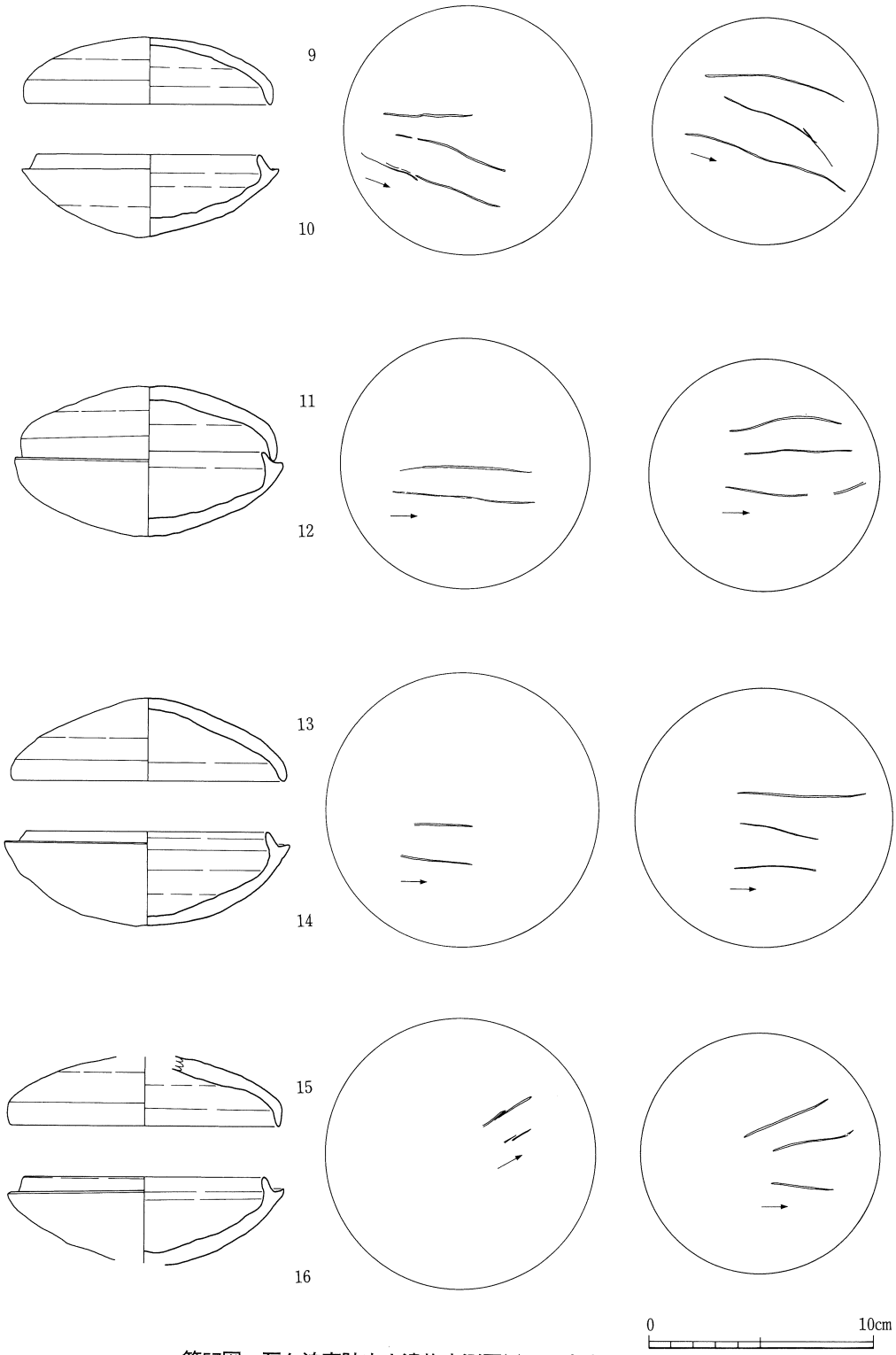
壷類の脚部と思われる。裾部が外に大きく広がる。

甕（300～303）

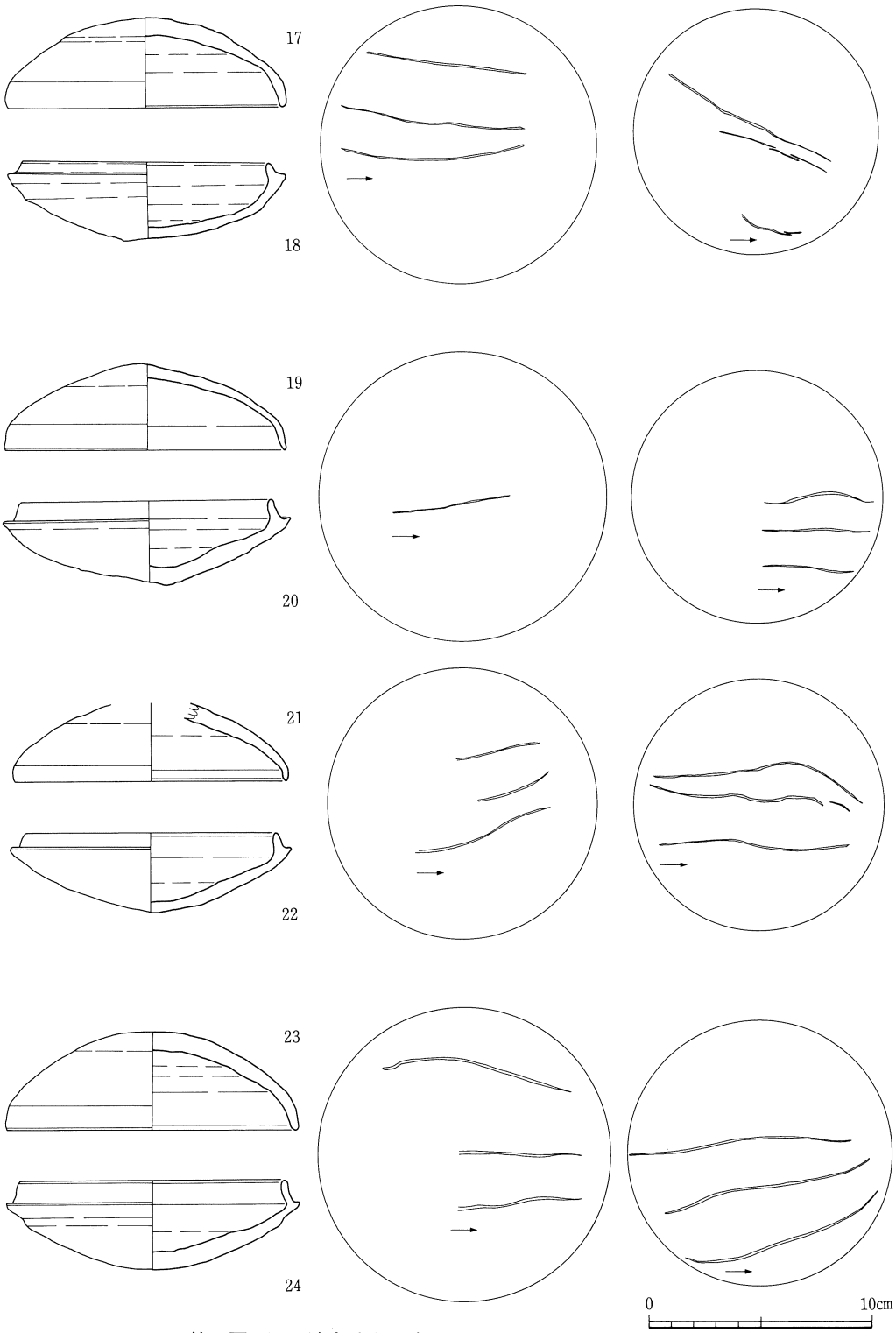
300、301は口縁部が短く、頸部から大きく反る形態をもつ。口縁端部は肥厚し段がつく。302は頸部にヘラ状工具を用いた斜格子の施文がみられる。303は頸部が長く伸びる形態をもつ。口縁部が内湾気味に反り、外面下端に稜をもつ。口縁部と頸上部には櫛描波状文が施されている。



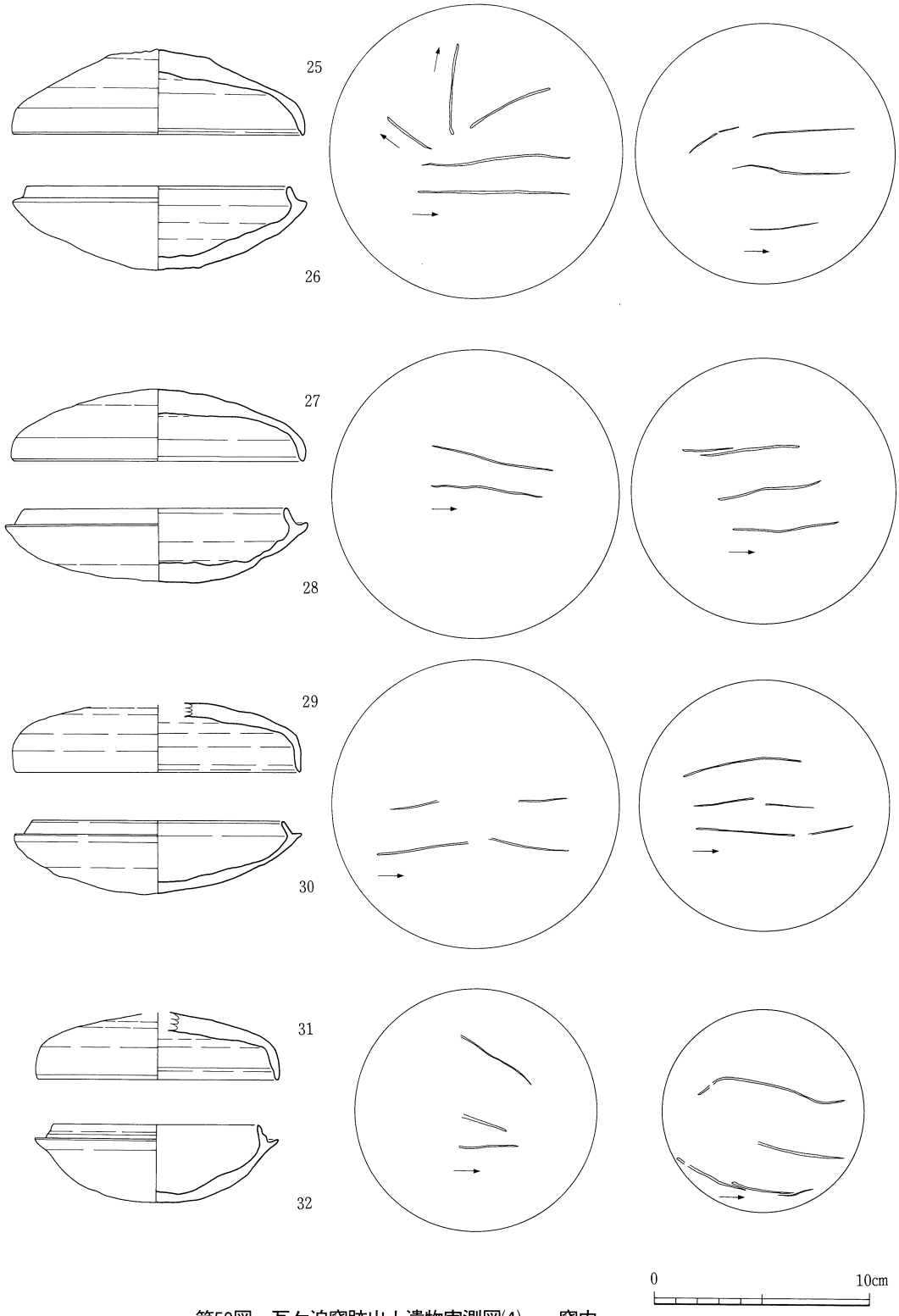
第56図　瓦ケ迫窯跡出土遺物実測図(1)　－窯内－



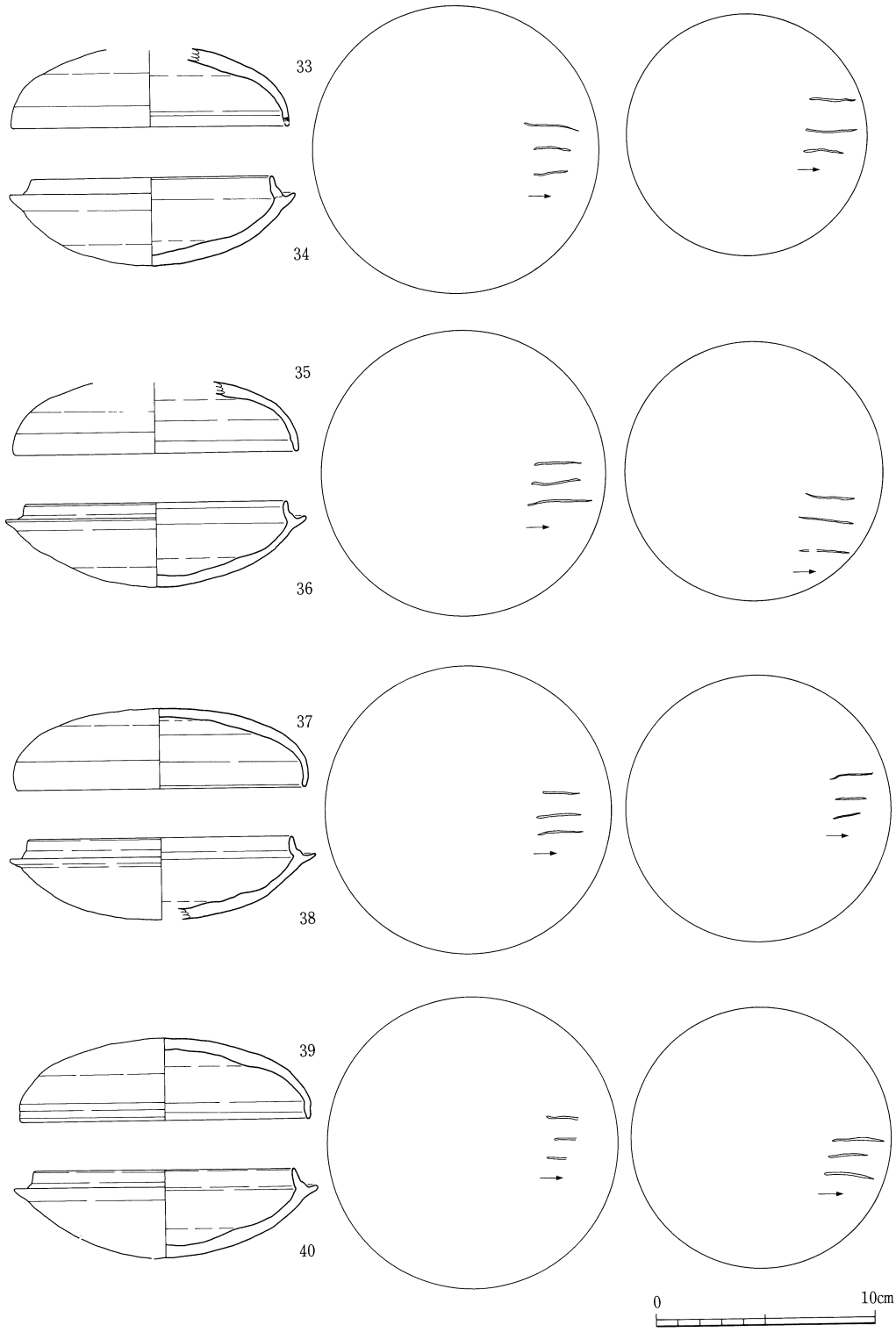
第57図　瓦ケ迫窯跡出土遺物実測図(2)　－窯内－



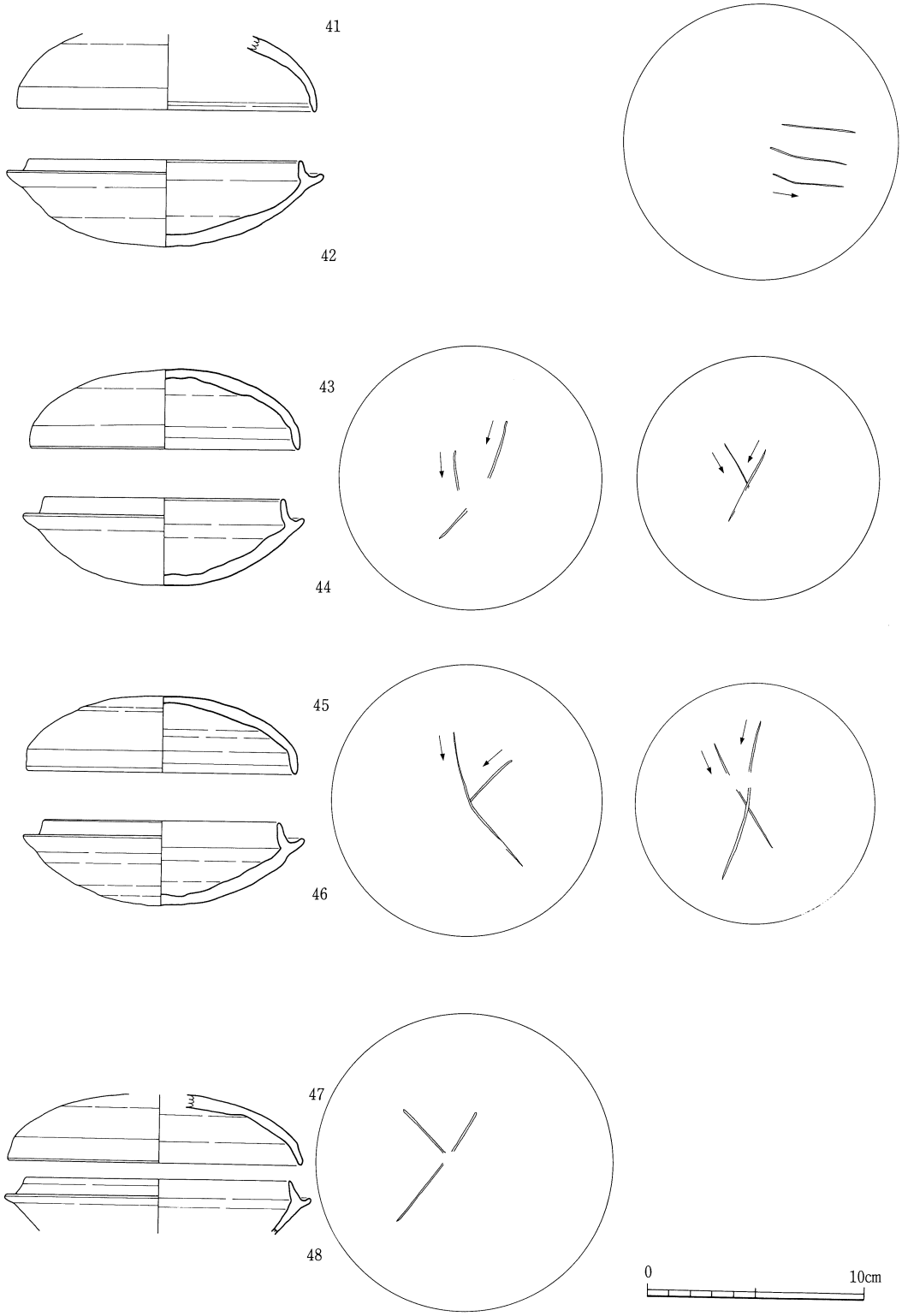
第58図　瓦ケ迫窯跡出土遺物実測図(3)　－窯内－



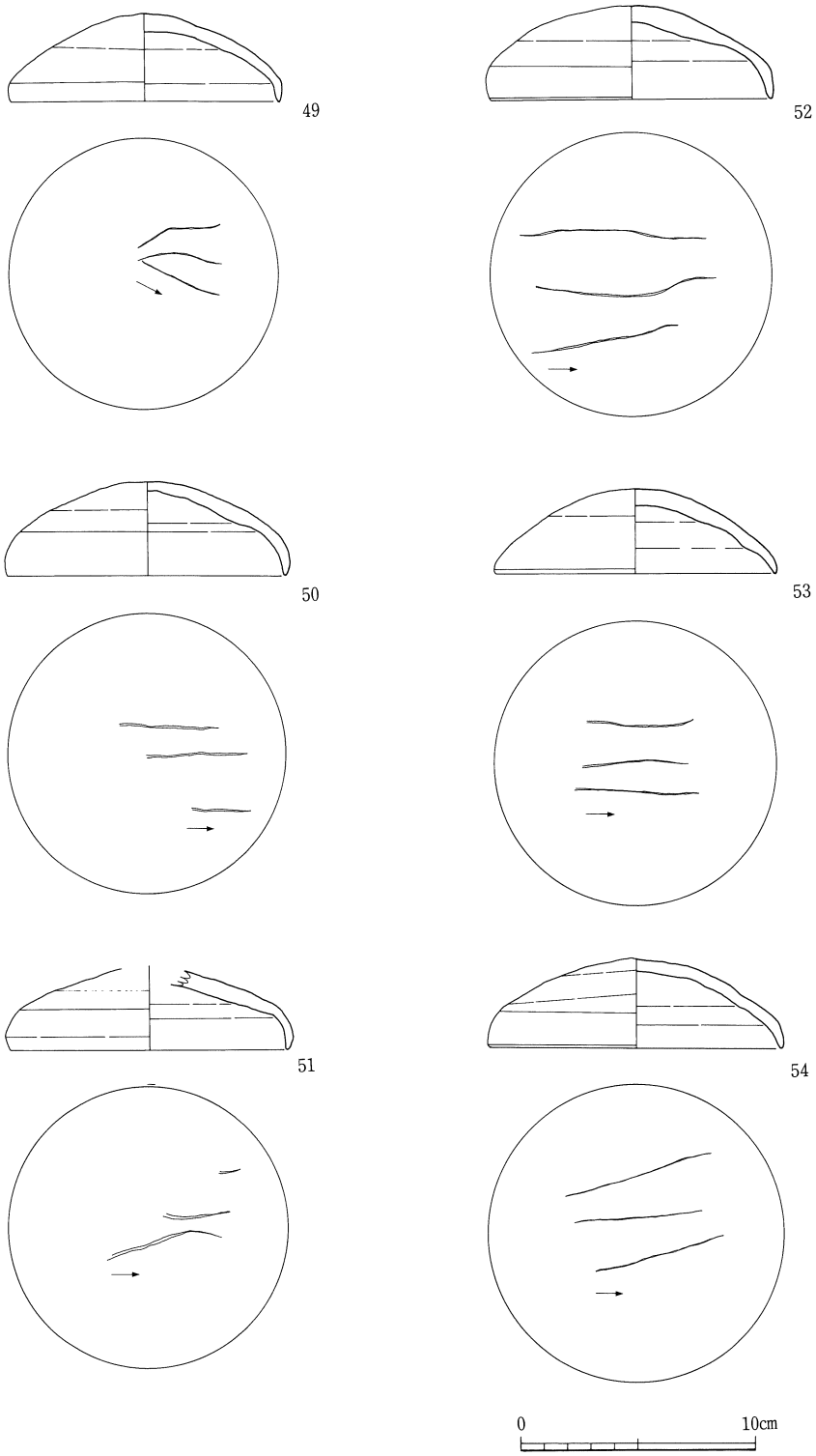
第59図　瓦ケ迫窯跡出土遺物実測図(4)　－窯内－



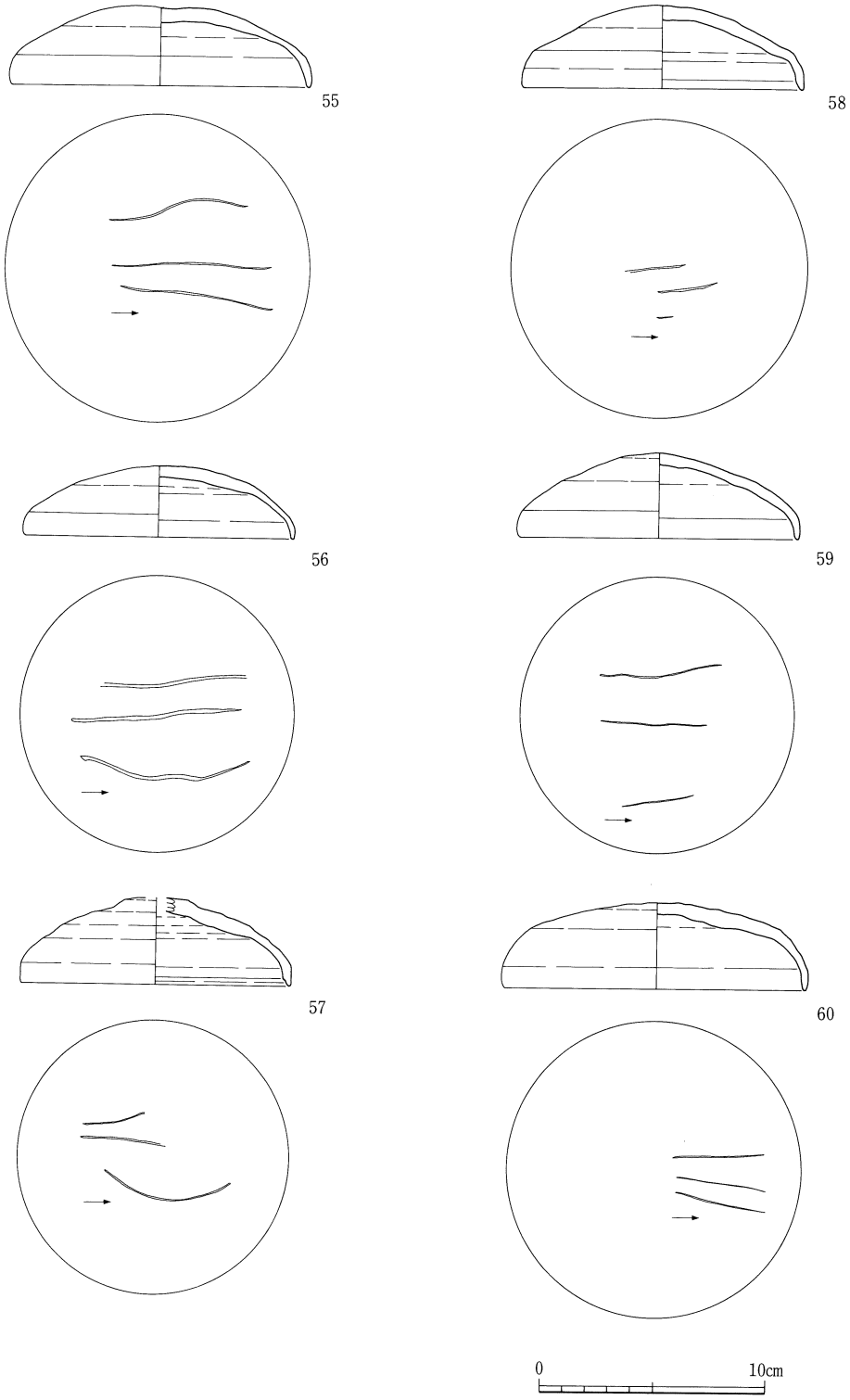
第60図　瓦ケ迫窯跡出土遺物実測図(5)　－窯内－



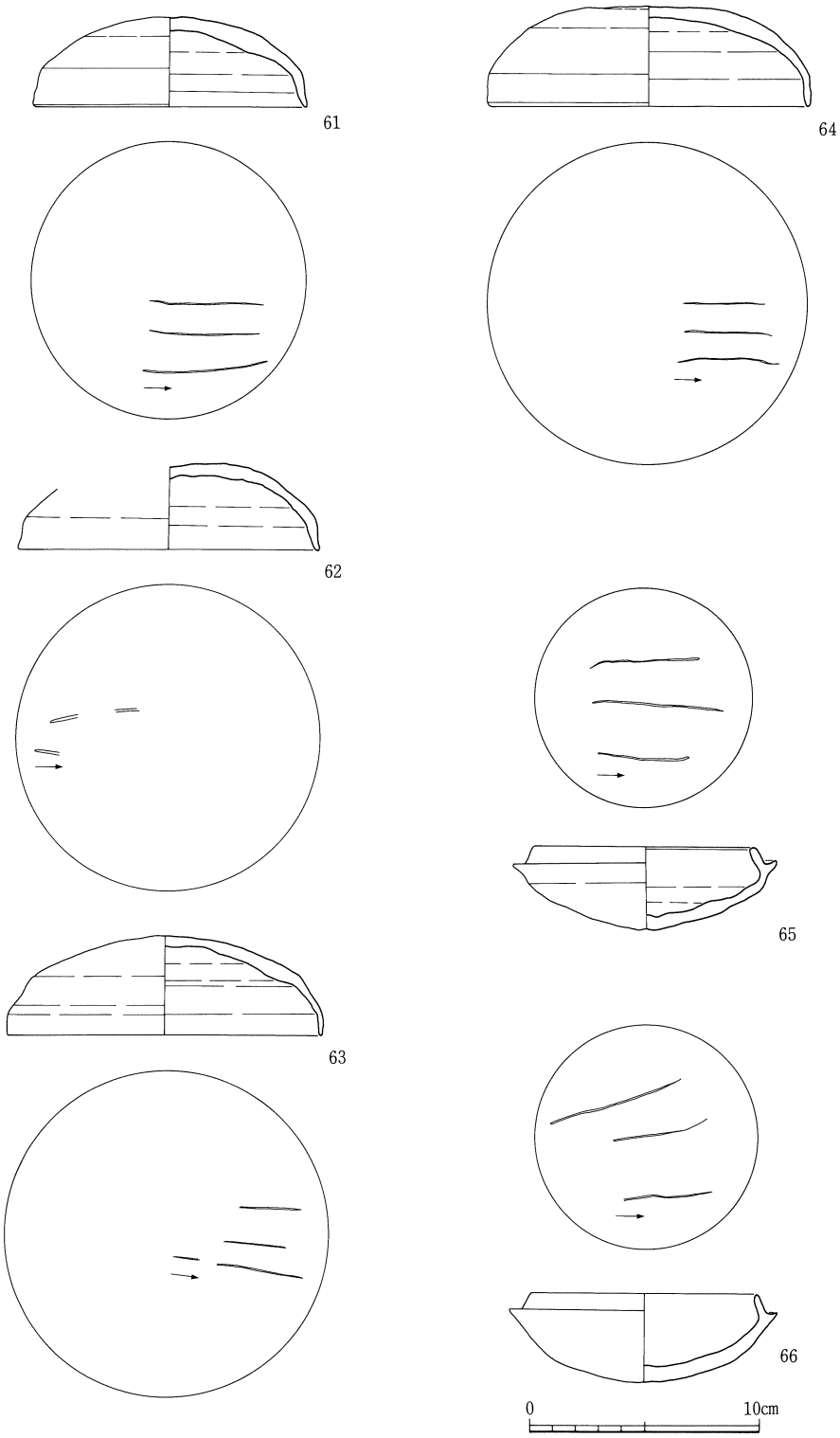
第61図　瓦ケ迫窯跡出土遺物実測図(6)　－窯内－



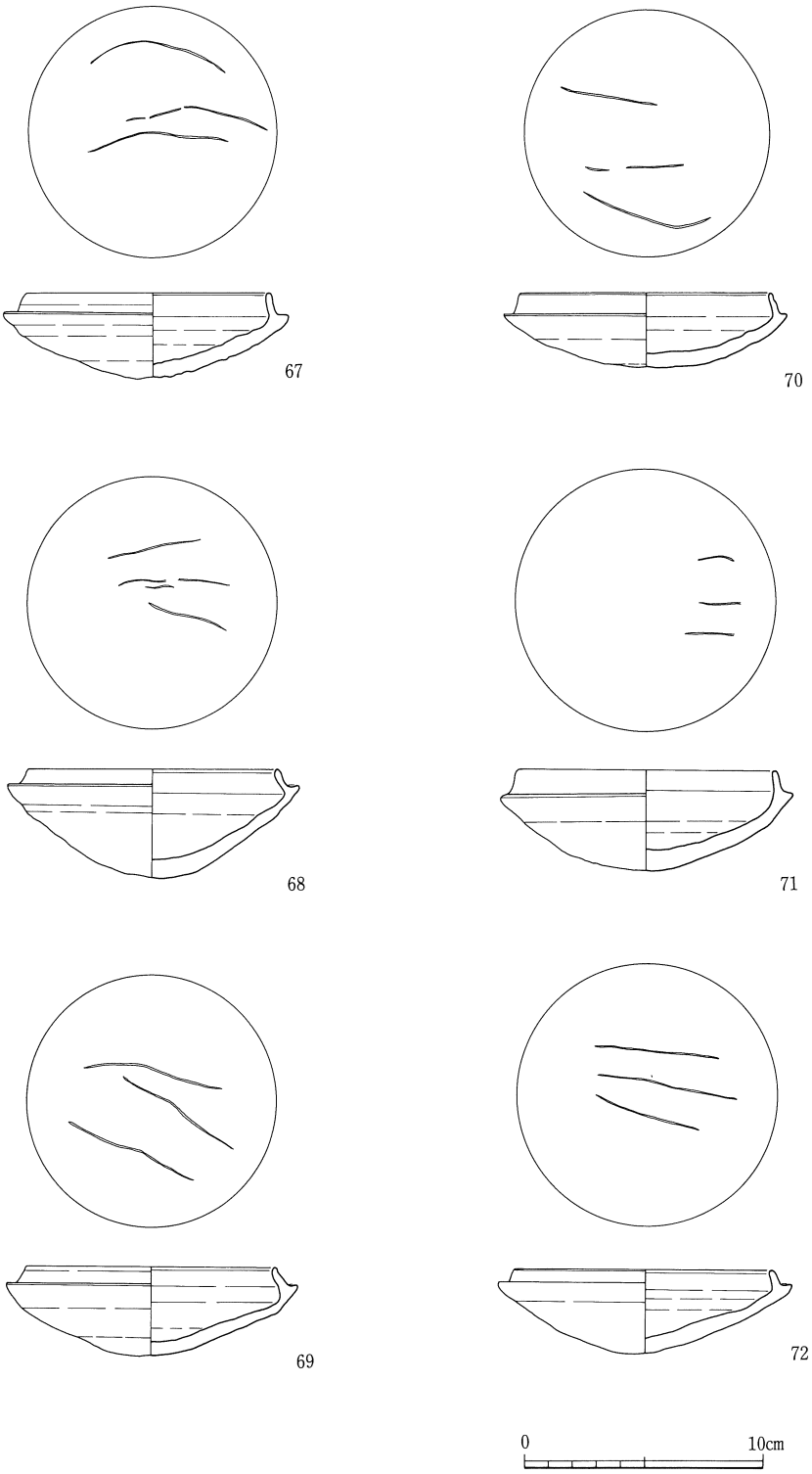
第62図　瓦ケ迫窯跡出土遺物実測図(7)　－窯内－



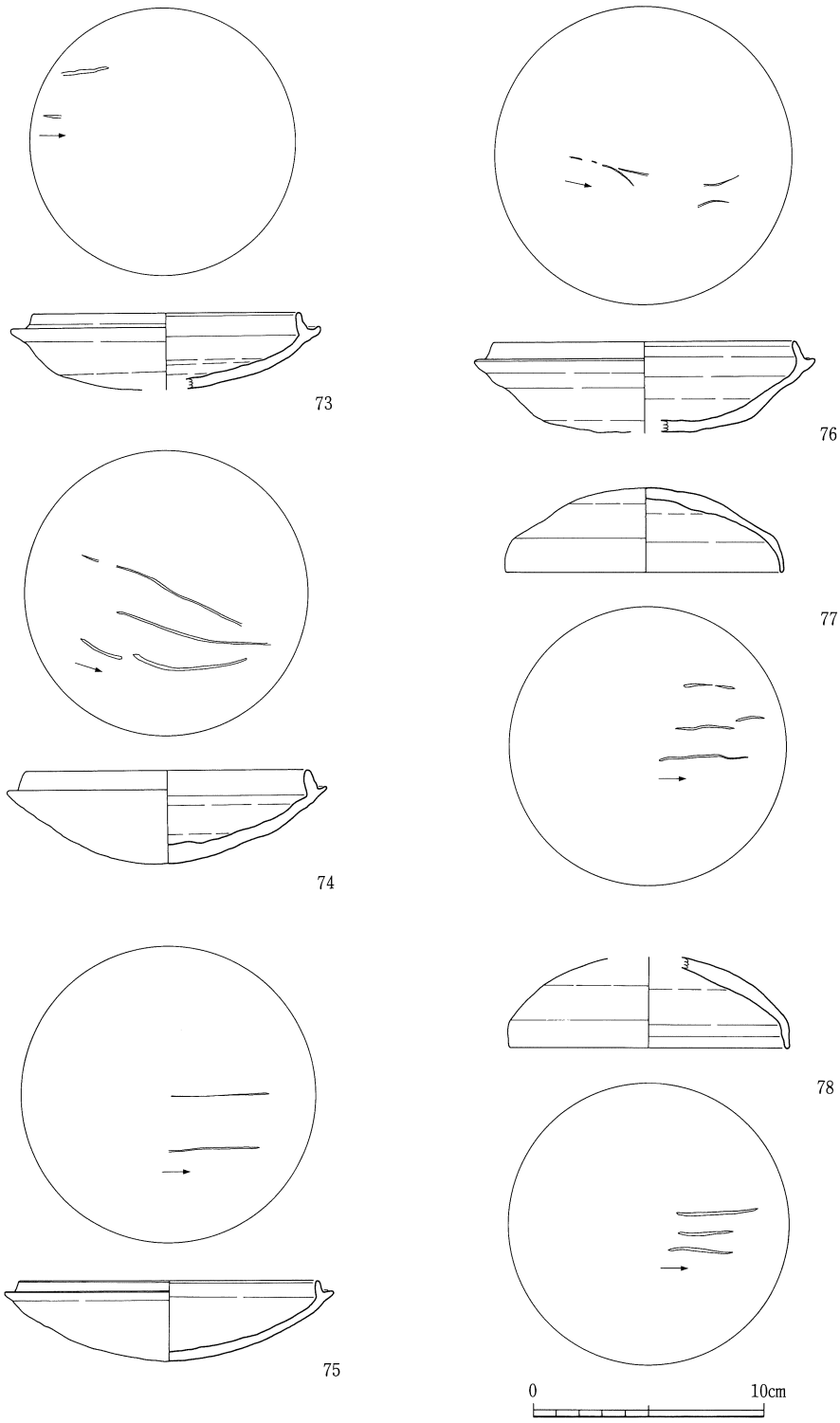
第63図　瓦ケ迫窯跡出土遺物実測図(8)　－窯内－



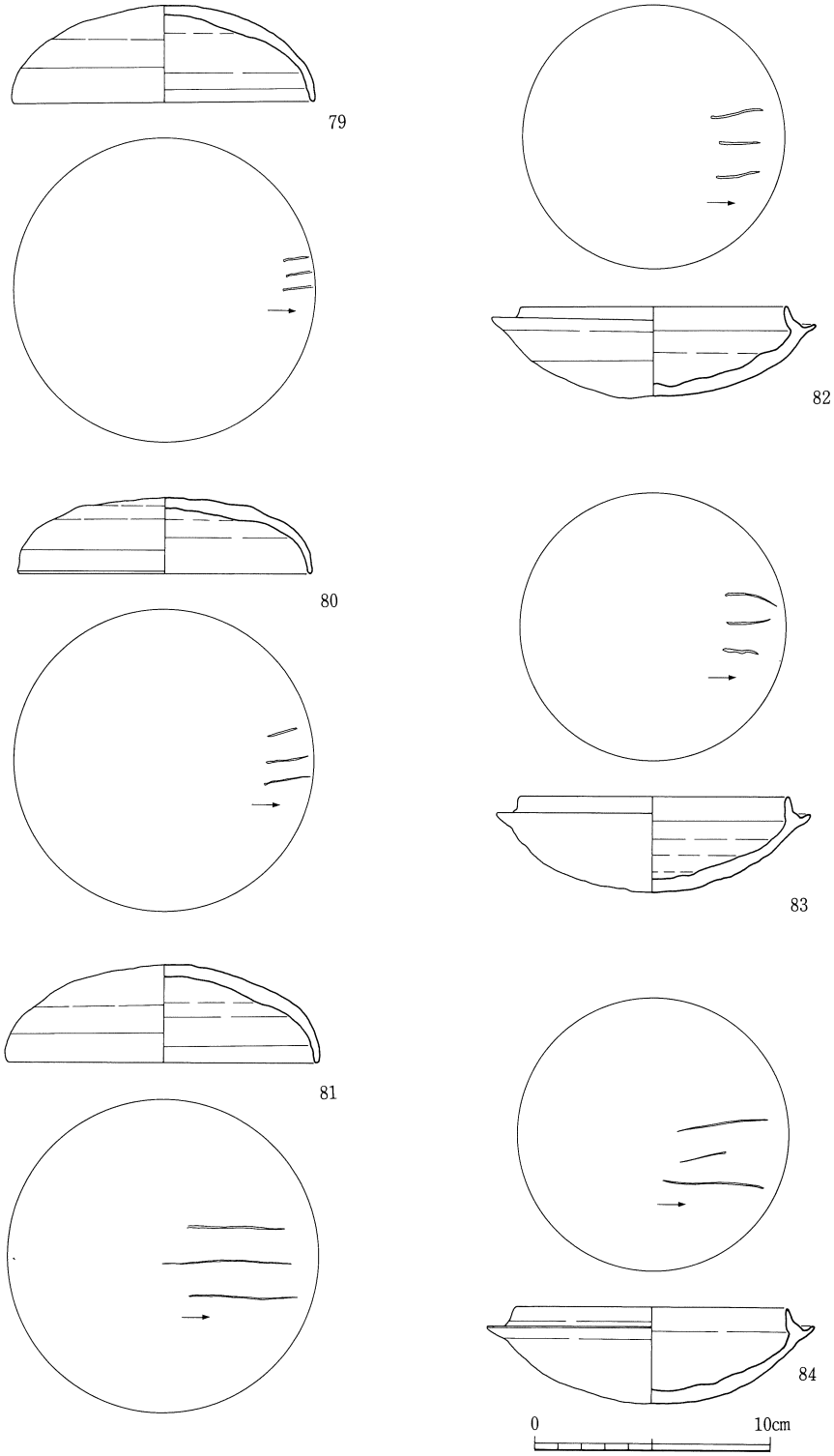
第64図　瓦ケ迫窯跡出土遺物実測図(9)　－窯内－



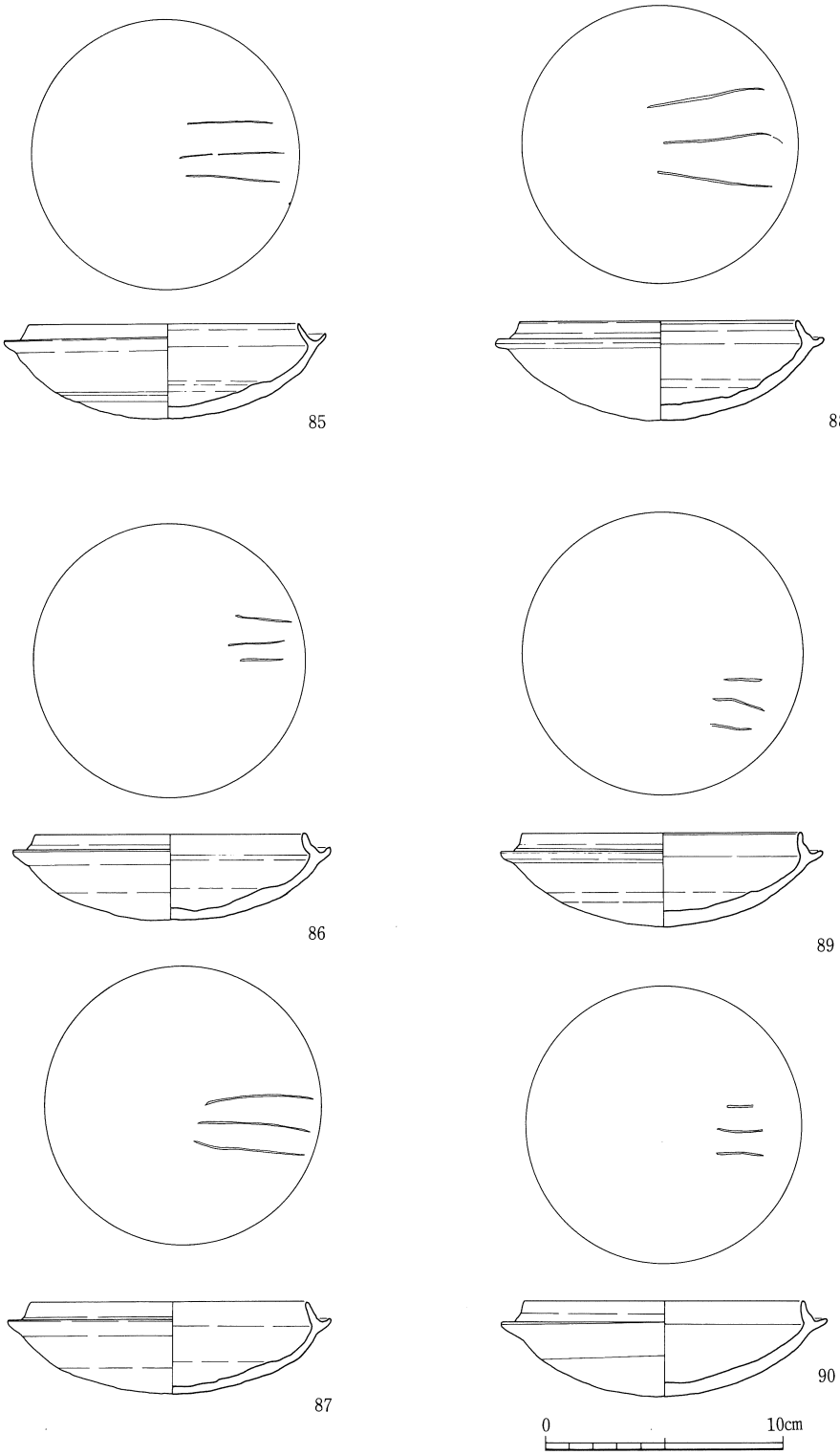
第65図　瓦ケ迫窯跡出土遺物実測図(10)　－窯内－



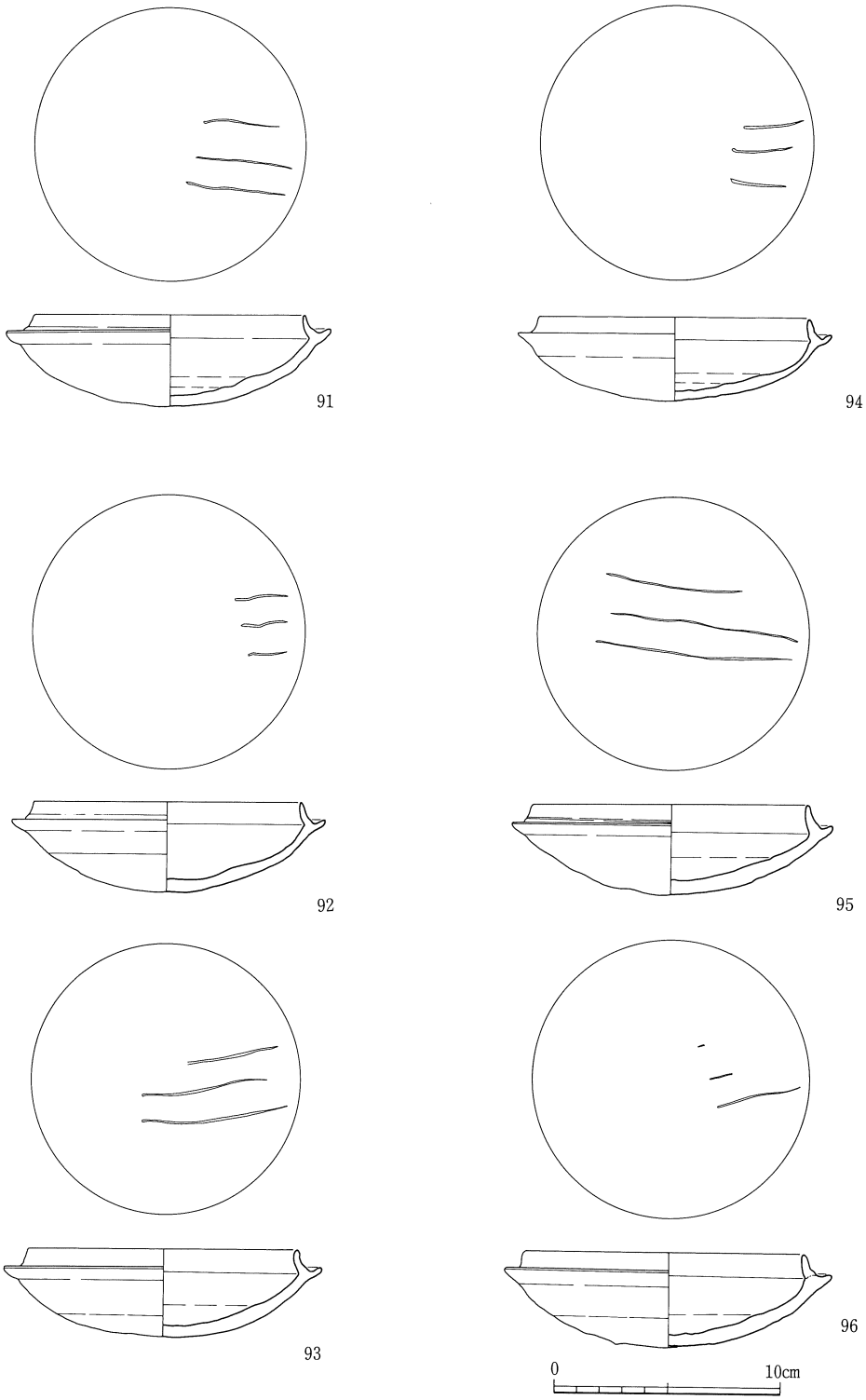
第66図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(11)　－窯内－



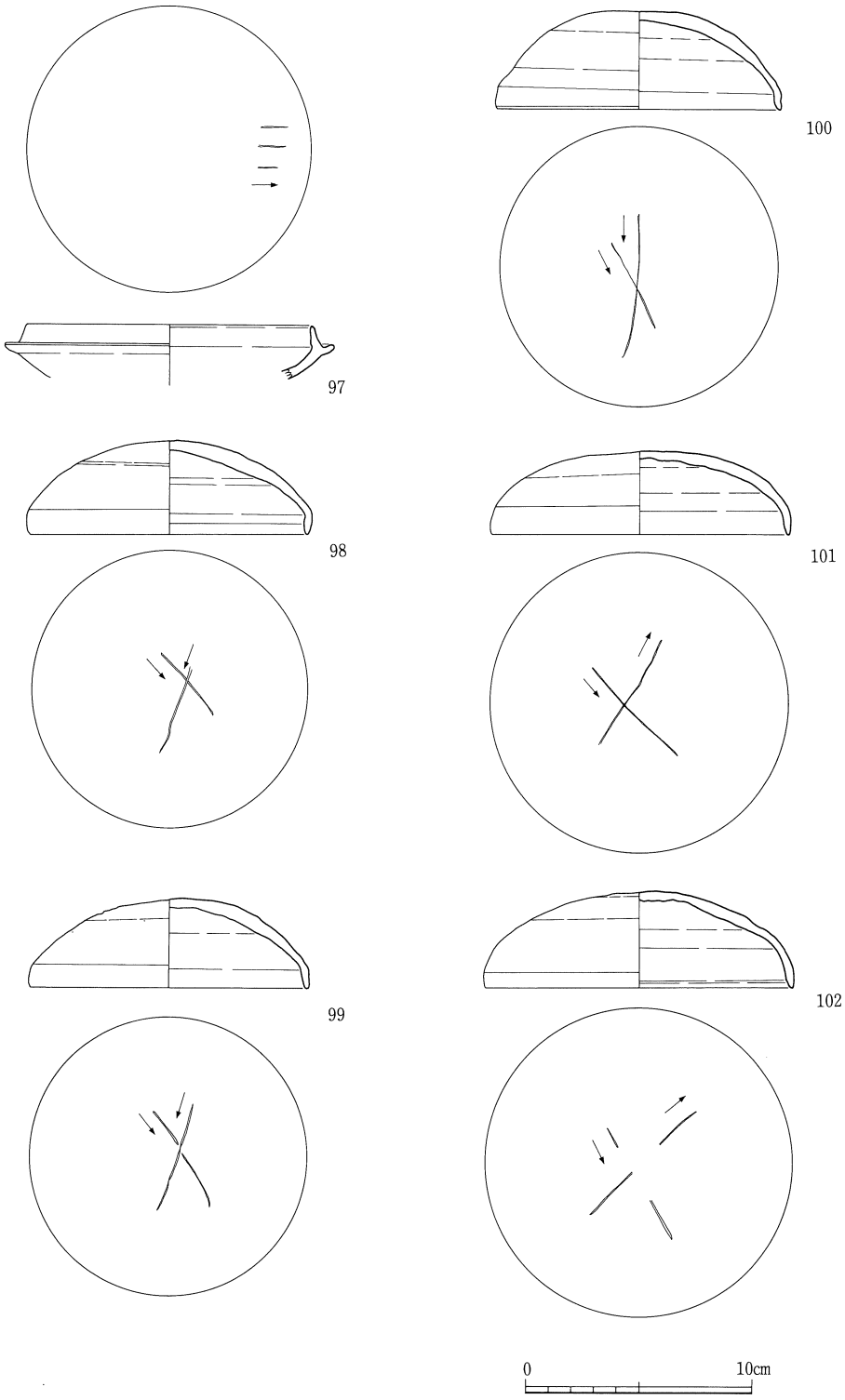
第67図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(12)　－窯内－



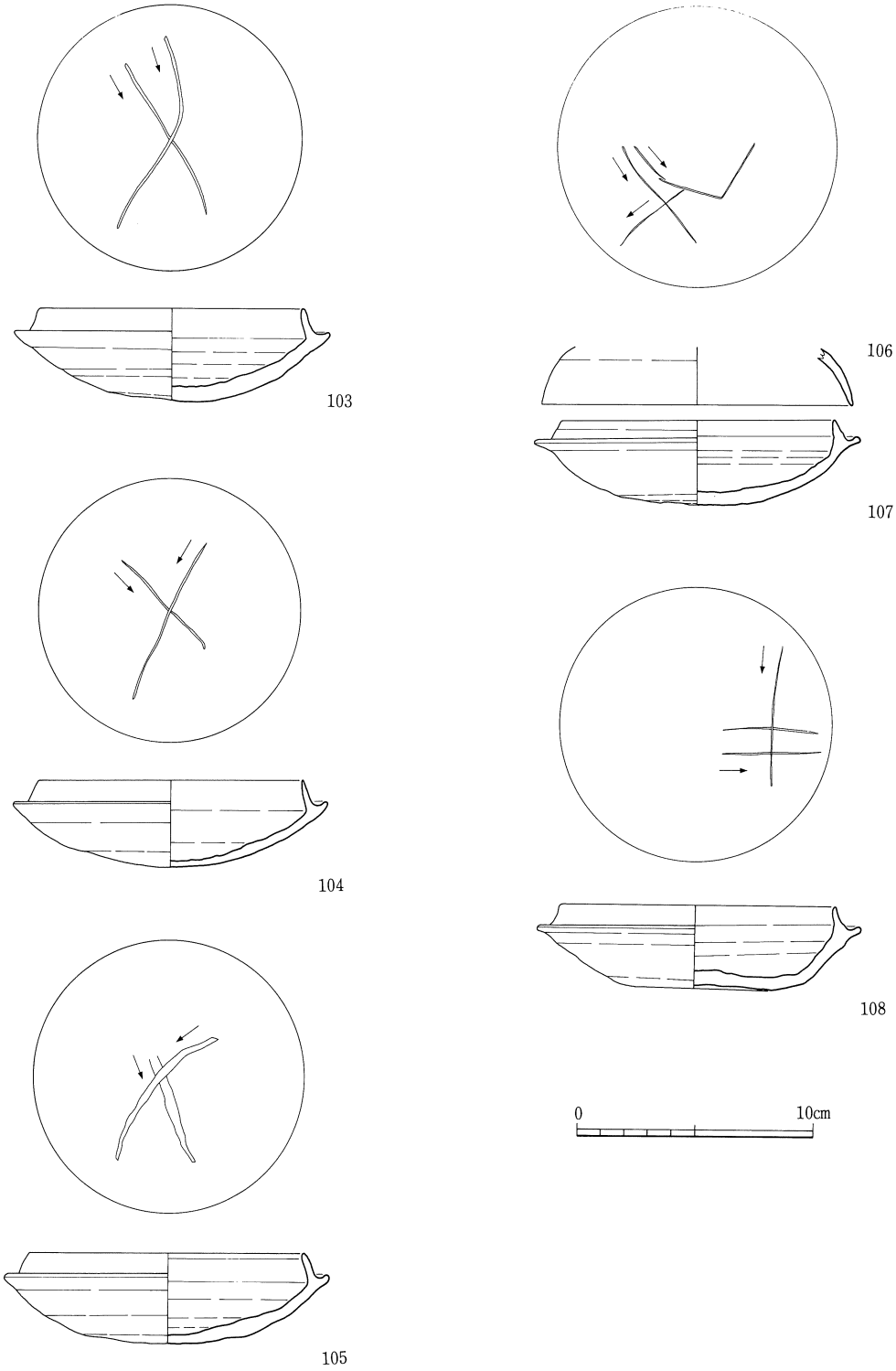
第68図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図⑬　－窯内－



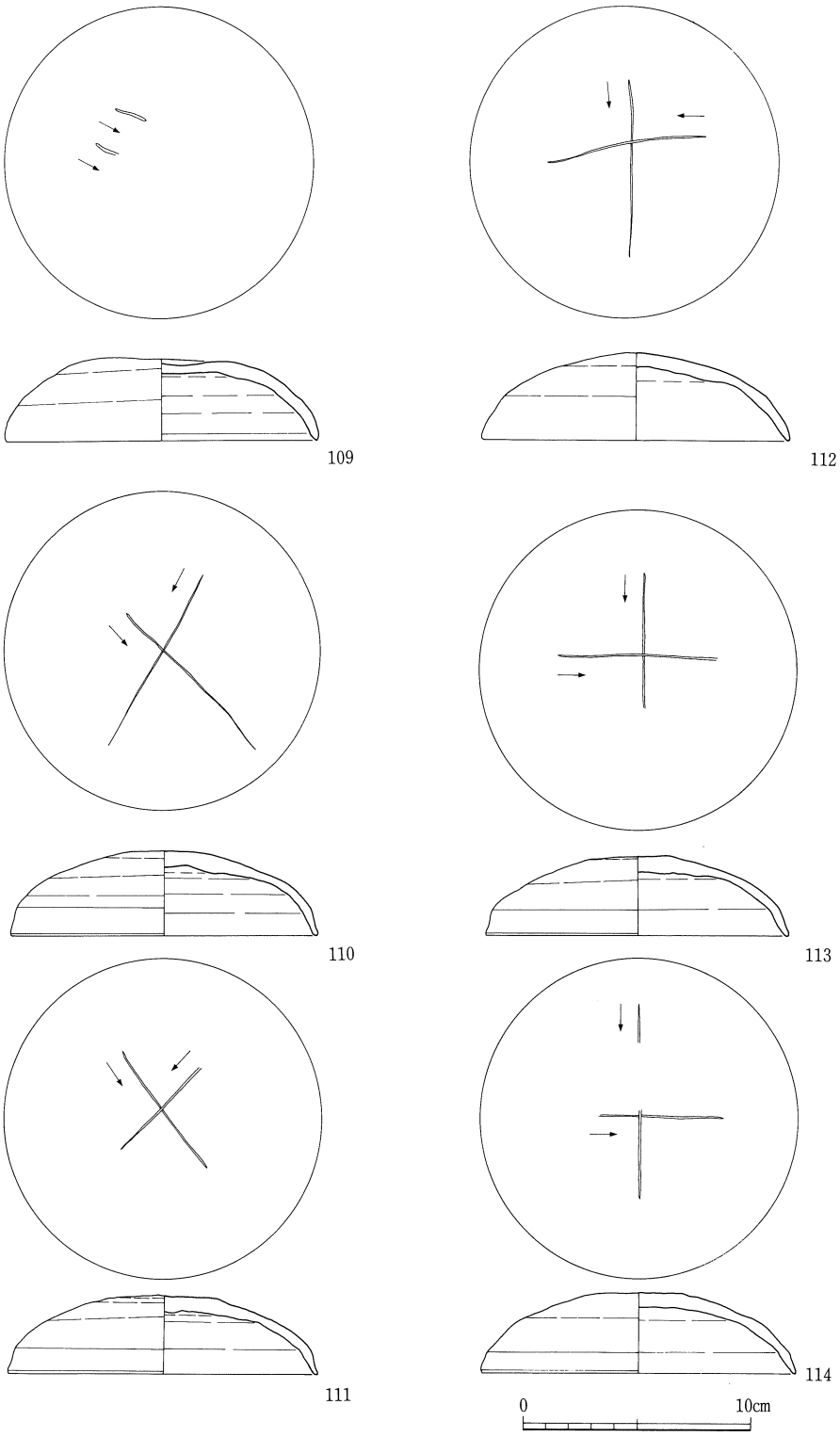
第69図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(14)　－窯内－



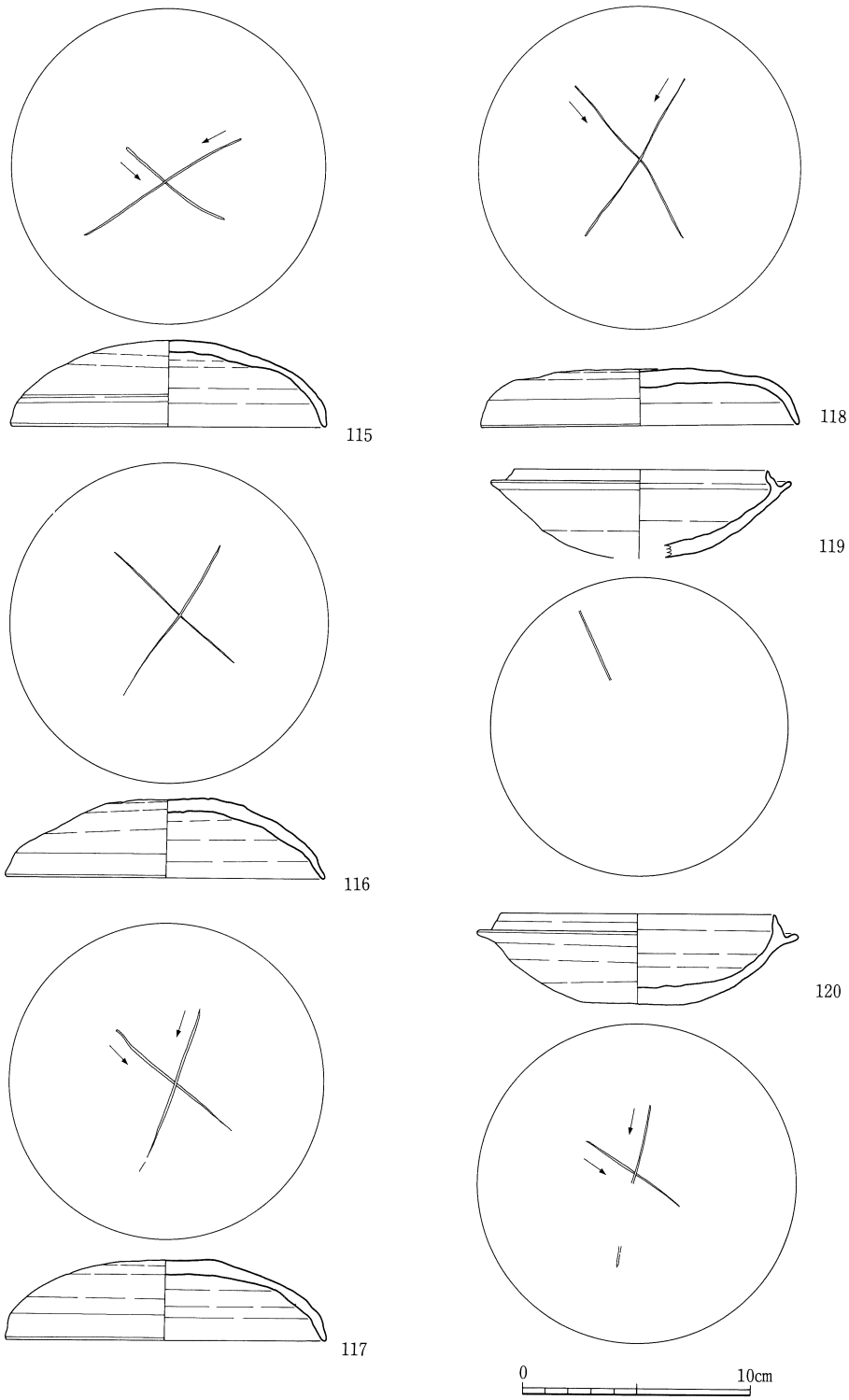
第70図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(15)　－窯内－



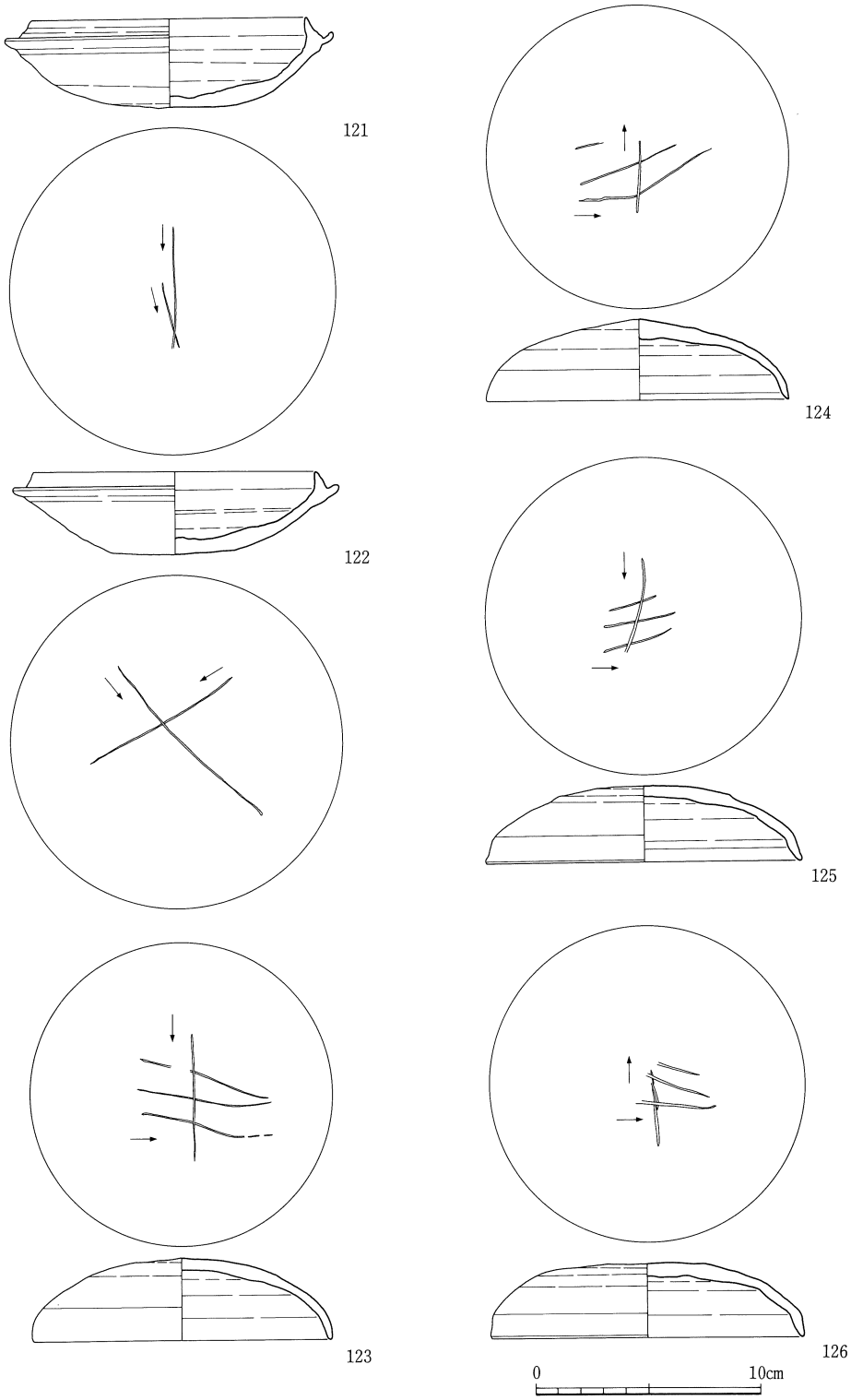
第71図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図⑯　－窯内－



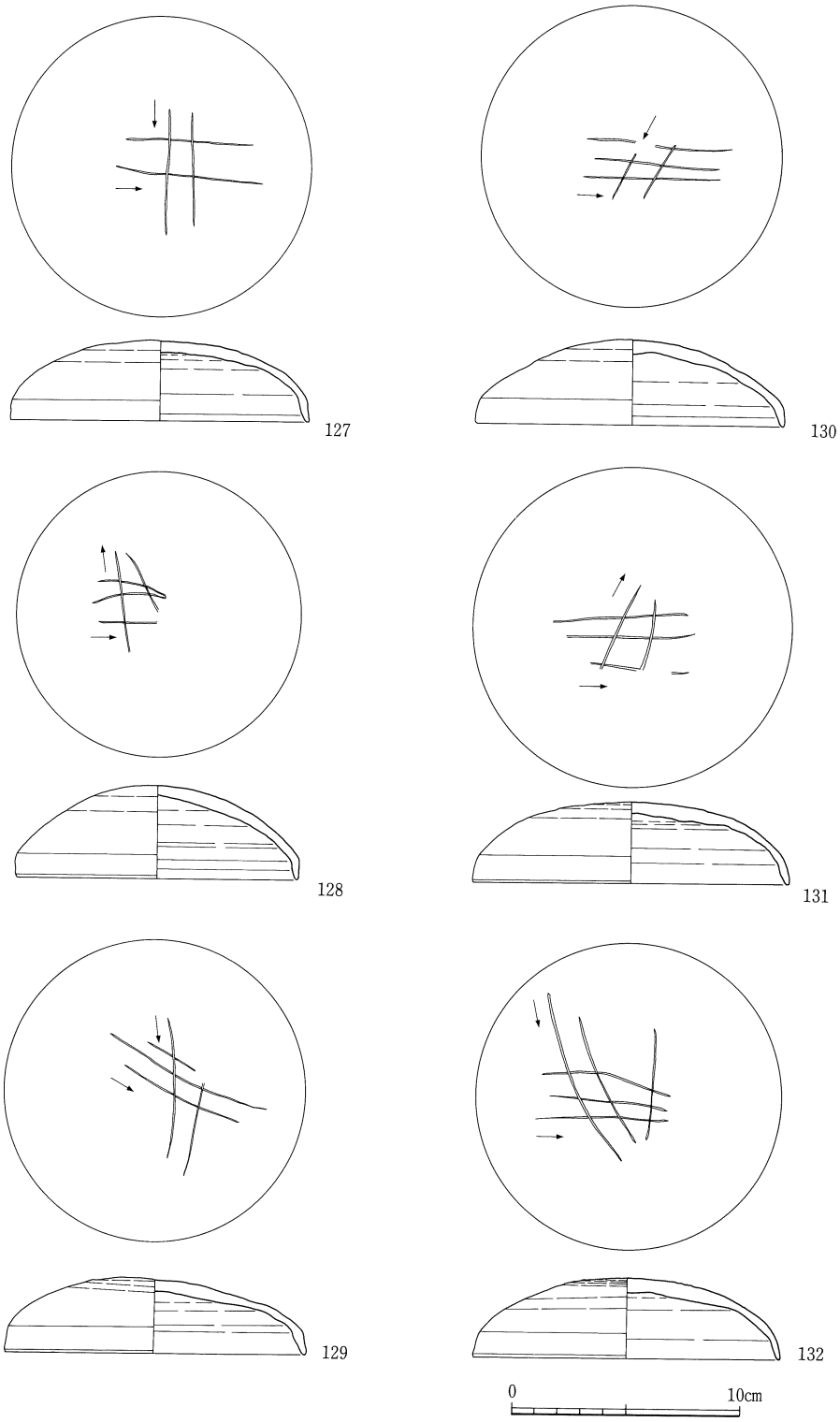
第72図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(17)　－窯内－



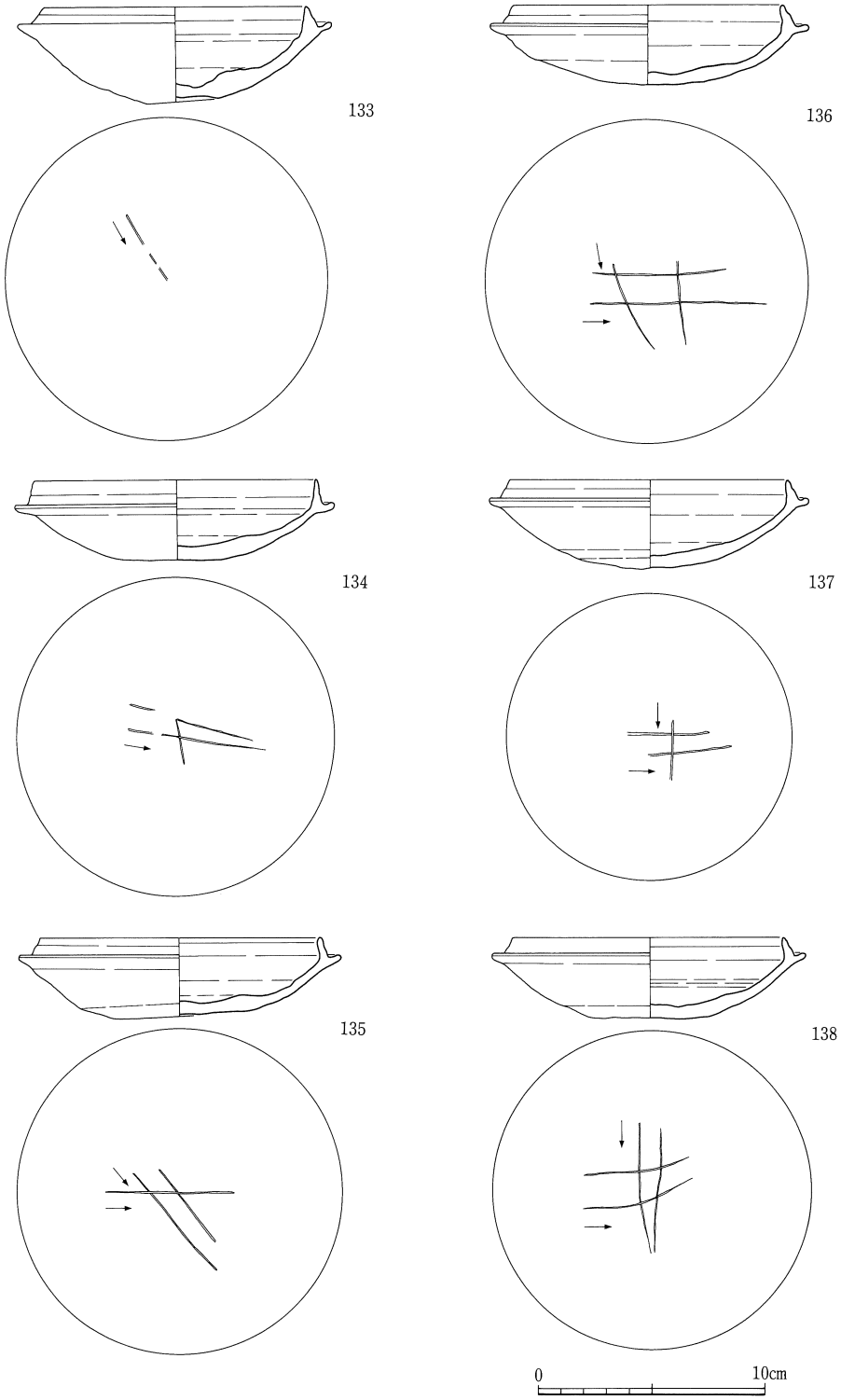
第73図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(18)　－窯内－



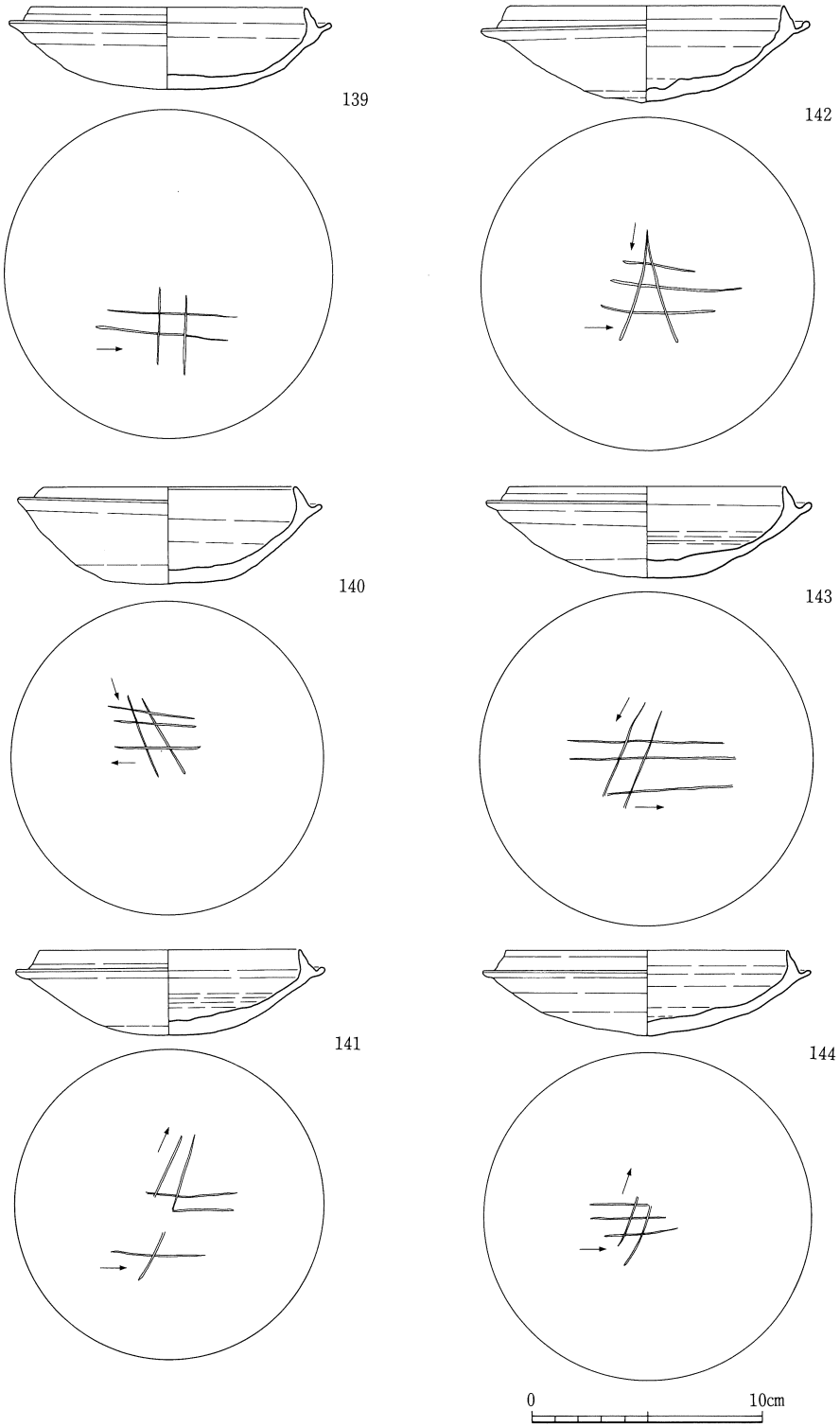
第74図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図⑲　－窯内－



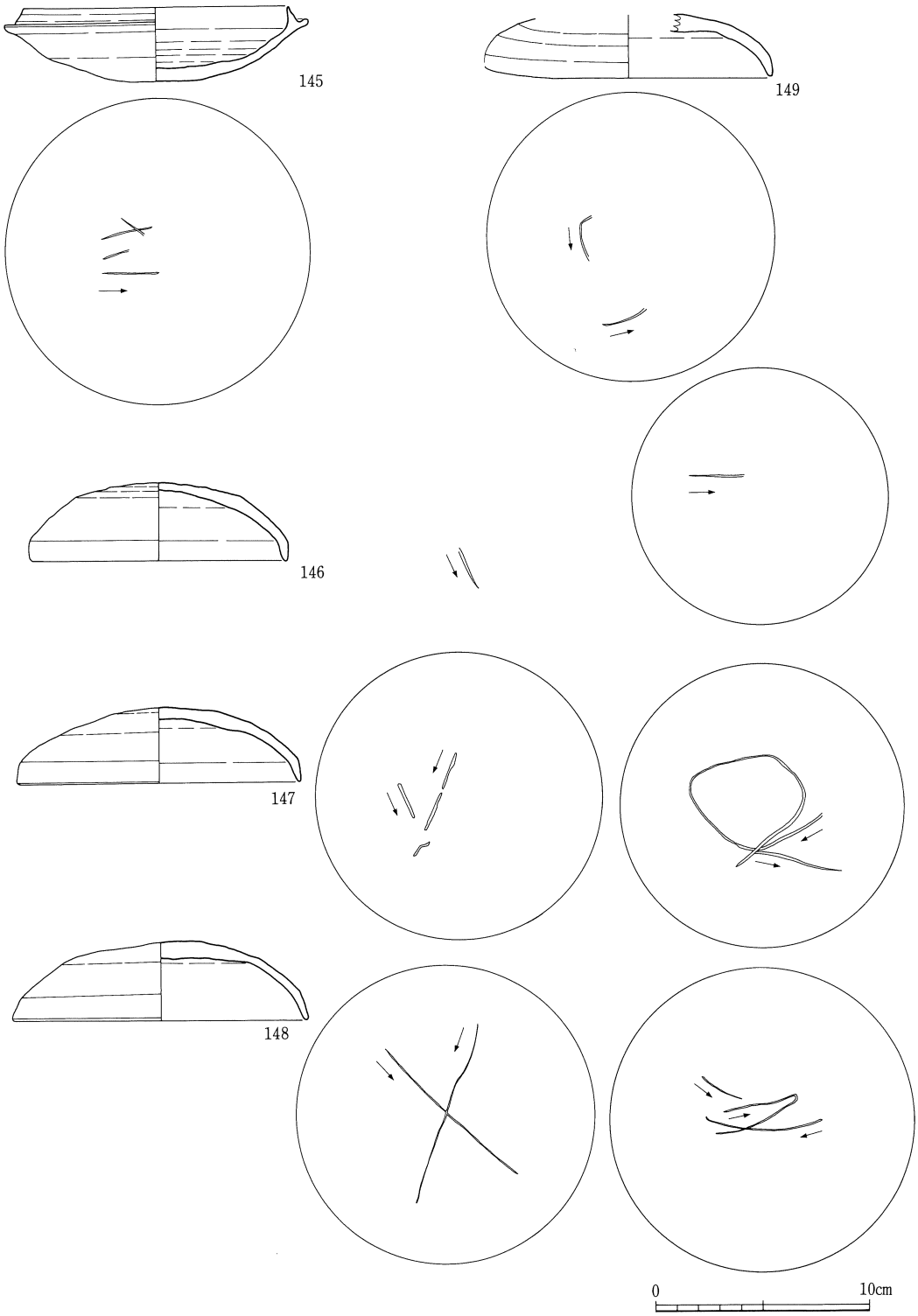
第75図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図⑳　－窯内－



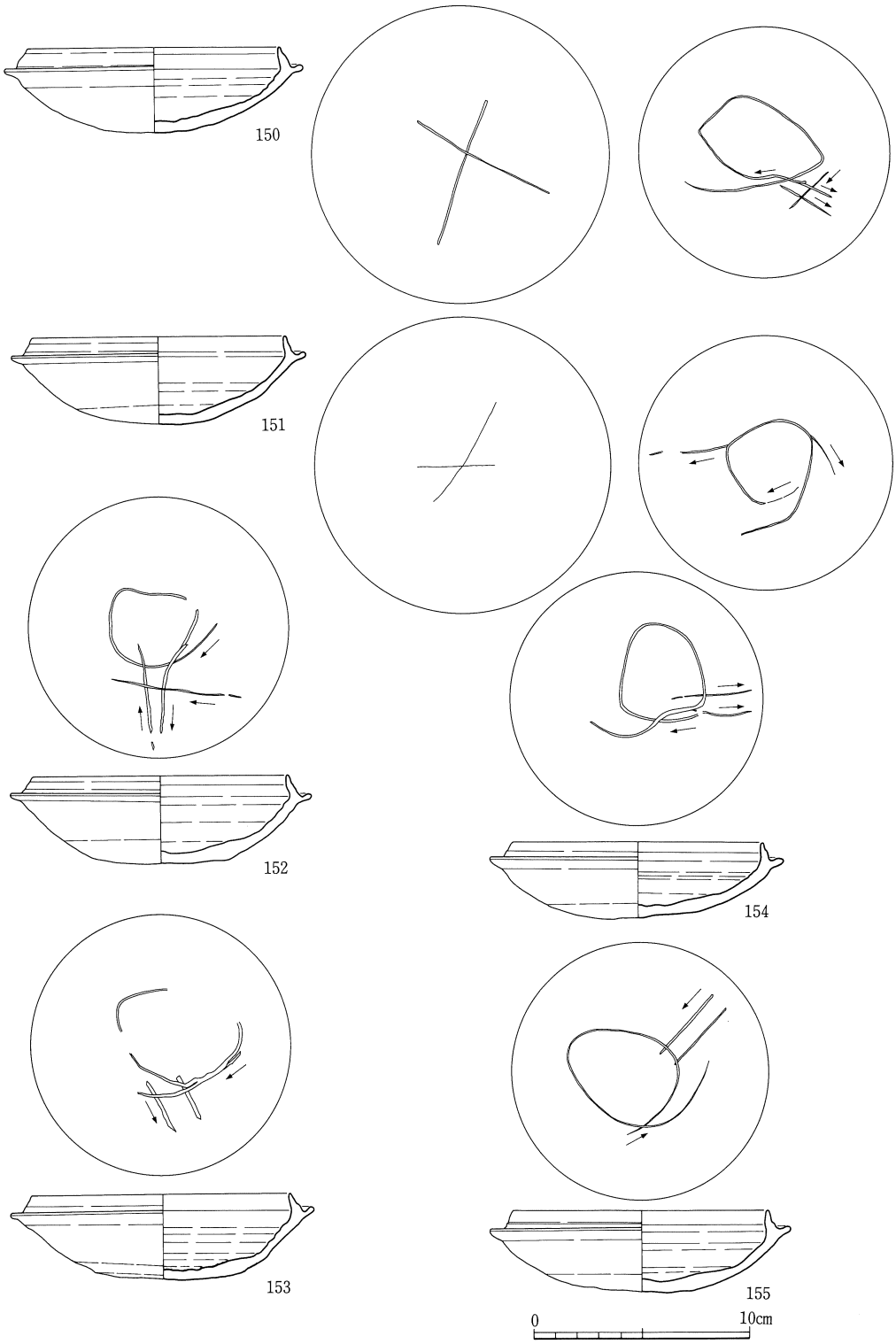
第76図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(21)　－窯内－



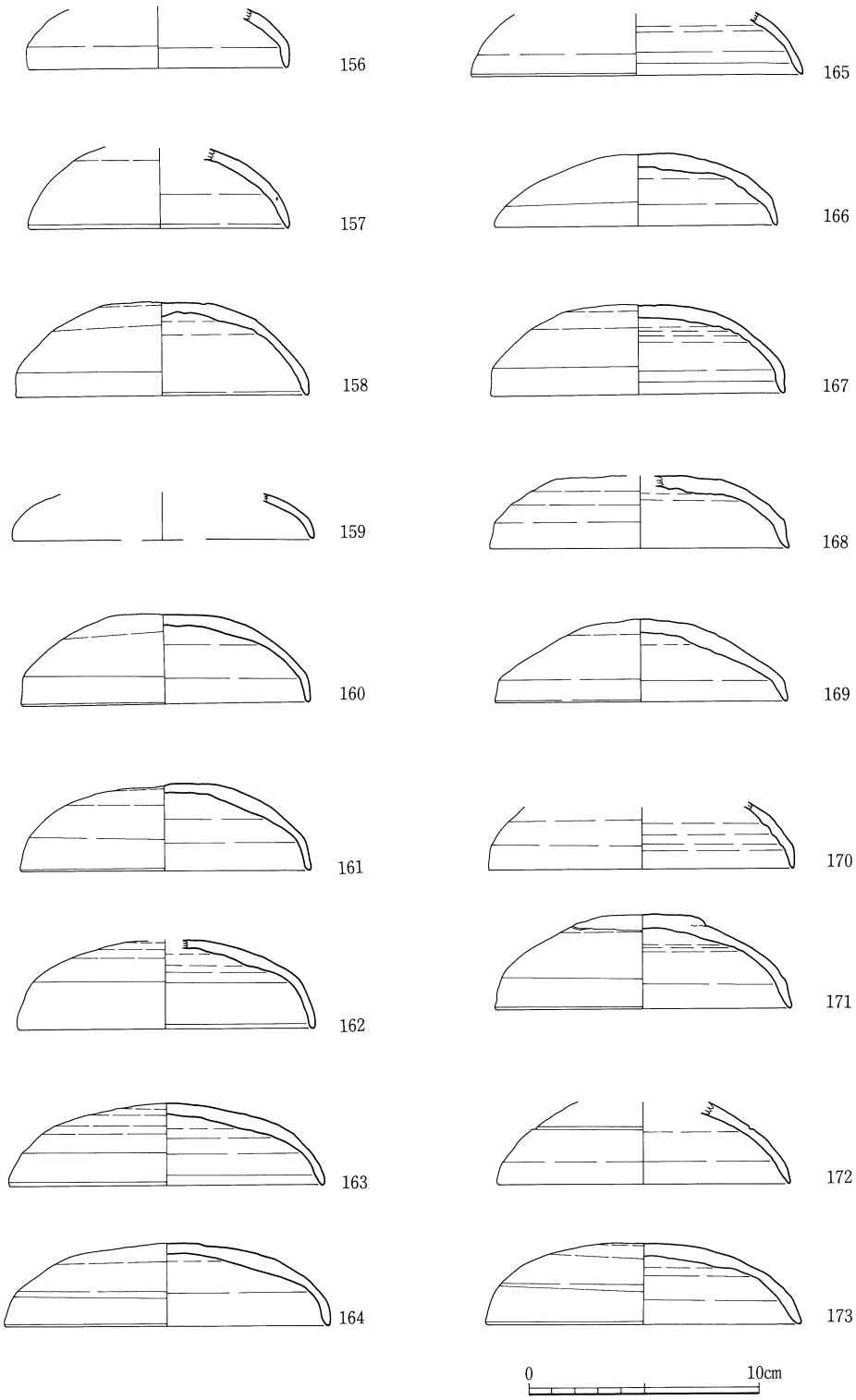
第77図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(22)　－窯内－



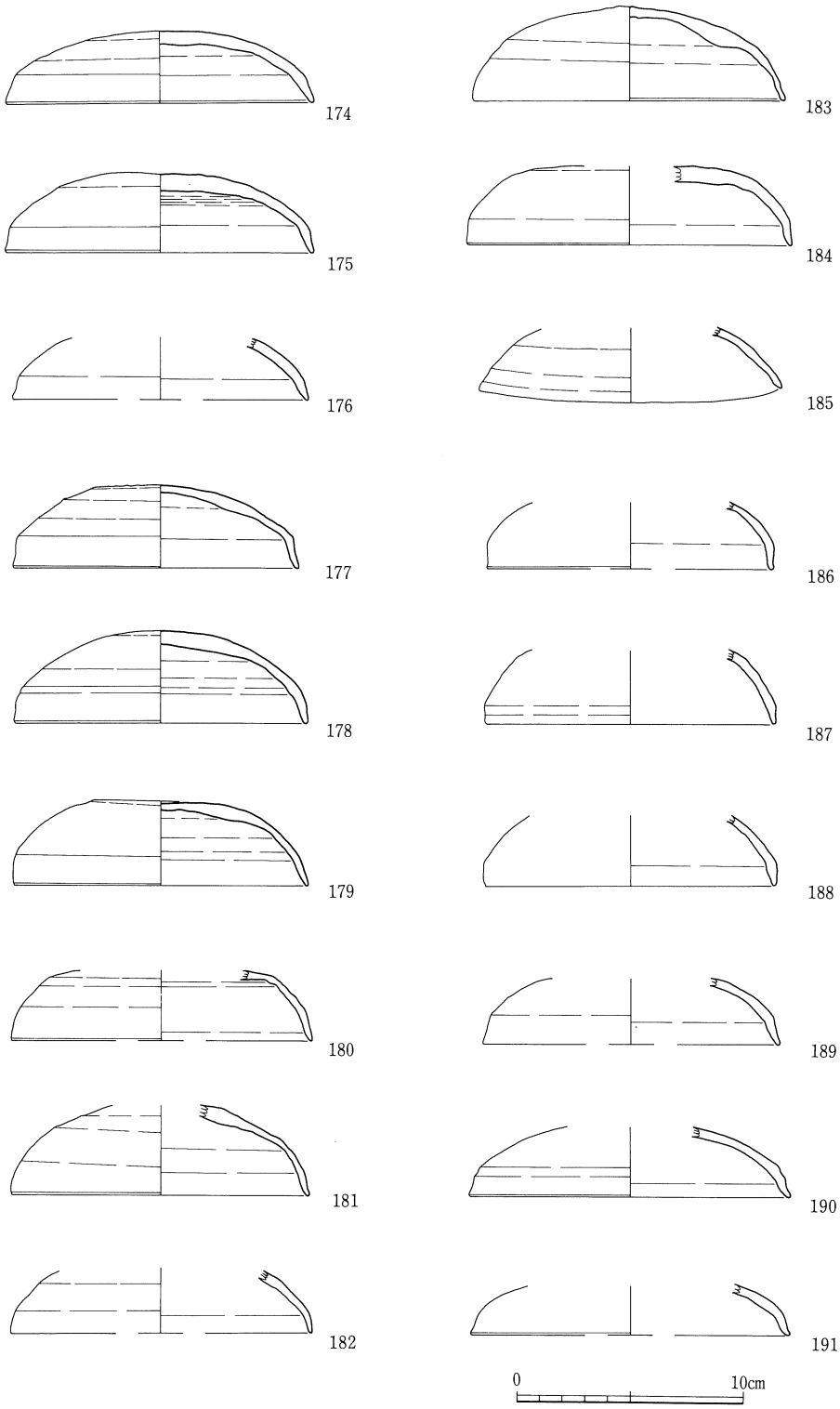
第78図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(23)　－窯内－



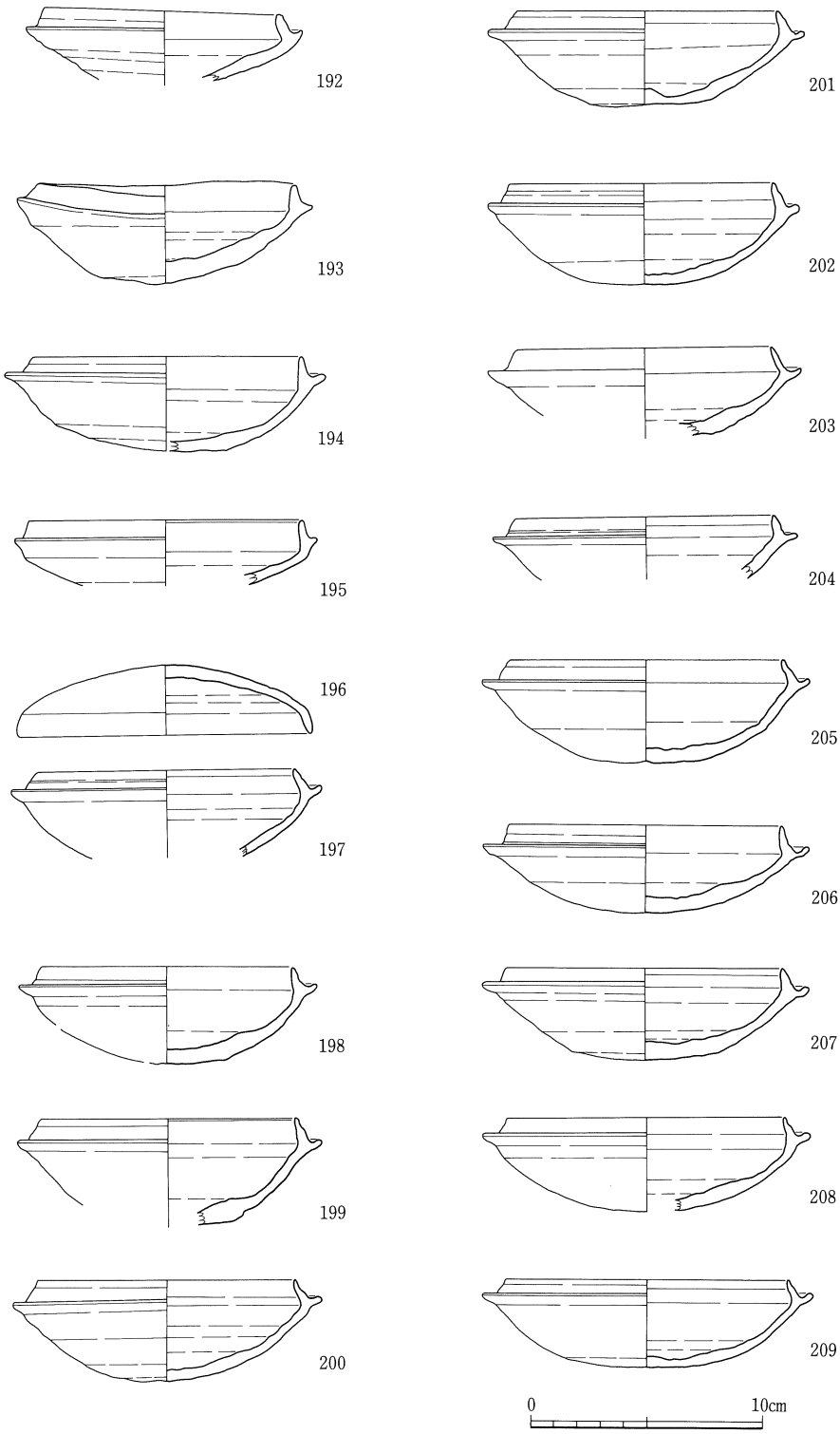
第79図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(24)　－窯内－



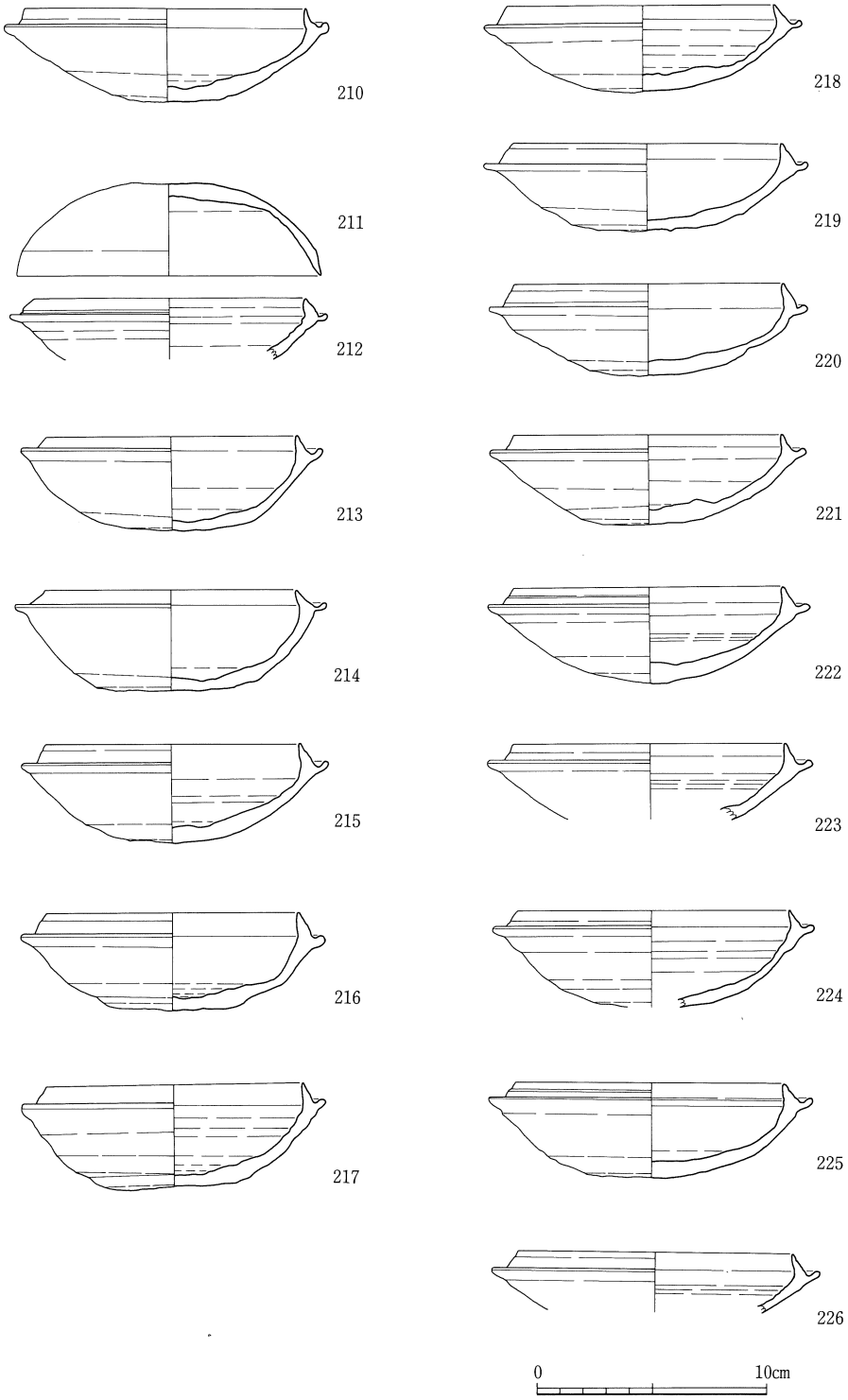
第80図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(25)　－窯内－



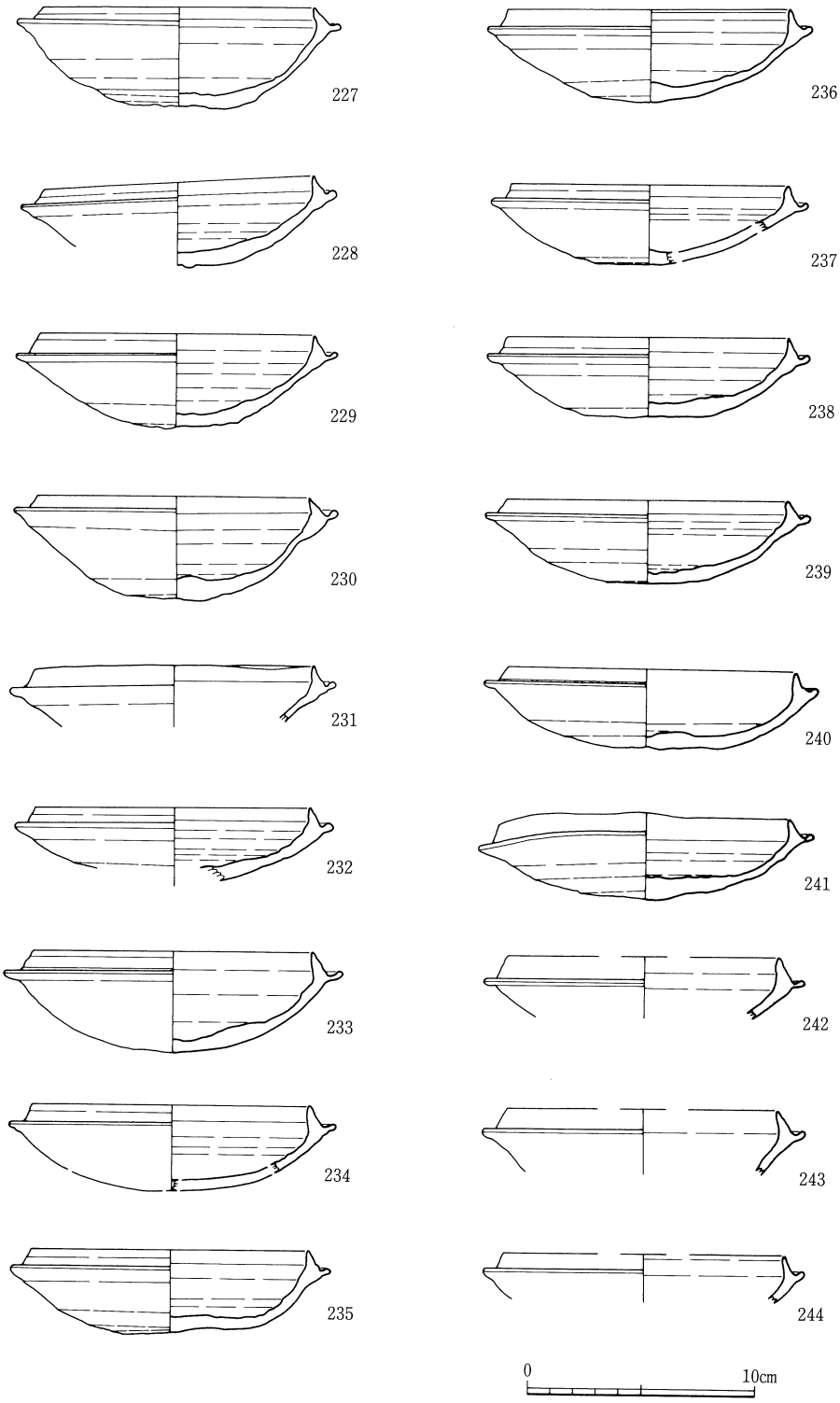
第81図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(26)　－窯内－



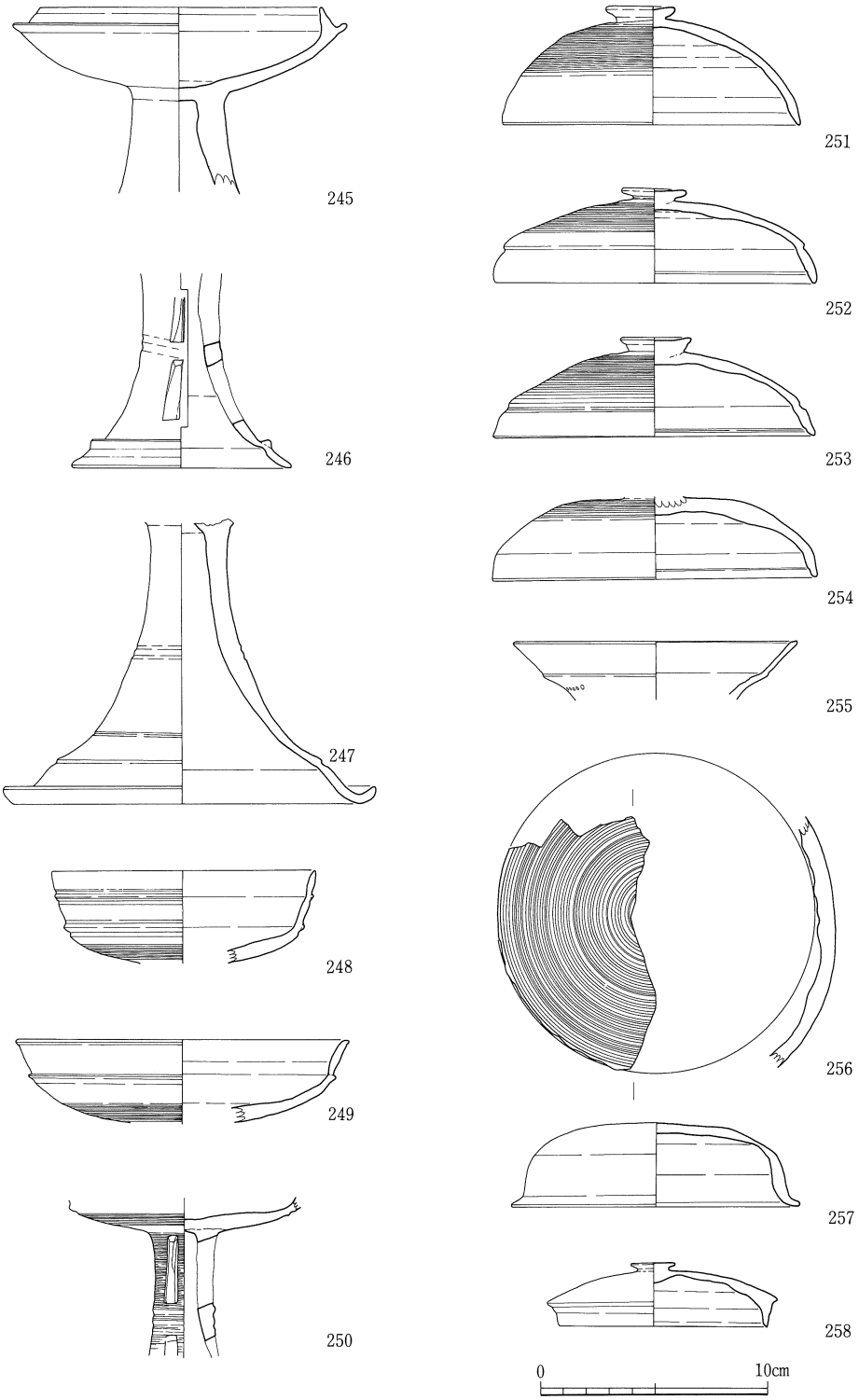
第82図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(27)　－窯内－



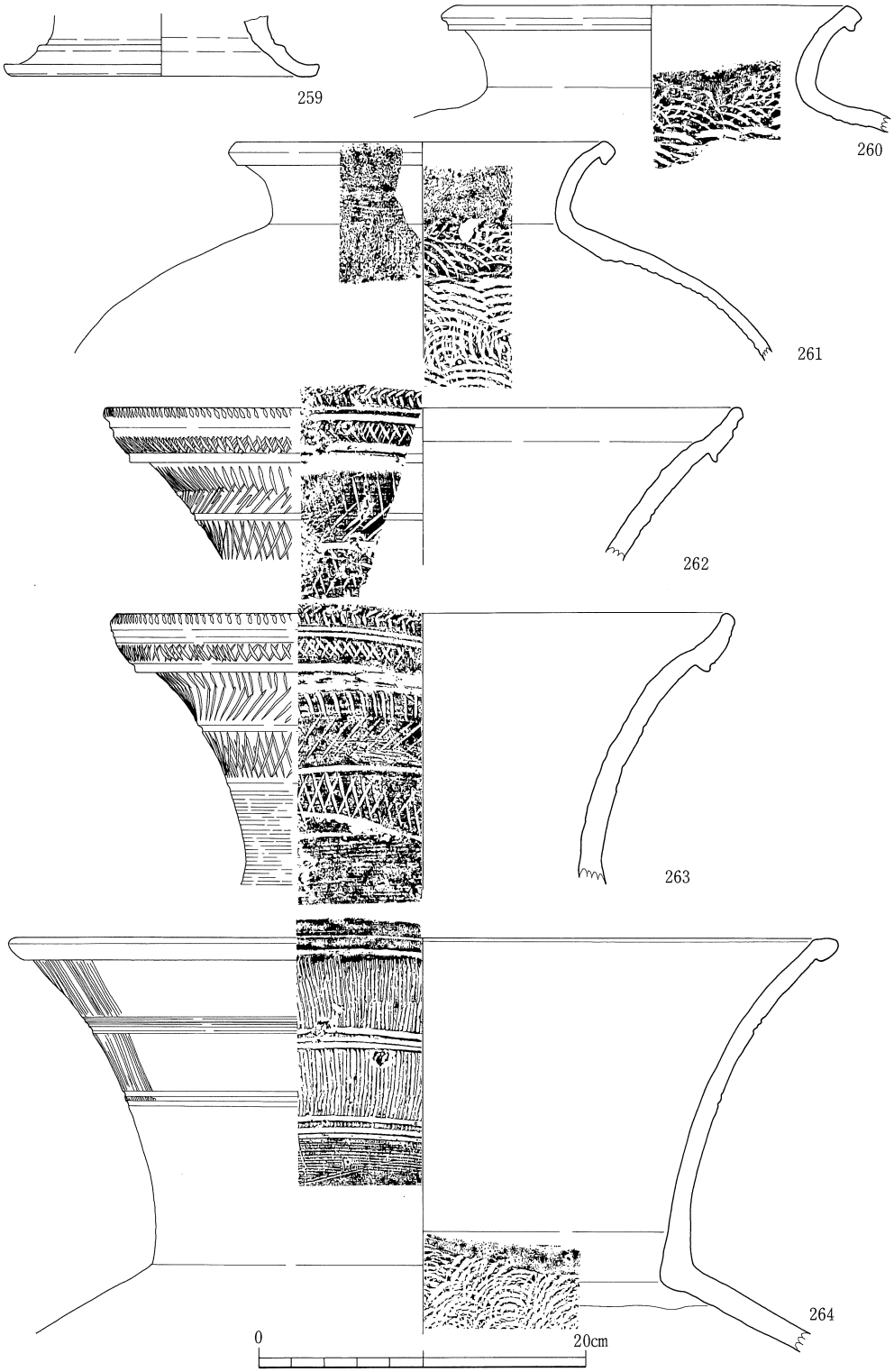
第83図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(28)　－窯内－



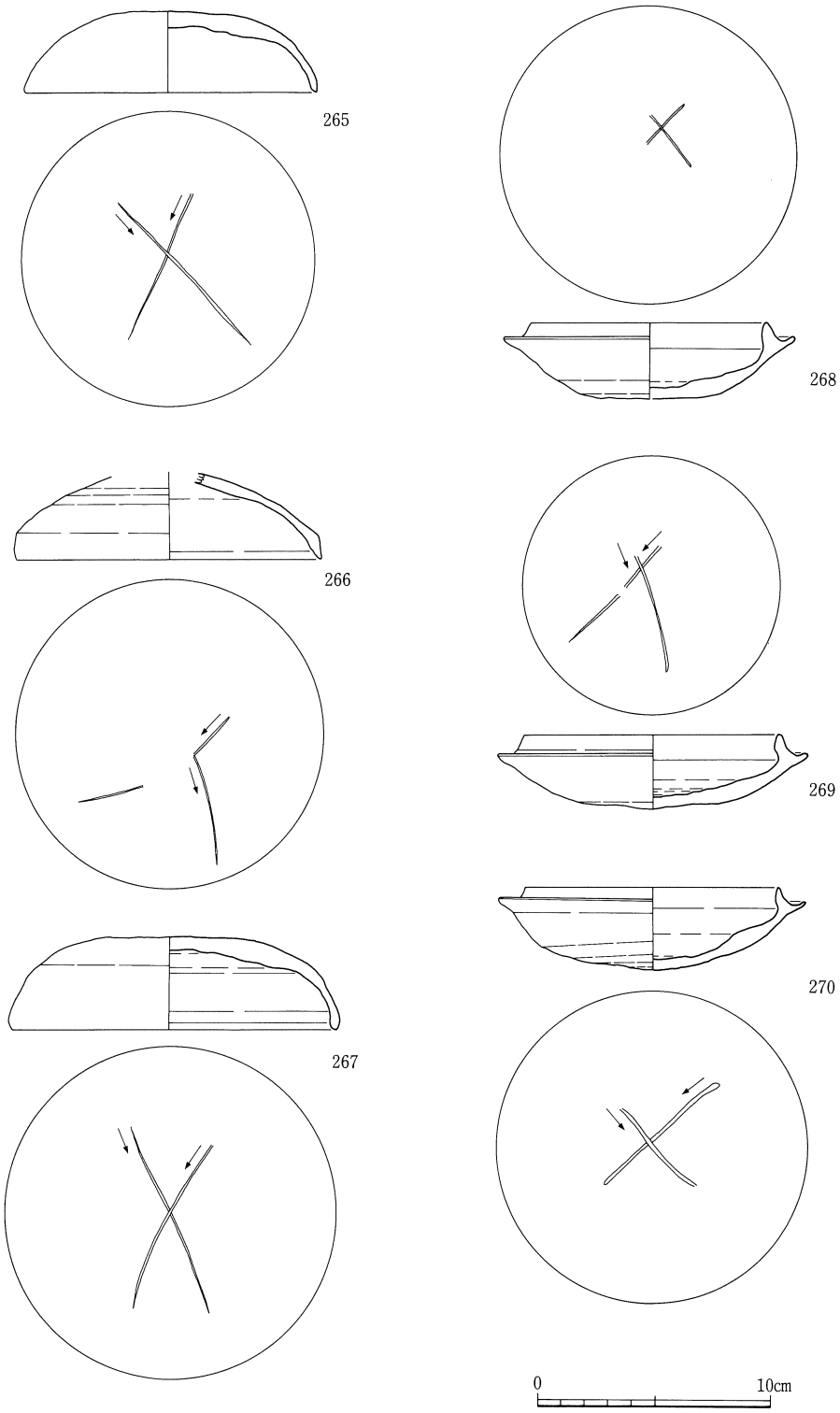
第84図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(29)　－窯内－



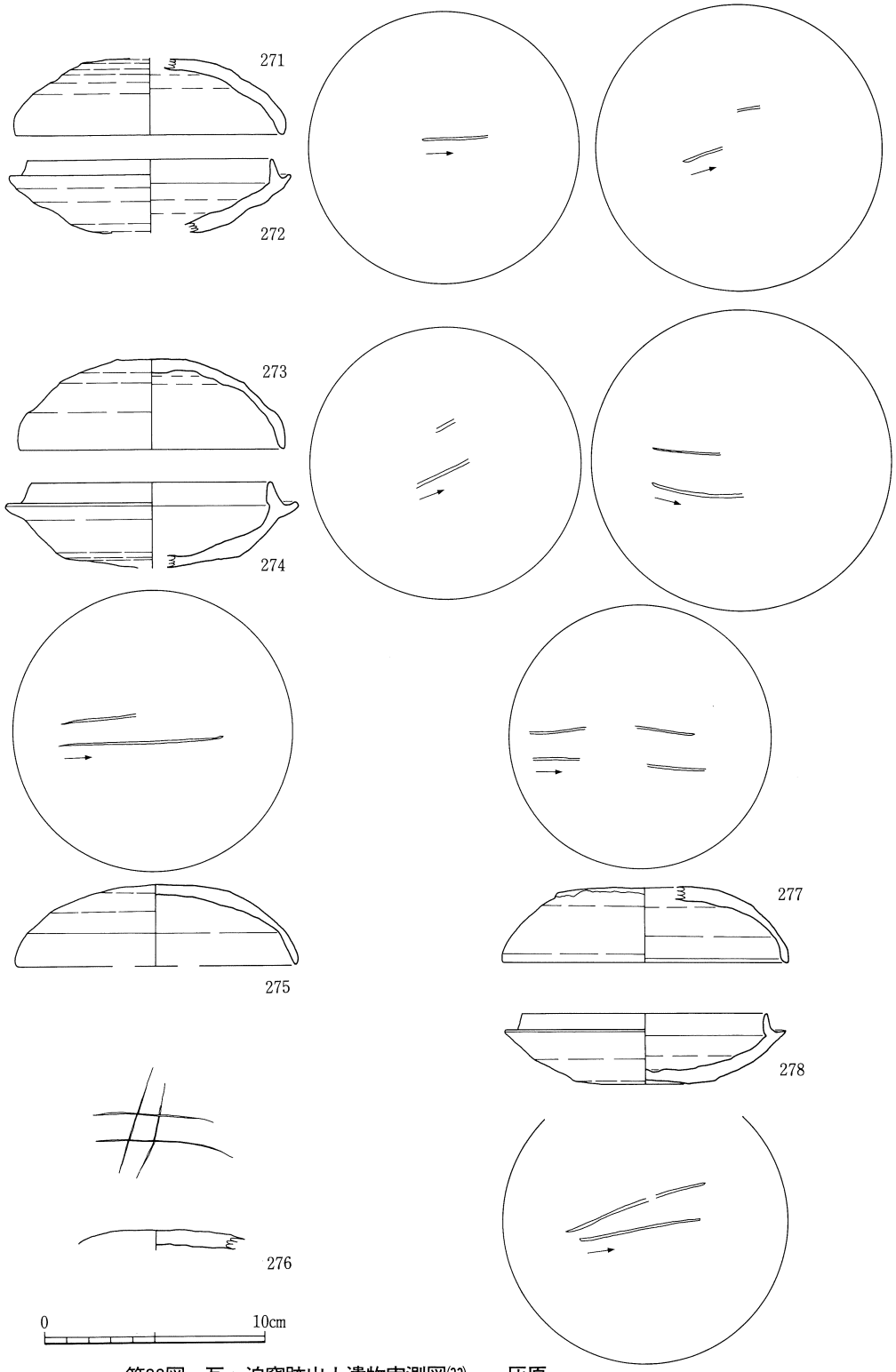
第85図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(30)　－窯内－



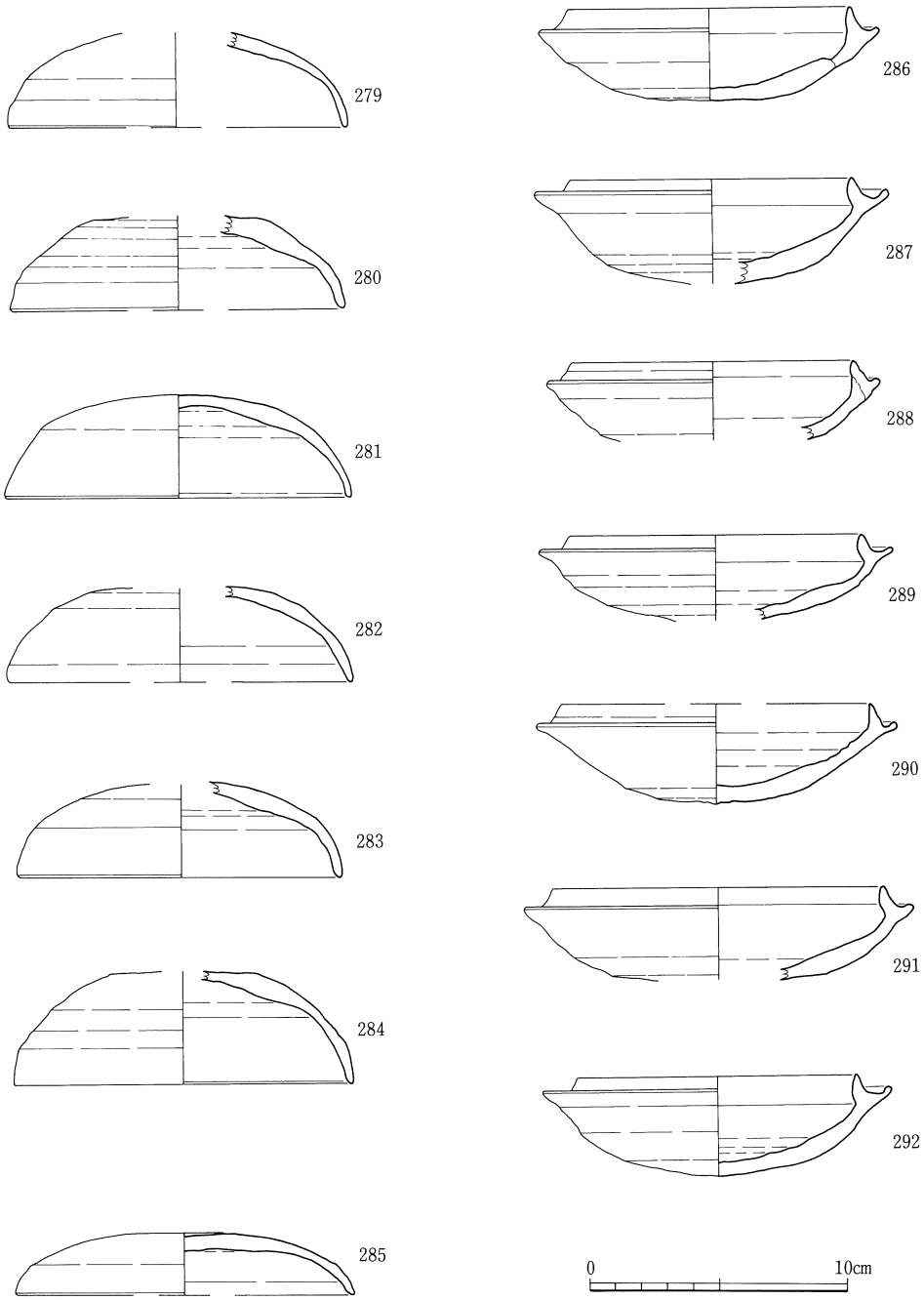
第86図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(31)　－窯内－



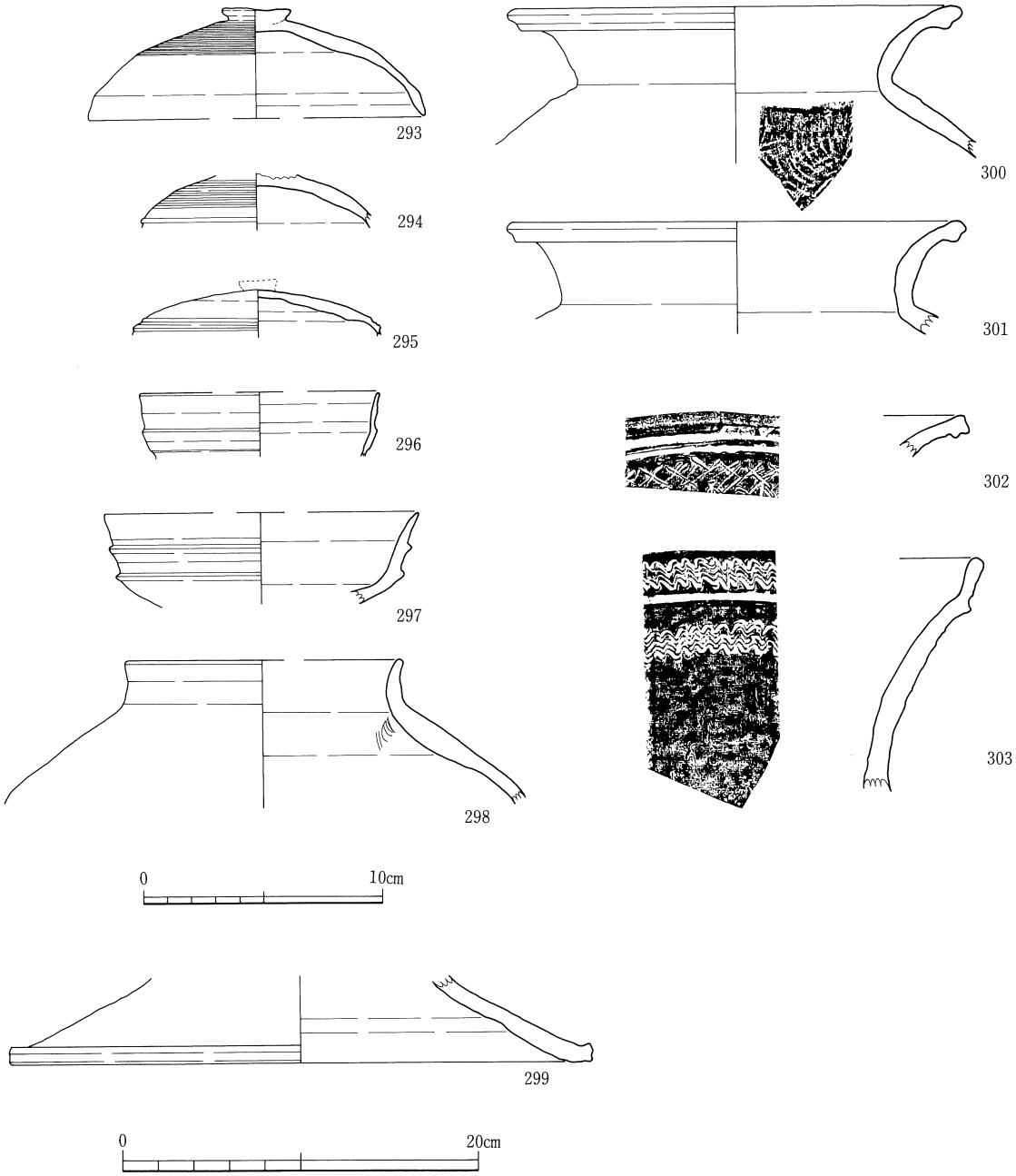
第87図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(32)　－灰原－



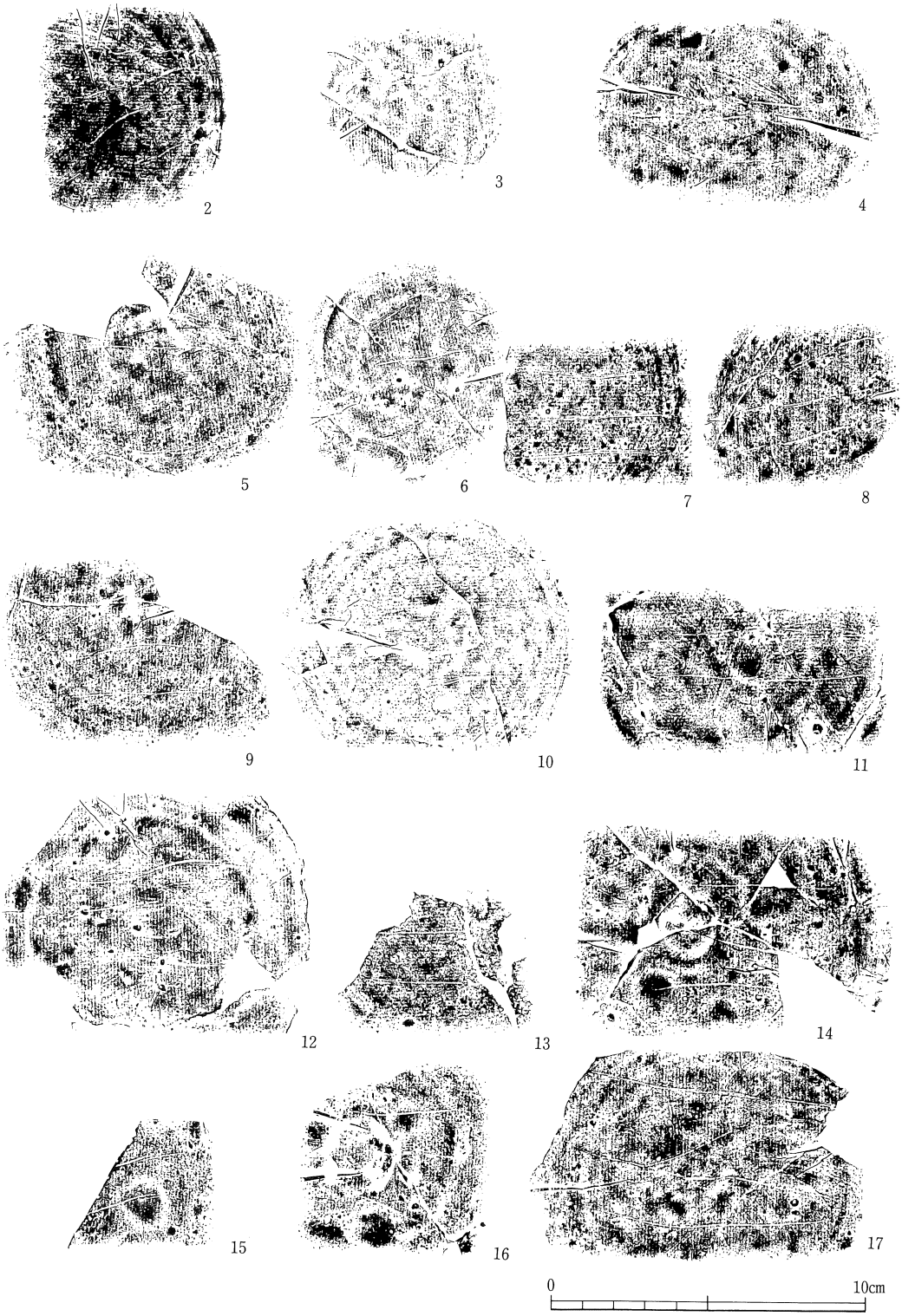
第88図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(33)　－灰原－



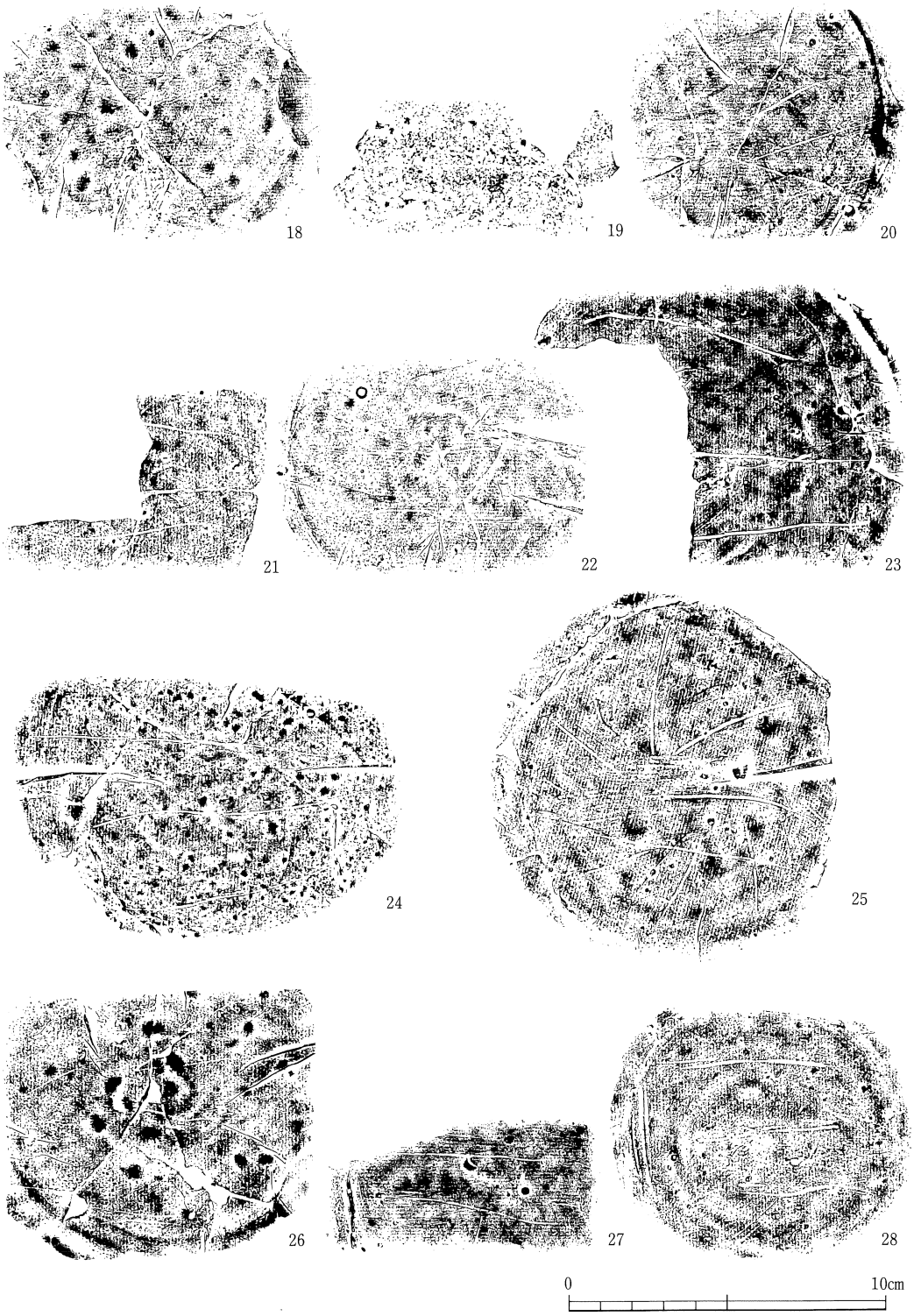
第89図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(34)　－灰原－



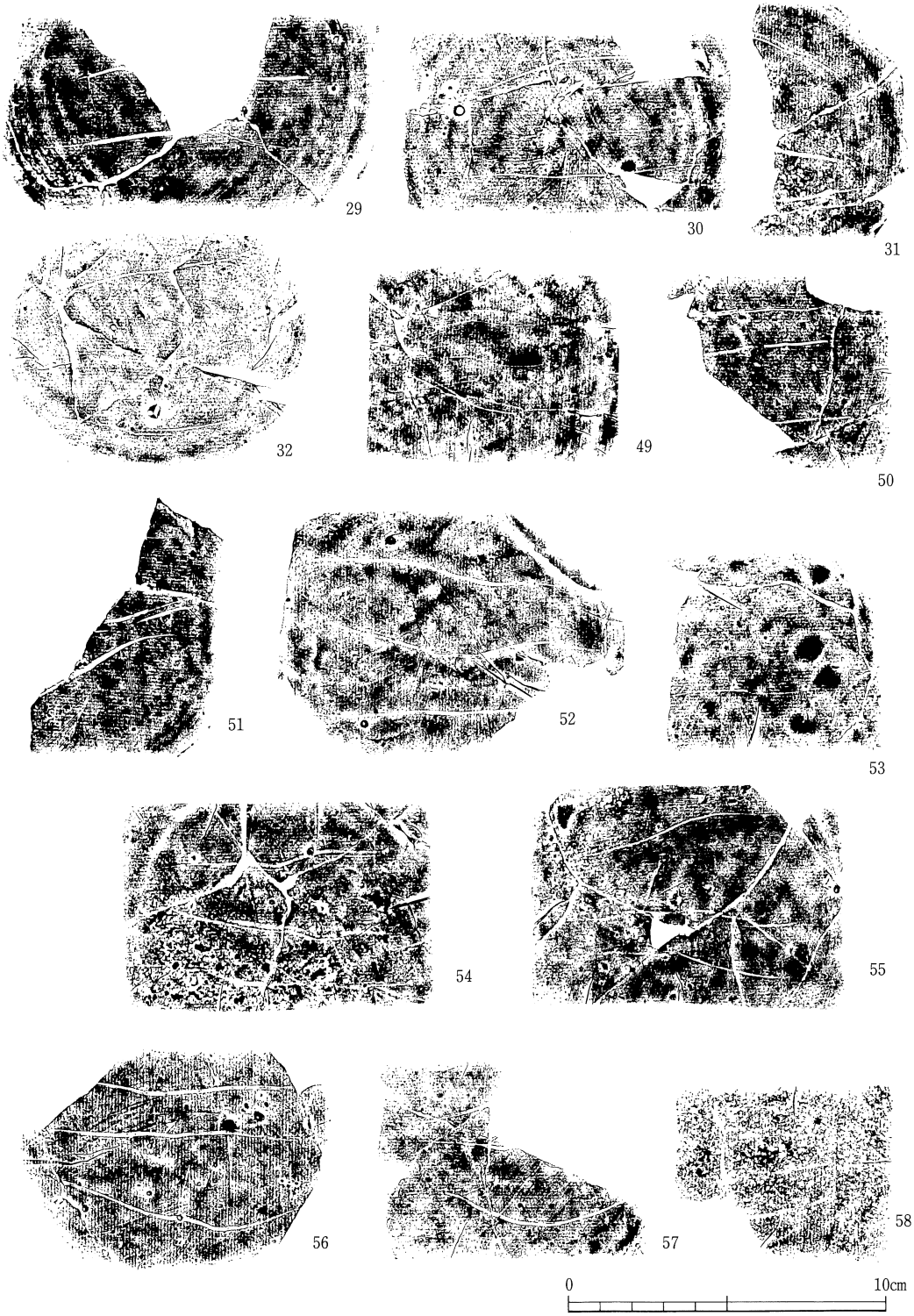
第90図　瓦ヶ迫窯跡出土遺物実測図(35)　－灰原－



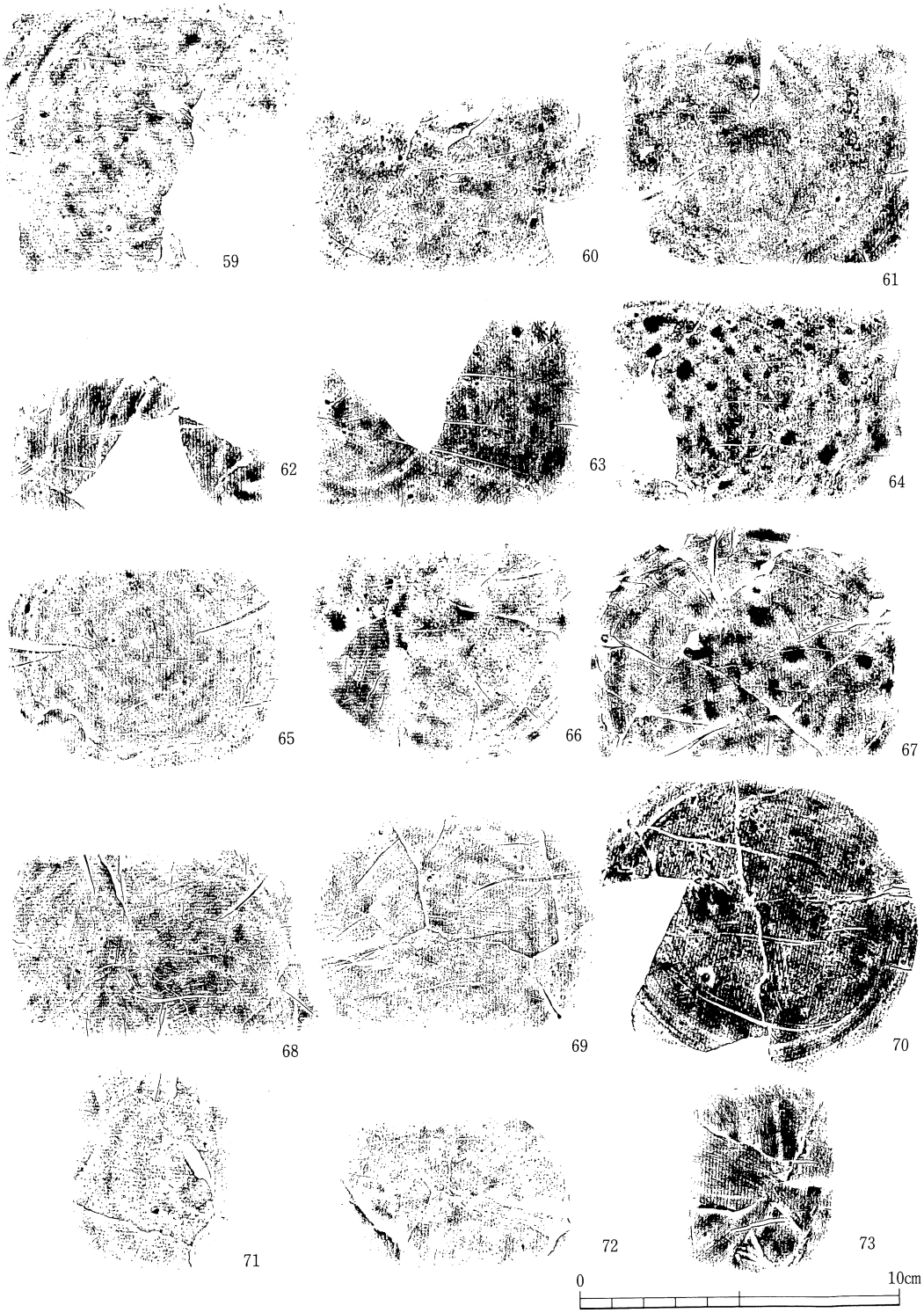
第91図　杯ヘラ記号拓影集成図(1)



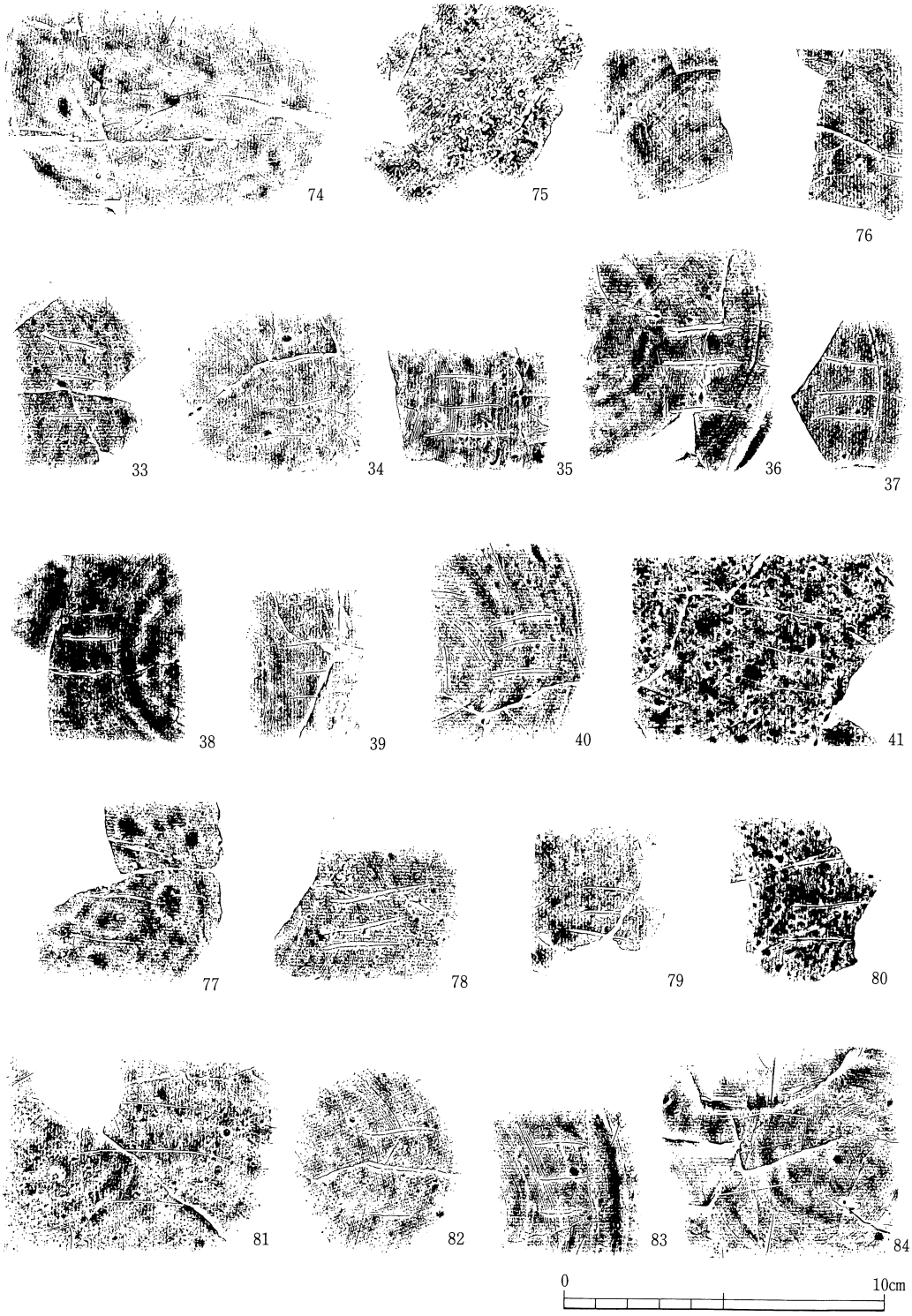
第92図　杯ヘラ記号拓影集成図(2)



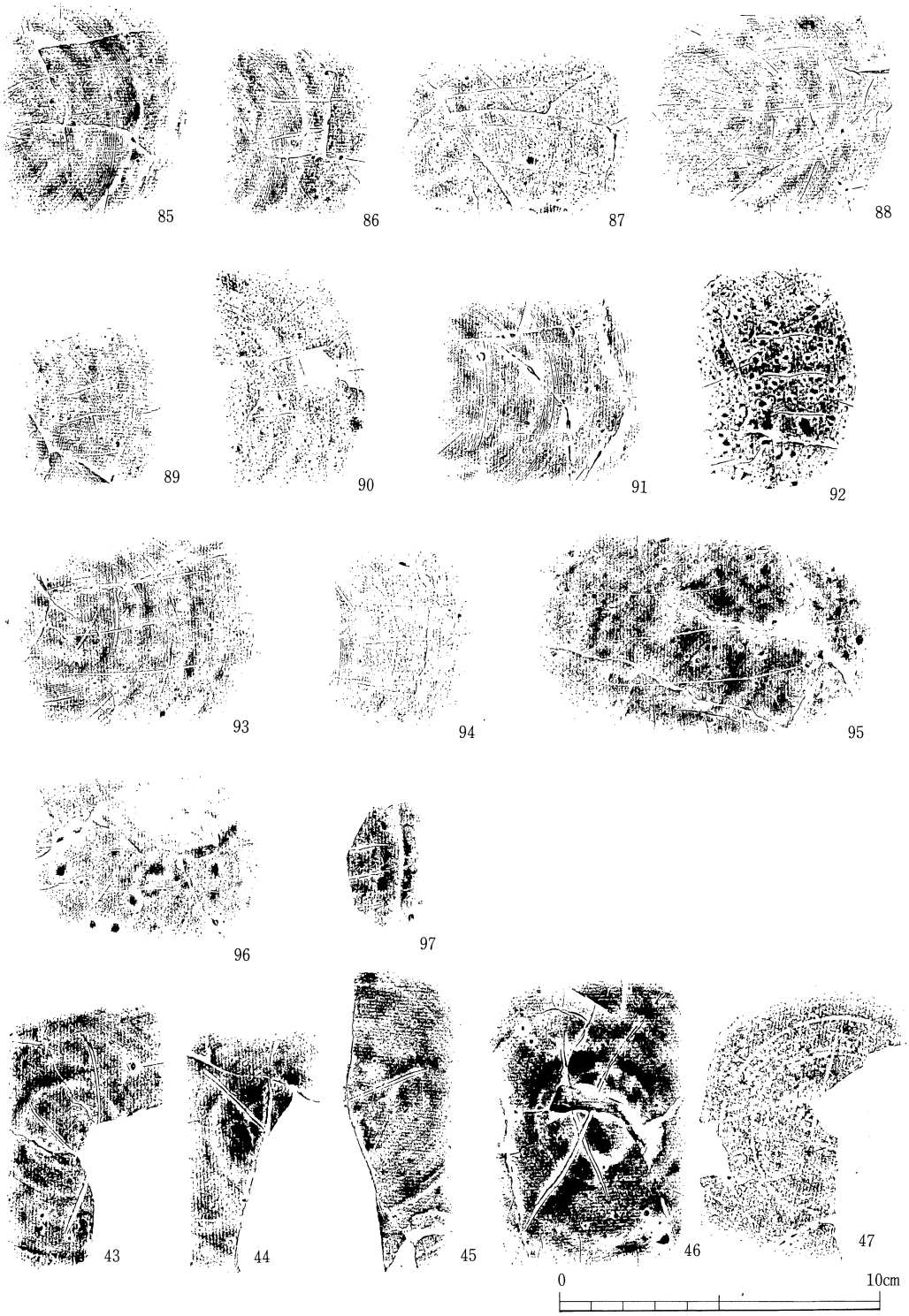
第93図　杯ヘラ記号拓影集成図(3)



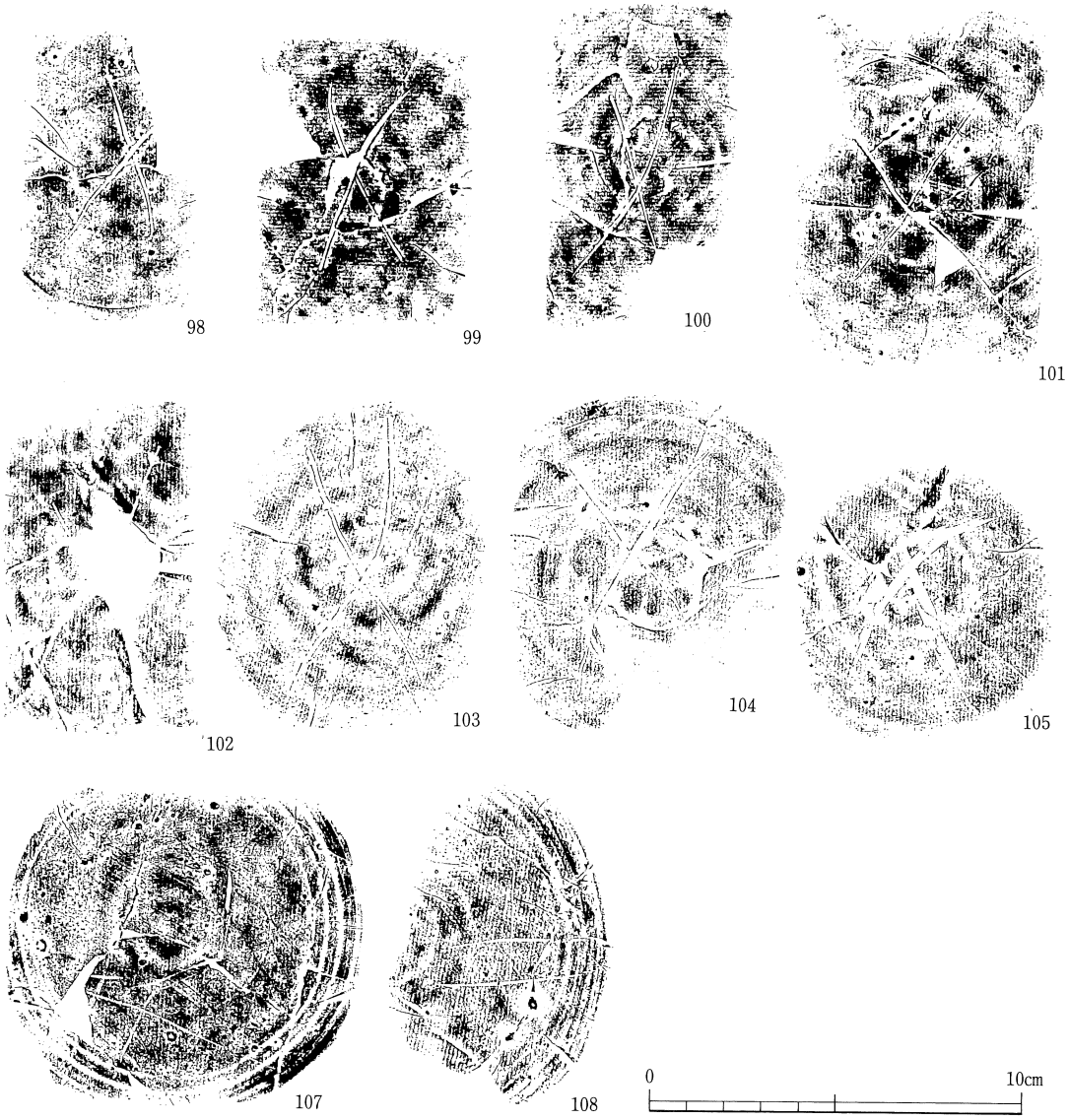
第94図　杯ヘラ記号拓影集成図(4)



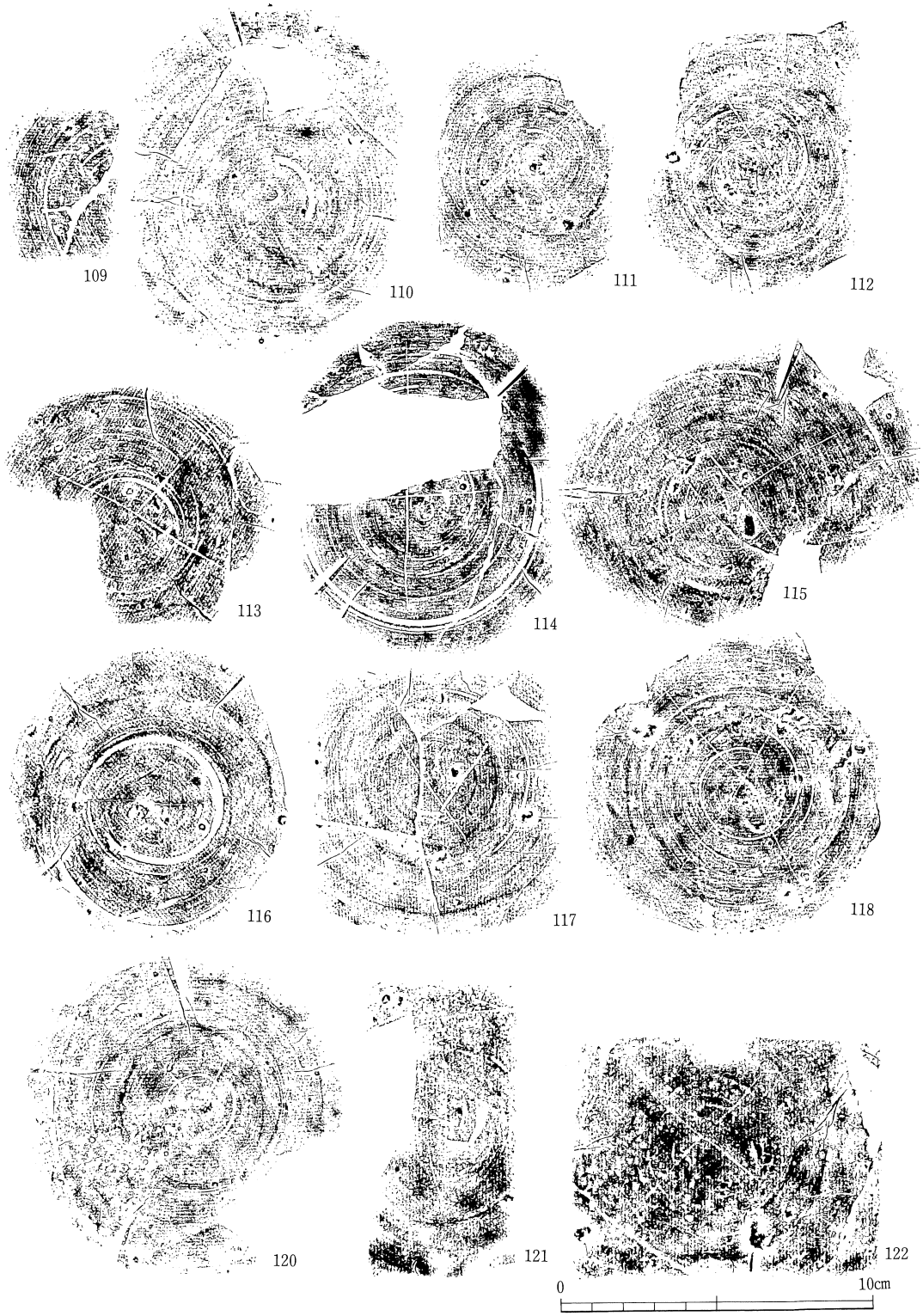
第95図　杯ヘラ記号拓影集成図(5)



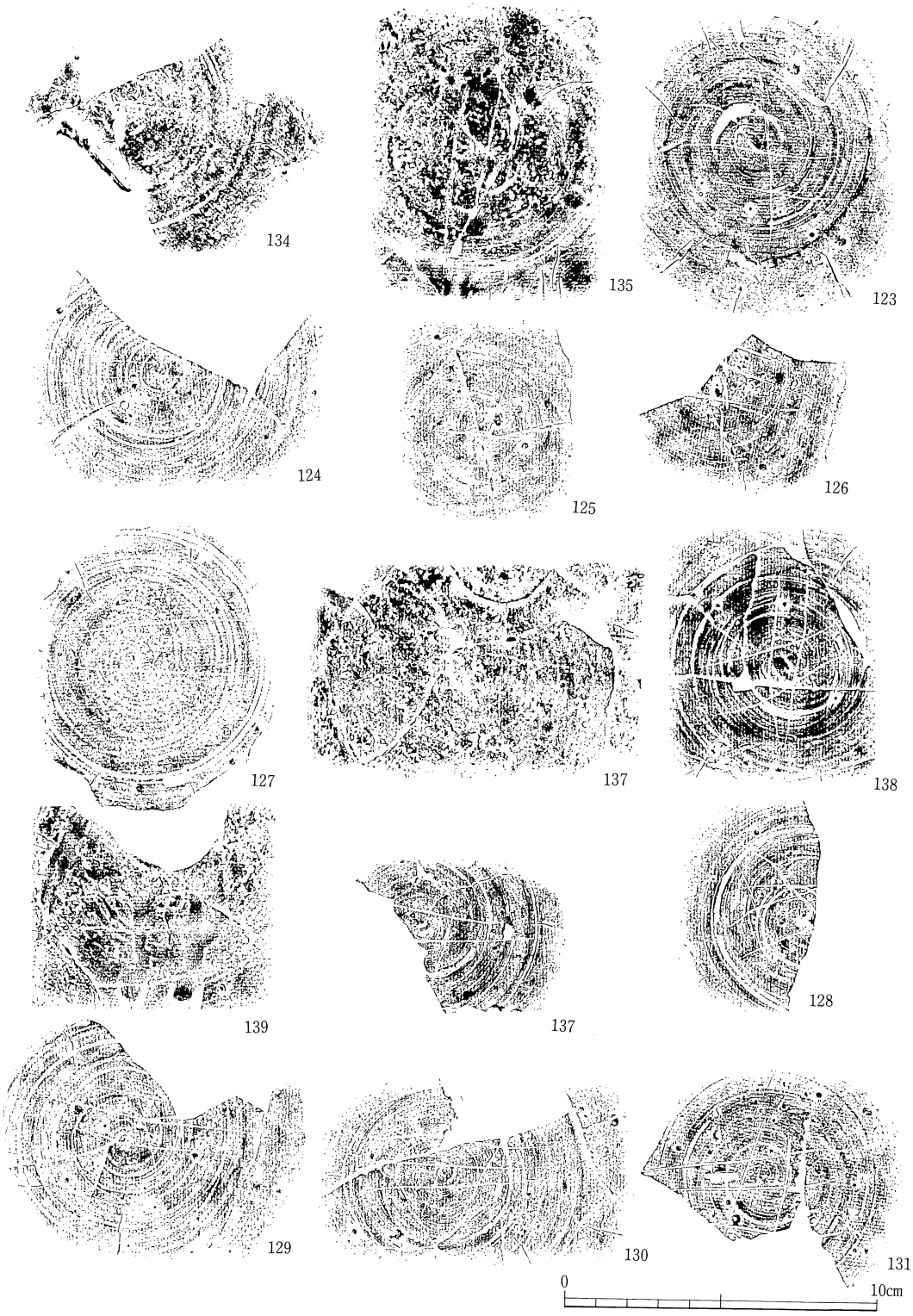
第96図　杯ヘラ記号拓影集成図(6)



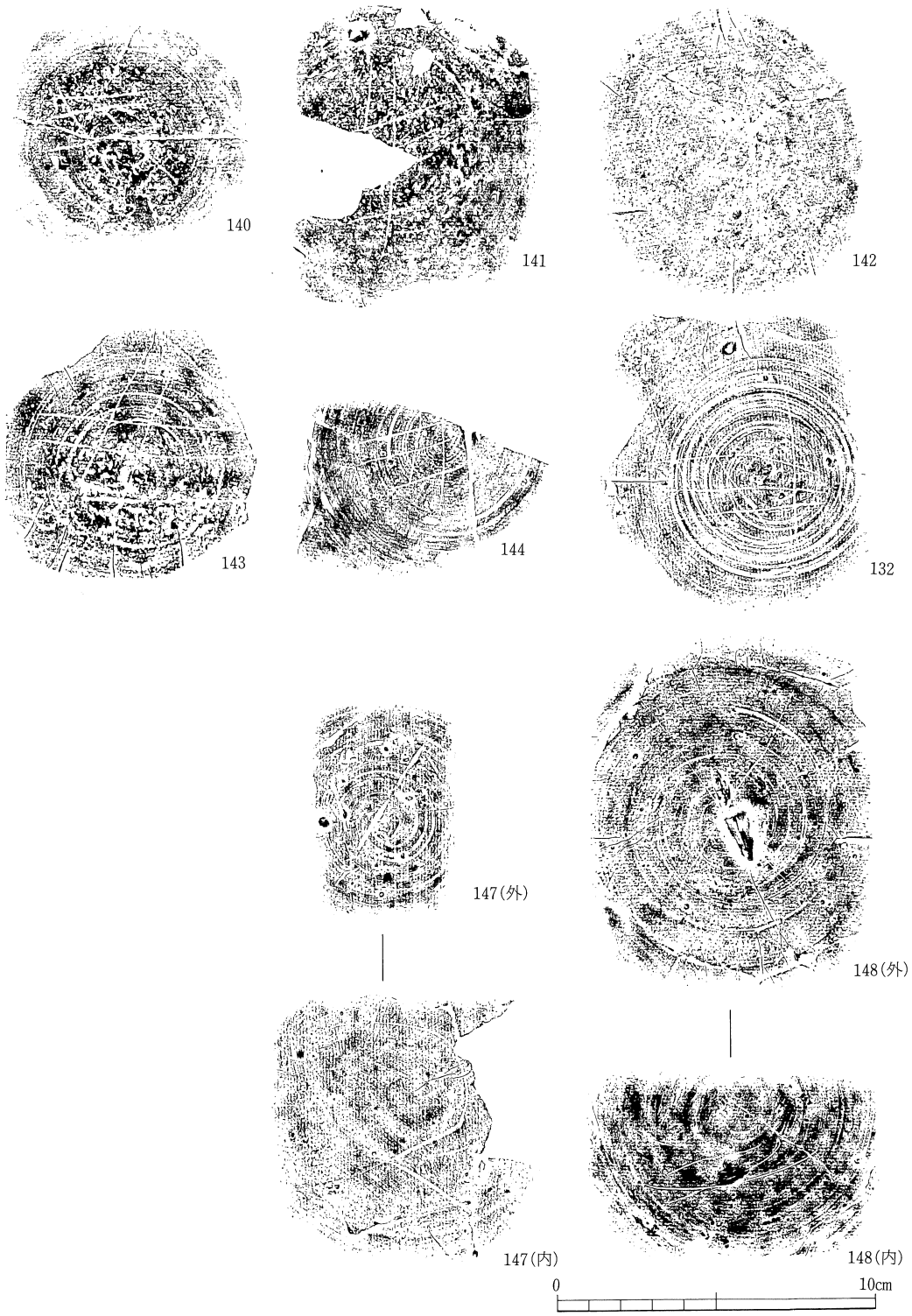
第97図　杯ヘラ記号拓影集成図(7)



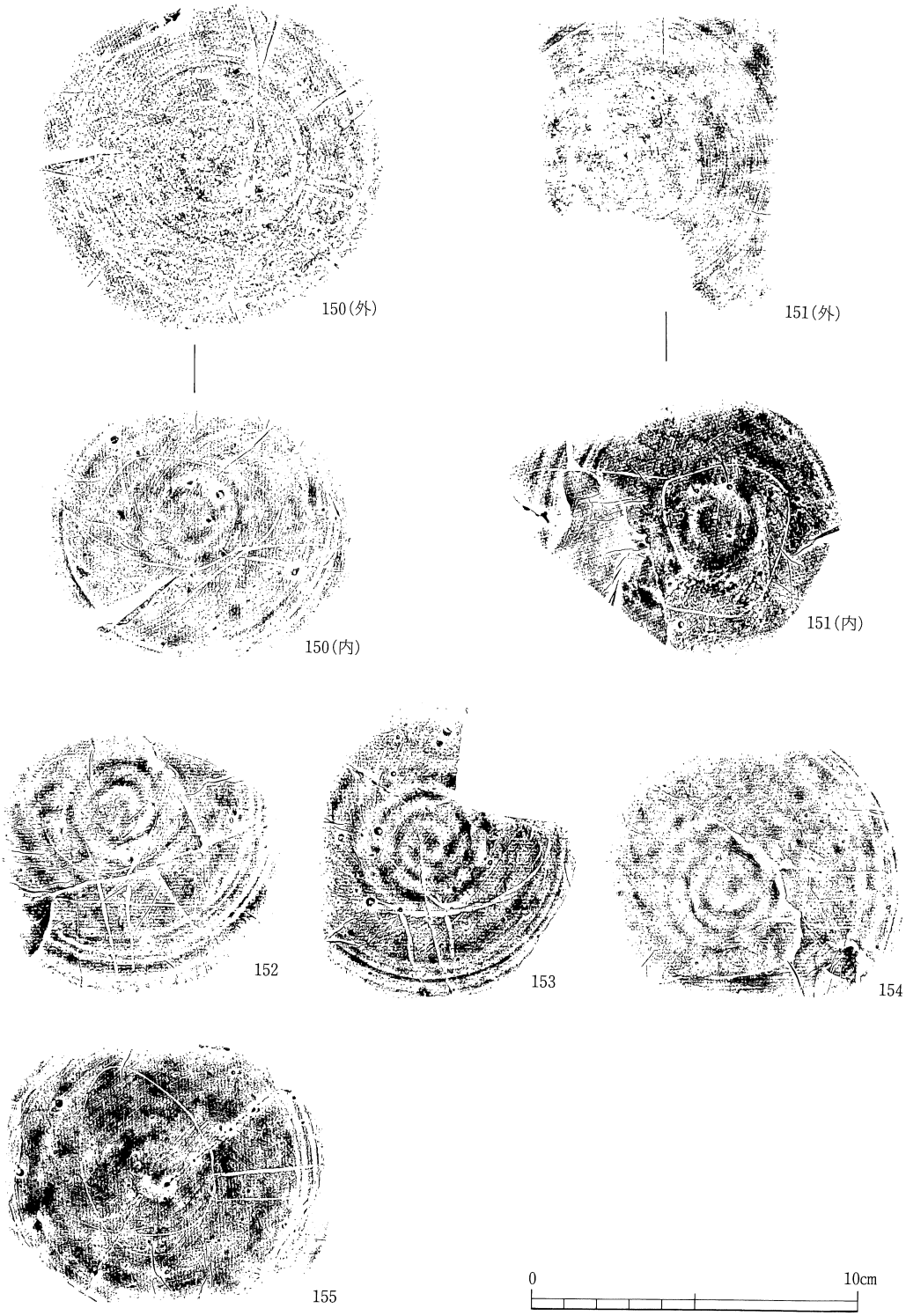
第98図　杯ヘラ記号拓影集成図(8)



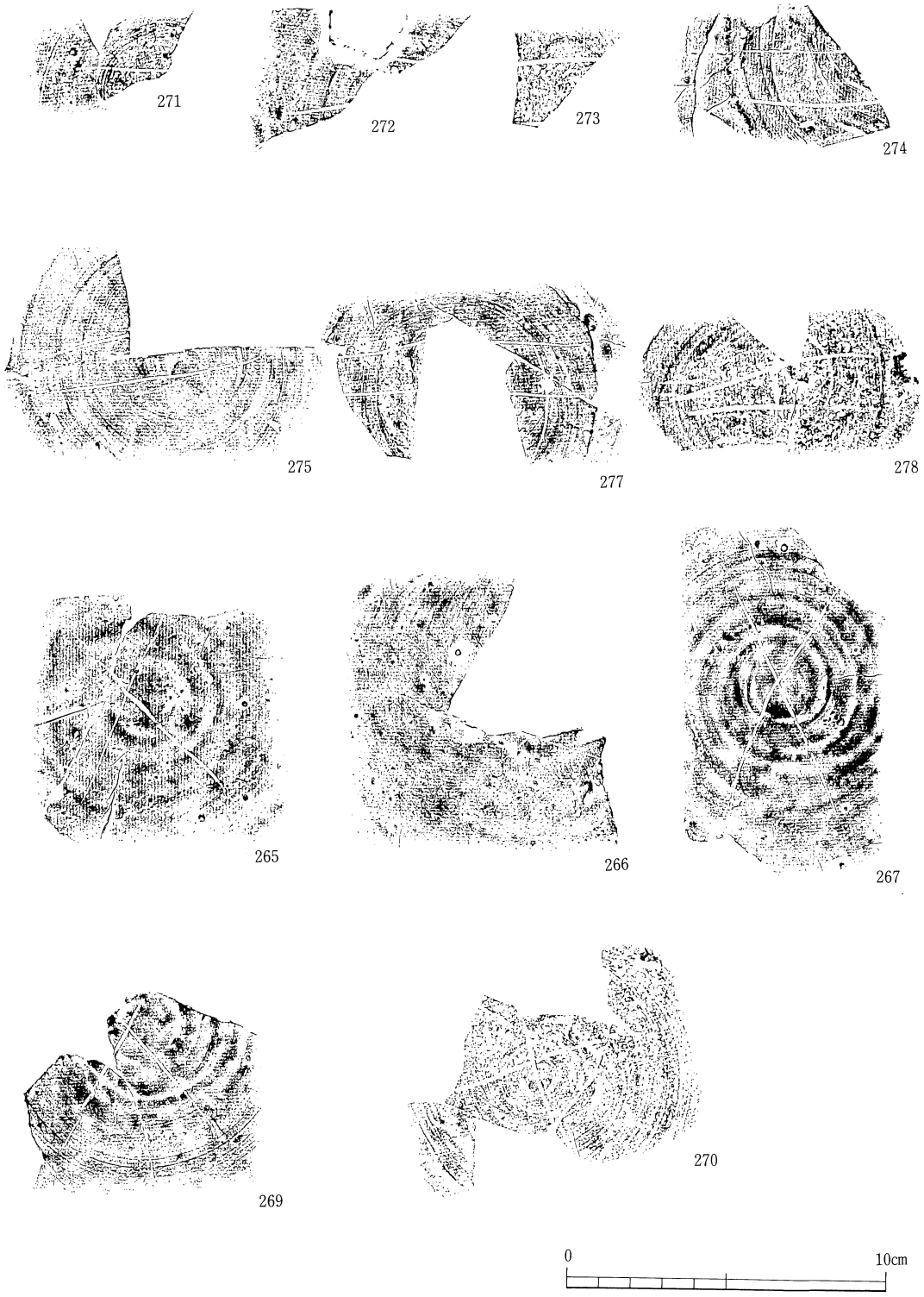
第99図　杯ヘラ記号拓影集成図(9)



第100図　杯ヘラ記号拓影集成図(10)



第101図　杯ヘラ記号拓影集成図(11)



第102図　杯ヘラ記号拓影集成図(12)

第 4 章　遺構と遺物の検討

1 遺　　構

窯構造について

瓦ケ迫窯跡、草場窯跡は半地下式無階無段登窯の構造であった。両窯共に、全長約12m程度、幅２m未満の規模をもち、形状は細長い寸胴を呈している。

窯内施設では、瓦ケ迫窯跡において焼台配置を想定し得る痕跡が残っていた。焼台は基本的に礫を用いている。窯床に浅い窪みをつけて配置したものとそのまま置かれた例がある。その痕跡をみる限り礫数個を水平に並べ、それを焼成部に数段配置したものと想定できる。礫の上面はほぼ平坦であり、礫の上の甕の破片を水平に置いた例も散見された。

草場窯跡は、燃焼部に舟底状ピットをもつ登窯である。舟底状ピットについては窯内の３枚の床のうちⅠ・Ⅱ次床を掘り込んでおり、Ⅲ次の最終床がピット上に貼られていた。このことから、製品焼成後に残滓を処理するための施設と考えた（注１）。

窯の規模、形態の推移について旧筑前国の福岡県牛頸窯跡群の発掘成果を基に検討がなされている（注２）。ここでの分類に瓦ケ迫窯・草場窯を対比させると、Ｂ類の条件である規模・形状、あるいは床面施設の付帯などを満たすものである。

和泉陶邑では、Ⅱ型式の段階において「うなぎの寝床」状の長大な窯がこの時期の特徴的な形態となる。しかも燃焼部床面にピット状の窪みを設けた舟底状ピットもこの段階の特徴である、とされている（文献１）。このように窯構造・規模における時期的な特徴は伊藤田窯跡群においても同様の傾向を示していたものといえよう。

注　1　舟底ピットは焼成時には埋められ前後の床との間に段差をつけない。またピット内には破損品や焼土、炭灰、窯壁片が多く堆積している。したがって、この施設を製品焼成後の窯内清掃と次段階の焼成準備のための機能を果たしたものと考えた。

窯外施設については、天観寺山窯跡群の窯跡例を取り上げ、焚口前部に付設された凹み穴の検討が加えられている。機能は製品焼成前では空焚後の炭灰処理穴、操業以後は窯内排水受けが考えられており、前庭部凹穴と称されている（小田富士雄「天観寺山窯跡群の構造と推移」『天観寺山窯跡群』北九州市埋蔵文化財調査会、1977）。

注　2　これによると次の特徴をもつものがＢ型に分類されている。１）全長は10～15m、２）平面形は細長いずん胴、３）舟底状ピットをもつ、４）床面傾斜が強い、５）煙出し部が多孔式で、排水溝を付設。牛頸窯跡群のＢ型は６世紀後半～７世紀前半頃に限定されている。（副島邦弘「牛頸窯跡群の編年的研究に関する覚書」『牛頸中通遺跡群』大野城市教育委員会、1980年）。

文献１　中村浩「１．窯体構造の問題」（大阪府教育委員会『陶邑Ⅱ』大阪、1977）。

2　遺　　物

1）　伊藤田窯跡群の須恵器器種構成

伊藤田窯跡群の中でこれまでに発掘調査が実施された瓦ケ迫、草場、夜鳴池の各窯跡、および城山窯跡群から出土した須恵器について、その構成を概観し併せて各器種の変化をみていくものである。

まず器種の組み合わせをみていきたい。

杯　杯にはA、Bの２種がある。杯Aには合子状の蓋杯。杯Bには椀状の身とつまみが付き、内面に返りをもつ蓋と組み合うものである。

瓦ケ迫窯段階の杯は杯Aである。調整技法についてみると、身の底部、蓋の天井部に回転ヘラ削りが施される。

草場窯段階では杯底部・天井部の調整技法は回転ヘラ切り未調整となる。

城山窯段階では、杯Bが新たに出現する。杯Aはこれと伴うものである。調整技法は回転ヘラ切り未調整に若干の手持ちヘラ削りが伴う。受部など各部分が矮小化、法量は縮小化する。

杯Bは口縁部が外へ屈曲するタイプと直線的に伸びる２種類の杯身がある。これに伴う蓋はボタン状の偏平なつまみをもち、内面に返りがある。

椀　伊藤田窯跡群では城山窯段階で出現する。直線的に伸びる体部をもち底部は平底である。高台はもたない。ただ、B区灰原から出土した椀を参考例として示しておきたい。この椀は浅く、体部外面に沈線が巡る。長方形で長い高台がつく。窯に伴うのか混入品なのか分明でない。

高杯　瓦ケ迫・踊ケ迫窯段階では、有蓋と無蓋タイプの２種ある。脚部についてみると、両タイプ共に長脚で柱部に長方形の二段透しをもつ例が多く、裾部が大きく広がる。無蓋高杯は杯部が直立気味に立上がり外面に稜をもつ形態である。このような形態はこの段階まででみられなくなる。

草場窯段階になると有蓋高杯はみられなくなる。無蓋高杯は杯部が前段階と異なり杯蓋状となる。脚部は長・短２形態ある。長脚の例は前段階よりも柱部が細く低くなる。透かしはみられなくなる。短脚のものは柱部が明確に形成されず杯部との境から八の字状に広がる。

城山窯段階では有蓋高杯はなく、無蓋高杯のみ存在する。前段階と同様に長・短２形態がある。長脚タイプについてみると、脚柱部が細く裾部の開きが弱い点は前段階とほぼ共通するが杯部が体部中程から外反するもの、稜をもつなどがあり概して深い形状をもつ。短脚タイプは小型化する傾向が認められる。

皿　城山窯段階で出現する器種である。A地区灰原、２号土坑から出土している。灰原出土例は底部が丸くやや深めの形態を呈している。２号土坑出土の皿は平底で体部下端は丸く口縁

部はやや外傾する。

瓿　瓦ケ迫窯段階では口縁部がやや開き気味である。体部は球体をなす。草場窯段階になると口縁部が内湾し、体部はやや偏平な球体をなすようになる。城山窯段階では体部が下脹れの形状を示す。

鉢　城山窯段階で出現する。深い形状をもつもの（A地区2号土坑）と平底で椀を大型にした形状（B地区2号窯）の2種ある。

短頸壺　瓦ケ迫窯跡の例は口縁部が長めで先端が細い。草場窯跡では小型のものが出土している。口縁部は短く内傾する。体部は最大径を中位にもつが偏平な形状を呈している。城山窯跡の例をみると偏平な体部に短い口縁部がつく。口縁部上端は肥厚しやや凹む。

壺　広口壺、長頸壺などが各段階にみられる。形態変化を確認するほどの資料は得られていない。

提瓶　瓦ケ迫窯跡では小型品の体部が出土している。草場窯跡の例は口縁部が内湾するものと、小型で頸部が細長く伸びるタイプがある。

横瓶　草場窯跡、夜鳴池の工房跡から出土している。ともに体部の破片であるため形態の変化はとらえにくい。

平瓶　伊藤田窯跡群内では城山窯段階に散見される。口縁部は内湾し、体部は充分に膨らみをもつがやや偏平になっている。

甕　口縁部の形態に特徴がある。瓦ケ迫窯跡の大型品には口縁部が肥厚し内湾するものがある。口縁下端は細く引き伸ばされ稜がつく。小型品は口縁部が肥厚し段がつくものがある。草場窯跡では大型品の口縁部は短くなり内湾しない。しかし肥厚した口縁部外面に段がつく。小型品は口縁部が肥厚しないものもみられるようになる。城山窯跡では甕の口縁部は肥厚するが外面の段や沈線は不明瞭、もしくはなくなる。

甑　草場窯段階のものは胴部上半が内傾し口縁部に至って緩く外へ開く。長胴型の形態をもつものであろう。

摺鉢　草場窯の例では直線的に伸びる体部にやや丸みをもつ底部がつく。底部はやや薄く縁辺は丸いが概ね平底状をなす。城山窯段階では直線的に伸びる体部に偏平な円盤状の底部がつく。この時期の特徴といえる変化を示している。

硯　草場窯跡灰原2点、城山窯跡群A地区灰原1点、B地区灰原1点の計4点がこれまでに確認されている。硯はいずれも円面硯である。草場窯例は水滴に伴う場合、8世紀代に比定される可能性がある。

水滴　小型の平瓶破片が草場窯で4点出土している。体部は上面が平坦で、肩部が鋭角に屈曲している。この資料は全て破片であるため明確な形態の復元はできないが、8世紀中頃に比定し得る特徴をもっている。

器種 / 窯名	杯			椀	高杯				皿	鼎	鉢	短頸壺	壺	提瓶	横瓶	平瓶	甕	甑	摺鉢	硯	特殊品 その他
	A		B		有蓋		無蓋														
	回転ヘラ	未調整			長脚	短脚	長脚	短脚													
瓦ヶ迫窯跡	○				○		○			○		○		○			○				
踊ヶ迫窯跡灰原	○		○		○							○	○	○			○				
草場窯跡		○					○	○		○		○	○	○	○		○	○	○		棒状製品 窯の時期と異なる硯
夜鳴池窯跡		○	○	○								○	○	○		○					土錘
夜鳴池工房跡		○						○					○		○		○				
城山窯跡群 A－2号窯跡		○	○	○				○									○				陶馬
A－1号土坑							○	○					○			○	○	○			
A－2号土坑		○	○					○	○		○							○			
A－灰原	○	○	○				○	○	○			○	○				○			○	
B－2号窯跡		○	○				○	○			○		○				○				

第2表　伊藤田窯跡群の器種構成

特殊品　草場窯内出土の棒状製品は中央部を持ち両端を使用できる形態を呈しており、「すりこぎ」様の機能が考えられる。

2）　瓦ケ迫窯出土杯のヘラ記号について（第103図）

伊藤田窯跡群の調査された窯においてヘラ記号をもつ例は、瓦ケ迫窯跡、草場窯跡などを挙げることができる。ヘラ記号をもつ器種は杯、高杯、鼎、壺などである。このなかでも杯に最も多くその例がみられる。

瓦ケ迫窯跡では個体を確認できる杯のじつに60％の割合でヘラ記号を確認している。ここでは瓦ケ迫窯跡出土杯のヘラ記号を中心に分析を試みるものである。

ヘラ記号の種類

ヘラ記号は直線の配置と組み合わせ、円弧と直線の組み合わせがある。

Ⅰ類は直線の配置であるが、長さと刻みの深さに差がある（Ⅰ－1，2）。Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ類は交差する直線の組み合わせである。直線の数が多くなるに従い分類が進む。

Ⅷ類は内面に円弧と直線の組み合わせ、外面にⅡ類が刻まれる。

ヘラ記号の位置

ヘラ記号が刻まれる位置には内面と外面、器面上の位置に違いがある。内面と外面の違いについては、図示したようにⅠ類は内面、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ類は外面、Ⅱ、Ⅲ類は内面と外面に刻まれる。Ⅷ類はすでに述べたように内面と外面の両面にヘラ記号が刻まれるものである。

ヘラ記号が器面のどの位置に刻まれているのかをみると、Ⅰ類－1，は中央を通過し偏ることなく刻まれている。Ⅰ類－2は縁辺近くにほとんどが位置する。この場合でもヘラ記号の延

長上に杯の中心がある。II～VII類は刻む直線が複数となりその範囲も広くとられるため、ヘラ記号の中心が器面のほぼ中央にくる。

ヘラ記号の記入方法

ヘラ記号Ⅰ類～VIII類において確認できるものはすべて右から左、上から下の方向で記入されている。

蓋と身のヘラ記号

瓦ケ迫窯跡では燃焼部から多くの杯が出土した。杯の大半は破片であったが接合作業の結果、多くの個体を復元できた。このなかで蓋と身が融着する例は、セットを示す好資料を提供するものであった。

蓋と身のセット関係は、内面ヘラ記号Ⅰ、II類、外面ヘラ記号II類などで確認した。特に内面ヘラ記号Ⅰ、II類では多数のセットがみられた。

セットをなす蓋と身は必ず同一のヘラ記号をもち、器面上の位置も同じである（注１）。

ヘラ記号と器形の関係を検討した結果、同一のヘラ記号は同巧の杯と対応することを確認した。そして場合によっては、同一のヘラ記号をもつ複数の杯をさらに小単位のグループとして抽出することが可能である。

瓦ケ迫窯跡杯ヘラ記号の特徴

瓦ケ迫窯跡のヘラ記号において最も特徴的な点は内面と、内外面にヘラ記号が記入されることである。

杯内面ヘラ記号は上ノ原横穴墓群の７・12・14号横穴墓などから出土している。上ノ原横穴墓群が伊藤田窯跡群から北西３kmの距離にあり須恵器供給範囲内であれば当然のことである。他の地域での事例を求めると、福岡県飯塚市井手ケ浦窯跡１号窯を指摘できる（文献１）。窯出土の蓋杯の内面にヘラ記号が記されたものである。ヘラ記号は10種類確認されている。古墳の出土例では同宗像郡城ケ谷古墳群（文献２）、田川郡大任町大行事横穴群（文献３）などがある。また内外面ヘラ記号は、九州において公表された資料をみる限り確認されていない（注２）。

注　1　広石古墳（福岡市教育委員会『広石古墳』1977年）ほかの古墳の副葬品にみられる杯蓋・身のセットではこの様な例が多く確認されている。窯跡では大阪府日置荘遺跡の須恵器窯跡（ＴＫ43期）などを例示できる。融着した杯蓋・身の外面に同一のヘラ記号が確認されている（大阪文化財センター『日置荘遺跡その５』1989年）。

注　2　ヘラ記号に関する所見については、高橋　徹氏（大分県教育庁文化課）のご教示、氏との共同研究を通じて得たものであることを付記しておく。

文献１　飯塚市教育委員会『井手ケ浦窯跡』福岡、1985年

文献２　福岡県教育委員会、福岡教育大学『城ケ谷古墳群』福岡、1977年。

文献３　大任町教育委員会『大行事横穴群』福岡、1979年。

3)　草場窯、瓦ケ迫窯出土の杯形状について

杯の形状における規格性をみるために口径、器高、重量、容積のデータを用い検討を行った。

草場窯：試料として、杯身36点、蓋31点を用いた。

口径・器高の分布では、身が口径10cm～11.4cm、器高2.9cm～4.1cmの範囲にある。

口径の度数分布は0.5cmを１枠の単位とする樹形図で表現した。これをみると、樹形は10cm以上、10.5cm未満が頂点となり、11cm以上、11.5cm未満まで大口径へと減じている。10cm未満の小口径範囲については試料が欠落している。

蓋は、口径11.2cm～12.8cm、器高3.1cm～4.2cmの幅をもつ。

口径の度数分布は、11cm以上、11.5cm未満から14cm以上、14.5cm未満までの７段階に渡っている。分布は、12cm以上、12.5cm未満を頂点とする正規分布を示している。

蓋と身の口径差については、窯内から出土したセット10点を例示できる。口径の幅は蓋が1.3cm、身は1.1cmと若干のばらつきがある。セット関係にある蓋と身の口径差は、1.0cm～1.9cm、平均1.4cmである。

この平均値を基に身口径の樹形を復元すると、身・蓋の頂点はよく対応していることから、正規分布を示す形状と考えられる。

重量および内容積については規格性の高さが窺われる。

瓦ケ迫窯：ヘラ記号分類に基づいた形状分布の分析を行った。

Ⅰ類－１　身は25点、蓋27点が口径、器高の数値を計測できる例である。口径・器高分布は身が口径9.3cm～13cm、器高3.1cm～4.6cmの範囲にある。口径の度数分布は、９cm以上、9.5cm未満から、13cm以上、13.5cm未満までの９段階に及んでおり、樹形は均整さを欠く。ただ、このなかの9.5cm以上、10cm未満、10.5cm以上、11cm未満と12cm以上、12.5cm未満の３か所に高い数値をみることができる。

蓋は、口径10.5cm～14cm、器高3.0cm～4.4cmの幅をもつ。口径の度数分布は、10.5cm以上、11cm未満から13.5cm以上、14cm未満までの７段階に及んでいる。この樹形は均整でないが、11cm以上、11.5cm未満、12cm以上、12.5cm未満、12.5cm以上、13cm未満の３か所に高い数値をみることができる。セット関係にある蓋と身の口径差1.1cm～2.9cm、平均1.5cmのデータを基準に類推すれば、蓋・身の頂点はうまく対応し、口径に３つの規格があることを想定できる。

Ⅰ類－２　身は21点、蓋12点を試料として用いた。口径･器高分布は、身が口径10.2cm～12.5cm、器高3.5cm～4.2cmの範囲にある。口径の度数分布は、10.5cm以上、11cm未満から、12.5cm以上、13cm未満までの５段階ある。樹形は11.5cm以上、12cm未満に頂点をもつ。

蓋は、口径11.6cm～13.8cm、器高3.2cm～4.4cmの幅をもつ。口径の度数分布は、11.5cm以上、12cm未満から13.5cm以上、14cm未満まで５段階に渡っている。分布は、13cm以上、13.5cm未満を頂点とする。身・蓋ともに試料数の少なさもあり、必ずしも実態を示すものではないかもし

分類	へ ラ 記 号	記入位置 内	記入位置 外
Ⅰ-1		●	
Ⅰ-2		●	
Ⅱ		●	●
Ⅲ		●	●
Ⅳ			●
Ⅴ			●
Ⅵ			●
Ⅶ			●
Ⅷ		●	

第103図　瓦ヶ迫窯のヘラ記号分類

れない。しかしセット関係にある蓋・身9点の口径差は、1cm～1.4cm、平均1.2cmを考慮すれば、ほぼ対応するものである。したがって、一定の規格性を確認するものと思われる。

II類～VIII類は、試料数が少ないが、無記号杯に近い分布を示している。

無記号　試料数は、身51点、蓋29点がある。このうち口径、器高の計測できた例は、身36点、蓋19点である。口径・器高分布は身が口径10.4cm～13cm、器高3.5cm～4.7cmの範囲にある。身の口径は6段階に分かれる。数値の頂点は12cm以上、12.5cm未満にある。

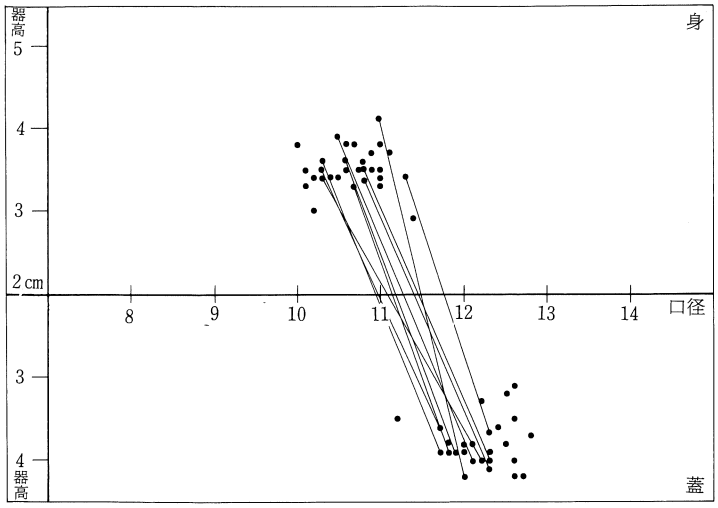
蓋は、口径11.2cm～14.8cm、器高3.2cm～4.2cmの幅をもつ。蓋は6段階に分かれ、13cm以上、13.5cm未満を頂点とする。

このように身・蓋は、口径に幅はあるが度数分布の形状から一定の規格が確認される。

重量および内容積については規格性の高さが窺われる。

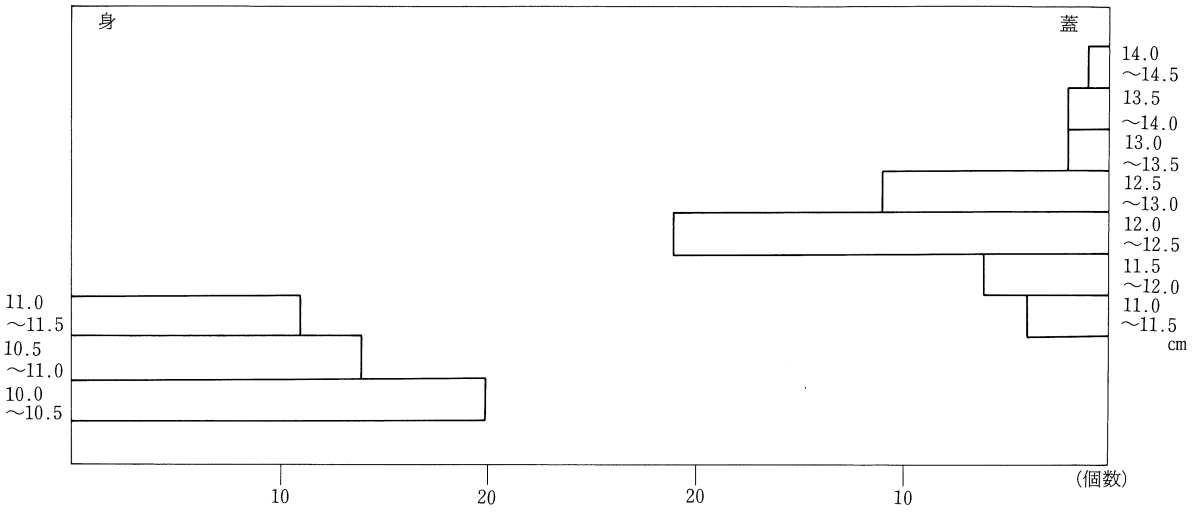
第3表　瓦ケ迫窯跡　杯ヘラ記号の数量

分　類	蓋		身		計
	外　面	内　面	外　面	内　面	
I－1		31		25	56
I－2		12		21	33
II	10	7	4	6	27
III			2	1	3
IV	4		1		5
V	1		3		4
VI	4		5		9
VII	1				1
VIII	5		3		8
総　計	75		71		146

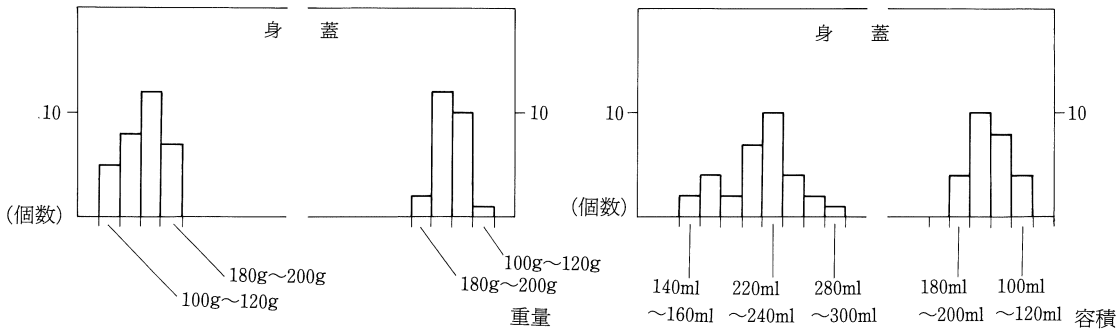


口径／器高

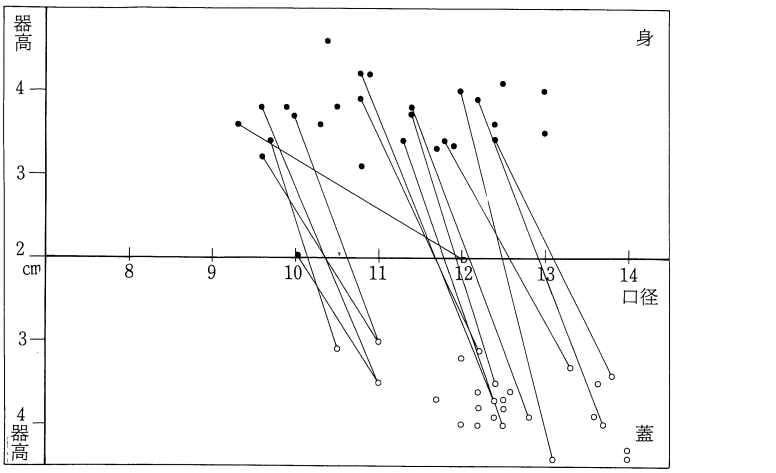
※直線で結んだ２点は
セット関係を示す。

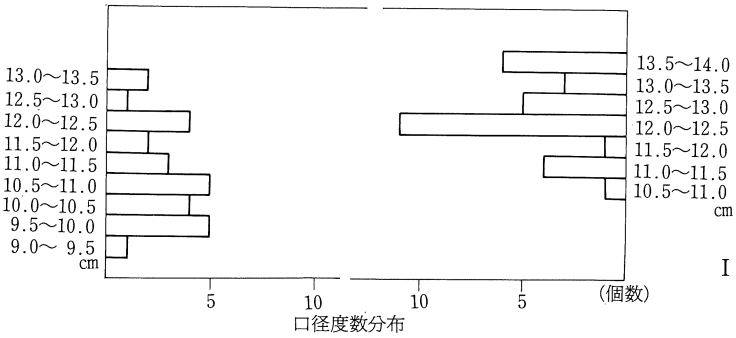


口径度数分布

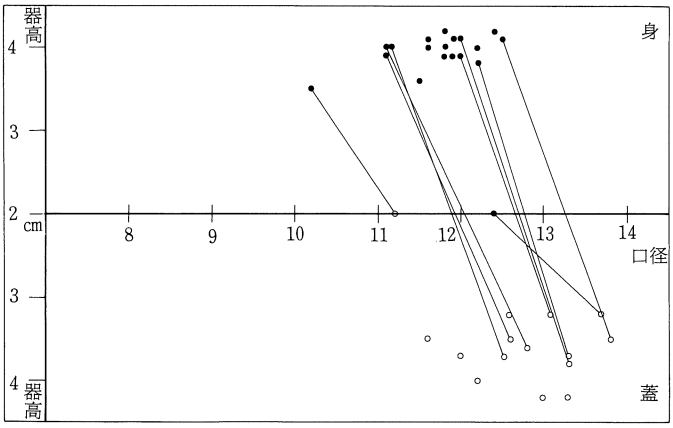


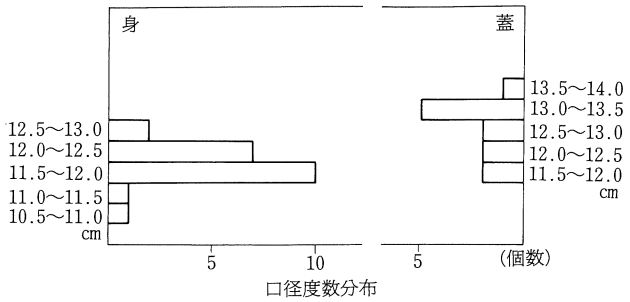
第４表　草場窯跡出土杯形状表





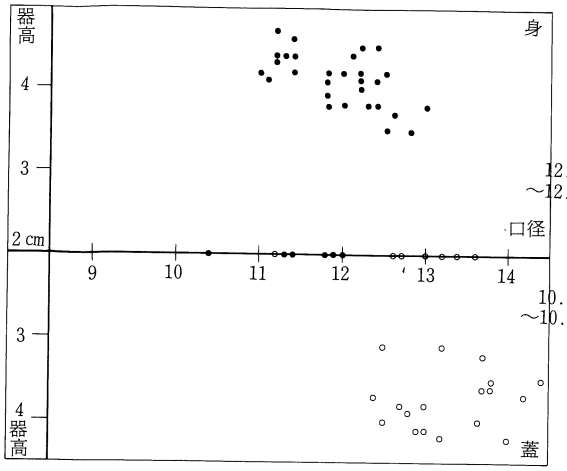
Ⅰ－1（ヘラ記号分類）



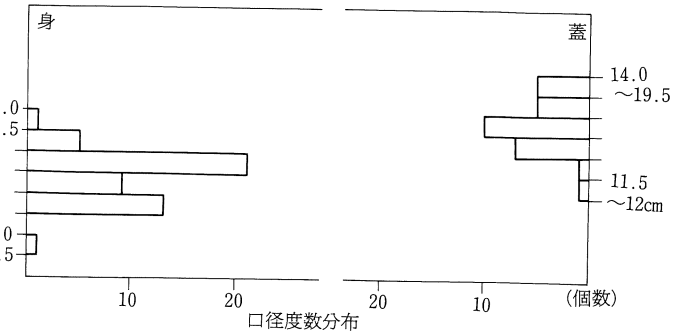


Ⅰ－2（ヘラ記号分類）

第5表　瓦ヶ迫窯跡出土杯形状表（1）

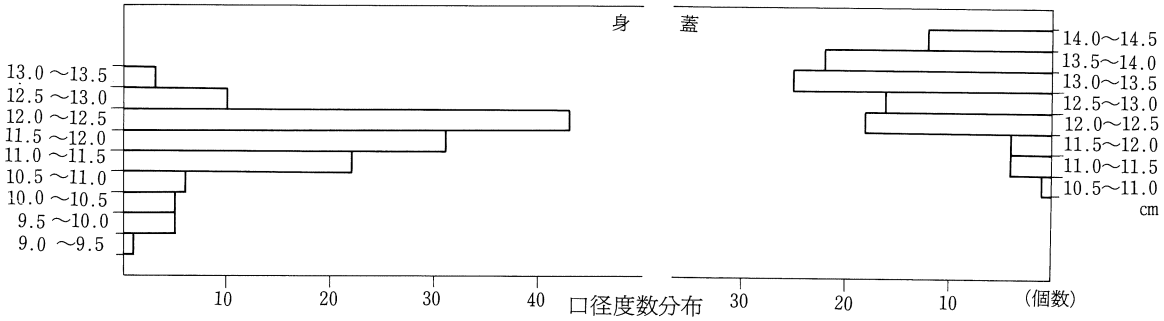


口径／器高

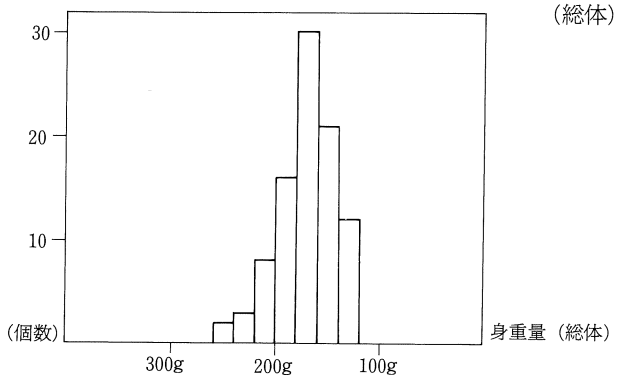


口径度数分布

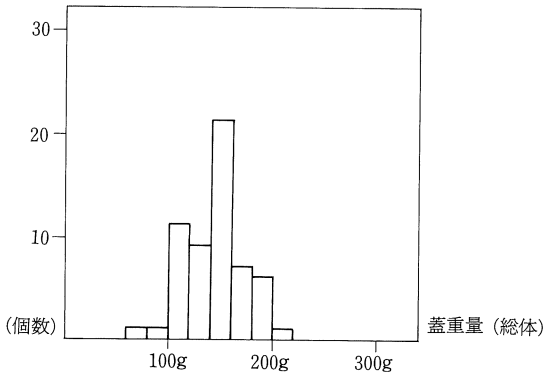
無記号杯



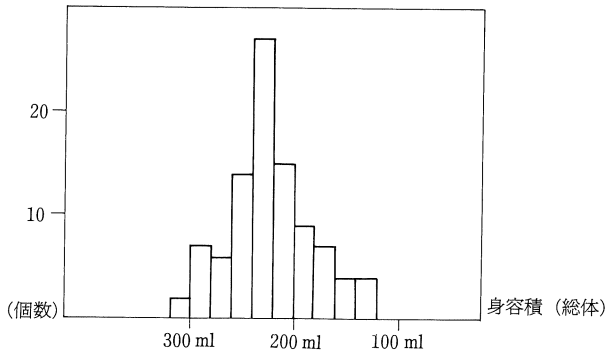
口径度数分布
（総体）



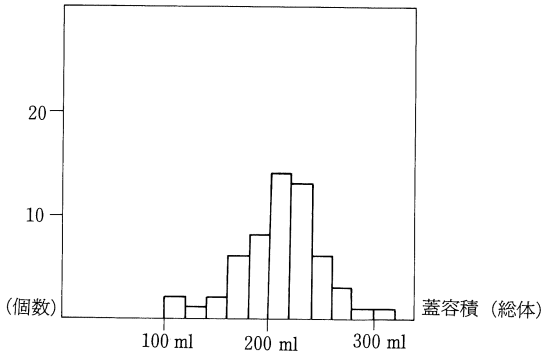
身重量（総体）



蓋重量（総体）



身容積（総体）



蓋容積（総体）

第６表　瓦ヶ迫窯跡出土杯形状表（２）

4) 須恵器の編年について

すでに報告された城山窯と今回報告分を合わせた窯の編年的位置づけを行っていきたい。

瓦ケ迫窯段階

伊藤田窯跡群では現在もっとも古い時期に属す。踊ケ迫窯は同段階に当てることができよう。

杯の縮少化などが顕著になる一方、これまでの調整技法も残存する。新たな器種の出現はない。九州では福岡県八女市野添9号窯、同新吉富村山田3号窯などが同時期の窯として知られている。この時期の多くの器種は粗雑化に向かい、甕の長頸化、杯各部位の退化、法量の縮少化などが顕著となる。瓦ケ迫窯の各器種についても同様の傾向がみられる。ただ、瓦ケ迫窯で観察できた杯法量のばらつきは、この窯の性格を示すものと考える。

草場窯段階

杯、高杯などに器形、調整技法に大きな変化がみられる。杯には回転ヘラ削り調整が全くみられず、回転ヘラきり未調整あるいはその後若干のナデがみられる程度となる。杯の法量は縮少化の傾向が進む。草場窯では杯の法量がほぼ同一の範囲に纏まる。

九州ではこの時期の窯は多く確認されている。旧豊前国の福岡県北九州市天観寺山窯跡群、旧筑前国の同県太宰府市、大野城市、春日市、筑紫野市にまたがる牛頸窯跡群などで確認されている。杯についてみると、天観寺山窯跡群II～IV区窯跡では草場窯跡と同様に杯は回転ヘラ切り未調整である。一方、牛頸窯跡群中の神ノ前窯跡では回転ヘラ削りと未調整のものが共存している。同じ九州内にあって杯調整技法に2つの変化の様相が存在するのである。旧和泉国陶邑窯跡群中の同時期の例も同様に調整・未調整の2つの技法があり（注1）、未調整という技法上の簡略化は漸移的に進んでいる。東九州では杯にみられる、回転ヘラ削り→未調整の変化は純粋なかたちで進行したものといえる。この時期、高杯は有蓋タイプが次第に減少し無蓋高杯が主体となる傾向がある。草場窯跡では有蓋タイプがなく無蓋高杯のみ確認されていることもこの窯の特徴といえる。

城山窯段階

夜鳴池窯はこの段階に含まれる。

新器種の出現がこの段階を特徴付ける大きな要素である。

杯B、椀、皿、硯などがこの段階に出現した新器種である。椀は形態がやや異なるものの前段階に天観寺山窯跡群で出現しているが、伊藤田窯跡群ではこの段階にみられる。また平瓶も窯資料としては城山窯例が初例である。城山窯出土の硯はわが国の窯製品としては初現期の例として位置付けられる。

これ以降の窯についても表採資料を手掛りに8、9世紀までの操業が考えられている。しかし今回は検討の対象から除外した。

上述の各段階を畿内田辺編年に対応させると次のようになる。

瓦ケ迫窯段階　　ＴＫ43

草場窯段階　　ＴＫ209

城山窯段階　　ＴＫ217

この編年観に関しては、田辺編年の様式概念を基本とする立場をとることを明らかにしておきたい。伊藤田窯跡群に関しては各段階の様式、各器種の特徴は若干欠落する部分もあるが、畿内編年との対比を通じて矛盾はない。

注　1　栂地区のＴＧ10－１、61、64などから出土した杯に回転ヘラ削り、ヘラ調整の２つの技法の並存が確認されている（大阪府教育委員会『陶邑II』大阪、1977年）。

第 5 章　自然科学的調査の成果

1　伊藤田窯跡群の熱残留磁気による地磁気年代

島根大学　**時枝　克安・伊藤　晴明**

伊藤田窯跡群（大分県中津市東南部）では6世紀後半から9世紀にかけて須恵器と瓦類が継続的に生産された。長期操業された窯跡群は地磁気の地域変化の研究にとって好都合なフィールドとなる。我々は今までに伊藤田窯跡群の草場窯跡、瓦ケ迫窯跡、および城山窯跡の熱残留磁気測定を行った。ここでは、前二例の結果について報告し、三者の関係をまとめる。得られた地磁気年代は次のとおりであるが、これらは真値から新しい方へ少しずれていると考えられる。なお、瓦ケ迫窯跡の結果は調査概報[1]で、城山窯は調査報告[2]ですでに記載されている。

草場窯跡　　A.D.660±20
瓦ケ迫窯跡　　A.D.650±25

(1)　年代測定の仕組と問題点

［仕　　組］

地磁気は長短の周期をもつ変動成分を含んでいるが、その中には、時間が約10年以上たつと方向と強度に目立った偏倚が現れるような緩慢な変動があり、これを地磁気永年変化と呼んでいる。一方、窯や竈の例のように、粘土が加熱されると、焼土は土中の磁鉄鉱等を担い手として熱残留磁気を帯びる。熱残留磁気の方向は、加熱時の地磁気の方向に一致し、再加熱されないかぎり安定であり数万年程度経過しても変化しない。もし、焼土が再加熱されて磁鉄鉱等のキュリー温度（575度C）以上になると、それ以前の残留磁気は完全に消滅し、その時の地磁気の方向に新しい残留磁気をもつようになる。つまり、須恵器窯のような高温加熱体の熱残留磁気は、最終焼成時の地磁気を正確に〝記憶〟している。

これらの事実から、もし地磁気の方向と年代のグラフ（標準曲線）が分かっているならば、これを〝時計〟の目盛りとして焼土の最終焼成年代を読み取れることになる。すなわち、地磁気の方向変化が時計の針の動きに相当し、焼成時の針の位置を熱残留磁気が記録する。標準曲線を求めるには、年代がよく分かっている焼土から各時代の地磁気データを多数蓄積し、適当

な短期間（～10年）の平均値をその時代（中央値）の標準点として定め次々と連ないでゆく。幸い、日本では、西南日本における過去2000年間の標準曲線が報告されているので、この方法が焼土随伴遺跡の年代推定法として実用化されている。地磁気年代法の詳細については中島等による解説[3]が参考になる。

［問 題 点］

まず、地域によって標準曲線の形が西南日本のものとかなり相違している可能性があげられる。相違が小さい場合は西南日本のものを代用できるが、大きい場合には地域ごとに固有の標準曲線を定めなければならない。最近、各地の新しいデータが増えた結果、このような標準曲線の地域差が具体的問題にされるようになってきた[4]。

次に、地磁気変動を原理とする地磁気年代は土器編年と無関係に思われがちであるが、実際にはそうではなく、地磁気年代の導出は土器編年を基礎としていることに注意する必要がある。すなわち、確実な史料による少数の年代定点を除くと、標準曲線のほとんどの年代目盛は考古学の土器編年体系を参照している。地磁気年代のうち、年代定点に近い値には問題がないが、離れた値は土器編年上の実年代に強く影響されており、もし土器年代に改訂があればそれに伴って訂正しなければならない。年代定点の数が増えると地磁気年代は完全に独立できるが、現状では、土器編年との相互依存は仕方のないことと言える。しかし、地磁気を媒介とする対比のおかげで、地磁気年代測定法は無遺物でも有効である点、その広域性により相互に隔絶した土器編年を対比できる点で独自の性格をもつ。

⑵ 遺跡の概要と年代測定用試料

［草場窯跡１号窯］

所在：大分県中津市；北緯33度32分58秒、東経131度14分39秒。南おちの緩斜面に作られた半地下式無階無段の須恵器登り窯である。窯の全長は約11.6m、最大幅は約1.4mであり、勾配は約15度、主軸はほぼ北に向いている。窯の年代は、出土土器片を畿内須恵器編年と比較して７世紀初頭頃と推定されている。窯底には三層の焼土（下から黄灰色、黒灰色、茶褐色）が積み重なっており、中間層が最も固く焼き締っていた。

［瓦ケ迫窯跡１号窯］

所在：大分県中津市；北緯33度33分02秒、東経131度14分12秒。北おちの緩斜面にある半地下式無階無段の須恵器登り窯である。窯の全長は約12m、最大幅は約1.7mであり、勾配は約25度、主軸はほぼ南を向いている。窯の年代は、出土土器を畿内須恵器編年と比較して６世後半～末と推定されている。

［年代測定用試料］

試料の採取方法は、動かないように切りだした拳大の焼土ブロックを石膏でかため、ブロック上面に作られた石膏面の走行と傾斜をクリノコンパスで測定して試料の方位を決める仕方によっている。草場窯跡については33個の試料を最上部の焼土からほぼ窯底全域にわたって採取した。また、瓦ケ迫窯跡については16個の試料を焼き締った窯底中央部から採取した。なお、これらの窯跡は安定した地盤に作られており、最終焼成後に傾動した可能性は全く考えられない。

⑶ 測 定 結 果

試料を立方体状（3×3×3㎝）に整形し、その残留磁気の方向を無定位磁力計で測定した。第104図、第105図に草場窯と瓦ケ迫窯跡の残留磁気の方向をシュミットステレオ投影法を用いて示してある。円内に示すように、他から離れたデータを除くと残留磁気の方向はよくまとまっているので、これらを元にして最終焼成年代を求めることにする。

円内のデータの平均方向と測定誤差の目安となる数値を計算すると次のようになる。ただし、Im：平均伏角、Dm：平均偏角、K：Fisher の信頼度係数、θ：95％誤差角、N：採用した試料数である。95％誤差角 θ は次のようにして決められた円錐の頂角の半分に相当し、小さいほど測定誤差が少ないことを意味する。円錐の決め方：シュミットステレオ投影図において、円錐の頂点を図の中心に、軸を平均方向に沿うように、また測定された残留磁気の方向の95％が円錐内に含まれるように頂角を選ぶ。Fisher の信頼度係数 K は値が大きいほど測定精度がよいことを示す。

熱残留磁気の平均方向

	Ｉｍ（度）	Ｄｍ（度Ｅ）	K	θ（度）	N
草場窯跡	60.85	-13.05	841	1.07	22
瓦ケ迫窯跡	59.30	-14.90	387	2.00	14

⑷ 考古地磁気年代の推定

第106図のステレオ投影図には、上で得られた残留磁気の平均方向（＋印）と誤差の範囲（点線の楕円）、および、広岡（1977）による過去2000年間の西南日本の地磁気永年変化曲線[5]（標準曲線）が示されている。

焼土の地磁気年代を求めるには、曲線上に残留磁気の平均方向に近い点を求め、その点の年代を読みとればよい。同様に、年代誤差も点線の楕円を目安として求めうる。このようにして

求めた草場窯と瓦ケ迫窯の地磁気年代は次のようになる。

地磁気年代

草場窯跡	A.D.660±20
瓦ケ迫窯跡	A.D.650±25

⑸ 考　　察

⑸―1　瓦ケ迫窯、草場窯、城山窯の結果の比較

各窯の土器型式が瓦ケ迫窯・草場窯・城山窯の順に古いものから編年上の形式を欠落なしに辿ることから、各窯の操業期間には切れ目がないと解釈されている。土器年代および関連する試料は大分県教育委員会文化課の小林昭彦氏による。

	地磁気年代	土器年代	畿内須恵器編年（型式）	
			田辺編年	中村編年
瓦ケ迫窯跡	650±25	6世紀後半～末	TK43	II-4
草場窯跡	660±20	7世紀初頭頃	TK209	II-5
城山窯跡A地区2号窯	720±20	7世紀前半	TK217	II-6・III-1
A地区3号窯	750±25	同上	同上	同上

⑸―2　年代導出の基礎、年代の順序とずれ

地磁気年代も土器年代も共に畿内須恵器のデータを基礎としている。すなわち、地磁気年代は陶邑須恵器窯群の熱残留磁気と土器編年による地磁気永年変化曲線を元に推定されており、土器年代は幾内の須恵器編年がそのままあてはめられている。

土器年代と地磁気年代の各々の順序はうまく整合しているが、両年代の間にはずれがあり、いずれも地磁気年代の方が新しい値になっている。ずれの最小値を誤差幅を考慮して見積ると瓦ケ迫窯跡1号窯では～40年、草場窯跡1号窯では～30年、城山窯跡A地区2号窯では～50年、同A地区3号窯では～75年になる。城山窯の大きなずれが顕著である。

⑸―3　年代のずれの原因

年代のずれを引き起こす原因として、(1)窯体の傾動、(2)地磁気の地域変化、(3)編年のずれがあるが、今の場合、窯はいずれも安定した地盤に構築されており、傾動した形跡は全く認められないので(1)は考慮しなくてもよい。

瓦ケ迫窯・城山窯の既報告において、我々は年代のずれの原因を主として地磁気の地域変化

に求めた。すなわち、城山窯にみられる75年以上のずれを土器編年の実年代のずれのせいにするのは難しいので、九州での地磁気永年変化曲線の形・年代目盛が、年代導出の基礎となっている畿内の永年変化曲線と異なっているためと考えた。

次に述べるように、今回得られた草場窯のデータは、城山窯の大きいずれに関する上述の解釈をさらに支持しており、また、草場窯、瓦ケ迫窯の比較的小さいずれについては編年のずれの影響の可能性を示しているように見える。

[地磁気の地域変化による年代のずれ]

前述したように、各窯の土器型式が編年上の型式を欠落なしに移行することから、考古学的には草場窯の廃止と城山窯の開始はほぼ連続すると考えられる。このことを我々の地磁気年代のデータを用いて記述すると、城山窯の操業は、ほぼ草場窯期（660±20）から城山窯期（720±20・750±25）の間、継続していたことになる。一つの窯のこのような長期使用は考え難い。したがって、城山窯の地磁気年代は見かけの値であって、正しくない地磁気永年変化曲線を用いたために生じたものと結論できる。真の年代は土器年代の７Ｃ前半に近い値をとることになるだろう。

[編年のずれの可能性]

瓦ケ迫窯と草場窯の年代のずれは比較的小さい。この小幅のずれには、九州の須恵器に畿内編年の実年代をそのまま適用する際に生じるずれが影響していると考えられないだろうか？もちろん、このずれには地磁気の地域変化の影響があってもよい。

九州と畿内に編年の実年代に関する詳細な知識を欠くのでこれ以上正当な議論はできない。しかし、前掲のデータだけを見ると編年のずれの可能性があってもよい。今のところ、この見解を支持する強い証拠はない。しかし、第106図にみられるように、中津市近辺で調査した窯（瓦ケ迫窯、草場窯、城山窯、塔の熊窯[7]）の残留磁気の方向が標準曲線にうまく沿っていることはこの見方の可能性を示唆しているように見える。

(6) ま　と　め

瓦ケ迫窯・草場窯にみられる地磁気年代と土器年代には小さいずれがある。また、城山窯の大きなずれの原因は地磁気の地域変化と考えるのが妥当である。しかし、現状ではこれ以上断定的なことは言えない。

過去の地磁気研究の立場から言うと、残留磁気の方向は最終焼成時の地磁気の方向を正しく示しているので、九州における地磁気方向の移動速度は、650年を少し過ぎたあたりで、畿内にくらべてかなり早くなったことになる。

以上の観点からみて、今回得られた草場窯跡（660±20）と瓦ケ迫窯跡（650±25）の地磁気年代は正しい値とは言えない。本当の値は土器年代（７Ｃ前半）と地磁気年代の間にあると予想される。

これらを検証する鍵となるのは、多数の調査例にもとずく全体的傾向の把握と、年代の分った焼土の熱残留磁気の測定である。伊藤田窯跡群のように長期操業された窯跡群はこれらの目的に最適のフィールドである。また、我々による福岡県須恵器窯調査（未報告）のかなりのデータが整理されると確定的な見解を打ち出せるかもしれないと期待している。

最後に熱残留磁気試料採取と考古学的情報収集に協力していただいた小林昭彦氏をはじめとする大分県教育委員会文化課の皆様に心から感謝します。

註　1　時枝克安、伊藤晴明（1984）　瓦ケ迫窯跡考古地磁気調査、『上ノ原遺跡群III、伊藤田窯跡群II』、一般国道10号中津バイパス埋蔵文化財発掘調査概報、大分県教育委員会、28-29

2　時枝克安、伊藤晴明（1985）　伊藤田城山窯跡Ａ地区２号窯及び３号窯の考古地磁気年代について、『伊藤田城山窯跡群』中津市文化財調査報告第５集、中津市教育委員会、115-120

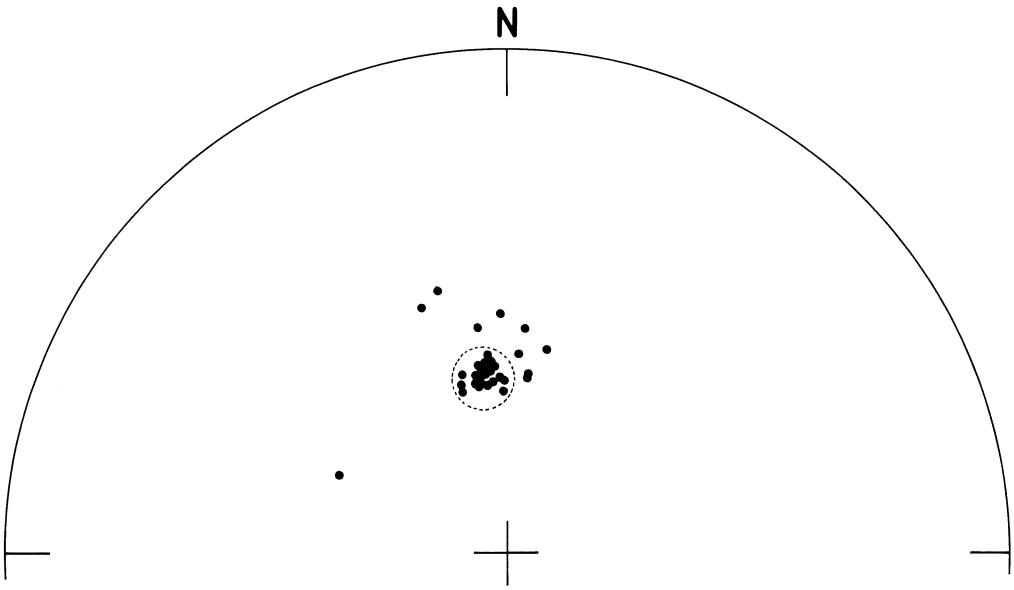
3　中島正志、夏原信義　考古地磁気年代推定法、考古学ライブラリー９、ニューサイエンス社

4　広岡公夫（1991）　考古地磁気永年変化の地域差、日本文化財科学会第８回大会研究発表要旨集、45-46

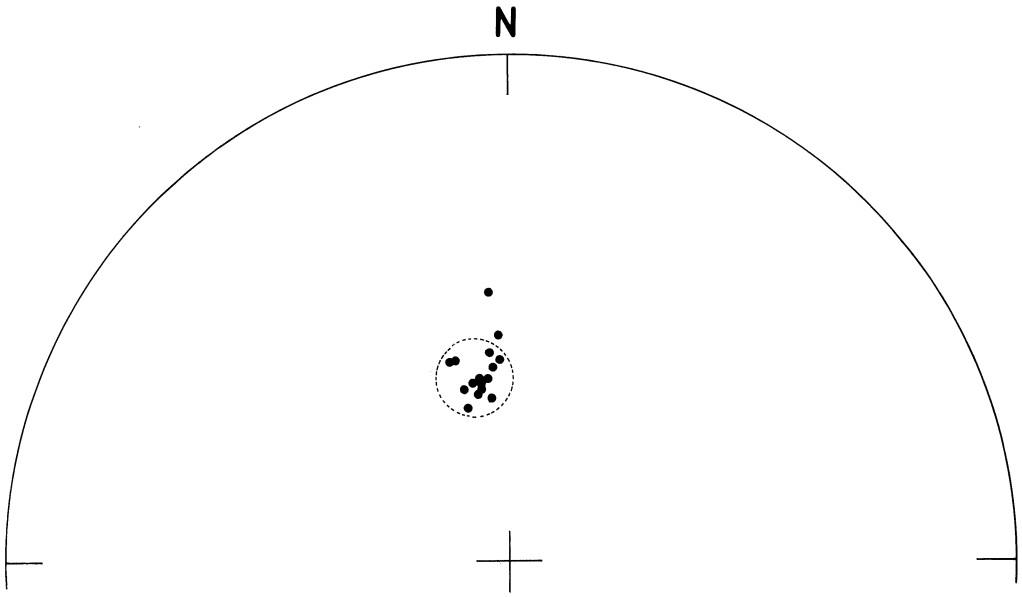
5　広岡公夫（1977）　考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向、第四紀研究15巻、200～203

6　註２に同じ

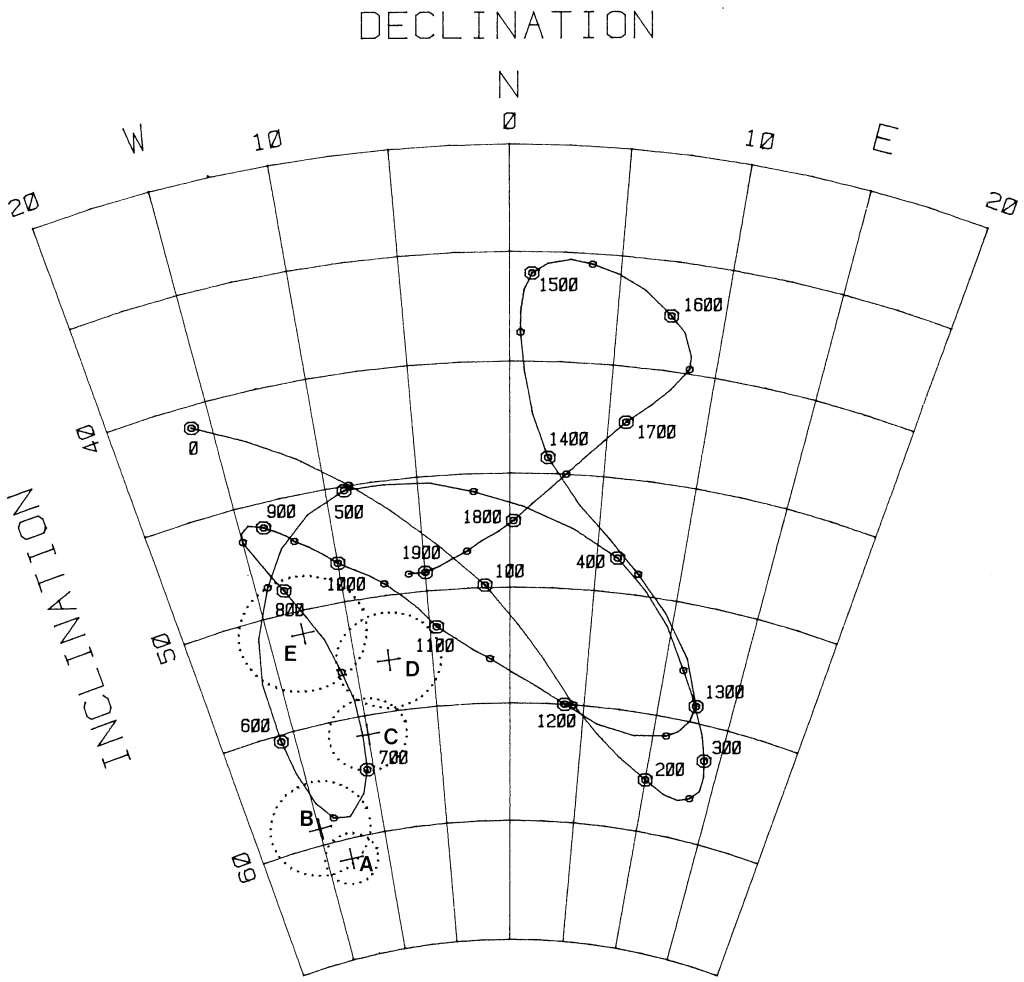
7　時枝克安（1989）　塔の熊窯跡の熱残留磁気による年代推定、『三光村の遺跡』三光村文化財調査報告書第１集、三光村教育委員会、81-84



第104図　草場窯跡の残留磁気方向



第105図　瓦ケ迫窯跡の残留磁気方向



第106図　各窯跡の残留磁気の方向と西南日本の地磁気永年変化曲線

草場窯跡(A)、瓦ケ迫窯跡(B)、城山窯跡A地区2号窯(C)、同3号窯(D)、塔の熊窯跡(E)の残留磁気の方向(＋)と誤差の範囲(点線の楕円)、および広岡による過去2000年間の西南日本の地磁気永年変化曲線。

2　伊藤田窯跡群および県内遺跡出土須恵器の蛍光X線分析

奈良教育大学　　三辻　利一

1）　はじめに

大分県内では6世紀代から中津市を中心にして須恵器が生産されたようである。これらの須恵器が何処へ供給されていたのか、また、5～6世紀初頭の古い須恵器は県外の何処から供給されていたのかは考古学上、きわめて興味深い問題である。これらの問題を解明するには、蛍光X線分析法による胎土分析はきわめて有効である。

本報告では、伊藤田群を中心として、県内の窯跡出土須恵器の化学特性を明らかにするとともに、これらの窯周辺の遺跡から出土した須恵器の蛍光X線分析の結果についても報告する。

2）　分析結果

はじめに、伊藤田窯群の須恵器の化学特性について述べる。

伊藤田群内の城山1号窯の窯体内から出土した須恵器と灰原から出土した須恵器の相互識別の結果を第107図に示す。両軸にとった$D_{(2)}$、$D_{(2')}$はそれぞれ、窯体内須恵器、灰原出土須恵器を母集団としたときの、各母集団の重心からのマハラノビスの汎距離である。両群の重心からのD^2が10のところに太線を引いてあるが、それぞれ、5％の危険率をかけて許容される境界線を示す。すなわち、$D^2_{(2)} \leqq 10$の領域には95％以上の窯体内出土須恵器が分布し、また、$D^2_{(2')} \leqq 10$の領域には95％以上の灰原出土須恵器が分布する。ところが、両群の化学特性が類似してくると、両群のサンプルは重複領域［$D^2_{(2)} \leqq 10$、$D^2_{(2')} \leqq 10$］に分布するようになる。第107図より、両群のサンプルは偏在するものの、過半数は重複領域に分布しており、両群の化学特性は類似していることを示している。したがって、窯体内から出土した須恵器と灰原から出土した須恵器の化学特性はほぼ同じであると考えられる。

次に、城山1号窯と城山2号窯の相互識別の結果を第108図に示す。$D_{(3)}$は城山2号窯の重心からのマハラノビスの汎距離を示す。両群のサンプルのほとんどが重複領域［$D^2_{(2)} \leqq 10$、$D^2_{(3)} \leqq 10$］に分布しており、両者の相互識別は不可能である。したがって、城山1号窯と2号窯の須恵器の胎土はほぼ同一であると考えることができる。

第109図には、同じ伊藤田群内の城山2号窯と瓦ケ迫窯の須恵器の相互識別の結果を示す。$D_{(4)}$は瓦ケ迫窯の重心からのマハラノビスの汎距離である。この場合は、$D^2_{(4)} \leqq 10$の領域内で両群のサンプルは明らかに偏在しており、その化学特性は若干異なることを示している。両者の化学的特性が明らかに異なる場合には、それぞれ、瓦ケ迫領域［$D^2_{(4)} \leqq 10$、$D^2_{(3)} > 10$］、

城山２号領域［$D^2_{(3)}$ ≦10、$D^2_{(4)}$ ＞10］に完全に分かれて分布する。しかし、第109図からわかるように、両群のサンプルはそのようには分布せず、$D^2_{(4)}$ ≦10の領域内で偏在しているだけである。したがって、両者の化学特性は若干ずれるものの、類似していることは明らかである。このように、伊藤田群内の窯跡出土須恵器は類似した化学特性をもつことは第110図の Rb-Sr 分布図でも明示される。Rb-Sr 分布図は各地の窯跡出土須恵器の地域差を有効に表示することで知られている。城山１号窯、２号窯、瓦ケ迫窯、草場窯、夜鳴池窯の須恵器は第110図の中津領域内にすべて分布した。これが伊藤田群の須恵器の化学特性と考えられる。このようにして、中津市周辺の窯は伊藤田群として一括される。全国各地の須恵器窯群も同じような特性をもつことが知られている。逆に言えば、全国各地に多数ある須恵器窯は窯群として整理され得る。

次に、柚木窯出土須恵器の分布値を第７表に示す。分布値はすべて、同時に測定された岩石標準試料 JG-1による標準化値で示されている。また、Rb-Sr 分布図は第111図に示されている。すべての点が中津領域にすっぽりと入っていることがわかる。その化学的特性は中津群に類似していることが予想される。そこで、中津群との相互識別を試みた。その結果を第112図に示す。柚木窯の須恵器も中津群への帰属条件［$D^2_{(1)}$ ≦10］を満足していることがわかる。しかし、K、Ca 量が少ないため、中津群の端に偏在している。ところが柚木群のもう１つの特徴は Fe 量が多いということである。そのため、Fe 因子を入れてマハラノビスの汎距離を計算すると、中津群内の他の窯から相互識別されることになる。その一例を第113図に示す。柚木窯は瓦ケ迫窯から完全に分離しており、両者の相互識別は可能である。この点で、柚木窯の須恵器はK、Ca、Rb、Sr の長石類に由来するとみえられる因子では一応、中津群に類似してはいるものの、Fe 因子を含めると、中津群の中では特異な特性をもつ窯であるといえよう。なお、第111図から、柚木窯の周辺で採取した粘土Ｂは柚木窯や中津群の須恵器とは全く異なる化学的特性をもつことがわかる。粘土Ａは Rb-Sr 分布図では一応、中津群に類似しているようにみえるが、第７表の分析値をみると、Ca、Fe、Rb、Sr の４因子で柚木窯の須恵器の特性とも異なることがわかる。したがって、これらＡ、Ｂ２種類の粘土は柚木窯の須恵器の素材粘土とは言い難いことがわかる。

次に、桐ヶ迫１号窯、および、２号墳出土須恵器の分析値を第８表に示す。また、桐ヶ迫１号窯出土須恵器の Rb-Sr 分布図を第114図に示す。中津領域とは少しずれていることがわかる。粘土は中津領域にも桐ヶ迫１号窯領域にも対応しない。したがって、このままではこの粘土は桐ヶ迫１号窯で焼成した須恵器の素材粘土とは言い難い。Fe 因子でも全く対応しないことは第８表からわかる。素材粘土は地元の他の場所で採掘されたと思われる。

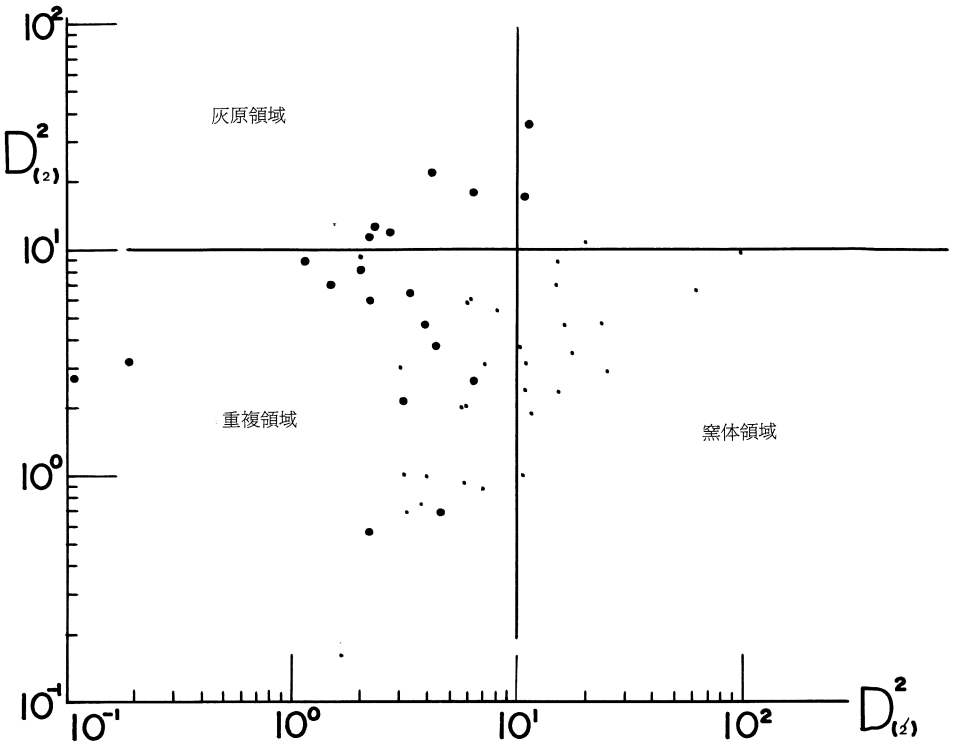
次に、桐ヶ迫窯と中津群の相互識別の結果を第115図に示す。重複領域に分布するサンプルはあるものの、両群は完全に分離しており、その相互識別は可能とみられる。また、柚木窯の須恵器は Fe 因子に特徴があることを前述したが、この因子を入れると、第116図に示すように、

柚木群と桐ヶ迫群は完全に分離し、相互識別はできる。このように、桐ヶ迫窯の須恵器も中津群と少し異なった化学的特性をもっていることがわかった。次に、桐ヶ迫2号墳出土須恵器のRb-Sr分布図を第117図に示す。すべての点は中津領域には分布するものの、桐ヶ迫領域には対応しないことがわかる。そこで、中津群と桐ヶ迫窯の両母集団からのマハラノビスの汎距離の二乗値を計算してみた。その結果を第8表に示してある。$D^2 \leqq 10$を母集団への帰属条件とすると、No.2～No.11の10点の須恵器は中津群へ帰属するが、地元の桐ヶ迫窯には帰属しない。したがって、中津群産と推定される、No.12とNo.13はマハラノビスの汎距離の二乗値からみると桐ヶ迫窯に近いが、中津群への帰属条件もほぼ満足するので、産地としては両群とも許容される。他方、No.1は両群への帰属条件を満足していないので、産地不明としておいた。このデータをみる限り、桐ヶ迫2号墳を築いた段階では桐ヶ迫1号窯は操業しておらず、中津群側から須恵器が供給されたと理解される。普通、地元で須恵器が生産されれば、必ず地元産の製品が古墳から出土するというのが全国各地でみられる通例だからである。

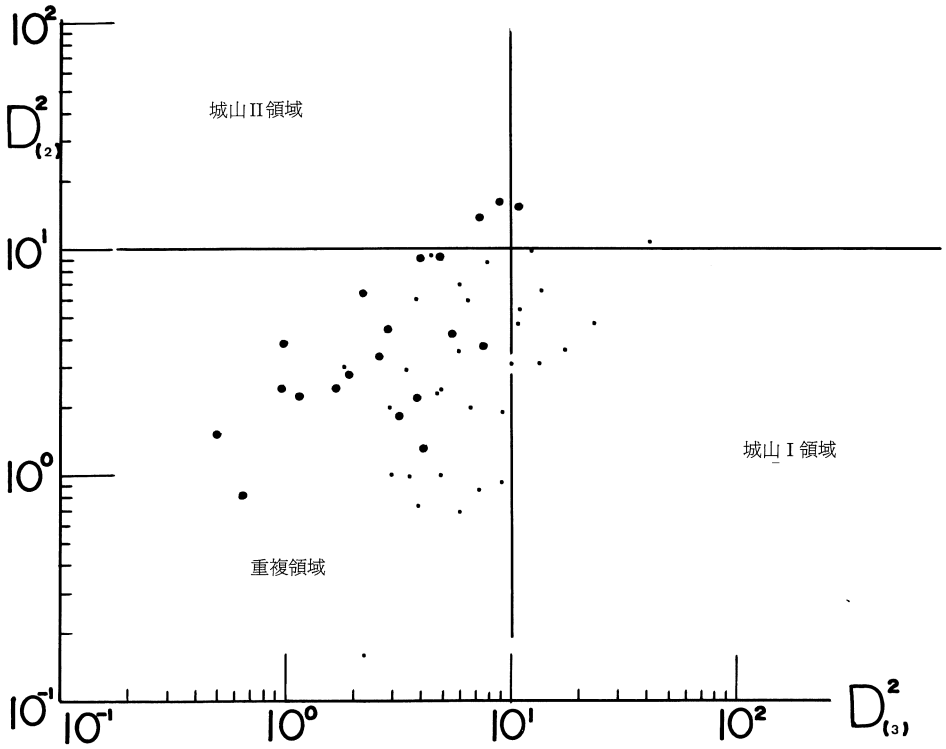
次に大分県下の多数の遺跡から出土した、比較的古い時期の須恵器の産地推定の結果について説明する。分析値は第9表に示されている。比較的古い時期の須恵器であるので、地元、中津群と大阪陶邑群の2群間で判別分析を試みた。第118図に判別分析図を示す。$D_{(0)}$、$D_{(1)}$はそれぞれ、大阪陶邑群、中津群の重心からのマハラノビスの汎距離である。両母集団の判別分析では大阪陶邑群のサンプルのほとんどは$D^2_{(0)} \leqq 10$、$D^2_{(1)} > 10$の大阪陶邑領域に分布し、中津群のサンプルのほとんどは$D^2_{(1)} \leqq 10$、$D^2_{(0)} > 10$の中津領域に分布するため、両者の相互識別は完全に可能であることが知られている。この結果を踏まえて第118図を見ると、多くの試料が大阪陶邑領域に分布していることがわかるが、中津領域に分布する試料もかなりあることがわかる。不明領域に分布するのはNo.8、16などの8点ばかりである。そこで、これらの遺跡出土須恵器の大阪陶邑群、中津群の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗値を計算した。分析値とともに第9表に示してある。また、$D^2_{(X)} \leqq 10$（Xは窯群名）を帰属条件として産地を推定した。この推定結果を確認するため、Rb-Sr分布図も作成した。大阪陶邑産と推定されたもののRb-Sr分布図を第119図に、中津群産と推定されたもののRb-Sr分布図を第120図に、また、産地不明としたものを第121図に示してある。大阪陶邑群産、中津群産と推定されたものはそれぞれ、大阪陶邑領域、中津領域によく対応していることがわかる。

産地推定の結果を点検してみると、上ノ原横穴墓群の須恵器をみると、多くの大阪陶邑産が含まれることがわかる。No.4の5世紀末と推定される須恵器はもしかすると、朝倉群産であるかもしれない。No.7の6世紀末と推定される須恵器は地元、中津群産である。その他の遺跡出土の須恵器についても、5世紀代、6世紀代と推定されるものはことごとく大阪陶邑産と推定されている。7世紀前半と推定される須恵器の中にも大阪陶邑産があることが注目される。前田遺跡には大阪陶邑産と推定される須恵器と中津群産と推定される須恵器が混合しているのに

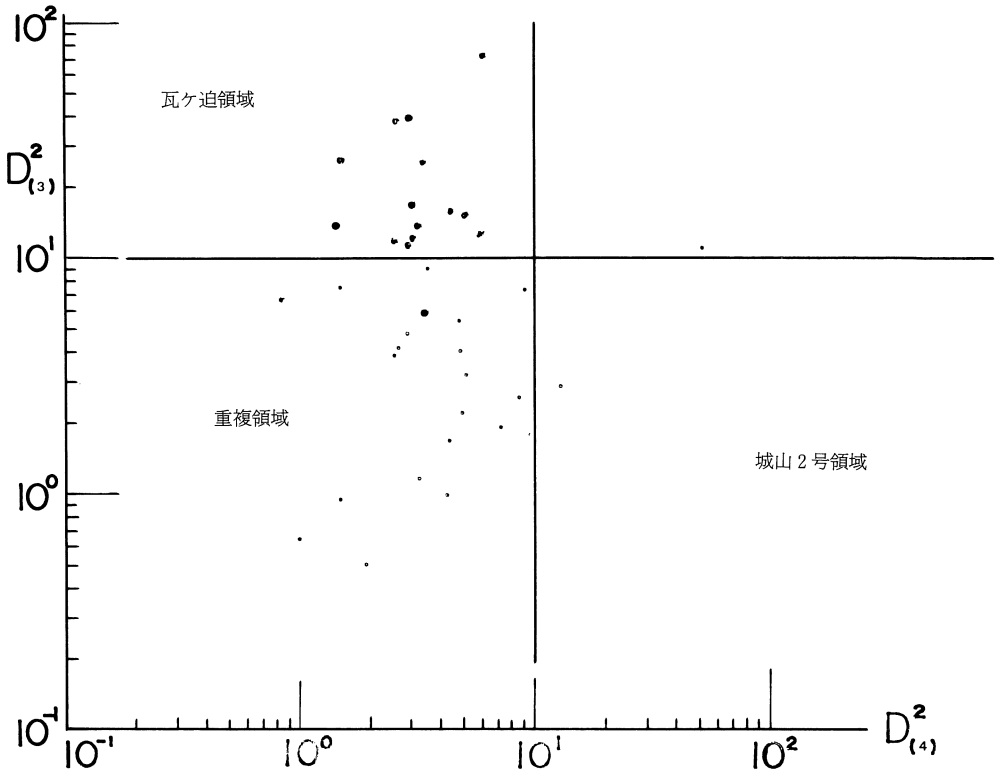
対し、十前垣遺跡の須恵器はすべて、中津群産である。これに対して、小迫墳墓群と稙田市遺跡の須恵器はすべて大阪陶邑産である点も注目に値する。これらの遺跡は5～6世紀代の遺跡と思われる。そして、8世紀代以後では最早、大阪陶邑産は検出されず、地元、中津群産の須恵器が大勢を占めるものと思われる。この模様は今後、さらに詳しい研究を進めることによって明らかにされるだろう。



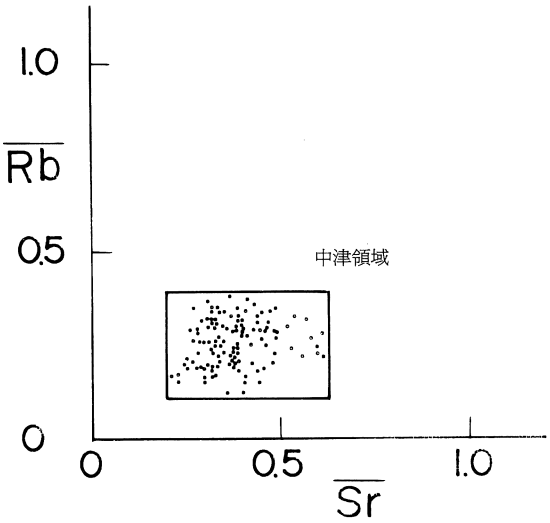
第107図　城山１号窯体内および灰原出土須恵器の相互識別（Ｋ，Ｃａ，Ｒｂ，Ｓｒ因子使用）



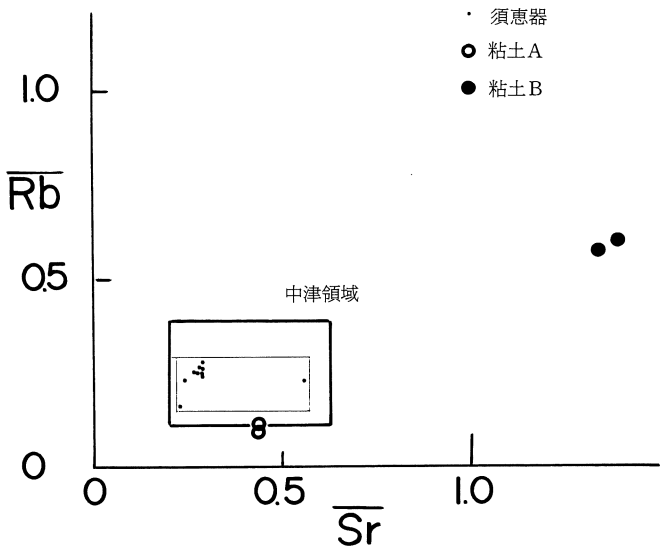
第108図　城山１号窯と２号窯の相互識別（Ｋ，Ｃａ，Ｒｂ，Ｓｒ因子使用）



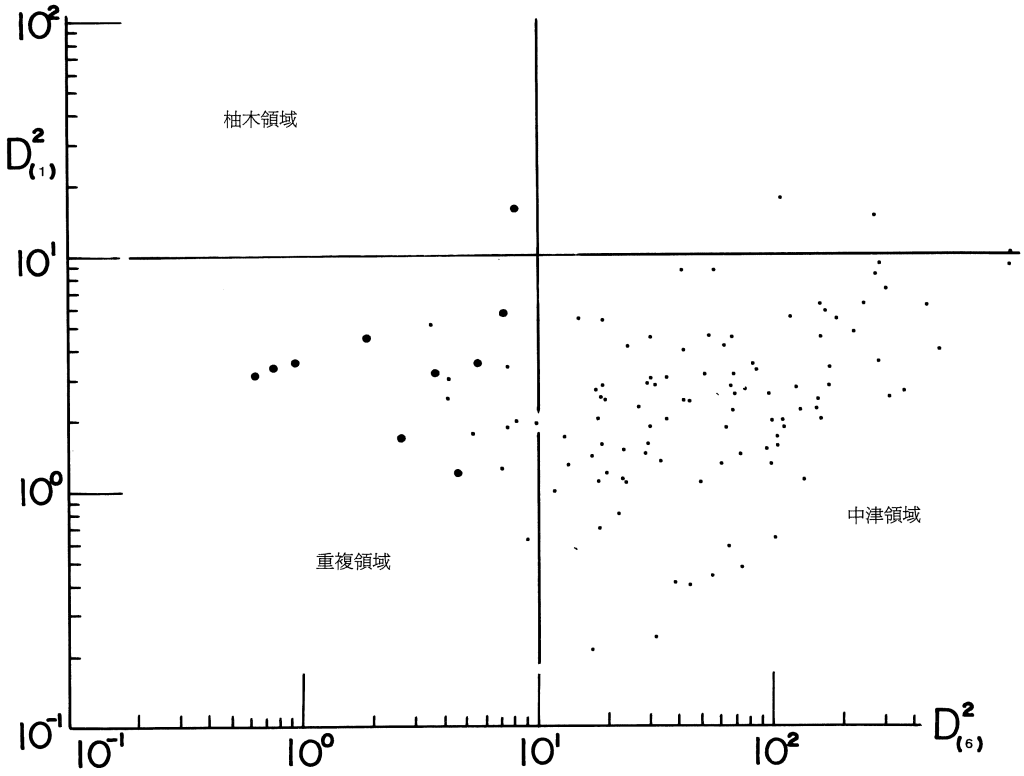
第109図　瓦ケ迫窯と城山２号窯の相互識別（Ｋ，Ｃａ，Ｒｂ，Ｓｒ因子使用）



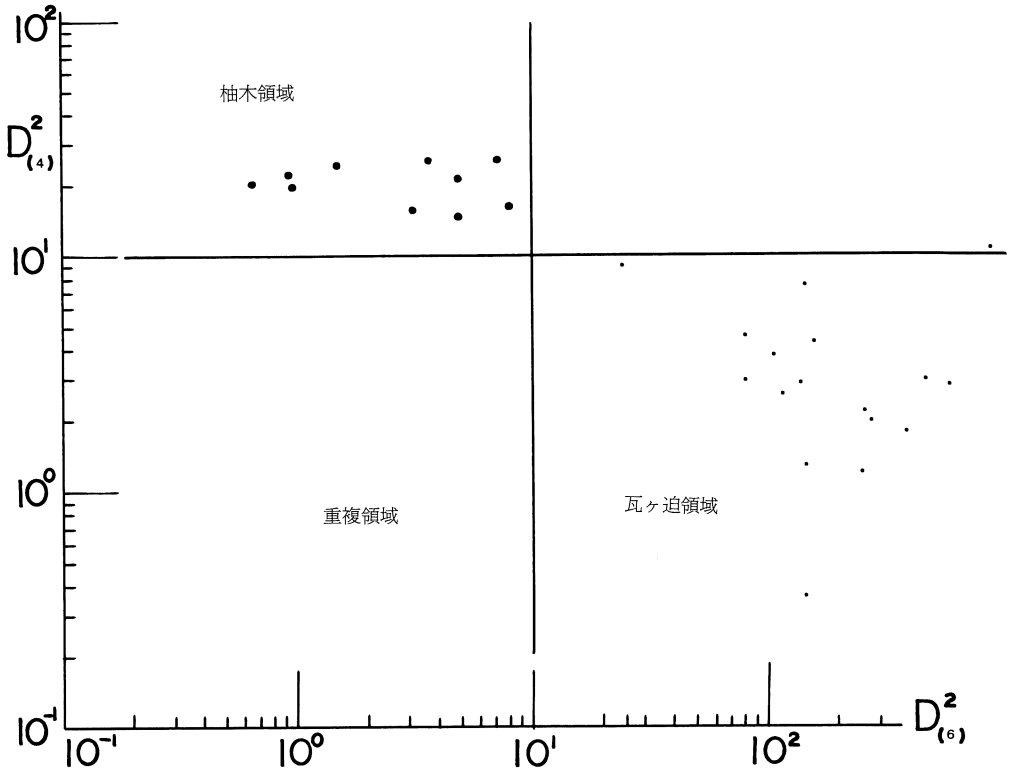
第110図　中津群の須恵器のＲｂ－Ｓｒ分布図



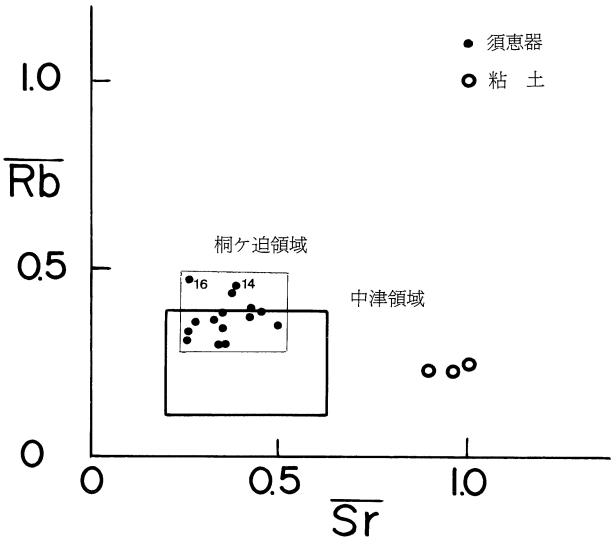
第111図　柚木窯出土須恵器のRb－Sr分布図



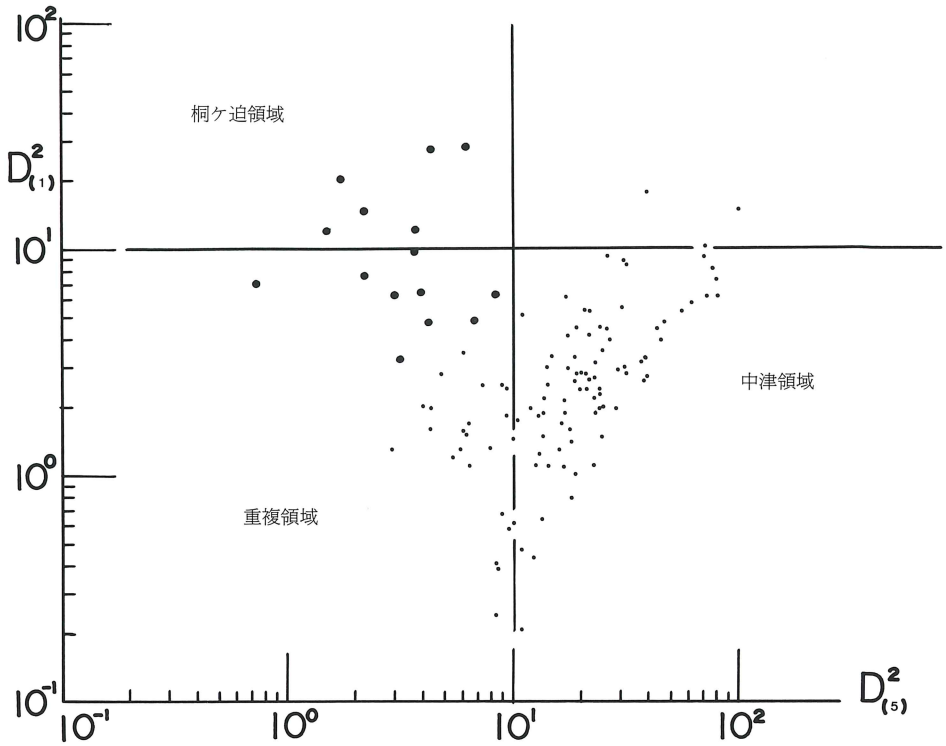
第112図　中津群と柚木窯の相互識別（K，Ca，Rb，Sr因子使用）



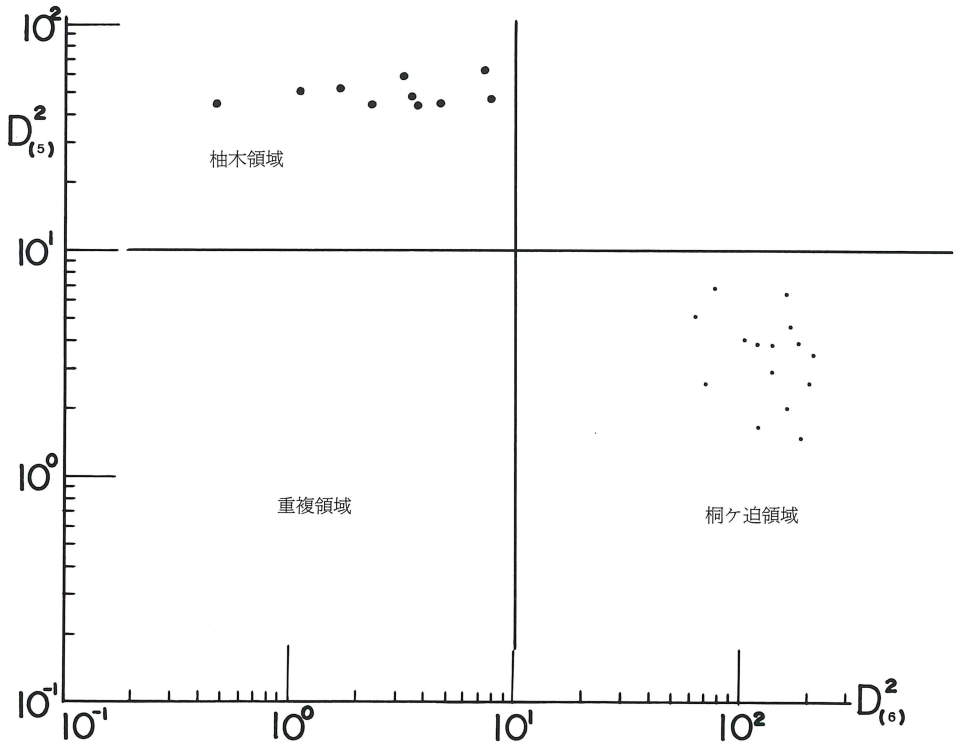
第113図　柚木窯と瓦ケ迫窯の相互識別（Ca, Fe, Rb, Sr因子使用）



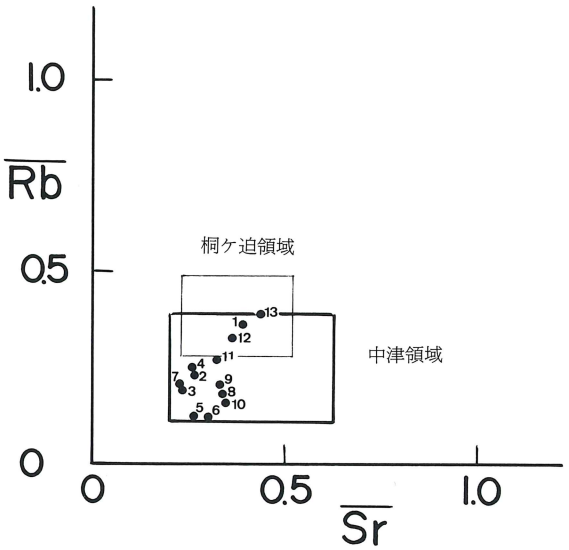
第114図　桐ケ迫窯出土須恵器のRb－Sr分布図



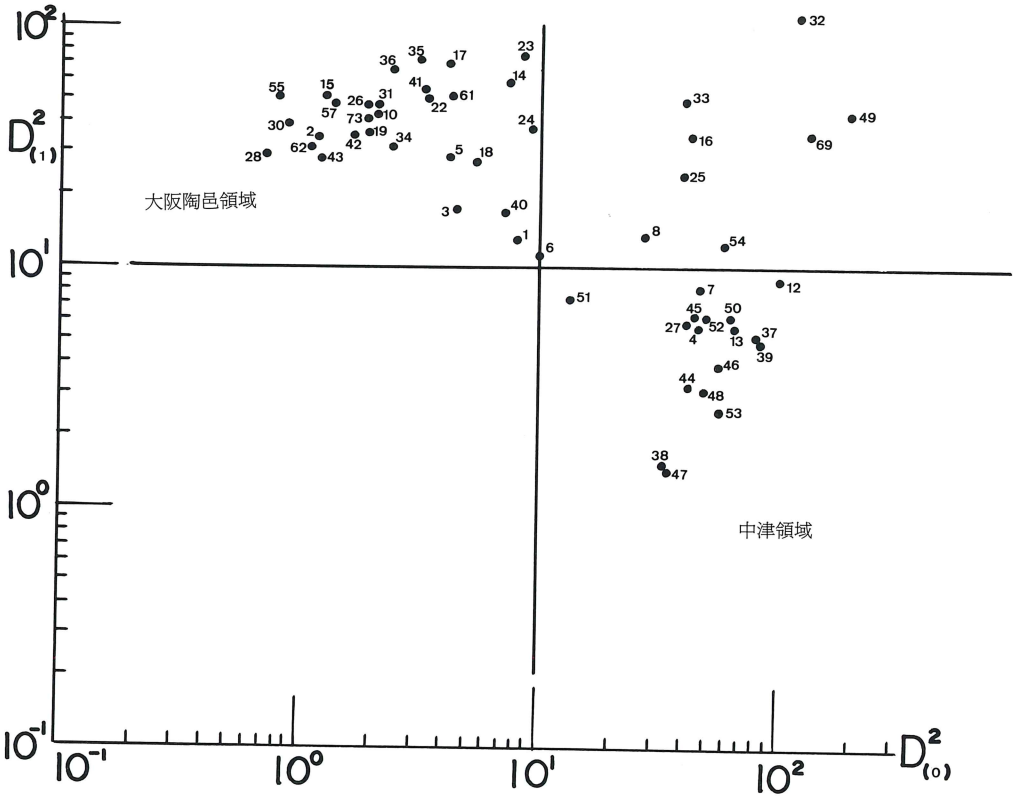
第115図　中津群と桐ケ迫窯の相互識別（K，Ca，Rb，Sr使用）



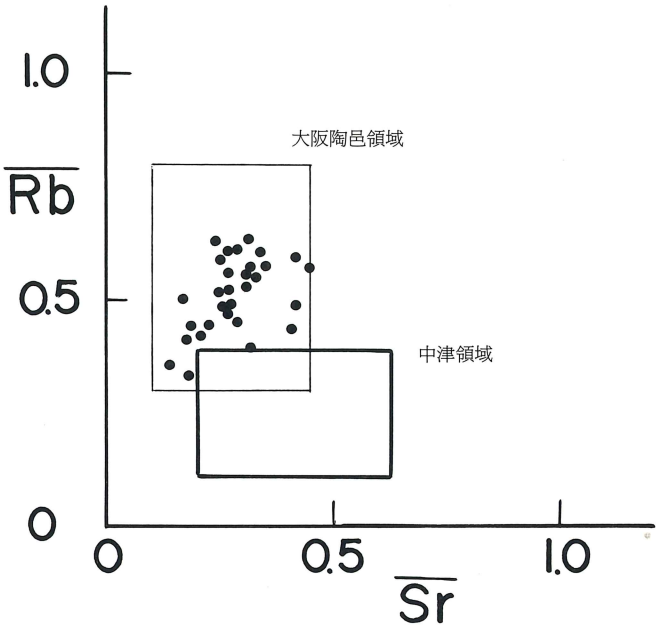
第116図　柚木窯と桐ケ迫窯の相互識別（K，Ca，Fe，Rb因子使用）



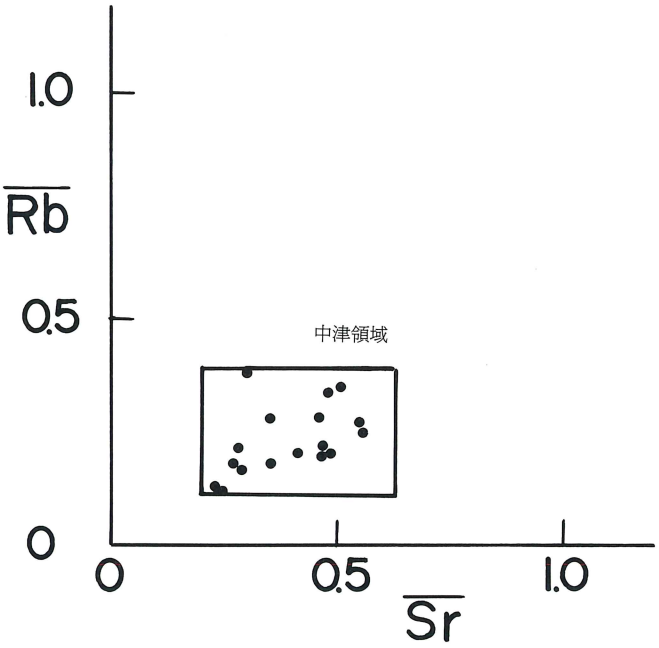
第117図　桐ケ迫２号墳出土須恵器のＲｂ－Ｓｒ分布図



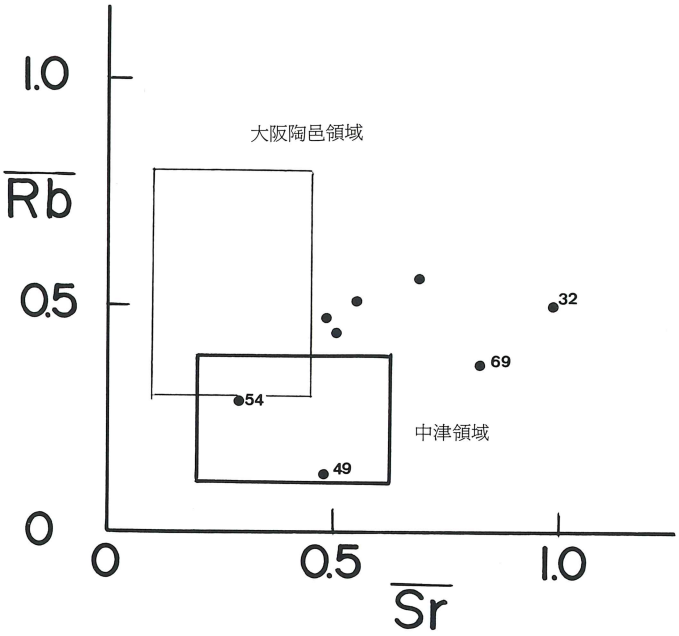
第118図　県内遺跡出土須恵器の産地推定（Ｋ，Ｃａ，Ｒｂ，Ｓｒ因子使用）



第119図　大阪陶邑産と推定されたもののRb－Sr分布図



第120図　中津群産と推定されたもののRb－Sr分布図



第121図　産地不明となったもののＲｂ－Ｓｒ分布図

第７表　柚木窯出土須恵器の分析値

No		K	Ca	Fe	Rb	Sr
1	須恵器	0.207	0.160	3.54	0.248	0.275
2	〃	0.184	0.173	3.55	0.257	0.289
3	〃	0.187	0.158	3.65	0.261	0.289
4	〃	0.208	0.152	3.53	0.270	0.289
5	〃	0.169	0.158	3.70	0.238	0.286
6	〃	0.178	0.139	3.35	0.247	0.269
7	〃	0.187	0.150	3.60	0.262	0.277
8	〃	0.164	0.147	3.37	0.230	0.244
9	〃	0.144	0.171	3.61	0.158	0.232
10	〃	0.149	0.279	3.31	0.231	0.561
11	粘土Ａ	0.153	0.349	2.58	0.099	0.432
12	〃	0.142	0.353	2.79	0.110	0.443
13	粘土Ｂ	0.381	0.479	1.72	0.597	1.39
14	〃	0.382	0.469	1.78	0.579	1.34

第8表　桐ケ迫遺跡出土須恵器の分析値

	No		K	Ca	Fe	Rb	Sr	中津群からのD^2	桐ケ迫窯からのD^2	推定産地
桐ケ迫2号墳	1	杯フタ	0.210	0.198	2.12	0.357	0.390	17	13	不　明
〃	2	杯身	0.168	0.130	2.52	0.232	0.258	3.3	19	中津群
〃	3	〃	0.124	0.120	2.33	0.193	0.234	7.1	40	〃
〃	4	杯フタ	0.171	0.146	2.36	0.238	0.257	3.8	15	〃
〃	5	杯身	0.094	0.155	2.82	0.124	0.258	7.9	53	〃
〃	6	杯フタ	0.094	0.161	2.85	0.122	0.301	6.7	57	〃
〃	7	〃	0.145	0.124	2.18	0.202	0.229	4.9	26	〃
〃	8	〃	0.131	0.164	2.46	0.182	0.336	4.0	40	〃
〃	9	杯身	0.139	0.166	2.54	0.203	0.329	4.5	34	〃
〃	10	〃	0.116	0.161	2.57	0.162	0.337	4.9	50	〃
〃	11	高杯	0.230	0.185	3.79	0.270	0.323	0.50	11	〃
〃	12	カメ	0.226	0.206	2.20	0.329	0.359	6.3	2.3	中津群又は桐ケ迫窯
〃	13	〃	0.268	0.238	2.11	0.390	0.432	11	2.9	〃
桐ケ迫1号窯	14	杯身	0.272	0.238	2.41	0.452	0.385			
〃	15	〃	0.243	0.253	2.63	0.367	0.417			
〃	16	〃	0.282	0.144	2.22	0.470	0.264			
〃	17	杯	0.274	0.219	2.13	0.436	0.384			
〃	18	〃	0.221	0.200	2.12	0.341	0.351			
〃	19	〃	0.215	0.157	1.94	0.313	0.255			
〃	20	杯フタ	0.238	0.202	1.86	0.314	0.261			
〃	21	高杯	0.224	0.280	2.19	0.295	0.359			
〃	22	ツボ	0.252	0.171	1.91	0.362	0.278			
〃	23	〃	0.254	0.217	1.97	0.360	0.328			
〃	24	〃	0.270	0.214	2.50	0.373	0.348			
〃	25	カメ	0.265	0.282	2.86	0.345	0.501			
〃	26	〃	0.274	0.289	2.15	0.395	0.432			
〃	27	〃	0.212	0.216	2.60	0.291	0.354			
〃	28	〃	0.254	0.262	2.31	0.387	0.449			
〃	29	粘土	0.167	0.416	4.52	0.258	1.01			
〃	〃	〃	0.166	0.411	5.33	0.233	0.887			
〃	〃	〃	0.171	0.413	3.91	0.235	0.960			

第９表　県内遺跡出土須恵器の分析値

	No.		K	Ca	Fe	Rb	Sr	大阪陶色からのD²	中津群からのD²	推定産地
上ノ原横穴	1	６Ｃ中	0.282	0.033	3.28	0.332	0.178	8.0	13	大阪陶邑
〃	2	〃	0.427	0.086	2.53	0.560	0.270	1.2	34	〃
〃	3	５Ｃ末	0.332	0.047	3.81	0.415	0.211	4.5	18	〃
〃	4	〃	0.125	0.157	2.94	0.179	0.272	46	5.7	伊藤田or朝倉群
〃	5	〃	0.342	0.028	2.19	0.352	0.139	4.2	29	大阪陶邑
〃	6	６Ｃ末	0.321	0.117	2.62	0.389	0.324	10	11	〃
〃	7	〃	0.087	0.108	2.38	0.125	0.231	48	8.2	伊藤田
〃	8	〃	0.361	0.254	1.70	0.435	0.505	27	14	不明
〃	9		－	－	－	－	－	－	－	－
樋多田遺跡	10		0.432	0.082	1.82	0.607	0.271	2.1	43	大阪陶邑
寺迫横穴	11	７Ｃ初	－	－	－	－	－	－	－	－
舟塚古墳	12	７Ｃ前半	0.191	0.401	4.62	0.202	0.491	102	9.0	伊藤田
〃	13	〃	0.283	0.372	2.58	0.343	0.477	66	5.8	〃
竜頭古墳	14	６Ｃ後半	0.492	0.157	2.13	0.490	0.424	7.4	59	大阪陶邑
〃	15	〃	0.468	0.088	2.18	0.485	0.275	1.3	51	〃
〃	16	〃	0.283	0.276	2.40	0.475	0.478	43	35	不明
飛山遺跡	17	６Ｃ末	0.527	0.082	2.38	0.569	0.315	4.3	7.0	大阪陶邑
〃	18	７Ｃ初	0.340	0.039	2.17	0.497	0.167	5.5	27	〃
〃	19	６Ｃ末	0.406	0.046	3.01	0.436	0.185	1.9	36	〃
屋宗遺跡	21	７Ｃ初	－	－	－	－	－	－	－	－
〃	22	〃	0.446	0.057	1.85	0.632	0.240	3.4	50	大阪陶邑
〃	23	７Ｃ前半	0.493	0.166	2.04	0.434	0.413	8.7	75	〃
〃	24	７Ｃ初	0.511	0.267	2.58	0.569	0.450	9.2	38	〃
〃	25		0.476	0.401	3.54	0.511	0.546	40	24	不明
蟹喰横穴	26	７Ｃ前半	0.456	0.095	2.22	0.626	0.317	1.9	47	大阪陶邑
〃	27	〃	0.304	0.275	2.56	0.354	0.506	41	5.9	伊藤田
三反田遺跡	28	６Ｃ代	0.438	0.129	2.99	0.518	0.270	0.71	29	大阪陶邑
〃	29	〃	－	－	－	－	－	－	－	－
羽野横穴	30	５Ｃ後半	0.468	0.124	2.19	0.549	0.334	0.89	40	大阪陶邑
〃	31	６Ｃ中	0.460	0.058	2.34	0.587	0.247	2.1	45	〃
〃	32	７Ｃ後半	0.557	0.487	2.64	0.498	0.982	120	117	不明
北友田遺跡	33	７Ｃ初	0.482	0.318	3.01	0.555	0.688	40	50	〃
前田遺跡	34		0.442	0.174	2.95	0.453	0.293	2.4	32	大阪陶邑
〃	35		0.548	0.129	2.08	0.573	0.354	3.1	73	〃
〃	36		0.554	0.174	2.62	0.558	0.306	2.4	68	大阪陶邑
〃	37		0.238	0.360	3.40	0.272	0.554	80	5.1	伊藤田
〃	38		0.178	0.150	3.23	0.212	0.280	33	1.5	〃
〃	39		0.240	0.376	4.37	0.246	0.556	84	5.0	〃
〃	40		0.307	0.079	2.42	0.443	0.225	7.1	17	大阪陶邑
〃	41		0.474	0.073	2.29	0.527	0.310	3.4	52	〃
〃	42		0.423	0.065	2.54	0.478	0.255	1.7	36	〃
〃	43		0.436	0.147	2.66	0.479	0.270	1.2	29	〃
十前垣遺跡	44		0.135	0.120	2.21	0.172	0.293	42	3.3	伊藤田

	No.		K	Ca	Fe	Rb	Sr	大阪陶色からのD²	中津群からのD²	推定産地
十前垣遺跡	45		0.101	0.091	2.55	0.124	0.243	44	6.3	〃
〃	46		0.201	0.208	1.94	0.222	0.468	55	3.9	〃
〃	47		0.218	0.188	2.57	0.284	0.349	33	1.5	〃
〃	48		0.142	0.132	2.12	0.175	0.349	48	3.3	〃
〃	49		0.132	0.542	4.39	0.133	0.482	190	44	不　明
〃	50		0.166	0.179	1.98	0.198	0.470	64	6.2	伊藤田
〃	51		0.285	0.130	2.25	0.381	0.296	13	7.4	〃
〃	52		0.209	0.191	2.74	0.283	0.458	48	6.0	〃
〃	53		0.159	0.214	2.44	0.201	0.406	57	2.6	〃
小迫墳墓群	54		0.298	0.351	3.13	0.293	0.293	60	12	不　明
〃	55		0.512	0.135	2.59	0.597	0.340	0.82	50	大阪陶邑
〃	57		0.489	0.086	2.70	0.606	0.272	1.4	49	〃
植田市遺跡	61		0.505	0.141	1.92	0.594	0.416	4.3	53	〃
〃	62		0.416	0.070	2.41	0.509	0.245	1.1	31	〃
〃	69		0.281	0.453	2.40	0.369	0.820	133	36	不　明
〃	73		0.409	0.051	3.44	0.409	0.175	2.0	42	大阪陶邑

3　草場窯跡出土炭の樹種

大分県林業水産部林業試験場木材部　　**城　井　秀　幸**

試料炭材を水で洗浄し、十分乾燥させた後パラフィンで包埋した。

包埋した試料をミクロトームで薄切りして、木口、柾目、板目面のプレパラートを作成し、オリンパス社製の偏光顕微鏡（Model　BHSP）で観察した。

観察結果は第10表のとおりで、出土したすべての炭材を試料としている訳ではないが観察した炭材（No.1～No.4）はすべて広葉樹材であった。

No.1（F-II-6-1）及び、No.2（F-II-6-2）出土炭は、単独道管が放射方向にならんでおり、アカガシ亜属あるいはマテバシイ属と考えられる。（写真１～３）

No.３（E-II-12－2）出土炭は、散孔材で、１年輪を通じてほぼ均等に道管が分布している。年輪界は、はっきりしている。（写真４）

No.４（第６トレンチ）出土炭は、環孔材で、直径の大きい道管が年輪界に沿って列をなして配列している。（詳細については第10表参照）

また、一部に未炭化部が観察された。（写真５～６）

炭の樹種同定にあたり、ご多忙中、不完全な試料にもかかわらず、全面的なご指導、ご協力を戴きました、九州大学農学部小田一幸助教授に心から感謝の意を表します。

（参考文献）

１）　島地謙・伊東隆夫：図説木材組織、東京、地球社、1982。

２）　林昭三：日本産木材顕微鏡写真集、京都大学木質科学研究所、1991。

第10表　出土した炭の樹種同定結果一覧

NO.	樹　　種	備　　考
NO.1（F-II-6-1）	アカガシ亜属，マテバシイ属	
NO.2（F-II-6-2）	〃	
NO.3（E-II-12-2）	同定不能 （広葉樹散孔材）	
NO.4（第６トレンチ）	同定不能 （広葉樹環孔材）	（道管の配列） 孔圏部は多列 孔圏外は散在状 （放射組織） 組織の大きさ 多列 高さ　１㎜以内 幅　　中庸 分布形式　拡散 構成細胞　異性III型

写真１　木口面×40

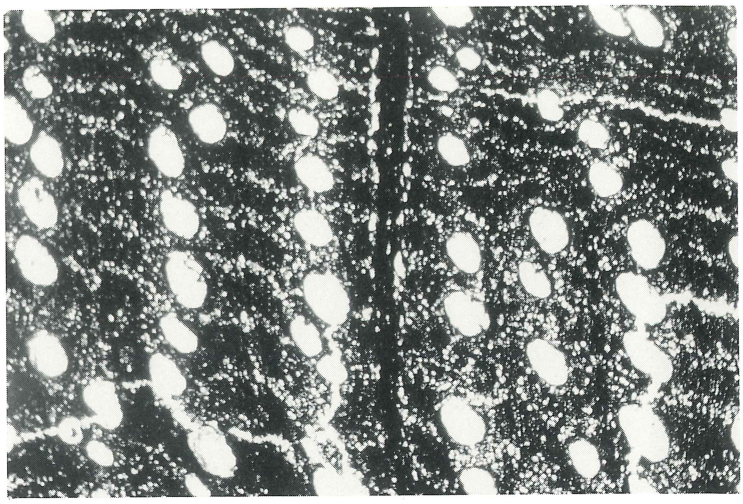


写真２　板目面×40

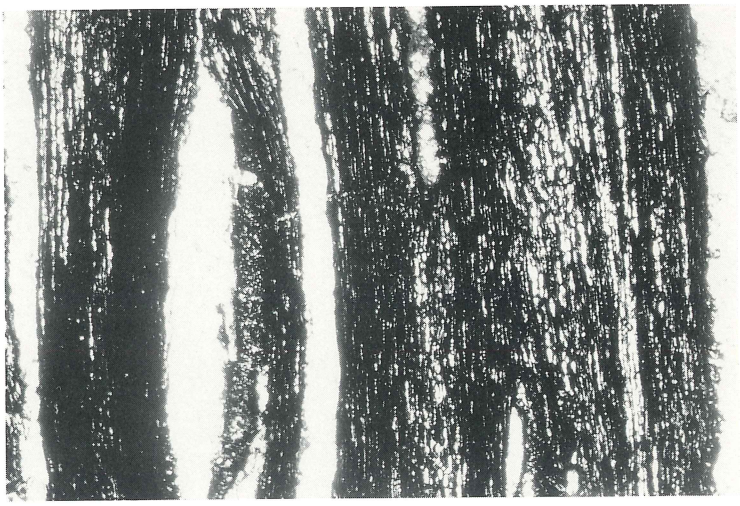
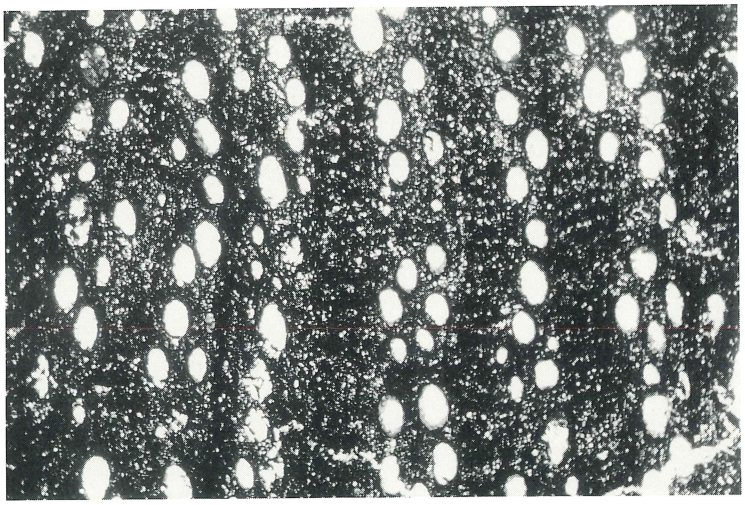


写真３　木口面×40



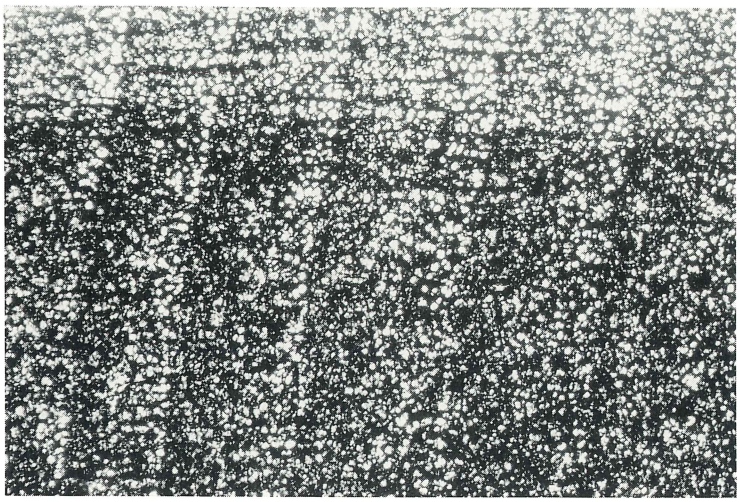


写真 4　木口面×40

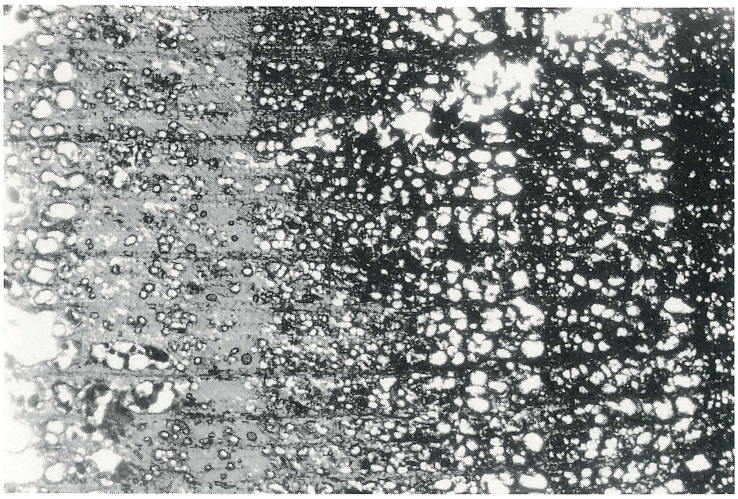


写真 5　木口面×40

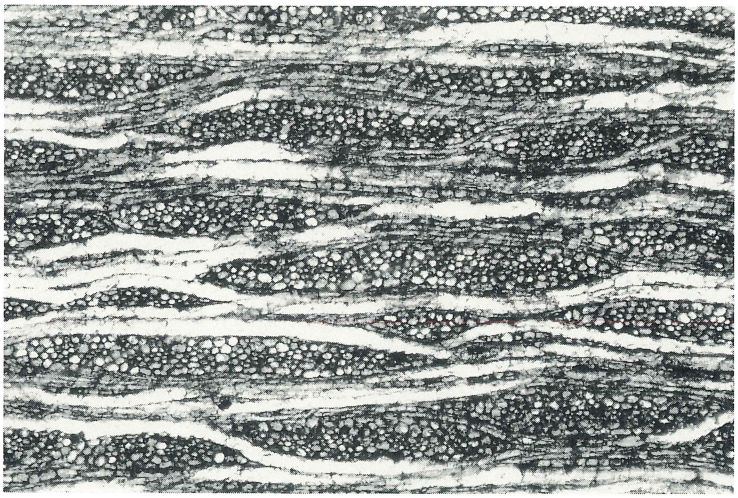


写真 6　板目面×40

第 6 章　ま　と　め

九州における古代窯業は多くが北部九州地域に集中する。また多くの資料が公にされ、当時の須恵器・瓦などの生産実体を究明する大きな手掛りが提供されている。こうしたなかで、伊藤田窯跡群は古墳時代から始まる須恵器製産地としては現在のところ東九州でもっとも南に位置する、と理解されている。

調査は、道路建設という40m幅のトレンチが窯跡群の分布する丘陵に設定されたものである。従って調査された窯跡は窯跡群の限られた部分の一様相を示すに留まる。しかし最近の調査結果をみると、宇佐市山本に虚空蔵寺瓦窯が発見、調査され注目を集めるなど窯業遺跡の検出例が増加し、伊藤田窯跡群周辺及び近隣にも古墳時代に限らず歴史時代の窯の分布が知られるようになった。このことは、この地域の窯業が断続的ながら長期間にわたり広い範囲で展開していたことを示している。

調査では次に示す 3 つの自然科学的調査を併せて実施した。①熱残留磁気年代測定、②胎土分析、③燃料材の樹種同定である。①については必ずしも考古年代と合致するものではなかったが、他地域では整合する事例も多くあり、地域的な地磁気補正を含む精度の向上に伴って今後年代測定の有効な手段となろう。②は伊藤田窯跡群、周辺窯跡及び県内遺跡の須恵器について行った。伊藤田窯産須恵器の分布域を胎土分析を通じて把えようと試みたものである。併せて他地域産須恵器の搬入状況を概観するものであった。この中で、上ノ原横穴墓群では同時期の副葬品中に伊藤田窯産と陶邑産が共伴することが分析結果として提示されている。在地窯が操業している時期にもかかわらず他地域の須恵器がもたらされている事実は、伊藤田窯跡群の須恵器生産能力と須恵器の需要・供給に関わる問題を示すものである。③は窯の燃料となった木材の種類を同定することで窯場の植生、燃料材の選択、燃焼効率などの解明を目指したものであった。良好な試料が得られなかったが精力的な分析の結果、マテバシイ属など広葉樹であることが判明した。以上のように考古学にとって有為な成果が得られた。

調査を行った 3 基の窯の出土須恵器が編年の流れにおいて、ＴＫ43→ＴＫ209→ＴＫ217とそれぞれ連続する 3 型式に該当することは、型式変化の推移を考える上で幸運なことであった。ここで得られた須恵器の多くは窯内に出土位置を限定され、一括資料として重要な意味をもつ。そして瓦ケ迫窯出土の杯ヘラ記号はこの窯独特の形状と記入位置をもつものであり、窯の特定に際し有効な材料を提供したものといえよう。須恵器は、従来から時期判定の指標として重要な位置付けがなされている。汎日本的に出土することもその理由のひとつである。伊藤田窯跡群から出土した須恵器の様式は九州他地域、畿内との比較において矛盾がないものであった。

今回の調査は伊藤田窯跡群に、窯構造、製品である須恵器において斉一性の高い様相を確認したものといえる。地方の窯場の在り方を考える上でひとつの成果であったと考える。

付　遺物観察表

— 凡　例 —

遺物番号は窯および遺構ごとに通し番号とし、
実測図、写真番号と共通する。

草　場　窯　跡

図版番号	器種	法量 口径 受部径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	残存度	出土地	備考
11図1	杯蓋	11.7 — 3.6	横ナデ 天井部回転ヘラ切り	砂粒若干、細砂やや多量。堅緻、半還燃焼成。 (内)淡茶褐色を基調とする。 (外)暗茶褐色を基調とする。	完形	窯内	2とセット
2	杯身	10.3 12.5 3.5	横ナデ 底部回転ヘラ切り 後円方向ナデ	細砂若干混入。堅緻、酸化燃焼成。 (内)灰褐色を基調とする。 (外)淡茶褐色を基調とする。	完形	窯内	1とセット
3	杯蓋	11.7 — 3.9	横ナデ 天井部回転ヘラ切り	細砂若干混入。堅緻、酸化燃焼成。 (内)暗茶褐色を基調とする。 (外)暗茶褐色を基調とする。	完形	窯内	4とセット
4	杯身	10.3 12.7 3.6	横ナデ　底部2回転ヘラ切り後多方向粗雑ナデ	細砂若干混入。 堅緻、酸化燃焼成。 暗茶褐色を基調とする。	完形	窯内	3とセット
5	杯蓋	12.2 — 4.0	横ナデ 天井部回転ヘラ切り	白色細砂、角閃石粒微量。 良好。 暗赤灰色を基調とする。	完形	窯内	6とセット
6	杯身	10.3 12.6 3.4	横ナデ 底部回転ヘラ切り	白色細砂、角閃石粒微量。 良好 暗赤灰色を基調とする。	完形	窯内	5とセット
7	杯蓋	12.1 — 4.0	横ナデ 天井部回転ヘラ切り	良粒細砂若干混入。堅緻、酸化燃焼成。 (内)淡赤褐色を基調とする。 (外)淡赤褐色を基調とする。	完形	窯内	8とセット
8	杯身	10.5 12.7 3.9	横ナデ 底部回転ヘラ切り 後多方向ナデ	細砂やや多量混入。堅緻、酸化燃焼成。 (内)明赤褐色を基調とする。 (外)淡茶褐色を基調とする。	完形	窯内	7とセット
9	杯蓋	11.9 — 3.9	横ナデ 天井部右回転ヘラ切り	細砂若干。 堅緻、酸化燃焼成。 淡茶褐色を基調とする。	完形	窯内	10とセット
10	杯身	10.7 12.8 3.3	横ナデ 底部右回転ヘラ切り	砂粒岩石、細砂やや多量。 堅緻、酸化燃焼成。 暗茶褐色を基調とする。	完形	窯内	9とセット
11	杯蓋	11.8 — 3.9	横ナデ 天井部回転ヘラ切り	白色細砂、内外面に若干黒色破裂粒。良好。 (内)淡赤灰色を基調とする。 (外)暗赤灰色を基調とする。	完形	窯内	12とセット
12	杯身	10.6 12.7 3.6	横ナデ 底部回転ヘラ切り	白色細砂、内外面に黒色破裂粒若干。良好。 (内)淡赤褐色を基調とする。 (外)暗赤褐色を基調とする。	完形	窯内	11とセット
13	杯蓋	12.2 — 4.0	横ナデ 天井部回転ヘラ切り後ナデ	細砂若干。堅緻、酸化焼成。 (内)暗茶褐色、茶褐色を半分する。 (外)淡茶褐色を基調とする。	完形	窯内	14とセット
14	杯身	10.8 13.5 3.5	横ナデ 底部回転ヘラ切り 後多方向ナデ	良粒細砂若干。 堅緻、酸化焼成。 淡赤褐色を基調とする。	完形	窯内	13とセット
15	杯蓋	12.3 — 4.1	横ナデ 天井部回転ヘラ切り	白色細砂、斜長石粒、内外面に黒色破裂粒。通有。 (内)暗赤灰色を基調とする。 (外)暗灰褐色を基調とする。	ほぼ完形	窯内	16とセット
16	杯身	10.8 12.6 3.3	横ナデ 底部回転ヘラ切り	白色細砂、斜長石粒少量。通有。 (内)暗赤灰色を基調とする。 (外)暗灰褐色を基調とする。	完形	窯内	15とセット
17	杯蓋	12.0 — 4.2	横ナデ 天井部右回転ヘラ切り	細砂若干。堅緻、半還元。 (内)茶褐色を基調とする。 (外)暖茶褐色を基調とする。	完形	窯内	18とセット
18	杯身	10.8~11.3 13.2 4.1	横ナデ 底部右回転ヘラ切り	砂粒細砂若干。堅緻、半還元。 (内)淡茶褐色を基調とする。 (外)暖茶褐色を基調とする。	完形	窯内	17とセット
19	杯蓋	12.3 — 3.65	横ナデ 天井部回転ヘラ切り	白色細砂、斜長石粒微量。通有。 (内)淡赤灰色を基調とする。 (外)暗赤灰色を基調とする。	ほぼ完形	窯内	20とセット
20	杯身	11.3 13.3 3.4	横ナデ 底部回転ヘラ切り	白色細砂、斜長石粒。通有。 (内)淡赤灰色を基調とする。 (外)暗赤灰色を基調とする。	ほぼ完形	窯内	19とセット

図版番号	器種	法量 口径 受部径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	残存度	出土地	備考
12図21	杯蓋	11.2 — 3.5	横ナデ 天井部回転ヘラ切り	白色細粒若干、斜長石粒 良好。 暗灰褐色を基調とする。	1／2欠失	窯内	
22	杯蓋	12.8 — 3.7	横ナデ 天井部右回転ヘラ切り	白色細粒若干。 良好。 赤灰褐色を基調とする。	口縁～体部1／2欠失	窯内	
23	杯蓋	11.8 — 3.8	横ナデ 天井部右回転ヘラ切り	細粒若干、内面に黒色破裂粒若干。不良(堅緻)。 (内)暗赤褐色を基調とする。 (外)赤褐色を基調とする。	1／2欠失	窯内	
24	杯蓋	12.0 — 3.8	横ナデ 天井部回転ヘラ切り	白色細砂、斜長石粒。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	口縁部1／2欠失	窯内	
25	杯蓋	12.0 — 3.9	横ナデ 天井部回転ヘラ切り	白色細砂。通有。 (内)淡赤灰色を基調とする。 (外)赤灰色を基調とする。	口縁部1／4欠失	窯内	
26	杯蓋	12.0 — —	横ナデ	斜長石粒、白色細粒若干。良好。 (内)暗灰色を基調とする。 (外)暗赤灰色を基調とする。	1／5残存	窯内	
27	杯蓋	12.1 — 3.8	横ナデ 天井部回転ヘラ切り	白色細砂。通有。 (内)淡赤灰色を基調とする。 (外)暗赤灰色を基調とする。	ほぼ完形	窯内	
28	杯蓋	12.1 — 4.1	横ナデ 天井部回転ヘラ切り	白色細砂、内面に黒色破裂粒若干。通有。 (内)淡赤灰色を基調とする。 (外)暗赤灰色を基調とする。	口縁部1／3欠失	窯内	
29	杯蓋	12.2 — 3.3	横ナデ 天井部回転ヘラ切り	内外面に黒色破裂粒。 良好。 灰褐色を基調とする。	1／5残存	窯内	
30	杯蓋	12.2 — 4.0	横ナデ 天井部回転ヘラ切り	白色細砂、金雲母粒。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	ほぼ完形	窯内	
31	杯蓋	12.2 — —	横ナデ 天井部回転ヘラ切り	白色細粒若干、斜長石粒。良好。 灰褐色を基調とする。	1／5残存	窯内	
32	杯蓋	12.3 — 3.9	横ナデ 天井部回転ヘラ切り後ナデ	白色細砂。通有。 (内)淡赤灰色を基調とする。 (外)暗赤褐色を基調とする。	完形	窯内	
33	杯蓋	12.3 — 4.0	横ナデ 天井部右回転ヘラ切り	白色細粒若干、内外面に黒色破裂粒。良好。 灰褐色を基調とする。	口縁部～体部1／2欠失	窯内	
34	杯蓋	12.3 — 4.0	横ナデ 天井部回転ヘラ切り	内外面に黒色破裂粒。 良好。 赤褐色を基調とする。	口縁部～体部1／2欠失	窯内	
35	杯蓋	12.4 — 3.6	横ナデ 天井部回転ヘラ切り	白色砂粒若干。 良好。 灰褐色を基調とする。	1／4残存	窯内	
36	杯蓋	12.5 — 3.2	横ナデ 天井部回転ヘラ切り	白色細砂、斜長石粒微量。 通有。 暗赤灰色を基調とする。断面黒灰色。	口縁部1／2欠失	窯内	
37	杯蓋	12.5 — 3.8	横ナデ 天井部回転ヘラ切り	白色細砂。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	口縁部～体部2／3欠失	窯内	
38	杯蓋	12.6 — 3.1	横ナデ 天井部右回転ヘラ切り	白色細砂、内面に黒色破裂粒。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	口縁部1／3欠失	窯内	
39	杯蓋	12.6 — 3.5	横ナデ 天井部回転ヘラ切り	白色細砂、内外面に黒色破裂粒。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	口縁部1／3欠失	窯内	
40	杯蓋	12.6 — 3.5	横ナデ 天井部回転ヘラ切り	白色細砂。 通有。 暗赤灰色を基調とする。	ほぼ完形	窯内	
13図41	杯蓋	12.6 — 4.0	横ナデ 天井部回転ヘラ切り	白色細粒若干、黒色微細粒若干。 良好。 暗灰褐色を基調とする。	1／4残存	窯内	

図版番号	器種	法量 口径 受部径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	残存度	出土地	備考
42	杯蓋	12.6 — 4.2	横ナデ 天井部回転ヘラ切り	斜長石粒。通有。 (内)淡赤褐色を基調とする。 (外)暗赤褐色を基調とする。	完形	窯内	
43	杯蓋	12.7 — 4.2	細かく窯壁付着の為調整不明	白色細砂、斜長石粒。通有。 (内)淡赤灰色を基調とする。 (外)暗赤灰色を基調とする。	口縁部1／3欠失	窯内	
44	杯蓋	— — —	横ナデ 天井部回転ヘラ切り	白色細粒若干。良好。 (内)暗灰褐色を基調とする。 (外)灰オリーブ色を基調とする。	1／5残存	窯内	
45	杯蓋	— — 3.9	横ナデ 天井部回転ヘラ切り	内面に黒色破裂粒。良好。 (内)灰褐色を基調とする。 (外)暗灰褐色を基調とする。	1／4残存	窯内	
46	杯蓋	11.0 — —	横ナデ 天井部回転ヘラ切り後ナデ	白色細砂微量。 良好。 灰褐色を基調とする。	1／3残存	窯内	
47	杯蓋	11.9 — —	自然釉付着のため不明	白色石粒微量。不良。 (内)赤灰色を基調とする。 (外)灰褐色を基調とする。	1／6残存	窯内	
48	杯蓋	12.3 — —	自然釉付着のため不明	白色細砂。 通有。 灰褐色を基調とする。	1／4残存	窯内	
49	杯蓋	12.8 — —	自然釉付着のため不明	白色砂粒微量、斜長石微量。不良。 淡赤褐色を基調とする。	1／5残存	窯内	
50	杯蓋	13.1 — —	自然釉付着のため不明	白色細砂、石英粒、角閃石やや多量。良好。 赤灰色を基調とする。	破片	窯内	
51	杯蓋	11.3 — —	横ナデ	白色細砂。 良好。 灰褐色を基調とする。	口縁部1／4残存	窯内	
52	杯蓋	12.3 — —	横ナデ	白色細砂、斜長石粒。 通有。 淡灰色を基調とする。	口縁部1／5残存	窯内	
53	杯蓋	— — —	横ナデ	白色砂粒。 不良。 淡灰色を基調とする。	破片	窯内	
54	杯蓋	— — 3.4	横ナデ 天井部回転ヘラ切り	白色細砂。通有。 (内)赤褐色を基調とする。 (外)暗赤灰色を基調とする。	1／4残存	窯内	
55	杯蓋	13.1 — —	自然釉の為不明	白色細砂。 良好。 灰褐色を基調とする。	1／5残存	窯内	
56	杯蓋	13.6 — —	自然釉の為不明	白色細砂。 良好。 灰褐色を基調とする。	1／4残存	窯内	
57	杯蓋	— — —	横ナデ	白色砂粒。 通有。 黒灰色を基調とする。	破片	窯内	
58	杯蓋	— — —	横ナデ	白色細砂。 通有。 黒灰色を基調とする。	破片	窯内	
59	杯蓋	— — —	横ナデ	白色細砂。 通有。 黒灰色を基調とする。	破片	窯内	
60	杯蓋	— — —	横ナデ	白色細砂。 不良。 淡灰色を基調とする。	破片	窯内	
14図 61	杯蓋	— — —	横ナデ	白色細砂。 通有。 淡灰色を基調とする。	破片	窯内	
62	杯蓋	12.4 — —	自然釉の為不明	白色細砂、角閃石。 通有。 灰褐色を基調とする。	口縁部1／3残存	窯内	

図版番号	器種	法量 口径 受部径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	残存度	出土地	備考
63	杯蓋	— — —	横ナデ	白色細砂。通有。 (内)灰褐色を基調とする。 (外)黒灰色を基調とする。	破片	窯内	
64	杯蓋	— — —	横ナデ	白色細砂。 良好。 黒灰色を基調とする。	破片	窯内	
65	杯蓋	13.6 — —	横ナデ 天井部回転ヘラ切り後ナデ	白色細砂微量。 良好。 灰色を基調とする。	1／4残存	窯内	
66	杯蓋	14.1 — —	自然釉の為不明	白色細砂。 良好。 暗黒灰色を基調とする。	口縁部1／5残存	窯内	
67	杯蓋	— — —	横ナデ	白色細砂。 不良。 淡赤褐色を基調とする。	破片	窯内	
68	杯蓋	11.2 — —	横ナデ	白色細砂、斜長石。 通有。 灰褐色を基調とする。	口縁部1／6残存	窯内	
69	杯蓋	12.9 — —	横ナデ	白色細砂。通有。 (内)灰色を基調とする。 (外)赤灰色を基調とする。	1／5残存	窯内	
70	杯身	10.0 12.3 3.8	自然釉の為不明	白色細粒、黒色破裂粒。 良好。 暗灰褐色を基調とする。	口縁部～体部 2／3欠失	窯内	
71	杯身	10.1 12.2 3.3	横ナデ 底部回転ヘラ切り	白色細粒若干、内面に黒色破裂粒。 良好。 暗灰褐色を基調とするが赤黒褐色部分あり。	完形	窯内	
72	杯身	10.1 12.5 3.5	自然釉の為不明	白色細粒若干、内面に黒色破裂粒。良好。 断面暖灰褐色を基調とする。 内外面赤灰褐色を基調とする。	2／3残存	窯内	
73	杯身	10.1 12.4 3.5	横ナデ 底部回転ヘラ切り	白色細砂少量、斜長石粒。通有。 (内)暖灰褐色を基調とする。 (外)黒灰褐色を基調とする。	口縁部 1／3残存	窯内	
74	杯身	10.2 12.4 3.0	横ナデ 底部回転ヘラ切り	白色細砂、斜長石粒、内外面に黒色破裂粒若干。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	口縁部 1／3残存	窯内	
75	杯身	10.2 12.5 3.4	自然釉の為不明	白色細粒、黒色破裂粒。良好。 暖灰色を基調とするが、自然釉の為赤灰褐色。	1／3残存	窯内	
76	杯身	10.3 12.4 3.4	横ナデ 底部回転ヘラ切り	白色細砂、斜長石粒微量、内面に黒色破裂粒。 通有。 黒灰褐色を基調とする。	口縁部 1部欠失	窯内	
77	杯身	10.3 12.6 3.4	横ナデ 底部回転ヘラ切り	斜長石粒、内外面に黒色破裂粒、白色細粒。良好。 赤灰褐色を基調とする。	2／3残存	窯内	
78	杯身	10.3 12.7 —	自然釉の為不明	自色細粒若干、内面に黒色破裂粒。良好。 暗灰色を基調とする。	1／4残存	窯内	
79	杯身	10.4 12.4 3.4	横ナデ 底部回転ヘラ切り	白色細砂、金雲母粒、外面に黒色破裂粒。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	完形	窯内	
80	杯身	10.5 11.7 3.4	横ナデ 底部回転ヘラ切り	白色細砂、斜長石粒、角閃石粒微量。通有。 淡赤灰色～黒灰褐色を基調とする。	口縁部 1／3欠失	窯内	
81	杯身	10.6 13.0 3.5	横ナデ 底部回転ヘラ切り	斜長石粒、内面、外面の口縁部に黒色破裂粒。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	ほぼ完形	窯内	
15図 82	杯身	10.6 12.8 3.8	横ナデ 底部回転ヘラ切り	内面に黒色破裂粒。 良好。 暗灰褐色を基調とする。	1／3残存	窯内	
83	杯身	10.7 13.2 3.8	窯壁付着の為不明	白色細粒若干、斜長石粒若干、内面に黒色破裂粒。良好。暗灰褐色を基調とするが赤灰褐色部分有り。	1／4欠失	窯内	

図版番号	器種	法量 口径 受部径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	残存度	出土地	備考
84	杯身	10.8 13.2 3.5	横ナデ 底部回転ヘラ切り	白色細粒。良好。 (内)淡赤灰色を基調とする。 (外)暗赤灰色を基調とする。	完形	窯内	
85	杯身	10.8 13.0 3.6	自然釉、窯壁付着の為不明	斜長石粒、内外面に黒色破裂粒。良好。 (内)灰褐色を基調とする。 (外)暗灰褐色を基調とする。	ほぼ完形	窯内	
86	杯身	10.8 13.0 —	横ナデ	白色細砂、斜長石粒微量、内面、口縁部外面に黒色破裂粒。通有。淡赤灰色を基調とする。	口縁部 2／5残存 底部欠失	窯内	
87	杯身	10.9 13.0 3.5	横ナデ 底部回転ヘラ切り	白色細砂、斜長石粒少量、内外面に黒色破裂粒。通有。 暗灰褐色を基調とする。	ほぼ完形	窯内	
88	杯身	10.9 13.2 3.7	横ナデ 底部回転ヘラ切り	内面に白色細砂、多面口縁部に黒色破裂粒。通有。(内)淡赤灰色を基調とする。(外)暗赤灰色を基調とする。	口縁部 1／4欠失	窯内	
89	杯身	11.0 13.3 3.3	横ナデ 底部回転ヘラ切り	白色細砂、斜長石粒、内面に黒色破裂粒。通有。 黒灰褐色～淡赤灰色を基調とする。	口縁部 1／3残存	窯内	
90	杯身	11.0 13.1 3.4	横ナデ 底部回転ヘラ切り	白色細砂、斜長石粒。 通有。 暗赤灰色を基調とする。	完形	窯内	
91	杯身	10.3～ 11.5 12.8～ 13.4 3.5	横ナデ 底部回転ヘラ切り	白色細粒、内外面に黒色破裂粒。良好。 (内)暗灰色を基調とする。 (外)灰オリーブ色を基調とする。	口縁部 1／3欠失	窯内	
92	杯身	11.0 13.0 3.7	自然釉の為不明	白色細粒、内面に黒色破裂粒。良好。 赤灰褐色を基調とする。	口縁部 1部欠失	窯内	
93	杯身	11.0 12.7 3.8	自然釉の為不明	白色細砂若干、斜長石粒若干。良好。 灰褐色を基調とする。	1／3残存	窯内	
94	杯身	11.1 13.2 3.7	横ナデ 底部回転ヘラ切り 後ナデ	白色細砂、角閃石粒微量、内面に黒色破裂粒。通有。 暗灰褐色を基調とする。	口縁部 1部欠失	窯内	
95	杯身	11.1 13.1 3.7	自然釉の為不明	白色細粒若干、内外面に黒色破裂粒。良好。 暗灰褐色を基調とする。	完形	窯内	
96	杯身	11.4 13.4 3.5	横ナデ 底部右回転ヘラ切り	斜長石粒若干、内面に黒色破裂粒。良好。 灰褐色を基調とする。	口縁部 1／3欠失	窯内	
97	杯身	11.4 12.6 2.9	横ナデ 底部回転ヘラ切り 後ナデ	白色細砂、斜長石粒、内外面に黒色破裂粒。通有。淡褐色であるが付着物のため灰褐色を基調とする。	完形	窯内	
98	杯身	10.0 12.1 —	自然釉の為不明	白色砂粒、角閃石若干。やや不良。 灰褐色を基調とする。	口縁部 1／4残存	窯内	
99	杯身	10.1 12.2 —	自然釉の為不明	白色細砂、斜長石粒多量、良好。 灰褐色を基調とする。	口縁部 1／4残存	窯内	
16図 100	杯身	10.1 12.2 —	自然釉の為不明	白色砂粒、斜長石粒。 良好。 灰褐色を基調とする。	1／4残存	窯内	
101	杯身	10.3 12.2 —	自然釉の為不明	白色細砂、黒色破裂粒。良好。 灰色を基調とする。	1／4残存	窯内	
102	杯身	10.1 — —	自然釉の為不明	白色細粒若干。 良好。 灰褐色を基調とする。	破片	窯内	
103	杯身	10.3 12.5 —	自然釉の為不明	白色細砂、黒色破裂粒。 良好。 灰色を基調とする。	口縁部 1／4残存	窯内	
104	杯身	10.3 12.2 —	自然釉の為不明	白色細粒。 良好。 灰色を基調とする。	破片	窯内	

図版番号	器種	法量 口径 受部径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	残存度	出土地	備考
105	杯身	10.7 12.8	自然釉の為不明	白色細砂、斜長石粒若干。 良好。 灰褐色を基調とする。	口縁部 1／3残存	窯内	
106	杯身	11.1 13.5 —	自然釉の為不明	白色砂粒。 良好。 灰褐色を基調とする。	口縁部 1／4残存	窯内	
107	杯身	9.8 — —	自然釉の為不明	斜長石粒、黒色破裂粒。 良好。 灰褐色を基調とする。	破片	窯内	
108	杯身	9.6 11.9 —	横ナデ	斜長石粒、黒色破裂粒。 良好。 灰褐色を基調とする。	破片	窯内	
109	杯身	9.7 — —	自然釉の為不明	白色細粒若干。 良好。 赤灰色を基調とする。	破片	窯内	
110	杯身	— — —	横ナデ	白色細粒。 良好。 灰色を基調とする。	破片	窯内	
111	杯身	10.0 — —	自然釉の為不明	角閃石。 良好。 灰褐色を基調とする。	破片	窯内	
112	杯身	9.9 12.1 —	自然釉の為不明	斜長石粒。 良好。 赤灰色を基調とする。	破片	窯内	
113	杯身	— — —	横ナデ	黒色破裂粒。 良好。 灰褐色を基調とする。	破片	窯内	
114	杯身	— — —	自然釉の為不明	白色細粒、斜長石粒若干。 良好 青灰色を基調とする。	破片	窯内	
115	杯身	10.2 — —	横ナデ	斜長石粒、黒色破裂粒。 良好。 灰褐色を基調とする。	破片	窯内	
116	杯身	10.3 12.5 —	自然釉の為不明	白色細粒。 良好。 赤灰色を基調とする。	破片	窯内	
117	杯身	— — —	自然釉の為不明	白色細粒、黒色破裂粒。 良好。 灰褐色を基調とする。	破片	窯内	
118	杯身	— — —	横ナデ	斜長石粒若干、黒色細粒。 良好。 灰褐色を基調とする。	破片	窯内	
17図 119	高杯	14.2～ 14.7 — 12.2	回転ヘラ削り	白色細砂微量。 良好。 暖灰色を基調とする。	口縁部、 脚部１部欠失	窯内	
120	高杯	13.6 — 11.9	横ナデ	細砂やや多量。良好堅緻、２次焼成。 明灰色を基調とする。	口縁部 1／2欠失	窯内	
121	高杯	13.9 — 12.3	外面2/3に自然釉、付着物	細砂若干。 良好。 暖灰色を基調とする。	口縁部 1／3欠失	窯内	
122	高杯	— — —	自然釉の為不明	細砂若干。 良好。 暖灰褐色を基調とするが赤茶褐色部分有り。	口縁部1／2 脚端部欠失	窯内	
123	高杯	14.1 — 12.9	内外面右側1／2に自然釉 横ナデ	白色細粒やや多量。 良好。 暗灰色を基調とするが外面は黒茶褐色。	口縁部脚端部 １部欠失 ほぼ完形	窯内	
124	高杯	14.1 — 12.9	1／2に自然釉、付着物 横ナデ	細砂若干。 良好。 暖灰色～赤茶褐色を基調とする。	口縁部 １部欠失 ほぼ完形	窯内	
125	高杯	14.2 — 11.8	口縁部若干焼き歪 横ナデ	細砂若干。堅緻良好。 灰褐色を基調とする。	口縁部 1／3欠失	窯内	

図版番号	器種	法量 口径 受部径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	残存度	出土地	備考
126	高杯	14.3 — 12.5	自然釉の為不明	細砂やや多量。堅緻良好、2次焼成。 灰褐色を基調とする。	ほぼ完形	窯内	
18図 127	高杯	14.6 — 11.7	回転ヘラ削り後ナデ	細砂若干。 良好。 暖茶褐色を基調とする。	口縁部1／2 脚端部大半を欠失	窯内	
128	高杯	14.6 — 12.4	横ナデ 自然釉付着	白色細砂、斜長石粒、角閃石粒微量。 通有。 明灰褐色～暗赤灰色を基調とする。	ほぼ完形	窯内	
129	高杯	14.6 — 12.5	内外面自然釉、窯壁付着 横ナデ	白色細砂若干。 良好。 灰褐色～暖赤茶褐色を基調とする。	口縁部3／4 脚端部1部欠失	窯内	
130	高杯	14.7 — 12.8	内外面自然釉、付着物	細砂若干。 断面暖灰色を基調とする。 内外面暖赤茶褐色を基調とする。	口縁部3/4欠失 脚端部3/4欠失	窯内	
131	高杯	14.7 — 12.0	自然釉付着 横ナデ	白色細砂、斜長石粒微量、角閃石粒。 通有。 暗灰褐色～暗赤灰色を基調とする。	口縁部 1／3残存	窯内	
132	高杯	14.0 — 8.5	1／2に自然釉 横ナデ 焼に歪大	細砂微量。堅緻良好。 暖灰褐色を基調とする。	完形	窯内	
133	無蓋高杯	— — —	自然釉の為不明	白色細砂。 良好。 黒灰色を基調とする。	破片	窯内	
134	無蓋高杯	13.1 — —	横ナデ	白色細砂。 良好。 淡灰色を基調とする。	口縁部 1／3残存	窯内	
135	無蓋高杯	12.9 — —	ヘラ削り	白色細砂。 不良。 灰褐色を基調とする。	1／4残存	窯内	
136	無蓋高杯	13.0 — —	横ナデ 底部回転ヘラ削り 焼き歪顕著	細砂微量。 良好。 灰色を基調とする。	杯部1／2残存	窯内	
137	無蓋高杯	13.0 — —	横ナデ 焼き歪顕著	細砂微量。 良好。 暗灰色を基調とする。	杯部1／2残存	窯内	
19図 138	高杯	— — —	横ナデ	白色砂粒。 良好。 淡灰色を基調とする。	破片	窯内	
139	高杯	— — —	自然釉の為不明	白色細砂。 不良。 灰褐色を基調とする。	破片	窯内	
140	高杯	— — —	横ナデ	白色砂粒。 通有。 淡灰色を基調とする。	破片	窯内	
141	高杯	— — —	横ナデ 底部回転ヘラ削り	白色細粒。良好。 (内)灰褐色を基調とする。 (外)黒灰褐色を基調とする。	1／4残存	窯内	
142	高杯	11.3 — —	横ナデ	白色細砂。 良好。 灰褐色を基調とする。	口縁部 1／4残存	窯内	
143	高杯	17.0 — —	横ナデ	白色細砂微量。 良好堅緻。 暗灰褐色を基調とする。	口縁部 1／3残存	窯内	
144	高杯	— — —	自然釉の為不明	白色細砂。 不良。 淡灰色を基調とする。	脚端部 1／2残存	窯内	
145	高杯	— — —	横ナデ	白色細砂。 通有。 黒灰色を基調とする。	脚端部 1／2残存	窯内	
146	高杯	— — —	横ナデ	白色細砂。 通有。 淡灰色を基調とする。	脚端部 1部残存	窯内	

図版番号	器種	法量 口径 受部径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	残存度	出土地	備考
147	高杯	— — —	横ナデ	白色細砂。 不良。 灰褐色を基調とする。	脚端部 1／5残存	窯内	
148	高杯	— — —	横ナデ	白色細砂。 不良。 茶褐色を基調とする。	破片	窯内	
149	脚部	底径9.6 — —	横ナデ	斜長石粒微量。 通有。 灰褐色を基調とする。	破片	焚口付近	
150	脚部	— — —	横ナデ	白色砂粒微量。 不良。 淡黄褐色を基調とする。	脚部破片	窯内	外面ヘラ記号「++」
151	脚部	底径13.7 — —	横ナデ	細砂微量。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	脚部1／6残存	窯内	
152	脚部	底径15.2 — —	横ナデ	細砂微量。 やや不良 灰褐色～淡灰褐色を基調とする。	脚部1／3残存	窯内	
153	瓦塊	11.3 — 11.8	横ナデ 体部下半回転ヘラ削り	細砂若干。良好堅緻。 赤褐色を基調とする。 断面灰褐色。	口縁部 2／3欠失	窯内	体部孔は貫通していない。
154	瓦塊	10.2 — 12.1	回転ヘラ削り	斜長石粒若干。 通有。 灰褐色を基調とする。	口縁部 3／4欠失 体部1／3欠失	窯内	穿孔部欠失
20図 155	瓦塊	10.1 — —	横ナデ	斜長石粒若干。 不良。 淡赤褐色を基調とする。	口縁部 1／4残存	窯内	
156	瓦塊	10.0 — —	横ナデ	斜長石粒若干。 不良。 淡赤褐色を基調とする。	口縁部 1／4残存	窯内	
157	瓦塊	10.0 — —	横ナデ	斜長石粒若干。 良好。 暗灰色を基調とする。	口縁部 1／2残存	窯内	
158	瓦塊	10.8 — —	横ナデ	斜長石粒若干。白色細粒若干。良好。 赤褐色を基調とする。	破片	窯内	
159	瓦塊	11.4 — —	横ナデ	斜長石粒若干。 良好。 灰褐色を基調とする。	口縁部 1／3残存	窯内	
160	瓦塊	— — —	横ナデ	白色砂粒若干。 良好。 暗灰色を基調とする。	口縁部破片	窯内	
161	瓦塊	11.0 — —	横ナデ 焼き歪顕著	細砂若干。 良好。 灰褐色を基調とする。	口縁部1／2残存	窯内	
162	瓦塊	— — —	横ナデ	白色細砂。通有。 (内)明赤灰色を基調とする。 (外)黒灰褐色を基調とする。	口縁部 1／6残存	窯内	内面ヘラ記号
163	提瓶	7.7 — —	横ナデ カキ目	白色細砂若干。 良好。 灰色を基調とする。	胴上半部残存	窯内	
164	提瓶	7.7 — —	横ナデ	白色細砂若干。 良好。 暗灰色を基調とする。	口縁部破片	窯内	
165	提瓶	8.0 — —	横ナデ	斜長石粒微量。 不良。 暗黄褐色を基調とする。	口縁部破片	窯内	
166	提瓶	8.0 — —	横ナデ	白色砂粒微量。 不良。 淡黄褐色を基調とする。	口縁部 1／3残存	窯内	
167	提瓶	8.0 — —	横ナデ	白色細砂微量。 良好。 暗灰褐色を基調とする。	口縁部破片	窯内	

図版番号	器種	法量 口径 受部径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	残存度	出土地	備考
168	提瓶	8.0 — —	横ナデ	白色細砂微量。 良好堅緻。 暗灰褐色を基調とする。	口縁部 1／3残存	窯内	
169	提瓶	9.0 — —	横ナデ	砂粒若干。 良好。 灰褐色を基調とする。	口縁部破片	窯内	
170	短頸壺	— — —	横ナデ	細砂微量。 不良。 淡赤褐色を基調とする。	口縁部破片	窯内	
171	壺	— — —	横ナデ	白色細粒微量。 良好。 灰褐色を基調とする。	口縁部破片	窯内	
172	甕	— — —	外面自然釉の為不明 内面青海波当具痕	細砂やや多量。 良好、2次焼成。 暗灰褐色を基調とする。	口縁部破片	窯内	
21図 173	甕	26.0 — —	自然釉の為不明	白色細砂。 良好。 暗灰褐色を基調とする。	口縁部1部残存	窯内	
174	甕	— — —	カキ目	白色細砂、内面に黒色破裂粒。 良好。 暗灰褐色を基調とする。	破片	窯内	
175	甕	44.0 — —	横ナデ	斜長石粒微量。 良好堅緻。 灰色を基調とする。	口縁部破片	窯内	
176	甕	56.8 — —	頸部斜方向にヘラ描き平行線	白色細砂微量。 堅緻良好、2次焼成。 灰色を基調とする。	口縁部 1／3残存	窯内	
177	甕	61.0 — —	頸部斜方向にヘラ描き平行線	細砂微量。 良好堅緻。 灰色を基調とするが自然釉の為黒灰色。	口縁部 1／8残存	窯内	
22図 178	杯蓋	— — 3.0	横ナデ 天井部右回転ヘラ切り	白色細砂、斜長石粒、内外面に黒色破裂粒若干。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	口縁部ほぼ欠失	灰原 F-II-6	
179	杯蓋	10.8 — 3.9	横ナデ 天井部回転ヘラ切り	白色細砂、斜長石粒、内外面に黒色破裂粒。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	口縁部 1／5残存	灰原 F-II-7	
180	杯蓋	11.4 — 2.7	横ナデ 天井部回転ヘラ切り	白色細砂、斜長石粒、角閃石粒、内外面に黒色破裂粒。通有。 暗赤灰色を基調とする。	口縁部 1／3残存	灰原 F-II-10	
181	杯蓋	— — 3.5	横ナデ 天井部回転ヘラ切り	白色細砂、斜長石粒微量、角閃石粒微量、内面に黒色破裂粒。通有。 赤灰色を基調とする。	口縁部 1／8残存	灰原 F-II-6	
182	杯蓋	11.4 — 3.9	横ナデ 天井部回転ヘラ切り後ナデ	白色細砂、斜長石粒。 通有。 灰褐色を基調とする。	口縁部 1／3残存	灰原 F-II-10	
183	杯蓋	— — 4.3	横ナデ 天井部回転ヘラ切り	白色細砂、斜長石粒微量。通有。 (内)淡褐色を基調とする。 (外)暗灰褐色を基調とする。	口縁部1部残存	灰原 E-II-4 F-II-12	
184	杯蓋	11.4 — 4.0	横ナデ 天井部回転ヘラ切り	白色細砂、斜長石粒。 通有。 灰褐色を基調とする。	口縁部 1／6残存	灰原 E-II-10	
185	杯蓋	— — 3.3	横ナデ 天井部回転ヘラ切り	斜長石粒、内外面に黒色破裂粒若干。 通有。 灰褐色を基調とする。	1／4残存	灰原 F-I-22	
186	杯蓋	11.5 — 3.6	横ナデ 天井部回転ヘラ切り	白色細砂、斜長石粒。 通有。 灰褐色を基調とする。	口縁部 1／4残存	灰原 E-II-10	
187	杯蓋	11.3 — 3.8	横ナデ 天井部回転ヘラ切り	白色細砂、斜長石粒。 通有。 灰褐色を基調とする。	口縁部 1／3欠失	灰原 E-II-10	
188	杯蓋	— — 3.4	横ナデ 天井部回転ヘラ切り	白色細砂、斜長石粒。通有。 (内)赤褐色を基調とする。 (外)暗赤灰色を基調とする。	1／6残存	灰原 F-II-12 II-21	

図版番号	器種	法量 口径 受部径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	残存度	出土地	備考
189	杯蓋	— — 3.0	横ナデ 天井部回転ヘラ切り	白色細砂、斜長石粒。 堅緻だが不良。 淡赤褐色を基調とする。	1／6残存	灰原 F-II-7	
190	杯蓋	— — 2.9	横ナデ 天井部回転ヘラ切り	白色細砂、斜長石粒、内外面に黒色破裂粒。 堅緻だが不良。 淡赤褐色を基調とする。	口縁部1部残存	灰原 F-II-6	
191	杯蓋	11.6 — 3.3	横ナデ 天井部回転ヘラ切り	白色細砂、斜長石粒微量、内面に黒色破裂粒。 通有。 暗赤灰色を基調とする。	口縁部1部残存	灰原 F-II-6 II-12	
192	杯蓋	— — 4.3	横ナデ 天井部回転ヘラ切り	白色細砂、斜長石粒微量。通有。 (内)淡褐色を基調とする。 (外)暗灰褐色を基調とする。	口縁部1部残存	灰原 E-II-4 F-II-12	
193	杯蓋	— — 3.5	横ナデ 天井部回転ヘラ切り	白色細砂、斜長石粒、内外面に黒色破裂粒。通有。 (内)暗褐色を基調とする。 (外)暗赤灰色を基調とする。	口縁部1部残存	灰原 F-II-4 I-22	
23図 194	杯蓋	13.6 — 3.8	横ナデ 天井部回転ヘラ切り	白色細砂、斜長石粒。 やや不良。 灰褐色を基調とする。	口縁部 1／4残存	灰原 F-I-22	
195	杯蓋	12.7 — —	横ナデ 焼に歪大	斜長石粒若干、白色細粒、内外面に黒色破裂粒。良好。灰色を基調とする。	1／5残存	灰原 F-I-22	
196	杯蓋	12.4 — —	横ナデ	白色細砂、斜長石粒。 通有。 灰褐色を基調とする。	口縁部1部残存 底部欠失	灰原 E-II-10	
197	杯蓋	— — —	横ナデ 天井部ヘラ切り未調整	角閃石粒微量。 通有。 黄灰褐色を基調とする。	底部及び本体 1／4残存	灰原 E-II-10	天井部外面ヘラ記号「×」
198	杯蓋	— — —	横ナデ 天井部ヘラ切り未調整	角閃石粒微量、白色細粒。通有。 (内)黒灰褐色を基調とする。 (外)灰褐色を基調とする。	底部残存	灰原　土杭6 F-I-22 II-18	天井部外面ヘラ記号「×」
199	杯身	9.9 12.1 3.2	横ナデ 底部回転ヘラ切り	白色細砂若干、内面に黒色破裂粒。不良。 (内)淡褐色を基調とする。 (外)灰褐色を基調とする。	2／3残存	灰原　G-II-2 E-II-9 E-II-6, E-II-7	
200	杯身	9.7 11.7 3.0	自然釉の為不明	白色細粒若干。良好堅緻。 灰褐色を基調とする。	1／4残存	灰原 E-II-10	
201	杯身	9.7 11.7 —	自然釉の為不明	白色細粒、斜長石粒、内面に黒色破裂粒。良好。灰褐色を基調とする。	1／6残存	灰原 E-II-10 II-15	
202	杯身	9.9 12.0 3.1	横ナデ 底部回転ヘラ切り	斜長石粒若干、白色細粒。 やや不良。 淡灰褐色を基調とする。	1／3残存	灰原 F-II-6	
203	杯身	10.0 — 2.8	自然釉の為不明	斜長石粒、内面、口縁部外面に黒色破裂粒。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	口縁部 1／5残存	灰原 F-II-7 II-11	
204	杯身	10.4 12.4 3.1	横ナデ 底部回転ヘラ切り	斜長石粒、白色細粒若干、内外面に黒色破裂粒。良好。灰褐色を基調とする。	1／3残存	灰原 F-II-6	
205	杯身	10.4 12.2 3.2	自然釉の為不明	斜長石粒若干、内面に褐色破裂粒。良好。 (内)淡赤灰色を基調とする。 (外)灰褐色を基調とする。	1／5残存	灰原 E-II-10	
206	杯身	10.5 12.5 —	横ナデ	斜長石粒、白色細粒、内外面に黒色破裂粒。 堅緻だが不良。(内)淡赤褐色を基調とする。 (外)灰褐色を基調とする。	1／4残存	灰原 F-II-6	
207	杯身	10.5 12.4 —	横ナデ 天井部焼き歪	白色細粒、斜長石粒、内外面に黒色破裂粒。 良好。(内)暗灰色を基調とする。(外)赤灰色を基調とする。	1／4残存	灰原 E-II-10	
208	杯身	10.6 12.5 3.1	自然釉の為不明	斜長石粒、白色細粒若干、内面に黒色破裂粒。 良好。(内)灰褐色を基調とする。(外)灰色を基調とする。	1／5残存	灰原 F-II-6	
209	杯身	10.6 12.8 3.5	横ナデ 底部回転ヘラ切り	内外面に黒色破裂粒。良好。 灰褐色を基調とする。	1／3残存	灰原 F-II-7, 11, 13	

図版番号	器種	法量 口径 受部径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	残存度	出土地	備考
24図 210	杯身	10.8 — 3.2	横ナデ 底部回転ヘラ切り	斜長石粒、内外面に黒色破裂粒。通有。 (内)明褐色を基調とする。 (外)暗灰褐色を基調とする。	1／3残存	灰原 E-II-10	
211	杯身	10.8 12.9 —	横ナデ	白色細粒。 良好。 淡黄褐色を基調とする。	口縁部 1／4残存	灰原 F-II-22	
212	杯身	— — 3.5	横ナデ 底部回転ヘラ切り	白色細粒若干、内外面に黒色破裂粒。良好。 (内)灰褐色を基調とする。 (外)暗赤灰色を基調とする。	1／5残存	灰原 E-II-10	
213	杯身	— — 3.2	横ナデ 底部回転ヘラ切り 後ナデ	白色細砂、斜長石粒。 不良。 淡灰色を基調とする。	1／4残存	灰原 F-II-6	
214	杯身	— — 3.0	横ナデ 底部回転ヘラ切り	白色細砂、斜長石粒、内外面に黒色破裂粒。 通有。 赤褐色を基調とする。	口縁部1部残存	灰原 E-II-9	
215	杯身	— — 2.7	横ナデ 底部回転ヘラ切り 後ナデ	白色細砂、内外面に黒色破裂粒。 やや不良。 灰褐色を基調とする。	口縁部1部残存	灰原 F-II-11	
216	杯身	— — 3.2	横ナデ 底部回転ヘラ切り	白色細粒若干、内外面に黒色破裂粒。良好。 淡赤灰色を基調とする。	1／5残存	灰原 F-II-1	
217	杯身	— — 3.2	横ナデ 底部回転ヘラ切り	斜長石粒、内外面に黒色破裂粒。 通有。 灰褐色を基調とする。	口縁部1部残存	灰原 F-II-1	
218	杯身	— — 3.3	横ナデ 底部回転ヘラ切り	白色細砂、斜長石粒。 通有。 灰褐色を基調とする。	口縁部1部残存	灰原 F-II-6	
219	杯身	— — 3.3	横ナデ 底部回転ヘラ切り	白色細粒若干、内外面に黒色破裂粒。良好。 灰褐色を基調とする。	1／5残存	灰原 F-II-10	
220	杯身	— — 3.1	自然釉の為不明	斜長石粒、内外面に黒色破裂粒。 不良。 淡黄褐色を基調とする。	1／4残存	灰原 F-II-11	
221	杯身	— — —	横ナデ	白色細砂、斜長石粒、内外面に黒色破裂粒。 通有。 灰褐色を基調とする。	口縁部 1／6残存	灰原 F-II-7	
222	杯身	— — 3.0	自然釉の為不明	白色細砂、斜長石粒、内面、口縁部外面に黒色破裂粒。通有。 暗灰褐色を基調とする。	口縁部1部残存 底部欠失	灰原 F-II-6	
223	杯身	— — —	横ナデ 底部回転ヘラ切り 後ナデ	白色細砂、斜長石粒、内外面に黒色破裂粒。通有。 暗赤灰色を基調とする。	口縁部1部残存	灰原 F-I-22	
224	杯身	— — 2.8	横ナデ 底部回転ヘラ切り	白色細砂、斜長石粒、内外面に黒色破裂粒。不良。 (内)淡黄褐色を基調とする。 (外)暗赤褐色を基調とする。	1／4残存	灰原 F-II-7	
225	杯身	— — 3.4	横ナデ 底部回転ヘラ切り	斜長石粒、内面に黒色破裂粒。通有。 (内)淡茶褐色を基調とする。 (外)暗灰褐色を基調とする。	口縁部1部 天井部1部残存	灰原 F-II-7	
226	杯身	— — —	横ナデ	白色細粒、斜長石粒。良好。 灰褐色を基調とする。	1／6残存	灰原 F-II-10	
227	杯身	10.6 — 3.6	横ナデ 底部回転ヘラ削り	白色細砂、斜長石粒、内外面に黒色破裂粒。不良。 淡褐色を基調とする。	口縁部 1／4残存	灰原 E-II-10	
228	杯身	— — —	横ナデ 底部回転ヘラ切り	白色細砂、斜長石粒、内外面に黒色破裂粒。通有。 灰褐色を基調とする。	1／4残存	灰原 F-II-16	
229	杯身	— — —	自然釉の為不明	斜長石粒。 良好。 暗灰褐色を基調とする。	口縁部 1／6残存	灰原 E-II-10	
230	杯身	— — —	横ナデ	斜長石粒、白色細粒若干、内外面に黒色破裂粒。良好。灰褐色を基調とする。	1／4残存	灰原 F-II-3	

図版番号	器種	法量 口径 受部径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	残存度	出土地	備考
25図 231	高杯	17.6 — 12.2	横ナデ 底部回転ヘラ削り右	白色細砂若干。 良好。 明灰色を基調とする。	口縁部 1／3残存 脚端部欠失	灰原 F-Ⅰ-22	
232	高杯	17.7 — 6.1	ロクロ整形痕 底部回転ヘラ削り	石英粒やや多量。 良好。 暗灰色を基調とする。	口縁部1部残存 下半部残存	灰原F-Ⅰ-17 Ⅱ-7 Ⅱ-21	貼付高台剝落
233	高杯	10.0 — —	自然釉の為不明	内外面に黒色破裂粒。 良好。 灰褐色を基調とする。	破片	灰原 F-Ⅱ-7	
234	高杯	— — —	自然釉の為不明	内面に黒色破裂粒。 良好。 灰褐色を基調とする。	破片	灰原 F-Ⅶ-3	
235	高杯 蓋	14.0 — 4.8	カキ目 横ナデ	白色細砂若干。 やや不良。 暗灰色～黄褐色を基調とする。	口縁部1部 天井部残存	灰原 F-Ⅱ-3 Ⅱ-4	
236	高杯 蓋	— — —	横ナデ 天井部右回転ヘラ削り	内外面に黒色破裂粒。良好。 (内)灰褐色を基調とする。 (外)赤灰褐色を基調とする。	1／4残存	灰原 F-Ⅱ-7 Ⅱ-3	
237	高杯 蓋	— — —	横ナデ 天井部右回転ヘラ削り	内外面に黒色破裂粒。良好。 (内)褐色を基調とする。 (外)灰褐色を基調とする。	1／4残存	灰原 F-Ⅱ-7	
238	高杯	— — —	横ナデ	斜長石粒、内外面に黒色破裂粒。良好。 暖灰色を基調とする。	柱部 脚下半部1／3残存	灰原 E-Ⅱ-10 F-Ⅱ-6	
239	高杯	— — —	横ナデ	白色細粒、斜長石粒。良好。 (内)灰褐色を基調とする。 (外)暗灰褐色を基調とする。	脚部1／4残存	灰原	
240	高杯	— — —	自然釉の為不明	斜長石粒、内外面に黒色破裂粒。良好。 (内)灰褐色を基調にする。 (外)暗赤灰色を基調とする。	柱部 脚下半部1／3残存	灰原 E-Ⅱ-9 Ⅱ-10	
241	高杯	— — —	横ナデ	白色細粒、斜長石粒。良好。 灰色を基調とする。	柱部 脚端一部残存	灰原 F-Ⅰ-22	
242	高杯	— — —	横ナデ	白色細砂、斜長石粒、内外面に黒色破裂粒。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	柱部 脚端1部残存	灰原 F-Ⅰ-22	
26図 243	高杯	— — —	自然釉の為不明 横ナデ	内外面に黒色破裂粒、白色細粒斜長石粒若干。 良好。灰褐色を基調とする。	柱部 脚端1部残存	灰原 F-Ⅱ-6 Ⅱ-10	
244	高杯	— — —	横ナデ	白色細粒。良好。 灰色を基調とする。	脚部完存	灰原 G-Ⅱ-11	
245	高杯	— — —	横ナデ	白色細粒。良好。 (内)赤灰色を基調とする。 (外)灰褐色を基調とする。	脚部1／2残存	灰原 F-Ⅱ-7	
246	長頸壺	— — —	カキ目	白色細砂。 通有。 暗赤灰色を基調とする。	頸部残存	灰原 F-Ⅱ-6	
247	提瓶	6.9 — —		白色細砂、斜長石粒。 通有。 灰褐色を基調とする。	口縁部1部残存	灰原 F-Ⅰ-23 Ⅰ-22	
248	提瓶	— — —	カキ目	斜長石粒。通有。 (内)黄褐色を基調とする。 (外)暗灰褐色を基調とする。	体部破片	灰原 F-Ⅱ-6	
249	提瓶	— — —	カキ目	白色細砂。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	胴部側面1部残存	灰原 F-Ⅱ-14 Ⅱ-10	外面ヘラ記号「×」
250	壺	17.4 — —	カキ目	斜長石粒。通有。 (内)明褐色を基調とする。 (外)暗灰褐色を基調とする。	口縁部～体部 1／5残存	灰原 F-Ⅰ-6 Ⅰ-7 Ⅰ-12	
251	横瓶	— — —	側面ヘラ削り	白色細砂、内面に黒色破裂粒。 通有。 灰褐色を基調とする。	側面残存	灰原 F-Ⅰ-22 Ⅰ-23 Ⅱ-7	外面ヘラ記号「‖」

図版番号	器種	法量 口径 受部径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	残存度	出土地	備考
27図 252	甑	— — —	横ナデ 外面平行タタキ	白色細砂。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	口縁部～胴部残存	灰原 G-Ⅰ-21 Ⅰ-22 Ⅰ-23	
253	擂鉢	16.1 — 16.1	底部一方向 手持ヘラ削り	白色細粒若干。 やや不良。 灰褐色を基調とする。	1／2残存	灰原 F-Ⅰ-17 Ⅰ-22	
254	擂鉢	— — —	底部手持ヘラ削り	自然釉の為不明 良好。 灰褐色を基調とする。	底部1／4残存	灰原 F-Ⅱ-8	
255	提瓶	— — —	外面カキ目	白色細砂、斜長石粒。 通有。 赤灰色を基調とする。	体部1／8残存	灰原 F-Ⅱ-2 Ⅱ-6 Ⅱ-11	
256	甕	17.6 — —	斜め方向のハケ状の調整後ヨコナデ	白色細砂、内外面に黒色破裂粒。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	口縁部1部残存	灰原 E-Ⅱ-10	
257	甕	— — —	自然釉の為不明	斜長石粒、内外面に黒色破裂粒。 通有。 灰褐色を基調とする。	口縁部～体部破片	灰原 E-Ⅱ-14 F-Ⅱ-6	口縁部内面にヘラ記号
258	甕	19.2 — —	口縁部斜方向の平行タタキ 胴部(外)平行タタキ (内)青海波文	白色細砂、斜長石粒、内外面に黒色破裂粒。 通有。(内)赤灰色を基調とする。 (外)暗赤灰色を基調とする。	口縁部～胴部上部 1／4残存	灰原 E-Ⅱ-10	
259	甕	25.9 — —	口縁部横ナデ 胴部（外）平行タタキ（内）青海波文	白色細砂、斜長石粒、内外面に黒色破裂粒。通有。 (内)暗灰褐色を基調とする。 (外)淡赤褐色を基調とする。	口縁部1部残存	灰原 E-Ⅱ-9	
260	甕	21.5 — —	自然釉の為不明	斜長石粒若干。 通有。 灰褐色を基調とする。	口縁部～胴部上端 1／2残存	灰原 F-Ⅰ-22 Ⅱ-10 E-Ⅱ-9	
261	甕	22.9 — —	横ナデ 胴部内面青海波文	白色細砂、斜長石粒、内面に黒色破裂粒。 通有。 赤灰色を基調とする。	口縁部 1／6残存	灰原 E-Ⅰ-24 E-Ⅱ-6	
262	鉢	— — —	右方向 手持ヘラ削り	斜長石粒。 通有。 灰褐色を基調とする。	破片	灰原	
263	甕	— — —	頸部櫛描波状文	白色細砂。 良好。 黒灰褐色を基調とする。	破片	灰原 F-Ⅱ-9	
28図 264	甕	30.2 — —	櫛描波状文	白色細砂、斜長石粒、内外面に黒色破裂粒。通有。 (内)灰褐色を基調とする。 (外)暗赤灰色を基調とする。	口縁部 1／5残存	灰原 F-Ⅰ-22	
265	甕	40.0 — —	頸部ヘラ状工具による連続鋸歯状文	白色細砂。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	口縁部 1／6残存	灰原 F-Ⅰ-22	
266	甕	55.0 — —	櫛描波状文 回転カキ目	白色細砂、斜長石粒。 通有。 灰褐色を基調とする。	口縁部 1／6残存	灰原 E-Ⅱ-9	
267	甕	58.4 — —	頸部カキ目状調整 頸部上部に櫛描波状文	白色細砂、斜長石粒。 通有。 灰褐色を基調とする。	口縁部 1／6残存	灰原 F-Ⅱ-2 Ⅱ-11	
268	甕	60.0	頸部櫛描波状文	石英粒やや多量。 通有。 暗灰色を基調とする。	口縁部 1／8残存	灰原 F-Ⅱ-11	
29図 269	甕	— — —	平行タタキ 同心円当具痕	斜長石粒、角閃石粒。 良好。 灰褐色を基調とする。	破片	土坑1	
270	甕	— — —	ナデ 同心円当具痕	斜長石粒、角閃石粒、内外面に黒色破裂粒。良好。 (内)暗灰褐色を基調とする。(断)灰色 (外)自然釉の為暗赤灰色を基調とする。	破片	土坑1	
271	甕	— — —	平行タタキ 同心円当具痕	斜長石粒。 良好。 灰色を基調とする。	破片	土坑1	
272	甕	— — —	木目平行タタキ 同心円当具痕	白色細粒、斜長石粒微量。 良好。 灰色を基調とする。	破片	土坑1	

図版番号	器種	法量 口径 受部径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	残存度	出土地	備考
273	甕	— — —	平行タタキ後 直交タタキ	斜長石粒やや多量。 やや不良。 灰褐色を基調とする。	破片	土坑1	
274	甕	— — —	平行タタキ 同心円当具痕	斜長石粒、角閃石粒。 良好。 灰色を基調とする。	破片	土坑1	
275	甕	— — —	平行タタキ後 直交タタキ	斜長石粒多量、角閃石粒。 良好。 灰褐色を基調とする。	破片	土坑1	
276	甕	— — —	平行タタキ 同心円当具痕	斜長石粒微量、白色細粒。 良好。 灰褐色を基調とする。	破片	土坑1	
30図 277	杯蓋	12.0 — 3.6	横ナデ 天井部回転ヘラ切り後ナデ	白色細粒若干、斜長石粒、内外面に黒色破裂粒。良好。(内)赤灰色を基調とする。(外)暗赤灰色を基調とする。	天井部 口縁部1部残存	土坑2	
278	杯蓋	11.0 — 3.9	横ナデ 天井部回転ヘラ切り	斜長石粒、内外面に黒色破裂粒。良好。 灰褐色を基調とする。	1／2残存	土坑2	
279	杯身	10.2 12.2 3.8	自然釉の為不明	白色細粒、内外面に黒色破裂粒。良好。 (内)灰褐色を基調とする。 (外)赤灰色を基調とする。	1／2残存	土坑2	
280	杯身	9.4 12.0 3.6	横ナデ 底部回転ヘラ切り後ナデ	白色細粒若干、斜長石粒。良好。 灰褐色を基調とする。	1／5残存	土坑2	
281	杯身	10.1 12.3 3.1	横ナデ 底部回転ヘラ切り	斜長石粒、内外面に黒色破裂粒。良好。 灰褐色を基調とする。	口縁部1／4 天井部残存	土坑2	外面ヘラ痕
282	杯身	10.3 12.1 3.4	横ナデ 底部回転ヘラ切り	白色細粒若干、斜長石粒、内面に褐色破裂粒。 やや良好。灰褐色を基調とする。	ほぼ完形	土坑3	
283	杯身	11.2 13.0 3.4	横ナデ 底部回転ヘラ切り後ナデ	白色細砂、斜長石粒、内外面に黒色破裂粒。 良好。 赤灰色を基調とする。	1／2残存	土坑2	
284	甕	11.0 — —	横ナデ	斜長石粒若干。 良好。 灰褐色を基調とする。	口縁部 1／6残存	土坑2	
285	壺	12.5 — —	横ナデ	白色細砂、斜長石粒微量。 通有。 赤灰色を基調とする。断面灰色	口縁部残存	土坑2	
286	甕	21.6 — —	自然釉の為不明	斜長石粒若干。 良好堅緻。 灰色を基調とする。	口縁部～頸部 3／4残存	土坑2	
287	甕	21.6 — —	自然釉の為不明	白色細砂、斜長石粒。 通有。 暗赤灰色を基調とする。	口縁部1部残存	土坑2	
288	甕	21.4 — —	自然釉の為不明	白色細砂、内面に黒色破裂粒。 良好。 暗灰褐色を基調とする。	口縁部～胴部上部1／4残存	土坑2	
289	短頸壺	9.8 — 18.5	摩滅のため調整不明	斜長石粒、角閃石粒微量。 不良。 淡黄褐色を基調とする。	底部残存	土坑2	
290	壺	— 12.1 —	回転ヘラ削り後丁寧なナデ	白色細砂、斜長石粒。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	底部～胴部残存	土坑3	
31図 291	杯蓋	— — —	横ナデ	斜長石粒。 通有。 褐色を基調とする。	つまみ残存	灰原 E-II-10	
292	杯蓋	— — —	自然釉の為不明	白色細砂。 通有。 赤褐色を基調とする。	つまみ残存	灰原 F-I-22	
293	杯蓋	— — —	横ナデ	白色細砂、斜長石粒、角閃石粒微量。 通有。 褐色を基調とする。	つまみ2／3残存	灰原 E-II-13	

図版番号	器種	法量 口径 受部径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	残存度	出土地	備考
294	杯蓋	— — —	横ナデ	白色細砂、斜長石粒。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	つまみ残存	灰原	
295	杯蓋	— — —	横ナデ	白色細砂。 通有。 黒灰褐色を基調とする。	天井部1／2残存	灰原 G-II-2 II-3	
296	杯蓋	— — —	横ナデ	白色細砂。 不良。 黄褐色を基調とする。	破片	灰原 E-II-10	
297	杯蓋	10.6 — 1.6	横ナデ 天井部回転ヘラ削り	斜長石粒。 通有。 灰褐色を基調とする。	1／4残存	灰原 F-II-16	
298	杯蓋	— — —	横ナデ 天井部回転ヘラ削り	白色細砂。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	破片	灰原 E-II-5	
299	杯身	11.1 — 4.3	横ナデ 底部右回転ヘラ削り	斜長石粒やや多量。 やや不良。 淡灰褐色～灰褐色を基調とする。	口縁部 1／2欠失	土坑2	
300	杯身	15.1 8.4 5.8	横ナデ	白色細砂。 通有。 黒灰褐色を基調とする。	口縁部1部 高台2／3残存	灰原 F-I-22	
301	杯身	11.0 — 3.2	横ナデ 底部右回転ヘラ切り	斜長石粒。不良。 (内)灰白色を基調とする。 (外)灰白色～淡褐色を基調とする。	1／4残存	灰原 F-II-11	
302	杯身	14.6 — 4.2	横ナデ 底部右回転ヘラ切り	斜長石粒。 不良。 灰白色を基調とする。	1／2残存	灰原 F-II-10	
303	杯身	11.3 7.2 3.7	横ナデ	白色細砂、斜長石粒。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	1／2残存	灰原 F-II-10	貼付け高台有り
304	杯身	13.4 — 3.5	横ナデ 底部回転ヘラ削り 後ナデ	白色細砂、斜長石粒、角閃石粒微量。 通有。 灰褐色を基調とする。	口縁部 1／3残存	灰原 F-II-10	
305	杯身	20.0 14.4 5.9	横ナデ	斜長石粒。 不良。 灰白色を基調とする。	1／4残存	灰原 E-II-15	
306	杯身	8.7 — 3.4	横ナデ 底部右回転ヘラ削り	白色細砂。 通有。 灰褐色を基調とする。	口縁部 1／3欠失	灰原 F-I-22 土坑2	
307	杯身	8.4 — 2.7	横ナデ 底部右回転ヘラ削り	白色細砂、内外面に黒色破裂粒。通有。 (内)赤褐色を基調とする。 (外)赤灰褐色を基調とする。	1／2残存	灰原 F-II-7 II-12	
308	須恵器蓋	14.3 — 3.0	天井部右回転ヘラ削り	白色細砂少量、斜長石粒、角閃石粒。 不良。 黄褐色～橙褐色を基調とする。	ほぼ完形	土坑2	
309	杯蓋	18.1 — 3.9	横ナデ 天井部右回転ヘラ削り	白色細砂、1㎜前後の白色粒。 通有。 黒灰褐色を基調とする。	1／2残存	灰原 E-I-25	
310	鉢	23.3 — 11.5	横ナデ	白色細砂、角閃石粒。 不良。 淡灰褐色を基調とする。	1／4欠失	灰原 F-II-10	
311	土師器椀	— — 4.4	不鮮明	白色細砂、斜長石粒。不良。 橙褐色を基調とする。 底部外面にスス付着。	口縁1部及び体部1／4残存	土坑2	
312	土師器鉢	12.8 — 9.1	調整不明	斜長石粒多量、角閃石粒微量。 不良。 赤褐色を基調とする。	口縁部 2／3欠失	土坑5	同形浮文をもつ
313	土師器盤	13.6 — —	回転ヘラ削り	斜長石粒微量、角閃石粒微量。 不良。 淡橙褐色を基調とする。	底部残存	灰原 F-II-10	
314	土師器壷	9.8 — —	摩滅のため調整不明	斜長石粒、角閃石粒微量。 不良。 淡黄褐色を基調とする。	底部残存	灰原 F-I-22	

図版番号	器種	法量 口径 受部径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	残存度	出土地	備考
315	土師器鉢	20.0 — 7.0	調整不明	斜長石粒、角閃石粒多量。 不良。 赤褐色。	口縁部～体部の1部欠失	土坑5	
32図 316	円面硯	底径9.7 — —	海・陸部剝落	良好、細砂若干。通有、内部はセピア色で還元が及んでいない。 灰褐色を基調とする。	破片5点	灰原 E-I-24 I-25 II-5	
317	硯	— — —	斜め方向ヘラ削り	斜長石粒微量。 不良。 淡黄褐色を基調とする。	脚部のみ残存	灰原 G-I-18	
318	小型平瓶(水滴)	— — —	横ナデ	石英微量、白色細砂微量。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	破片	灰原 G-II-11	
319	小型平瓶(水滴)	— — —	横ナデ	斜長石粒。 通有。 灰褐色を基調とする。	破片	灰原 E-II-15	
320	小型平瓶(水滴)	— — —	横ナデ	細砂微量。 良好。 灰褐色を基調とする。	破片	灰原	
321	椀	— — —	右回転ヘラ削り	白色細砂、斜長石粒、内面に黒色破裂粒。通有。 (内)赤灰白色を基調とする。 (外)暗赤灰色を基調とする。	底部及び上半部欠失	土坑2	
322	棒状製品(脚)	— — —	自然椏の為不明	白色細砂若干。 良好。 暗灰色を基調とする。	一端欠失	窯内	
323	棒状須恵器	長さ23.3 最大厚3.8 最小厚2.8	ヘラによる面取り	細砂若干。 良好。 暗灰色を基調とする。	完形	窯内	

夜鳴池窯跡

図版番号	器種	法量 口径 受部径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	残存度	出土地	備考
41図 1	杯蓋	11.6 — 4.1	天井部回転ヘラ切り後1方向のナデ ロクロ整形痕	細砂やや多量。 良好。 暗灰色を基調とする。	ほぼ完形	灰原	
2	杯蓋	10.8 — 3.2	天井部多方向ナデ ロクロ整形痕	細砂若干。 良好堅緻。 明灰色を基調とする。	1/3残存	灰原	
3	杯蓋	11.4 — —	自然釉の為不明	白色細粒、斜長石粒若干、黒色破裂粒。良好。 (内)灰褐色を基調とする。 (外)灰色を基調とする。	口縁部 1/6残存	灰原	
4	杯蓋	11.8 — —	横ナデ	白色細粒、黒色破裂若干。良好。 灰色を基調とする。	1/4残存	灰原	
5	杯蓋	12.2 — 3.6	天井部回転ヘラ切り後1部ナデ ロクロ整形痕	細砂微量（雲母含む）。 通有。 明灰褐色を基調とする。	1/4残存	灰原	
6	杯蓋	12.3 — —	自然釉の為不明	白色細粒若干、斜長石粒。良好。 (内)灰褐色を基調とする。 (外)赤灰色を基調とする。	1/3残存	灰原	
7	杯蓋	12.5 — —	自然釉の為不明	白色細粒、黒色破裂粒。良好。 赤灰色を基調とする。	1/3残存	灰原	
8	杯蓋	— — —	ロクロ整形痕	砂粒をほとんど含まない。 良好。 灰褐色を基調とする。	天井部、体部1部残存	灰原	底部内面ヘラ記号
9	杯蓋	— — —	天井部回転ヘラ切り	細砂微量。 良好。 明灰色を基調とする。	1/8残存	灰色	
10	杯蓋	— — —	天井部回転ヘラ切り後1方向ナデ	砂粒をほとんど含まない。 良好。 明灰褐色を基調とする。	1/6残存	灰原	

図版番号	器種	法量 口径 受部径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	残存度	出土地	備考
11	杯身	12.8 — 3.8	底部回転ヘラ切り後丁寧な右回転ヘラ削り	砂粒（角閃石粒含む）微量。 通有。 灰褐色を基調とする。	1/2欠失	灰原	
12	杯身	9.3 11.3 —	底部回転ヘラ切り後ナデ	細砂微量。 不良。 暗黄褐色を基調とする。	1/2残存	灰原	
13	杯身	9.6 11.3 —	横ナデ 底部回転ヘラ切りの後ナデ	細砂若干。 良好堅緻。 灰褐色を基調とする。	1/4残存	灰原	
14	杯身	10.0 — 2.6	底部回転ヘラ切り後回転ナデ	細砂微量。 通有。 灰褐色を基調とする。	1/3残存	灰原	
15	杯身	10.0 — 3.2	底部回転ヘラ切り	細砂若干。 良好堅緻。 灰褐色を基調とする。	3/4欠失	灰原	
16	杯身	10.0 — 3.3	底部回転ヘラ切り後多方向ナデ	細砂微量。 通有。 明灰褐色を基調とする。	2/3欠失	灰原	
17	杯身	10.6 — —	自然釉の為不明	砂粒微量、細砂若干。 通有だがやや脆弱。 明灰褐色を基調とする。	3/4欠失	灰原	
18	杯身	— — —	底部回転ヘラ切り後ナデ ロクロ整形痕	細砂微量。 良好。 暗灰色を基調とする。	口縁部欠失 受部～天井部 1/2残存	灰原	底部内面ヘラ記号「×」
19	杯身	10.5 12.4 3.5	底部回転ヘラ切り後多方向ナデ	白色細粒、斜長石粒、良好。 灰色を基調とする。	1/4残存	工房付近表採	
20	杯身	10.4 — 3.2	底部回転ヘラ切り後ナデ ロクロ整形痕	細砂微量。 良好。 暗灰褐色を基調とする。	1/2欠失	灰原	
42図21	杯身	11.0 — —	ロクロ整形痕	細砂若干。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	2/3欠失	灰原	
22	杯身	11.0 — —	底部回転ヘラ切り	白色細粒、斜長石粒。良好。 (内)灰色を基調とする。 (外)灰褐色を基調とする。	1/5残存	灰原	
23	杯身	10.9 12.9 —	自然釉の為不明	白色細粒若干、斜長石粒。良好。 (内)暗赤灰色を基調とする。 (外)灰褐色を基調とする。	1/4残存	灰原	
24	杯身	11.3 13.6 —	自然釉の為不明	斜長石粒、黒色破裂粒。良好。 (内)灰褐色を基調とする。 (外)暗灰褐色を基調とする。	1/3残存	灰原	
25	杯身	11.3 13.5 —	底部回転ヘラ切り	白色細粒、黒色破裂粒。良好。 (内)灰褐色を基調とする。 (外)灰色を基調とする。	1/4残存	灰原	
26	杯身	12.4 — 3.2	底部回転ヘラ切り後ナデ ロクロ整形痕	細砂微量。 不良。 淡黄褐色を基調とする。	口縁部 1/2欠失	灰原	
27	杯蓋	10.0 — 2.6	天井部１部回転ヘラ削り	細砂若干。 良好、２次焼成。 灰褐色を基調とする。	1/2欠失	灰原	
28	杯蓋	9.1 11.2 2.8	自然釉の為不明	白色細粒、黒色破裂粒。良好 灰褐色を基調とする。	口縁部～体部 2/3欠失	灰原	
29	杯蓋	6.8 8.5 —	自然釉の為不明	白色細粒、角閃石粒。良好。 (内)灰褐色を基調とする。 (外)暗灰色を基調とする。	1/5残存	灰原	
30	杯蓋	7.3 — —	天井部横ナデ	細砂微量。 通有。 明灰褐色を基調とする。	口縁部～天井部1/6鈕欠失	灰原	
31	杯蓋	7.1 8.8 —	自然釉の為不明	白色細粒、内面に黒色破裂粒。良好。 灰褐色を基調とする。	1/5残存	灰原	

図版番号	器種	法量 口径 受部径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	残存度	出土地	備考
32	杯蓋	— — —	天井部右方向手持ちヘラ削り ロクロ整形痕	細砂微量。 良好。 灰褐色を基調とする。	3/4欠失 鈕欠失	灰原	天井部内面ヘラ記号「|||」
33	杯蓋	— — —	天井部回転ヘラ切り後一定方向ナデ	斜長石粒、黒色破裂粒。良好。 赤灰色を基調とする。	1/4残存	灰原	
34	杯蓋	— 10.1 —	横ナデ	白色細粒、斜長石粒。良好。 灰褐色を基調とする。	1/5残存	灰原	
35	杯蓋	8.0 — —	ロクロ整形痕	細砂微量。 不良。 明黄褐色を基調とする。	口縁部は 5/6欠失	灰原	
36	杯蓋	— — —	横ナデ	内面に黒色破裂粒。良好。 灰褐色を基調とする。	1/6残存	灰原	
37	杯蓋	8.7 10.8 —	天井部回転ヘラ切り	白色細粒、斜長石粒。良好。 (内)灰色を基調とする。 (外)灰褐色を基調とする。	1/4残存	灰原	
38	杯蓋	8.8 — —	自然釉の為不明	細砂微量。 良好、2次焼成。 明灰褐色を基調とする。	1/2欠失	灰原	
39	杯蓋	8.7 10.9 —	自然釉の為不明	白色細粒、角閃石粒。良好。 灰褐色を基調とする。	1/5残存	灰原	
40	杯蓋	9.3 — —	天井部右回転ナデ	細砂若干。 不良。 明赤褐色を基調とする。	1/2欠失	灰原	
41	杯蓋	9.0 11.3 —	横ナデ	斜長石粒、内面に黒色破裂粒。良好。 灰褐色を基調とする。	1/5残存	灰原	
42	杯蓋	9.4 — —	ロクロ整形痕	砂粒若干、細砂多量。 通有。 灰褐色を基調とする。	1/2欠失	灰原	
43	杯蓋	9.1 11.1 —	多方向ナデ	白色細粒若干。良好。 (内)灰色を基調とする。 (外)灰褐色を基調とする。	1/4残存	灰原	
44	杯蓋	9.2 11.3 —	自然釉の為不明	斜長石粒、黒色破裂粒。良好。 (内)灰褐色を基調とする。 (外)暗灰褐色を基調とする。	1/6残存	灰原	
45	杯蓋	9.4 — —	ロクロ整形痕	細砂やや多量。 堅緻、酸化焔焼成。 淡茶褐色を基調とする。	つまみ 1/2欠失	灰原	
46	杯蓋	10.5 12.7 —	横ナデ	斜長石粒、白色細粒、黒色破裂粒。良好。 灰褐色を基調とする。	口縁部 1/4残存	灰原	
43図 47	蓋	5.2 — 2.4	天井部右回転ヘラ削り	細砂やや多量、径1㎜前後の砂粒若干、角閃石粒多量。やや不良。 淡灰褐色を基調とする。	1/2欠失	灰原	
48	蓋	5.2 — 2.4	ロクロ整形痕	細砂微量。 良好。 明灰色を基調とする。	2/3欠失	灰原	
49	蓋	— — —	回転ヘラ削り	白色細粒若干。良好。(内)灰色を基調とする。 (外)灰色を基調とする。 (断)中心の径3㎜はセピア色	1/6残存	灰原	
50	蓋	5.2 9.1 —	自然釉の為不明	白色細粒若干、斜長石粒。 不良。 内外面灰褐色を基調とする。断面セピア色	1/5残存	灰原	
51	蓋	(10.9) — —	自然釉の為不明 焼き歪	砂粒をほとんど含まない。 良好。 明灰褐色を基調とする。	1/2残存	灰原	
52	杯身	— — —	回転ヘラ削り	白色細砂、内面に黒色破裂粒。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	1/6残存	灰原	

図版番号	器種	法量 口径 受部径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	残存度	出土地	備考
53	杯身	9.0 — 4.6	底部多方向ヘラ削り ロクロ整形痕	細砂若干。 通有。 明灰色を基調とする。	口縁部～体部 1/2欠失	灰原	底部内面 ヘラ記号「|||」
54	杯身	10.0 — 3.7	底部回転ヘラ切り 後多方向ナデ ロクロ整形痕	細砂微量。 良好。 明灰色を基調とする。	2/3欠失	灰原	
55	杯身	10.1 — 4.6	底部回転ヘラ切り 後一方向手持ヘラ削り	白色細粒、斜長石粒、黒色破裂粒。良好。 (内)灰褐色を基調とする。 (外)灰色を基調とする。	1/2残存	灰原	
56	杯身	11.0 — 3.5	ロクロ整形痕 底部多方向ヘラ削り	細砂微量。 良好。 明灰色を基調とする。	1/4残存	灰原	
57	杯身	10.7 — —	自然釉の為不明	白色細粒若干、角閃石粒。良好。 灰褐色を基調とする。	口縁部 1/5残存	灰原	
58	杯身	10.5 — —	横ナデ	白色細粒若干、角閃石粒。良好。 (内)暗灰褐色を基調とする。 (外)灰色を基調とする。	口縁部 1/5残存	灰原	
59	杯身	11.0 — —	ロクロ整形痕	細砂微量。 通有。 灰褐色を基調とする。	口縁部 1/4残存	灰原	
60	杯身	— — —	ロクロ整形痕	細砂微量。 良好。 灰褐色を基調とする。	2/3欠失	灰原	
61	杯身	— — —	底部回転ヘラ切り	斜長石粒、黒色破裂粒。良好。 灰褐色を基調とする。	底部、体部 1部残存	灰原	
62	杯身	— — —	多方向ナデ	白色細粒、黒色破裂粒。良好。 灰褐色を基調とする。	1/3残存	灰原	
63	短脚 高杯	— — —	器面荒れの為不明	角閃石粒微量。 不良。 淡黄褐色を基調とする。	1/3欠失	灰原	
64	短脚 高杯	5.1 — —	端部横ナデ 杯部との接合面は 放射状凹凸	細砂微量。 良好。 明灰色を基調とする。	脚部のみ残存	灰原	
65	短脚 高杯	7.0 — —	ロクロ整形痕	ほとんど砂粒を含まない。 良好堅緻。 明灰色を基調とする。	脚部3/4欠失	灰原	
44図 66	短脚 高杯	8.3 — —	ロクロ整形痕 杯部との接合面は リング状の凹凸	細砂微量。 通有。 明灰色を基調とする。	脚部のみ残存	灰原	
67	短脚 高杯	9.6 — —	自然釉の為不明	砂粒微量。 良好。 灰褐色を基調とする。	脚部3/4欠失	灰原	
68	高杯	— — —	横ナデ シボリ痕	白色細粒。 不良。 淡灰褐色～淡赤灰色を基調とする。	脚端1部～ 柱部残存	灰原	
69	甕	— — —	横ナデ	白色細砂微量、斜長石粒微量。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	口縁部 1/6残存	灰原	
70	甕	10.2 — —	ロクロ整形痕	細砂若干。 良好堅緻。 暗灰色を基調とする。	5/6欠失	灰原	
71	平瓶	8.4 — —	ロクロ整形痕	細砂微量。 良好堅緻。 灰色を基調とする。	口縁部残存	灰原	
72	提瓶	— — —	ロクロ整形痕	細砂極めて微量。 通有。 明灰褐色を基調とする。	頸部～体部 上半1部残存	灰原	
73	提瓶	— — —	回転ヘラ削り 回転カキ目	白色細砂。 通有。 灰褐色を基調とする。	側面1/2残存	灰原	

図版番号	器種	法量 口径 受部径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	残存度	出土地	備考
74	短頸壷	7.3 — —	カキ目	細砂微量。 良好。 灰褐色を基調とする。	3/4欠失	灰原	
75	長頸壷？	8.8 — —	横ナデ	白色細砂。 通有。 灰褐色を基調とする。	口縁部 1/6残存	灰原	内面ヘラ記号「×」
76	壷	10.8 — —	横ナデ	細砂若干。 良好堅緻。 灰褐色を基調とする。	口縁部～ 頸部残存	灰原	
77	壷	— — —	ロクロ整形痕 下斜方向へのヘラ削り	細砂、細粒若干。通有。 淡灰褐色を基調とする。 断面セピア色で還元が及んでいない。	胴部1/4残存	灰原	
78	椀	— 6.5 —	底部回転ヘラ切り	白色細砂。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	底部～体部 1/2残存	灰原	
79	土錘	長さ3.6 最大径1.9 孔径0.4	ナデ	砂粒をほとんど含まない。 良好。 明灰褐色を基調とする。	完形	灰原	

夜鳴池工房跡

図版番号	器種	法量 口径 受部径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	残存度	出土地	備考
45図 1	杯蓋	11.7 — 3.2	天井部 回転ヘラ切り	黒色細粒。不良。 淡褐色を基調とする。	口縁部 1/4欠失	工房内	
2	杯身	10.5 12.6 4.5	底部 回転ヘラ切り	白色細粒、角閃石粒。不良。 淡灰色を基調とする。	口縁部1部 受部～底部 2/3残存	工房内	
3	無蓋高杯	12.2 8.2 7.3	回転ヘラ削り	白色細砂。 不良。 淡黄褐色を基調とする。	口縁部 1/2欠失	工房内	
4	土師器甑	22.2 — 16.0	ナデ ハケ目 指頭による圧痕	細砂、雲母粒多量。 通有、やや脆弱。 暗黄色を基調とする。	胴下半部 1/2欠失	工房内	
5	横瓶	— — —	回転カキ目 内面同心円当具痕	白色細砂。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	胴部1/4残存	工房内排水溝	
46図 6	壷	18.8 — —	平行タタキ後回転カキ目　横ナデ 内面同心円当具痕	白色細砂。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	口縁部 胴体1部残存	工房内排水溝	
7	壷	— — —	平行タタキ 斜方向のナデ 内面同心円当具痕	白色細砂。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	口縁部、 底部欠失	工房内排水溝	
8	壷	— — —	平行タタキ 内面同心円当具痕	白色細砂微量。 不良。 淡黄褐色を基調とする。	胴部破片	工房内排水溝	
9	壷	— — —	横ナデ	白色細砂。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	破片	工房内排水溝	
10	壷	— — —	ヘラ状工具による 斜方向の施文 櫛描波状文	白色細砂。 不良。 灰白色を基調とする。	破片	工房内	
11	甕	— — —	回転カキ目 平行タタキ	不良。 灰白色を基調とする。	破片	工房内排水溝	
12	壷	— — —	相直行タタキ タテ方向のハケ目 内面同心円当具痕	白色細砂。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	破片	工房内排水溝	
13	甕	— — —	回転カキ目後平行タタキ 内面同心円当具痕	白色細砂。 通有。 灰褐色を基調とする。	胴部破片	工房内排水溝	

図版番号	器種	法量 口径 受部径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	残存度	出土地	備考
47図14	壷	— — —	平行タタキ 内面同心円当具痕	白色細砂。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	胴部破片	工房内排水溝	
15	甕	— — —	平行タタキ 内面同心円当具痕	白色細砂。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	胴部破片	工房内排水溝	

踊ヶ迫窯跡

図版番号	器種	法量 口径 受部径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	残存度	出土地	備考
49図1	杯蓋	13.6 — 3.0	横ナデ 天井部右回転ヘラ削り	白色細砂。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	1/6残存	灰原	外面ヘラ記号「丨」
2	杯身	— — —	横ナデ	白色細砂。 通有。 灰褐色を基調とする。	口縁部、体部1/6残存	灰原	
3	杯身	— — —	横ナデ	白色細砂、斜長石粒。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	口縁部破片	灰原	
4	杯身	— — —	横ナデ	白色細砂、斜長石粒。 通有。 灰褐色を基調とする。	口縁部破片	灰原	
5	杯身	— — —	底部 回転ヘラ削り	白色細砂、斜長石粒。通有。 (内)明褐色を基調とする。 (外)暗灰褐色を基調とする。	破片	灰原	
6	杯身	— — —	横ナデ	白色細砂、斜長石粒微量。 通有。 灰褐色を基調とする。	破片	灰原	
7	杯蓋	— — —	天井部 右回転ヘラ削り	白色細砂。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	破片	灰原	
8	高杯	— — —	回転カキ目後ナデ 内面シボリ痕	白色細砂。 通有。 灰褐色を基調とする。	脚柱部1/2残存	灰原	
9	脚部	— — —	櫛描波状文 横ナデ	白色細砂。通有。 (内)黒灰褐色を基調とする。 (外)赤褐色を基調とする。	破片	灰原	
10	短頸壷	8.2 — —	ヘラ状工具による斜方向の施文 内面同心円当具痕	白色細砂、斜長石粒。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	口縁部～体部上半1/4残存	灰原	
11	壷	— — —	自然釉の為不明	白色細砂。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	破片	灰原	
12	壷	10.2 — —	横ナデ	白色細砂。通有。 (内)暗赤灰色を基調とする。 (外)灰褐色を基調とする。	口縁部～頸部1/4残存	灰原	
13	壷	— — —	回転カキ目 平行タタキ 内面同心円当具痕	白色細砂、斜長石粒。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	破片	灰原	
14	壷	— — —	回転カキ目後 平行タタキ後ナデ 内面同心円当具痕	斜長石粒微量。 通有。 黒灰褐色を基調とする。	破片	灰原	
15	壷	— — —	回転カキ目後 平行タタキ 内面同心円当具痕	白色細砂、斜長石粒微量、内面に黒色破裂粒。通有。(内)灰褐色を基調とする。(外)赤灰褐色を基調とする。	破片	灰原	
16	甕	— — —	回転カキ目後 平行タタキ 内面同心円当具痕	斜長石粒微量。 通有。 灰褐色を基調とする。	破片	灰原	
17	提瓶	— — —	回転カキ目 内面同心円当具痕	斜長石粒、内面に黒色破裂粒。 通有。 黄褐色を基調とする。	破片	灰原	

瓦ヶ迫窯跡

図版番号	器種	法量 口径 受部径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	ヘラ記号	残存度	出土地	備考
56図 1	杯蓋	12.2 — —	天井部 右回転ヘラ削り	白色細砂若干、内面に黒色破裂粒。良好。 (内)灰褐色を基調とする。 (外)黒灰褐色を基調とする。	(内)	口縁部 1/2欠失	窯内 燃-最終床	2とセット
2	杯身	9.3 11.1 3.6	底部 右回転ヘラ削り	細砂若干。良好堅緻。 (内)灰褐色を基調とする。 (外)自然釉の為黄褐色。	(内) I-1	完形	窯内 燃-最終床 6G-2	1とセット
3	杯蓋	10.5 — 3.1	自然釉の為不明	細砂若干。良好、2次焼成。暗灰色を基調とするが、自然釉の為黒色、茶褐色部分有。	(内) I-1	口縁部 1/3欠失	窯内 燃-最終床 4G-2.6G-1	4とセット
4	杯身	9.7 11.4 3.4	底部 回転ヘラ削り	細粒若干混入。 良好、2次焼成、付着物顕著。 灰褐色を基調とする。	(内) I-1	1/3残存	窯内 燃-最終床 4G-2	3とセット
5	杯蓋	11.0 — 3.0	天井部 右回転ヘラ削り	砂粒ほとんど含まず、内外面に黒色破裂粒。良好。灰褐色を基調とする。	(内) I-1	1/2残存	燃-最終床 4G-2.6G-1	6とセット
6	杯身	9.6 11.2 3.2	底部 回転ヘラ削り	精緻。(断面)淡灰色を基調とする。(内)灰褐色を基調とする。(外)自然釉付着の為、黄褐色、黒色。	(内) I-1	完形	燃-最終床 4G-1,2,灰	5とセット
7	杯蓋	11.3 — 3.5	天井部 右回転ヘラ削り	白色砂粒微量、内外面に黒色破裂粒。 良好、2次焼成。 灰褐色を基調とする。	(内) I-1	口縁部 1/3欠失	燃-最終床 4G-1,灰	8とセット
8	杯身	9.6 11.6 3.8	自然釉の為不明	砂粒微量、破裂粒顕著。 2次焼成。 暗灰色を基調とする。	(内) I-1	完形	窯内 燃-最終床 4G-2,灰	7とセット
57図 9	杯蓋	11.0 — 3.0	天井部 回転ヘラ削り	細砂微量、黒色破裂粒顕著。 通有、2次焼成。 暗灰褐色を基調とする。	(内) I-1	口縁部 3/4欠失	窯内　燃-最終床 4G-2 6G-1,2	10とセット
10	杯身	10.0 11.8 3.7	底部 回転ヘラ削り	内外面に黒色破裂粒。通有。灰褐色を基調とする。	(内) I-1	ほぼ 完形	窯内　燃-最終床 6G-1,2 4G-2	9とセット
11	杯蓋	11.0 — 3.5	天井部 右回転ヘラ削り	白色細粒若干、黒色破裂粒顕著。 通有、2次焼成。 灰褐色を基調とする。	(内) I-1	1/4欠失	窯内 燃-4G-1,2	12とセット
12	杯身	10.2 12.0 —	天井部 右回転ヘラ削り	白色細粒若干、黒色破裂粒顕著。 通有、2次焼成。 灰褐色を基調とする。	(内) I-1	1部 残存	燃-4G-2	11とセット
13	杯蓋	12.4 — 3.7	天井部 右回転ヘラ削り	白色細粒若干、内外面に黒色破裂粒。通有、2次焼成の為焼き歪。暗褐色を基調とするが自然釉の為外面は黒灰色。	(内) I-1	口縁部 1/4欠失	窯内 燃-最終床 4G-1	14とセット
14	杯身	10.8 12.9 4.2	自然釉の為不明	(内)灰褐色を基調として黄褐色が混ざる。 (外)自然釉付着の為、全体黄褐色。	(内) I-1	口縁部 1/3欠失	窯内 燃-4G-1,2 6G-1	13とセット
15	杯蓋	12.2 — 3.1	天井部 右回転ヘラ削り	白色細粒若干、内外面に黒色破裂粒顕著。 通有。灰褐色を基調とするが、外面は自然釉の為黒灰色。	(内) I-1	1/2残存	燃-4G-1,2	16とセット
16	杯身	10.8 12.6 3.9	窯壁付着の為 不明	白色細粒。 通有。 灰褐色を基調とする。	(内) I-1	ほぼ 完形	窯内 燃-最終床 4G-1,2	15とセット
58図 17	杯蓋	12.5 — 4.0	天井部 右回転ヘラ削り	自然釉付着、内外面に黒色破裂粒。 通有、2次焼成。 暗灰色を基調とする。	(内) I-1	口縁部 2/3欠失	窯内 燃-最終床 4G-1,2	18とセット
18	杯身	11.3 12.6 3.4	底部 回転ヘラ削り	密。やや良好。自然釉が全体にみられる。 灰白色を基調とする。	(内) I-1	完形	窯内　燃-最終床 6G-2 4G-1,2	17とセット
19	杯蓋	12.8 — 3.9	天井部 右回転ヘラ削り	白色細粒若干。 通有、2次焼成。 灰褐色を基調とする。	(内) 不鮮明	口縁部 3/4欠失	窯内 燃-最終床	20とセット
20	杯身	11.4 13.1 3.8	底部 回転ヘラ削り	白色細粒、口縁部外面に黒色破裂粒。 通有。 灰褐色を基調として全体に自然釉付着。	(内) I-1	完形	燃-最終床 4G-1,2,灰 6G-1	19とセット

図版番号	器種	法量 口径 受部径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	ヘラ記号	残存度	出土地	備考
21	杯蓋	12.4 — 3.5	天井部 右回転ヘラ削り	白色細粒若干、内外面に黒色破裂粒。 通有。 灰褐色を基調とする。	(内) I-1	口縁部 3/4と底 部欠失	燃-最終床 4G-2,灰 8G-2	22とセット
22	杯身	11.4 12.8 3.7	自然釉の為不明	細砂微量混入、黒色破裂粒顕著。 通有、2次焼成。 暗灰褐色を基調とする。	(内) I-1	完形	燃-4G-2,灰 6G-1	21とセット
23	杯蓋	13.1 — 4.4	天井部 回転ヘラ削り	白色細粒若干、内外面に黒色破裂粒。良好。 (内)灰褐色を基調とする。 (外)自然釉の為黒灰褐色を基調とする。	(内) I-1	完形	窯内　燃-最終床 5G-1 4G-1,2	24とセット
24	杯身	12.0 13.4 4.0	自然釉の為不明	白色細粒若干、黒色破裂粒顕著。良好、2次焼成。黒褐色を基調とするが、内外面に自然釉の為、茶色範囲が広い。	(内) I-1	口縁部 2/3欠失	燃-最終床 3G-2 4G-1,2	23とセット
59図 25	杯蓋	13.7 — 4.0	自然釉の為不明	白色細砂微量、内外面に黒色破裂粒。 通有。 灰褐色を基調とする。	(内) I-1	口縁部 1/4欠失	燃-最終床 4G-1,2,灰 6G-1	26とセット
26	杯身	12.2 13.8 3.9	底部 回転ヘラ削り	細粒若干、黒色破裂粒顕著。 通有、焼き歪。 灰褐色を基調とする。	(内) I-1	ほぼ 完形	窯内 燃-4G-2,灰	25とセット
27	杯蓋	13.8 — 3.4	天井部 右回転ヘラ削り	石英微量、内外面に黒色破裂粒。通有。 灰褐色を基調とするが外面自然釉の為一部黒灰色。	(内) I-1	1/2残存	燃-4G-2,灰	28とセット
28	杯身	12.4 14.5 3.4	底部 回転ヘラ削り	白色細粒若干、黒色破裂粒顕著。 良好、2次焼成。 灰褐色を基調とする。	(内) I-1	ほぼ 完形	燃-最終床 4G-1,2,灰	27とセット
29	杯蓋	13.3 — 3.3	天井部 回転ヘラ削り	白色細粒有、内面に黒色破裂粒。良好。 灰褐色を基調とする。	(内) I-1	1/4欠失	窯内　燃-最終床 6G-2 4G-2,灰	30とセット
30	杯身	11.8 13.6 3.4	底部 回転ヘラ削り	焼成時の溶解塊付着。 (内)黄褐色を基調とする。 (外)灰褐色を基調とするが、半分黄褐色。	(内) I-1	口縁部 1/2欠失	窯内　燃-最終床 6G-2.4G-灰 5G-1	29とセット
31	杯蓋	11.2 — —	天井部 右回転ヘラ削り	白色細粒若干、内外面に黒色破裂粒。良好。(内)灰褐色を基調とする。(外)暗灰色を基調とする。	(内) I-2	1/3残存	窯内　燃-最終床 6G-2 4G-1,2,灰	32とセット
32	杯身	10.2 — 3.5	付着物の為不明	密、精良。 良好堅緻。 青灰色を基調とする。	(内) I-2	口縁部 一部欠 失ほぼ 完形	窯内 燃-最終床 4G-2.6G-2	31とセット
60図 33	杯蓋	12.8 — 3.6	天井部 回転ヘラ削り	細粒若干、黒色破裂粒顕著。 良好。 灰褐色を基調とする。	(内) I-2	口縁端 部欠失	窯内 燃-最終床 3G-2.4G-1,2	34とセット
34	杯身	11.1 13.3 4.0	底部 右回転ヘラ削り	細粒若干、黒色破裂粒顕著。 良好。 暗灰褐色を基調とする。	(内) I-2	1/3残存	窯内　燃-最終床 3G-1.4G-1 5G-1.6G-2	33とセット
35	杯蓋	13.1 — 3.2	天井部 回転ヘラ削り	白色細粒若干、黒色破裂粒顕著。 良好。 灰褐色を基調とする。	(内) I-2	1/2残存	窯内 燃-最終床 4G-1	36とセット
36	杯身	12.0 14.0 3.9	底部 回転ヘラ削り	白色細粒若干、内外面に黒色破裂粒顕著。 良好、2次焼成。 暗灰褐色を基調とする。	(内) I-2	口縁部 1/4残存 底部残 存	燃-最終床 4G-2.5G-1 6G-1,2	35とセット
37	杯蓋	13.3 — 3.7	天井部 右回転ヘラ削り	砂粒をほとんど含まない、内外面に黒色破裂粒顕著。良好。灰褐色を基調とする。	(内) I-2	1/2残存	窯内　燃-最終床 5G-1.6G-1 8G-2	38とセット
38	杯身	12.2 14.2 3.8	底部 回転ヘラ削り	内外面とも灰褐色を基調とし黄褐色がある。外面に溶解塊が付着。	(内) I-2	1/3欠失	窯内　燃-最終床 6G-1,2 8G-2	37とセット
39	杯蓋	13.3 — 3.8	天井部 右回転ヘラ削り	白色細粒若干、内外面に黒色破裂粒。 良好。 暗灰褐色を基調とする。	(内) I-2	口縁部 5/6欠失	窯内 燃-最終床 6G-1,2	40とセット
40	杯身	12.0 14.1 4.1	底部 回転ヘラ削り	白色細粒、斜長石粒。 通有。 灰褐色を基調とする。	(内) I-2	完形	窯内　燃-最終床 4G-1.5G-1 6G-1,2	39とセット
61図 41	杯蓋	13.8 — 3.5	天井部 回転ヘラ削り	白色細粒多量、黒色破裂粒顕著。通有、2次焼成。焼き歪。灰褐色を基調とするが、自然釉の為黄褐色。	(内) I-2	口縁部 1/4欠失	燃-6G-2	42とセット (融着)

図版番号	器種	法量 口径 受部径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	ヘラ記号	残存度	出土地	備考
42	杯身	12.5 14.8 4.1	底部 回転ヘラ削り	白色細粒若干、黒色破裂粒顕著。 通有、２次焼成。 暗灰褐色を基調とする。	(内) Ⅰ-２	口縁部 1/4欠失	燃-最終床 ４G-１，２	41とセット (融着)
43	杯蓋	12.5 — 3.7	天井部 右回転ヘラ削り	白色細粒若干、内外面に黒色破裂粒。 通有、２次焼成。 灰褐色を基調とする。	(内)Ⅱ	口縁部 3/4欠失	窯内　燃-最終床 ４G-２ ６G-１，２	44とセット
44	杯身	11.2 13.2 4.0	底部 右回転ヘラ削り	白色細粒若干、黒色破裂粒顕著。良好、２次焼成。灰褐色を基調とするが、自然釉の為外面黒褐色、褐色、内面黄褐色。	(内)Ⅱ	口縁部 1/4欠失	窯内 燃-６G-１，２ ８G-２	43とセット
45	杯蓋	12.6 — 3.5	天井部 右回転ヘラ削り	白色細粒若干、内外面に黒色破裂粒。 良好。 灰褐色を基調とする。	(内)Ⅱ	1/2残存	窯内 燃-３G-灰	46とセット
46	杯身	11.1 13.2 3.9	底部 右回転ヘラ削り	砂粒、細砂若干。 堅緻、良好、２次焼成。 灰褐色を基調とする。	(内)Ⅱ	口縁部 １部欠損	窯内 燃-最終床 ３G-２．６G-２	45とセット
47	杯蓋	13.7 — 3.2	天井部 右回転ヘラ削り	石英粒微量、内外面に黒色破裂粒。 良好。 灰褐色を基調とする。	(外)Ⅱ	口縁部 1/3残存 天井部 残存	窯内 燃-最終床 ３G-２	48とセット (融着)
48	杯身	12.4 14.4 —	横ナデ	砂粒ほとんど含まない、内面に黒色破裂粒。良好。暗灰褐色を基調とする。		口縁部 1/4残存	燃-最終床 ４G-２．５G-１	47とセット (融着)
62図 49	杯蓋	11.7 — 3.7	天井部 右回転ヘラ削り	白色細粒若干。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	(内) Ⅰ-１	3/4残存	燃-４G-２ ６G-１，２	
50	杯蓋	12.0 — 4.0	天井部 右回転ヘラ削り	白色細粒若干。通有、２次焼成。灰褐色を基調とするが、自然釉の為、内面暗灰褐色外面黒灰色、黄褐色。	(内) Ⅰ-１	口縁部 1/4欠失	窯内　燃-最終床 ４G-２．６G-２ ８G-２	
51	杯蓋	12.6 — 3.6	天井部 右回転ヘラ削り	白色細粒若干、内外面に黒色破裂粒顕著。 良好、２次焼成。 灰褐色を基調とする。	(内) Ⅰ-１	1/3残存	窯内 燃-４G-２	
52	杯蓋	12.2 — 4.0	天井部 回転ヘラ削り	白色細粒若干、内外面に黒色破裂粒顕著。 通有。	(内) Ⅰ-１	口縁部 1/3欠失	窯内 燃-最終床 ４G-２．６G-１	
53	杯蓋	12.2 — 3.6	天井部 右回転ヘラ削り	白色細粒若干、内外面に黒色破裂粒。良好。 (内)灰褐色を基調とする。 (外)暗灰褐色を基調とする。	(内) Ⅰ-１	口縁部 1/4残存 1/2個体	窯内　燃-最終床 ８G-２ ４G-１，２，灰	
54	杯蓋	12.5 12.4-12.9 3.8	天井部 回転ヘラ削り	白色細粒若干、内外面に黒色破裂粒。 通有、２次焼成、焼き歪。 灰褐色を基調とする。	(内) Ⅰ-１	ほぼ 完形	窯内　燃-最終床 ４G-１．５G-１ ６G-１，２	
63図 55	杯蓋	13.4 — 3.5	天井部 回転ヘラ削り	白色細粒若干、内外面に黒色破裂粒。 通有。 灰褐色を基調とする。	(内)	口縁部 1/2欠失	窯内 燃-最終床 ６G-２．８G-２	
56	杯蓋	12.0 — 3.2	天井部 右回転ヘラ削り	白色砂粒微量。 通有。 灰褐色を基調とする。	(内) Ⅰ-１	口縁部 3/5欠失	窯内 燃-４G-２ ６G-１，２	
57	杯蓋	12.2 — 3.8	天井部 右回転ヘラ削り	内面に黒色破裂粒。良好。 (内)灰褐色を基調とする。 (外)黒灰褐色を基調とする。	(内) Ⅰ-１	口縁部 3/4欠失	窯内　燃-最終床 ６G-１，２ ４G-１，灰	
58	杯蓋	12.5 — 3.7	天井部 右回転ヘラ削り	自然釉の為不明。 通有、２次焼成。焼き歪。 灰褐色を基調とする。	(内) Ⅰ-１	口縁部 3/4欠失	窯内 燃-最終床 ４G-２．６G-１	
59	杯蓋	12.4 — 3.9	天井部 右回転ヘラ削り	白色細粒若干、内外面に黒色破裂粒。 通有。 灰褐色を基調とする。	(内) Ⅰ-１	口縁部 1/4欠失	窯内 燃-最終床 ４G-１，２，灰	
60	杯蓋	13.6 — 3.9	天井部 右回転ヘラ削り	白色細粒若干、内外面に黒色破裂粒有。 通有。 灰褐色を基調とする。	(内) Ⅰ-１	口縁部 3/4欠失	窯内 燃-４G-１，２，灰	
64図 61	杯蓋	12.0 — 4.0	天井部 回転ヘラ削り	砂粒細粒若干。内外面に黒色破裂粒。 通有。 灰褐色を基調とする。	(内) Ⅰ-１	1/2残存	窯内 燃-最終床 ４G-１，２，灰	
62	杯蓋	13.3 — 3.7	天井部 右回転ヘラ削り	白色細砂、内外面に黒色破裂粒。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	(内) ヘラ痕か？	天井部 1/2欠失	窯内　燃-２G-１ ３G-２．４G-２ ５G-１．６G-２． ８G-２	

図版番号	器種	法量 口径 受部径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	ヘラ記号	残存度	出土地	備考
63	杯蓋	14.0 — 4.3	天井部 回転ヘラ削り	内面に黒色破裂粒。良好。 灰褐色を基調とする。	(内) I-1	口縁部 1/2欠失	窯内　燃-最終床 4G-2．5G-1 6G-1	
64	杯蓋	14.0 — 4.4	天井部 右回転ヘラ削り	白色砂粒やや多量、内外面に黒色破裂粒。 通有。 灰褐色を基調とする。	(内) I-1	口縁部 1/2欠失	窯内 燃-最終床．6G-1 4G-1，2	
65	杯身	9.6 11.5 3.6	底部 回転ヘラ削り	精緻。良好。青灰色を基調とする。(内)黄色っぽい付着物有り。(外)1/4ほど付着物。	(内) I-1	ほぼ 完形	窯内 燃-4G-1，2，灰 6G-2	
66	杯身	9.9 — 3.8	付着物の為不明	密、精良。 良好、堅緻。 灰褐色を基調とする。	(内)	ほぼ 完形	窯内 燃-最終床 4G-灰．6G-1	
65図 67	杯身	10.3 12.3 3.6	付着物の為不明	黒色破裂粒有り、白色細粒若干。良好。 (内)灰褐色に黄褐色。(外)黒色で焼成時の黄褐色の付着物。	(内) I-1	ほぼ 完形	窯内　燃-最終床 4G-2 6G-1，2．8G-2	
68	杯身	10.3-10.5 12.5 4.6	底部 回転ヘラ削り	細砂若干、黒色破裂粒顕著。 良好、2次焼成。 灰褐色を基調とする。	(内) I-1	ほぼ 完形	燃-最終床 6G-2．8G-2	
69	杯身	10.5 12.4 3.8	自然釉の為不明	細砂若干、黒色微粒若干。 良好、2次焼成。 灰褐色を基調とするが、付着物の為茶褐色。	(内) I-1	1/2残存	燃-最終床 3G-2 6G-1，2	
70	杯身	10.8 12.1 3.1	底部 回転ヘラ削り	灰褐色に薄く黄褐色が覆っている。外面の一部に自然釉有り。	(内) I-1	口縁部 2/3欠失	窯内 燃-6G-1，2 8G-2	
71	杯身	10.9 12.5 4.2	底部 右回転ヘラ削り	砂粒若干。 良好だが器壁の破裂膨張有り、2次焼成。 暗灰色を基調とする。	(内) I-1	口縁部 1/4欠失	窯内 燃-最終床 4G-2，灰	
72	杯身	12.4 10.8 3.6	底部 右回転ヘラ削り	細砂若干、黒色微粒石若干。 良好。 灰白色を基調とする。	(内) I-1	ほぼ 完形	窯内　燃-最終床 5G-2 6G-1，2	
66図 73	杯身	11.7 13.7 3.3	底部 右回転ヘラ削り	細砂若干。堅緻良好、2次焼成。灰褐色を基調とするが自然釉の為黄褐色が混ざる。	(内) I-1	口縁部 1/4欠失 底部1 部欠失	窯内　燃-2G-1 3G-2，灰 4G-1．6G-1	
74	杯身	12.5 14.1 4.1	底部 自然釉の為不明	精緻。良好。 (内)灰褐色を基調とする。(断面)青灰色。 (外)黄褐色を基調とする。自然釉付着。	(内) I-1	口縁部 1/4欠失	窯内　燃-6G-1 7G-1．8G-2	
75	杯身	13.0 14.4 3.5	底部 右回転ヘラ削り	砂粒若干、黒色破裂粒有り。 通有、2次焼成。 灰褐色を基調とする。	(内) I-1	1/4残存	窯内　燃-5G-1 8G-2 6G-1，2	
76	杯身	13.0 14.9 4.0	底部 右回転ヘラ削り	砂粒若干、破裂粒。 通有、2次焼成。 灰褐色を基調とする。	(内) I-1	1/3残存	燃-最終床 3G-1，灰 4G-灰	
77	杯蓋	12.0 — 3.7	天井部 右回転ヘラ削り	白色細粒若干。 通有、2次焼成、焼き歪。 灰褐色を基調とする。	(内) I-2	底部、 口縁部 の1部 残存	窯内 燃-最終床 6G-1	
78	杯蓋	12.2 — 4.0	天井部 右回転ヘラ削り	白色細粒若干、内外面に黒色破裂粒。 通有。 暗灰色を基調とする。	(内) I-2	1/3残存	窯内 燃-2G-1	
67図 79	杯蓋	13.0 — 4.2	天井部 回転ヘラ削り	白色細粒若干、内外面に黒色破裂粒顕著。 良好、焼き歪み。 灰褐色を基調とする。	(内) I-2	口縁部 1/4欠失	窯内 燃-最終床 2G-2．6G-1	
80	杯蓋	12.6 — 3.2	天井部 右回転ヘラ削り	白色細粒若干。 堅緻にて良好。 暗灰色を基調とする。	(内) I-2	1/3残存	窯内 燃-3G-2	
81	杯蓋	13.3 — 4.2	天井部 回転ヘラ削り	白色細砂微量、内外面に黒色破裂粒。 通有、2次焼成。 灰褐色を基調とする。	(内) I-2	ほぼ 完形	窯内　燃-2G-1 4G-1，2 6G-1	
82	杯身	11.6 — 3.5	付着物の為不明	密、精良。 良好、堅緻。 青灰色を基調とする。	(内) I-2	完形	窯内 燃-2G-1，2 3G-2．4G-2	
83	杯身	11.6 12.6 4.0	自然釉の為不明	精緻。(断面)青灰色を基調とする。(内)青灰色を基調とする。(外)黄褐色を基調とする。	(内) I-2	完形	窯内 燃-2G-1，2 4G-1	

図版番号	器種	法量 口径 受部径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	ヘラ記号	残存度	出土地	備考
84	杯身	11.6 14.0 4.1	底部 回転ヘラ削り	細粒若干。 良好。 暗灰色を基調とする。	(内) I-2	ほぼ 完形	窯内　燃-最終床 4G-1,2．3G-2 6G-1,2	
68図 85	杯身	11.6 13.9 4.0	底部 回転ヘラ削り	密。やや良好。(外)黒灰色を基調とする。 (内)灰褐色を基調とする。	(内) I-2	口縁部 1/2欠失	窯内　燃-最終床 4G-1,3．2G-2 6G-1,2．8G-2	
86	杯身	11.5 13.7 3.6	自然釉の為不明	白色細粒。 通有。 灰褐色を基調とする。	(内) I-2	完形	窯内 燃-2G-1,2 4G-2	
87	杯身	11.8 13.7 3.9	自然釉の為不明	白色細砂やや多量。黒色破裂粒顕著。 良好、2次焼成。灰褐色を基調とするが、外面は全面が自然釉に覆われ内面は自然釉が点在。	(内) I-2	窯内	燃-3G-2 4G-1,2	
88	杯身	11.8 14.0 4.2	底部 回転ヘラ削り	白色細粒若干。黒色破裂粒顕著。堅緻、良好。灰褐色を基調とするが、外面は自然釉の為大部分が黄褐色、1部黒色。	(内) I-2	完形	窯内 燃-2G-1 6G-1,2	
89	杯身	11.8 13.7 4.0	底部 回転ヘラ削り	白色細粒若干、黒色破裂粒顕著。良好、2次焼成。灰褐色を基調とする。内面は褐色が強く、外面は自然釉が多く認められる。	(内) I-2	1/6残存	窯内 燃-最終床 6G-1,2	
90	杯身	11.6 — 4.2	底部 回転ヘラ削り	細粒若干、破裂粒。 良好堅緻。 灰褐色を基調とする。	(内) I-2	完形	窯内　燃-最終床 4G-1,2．2G-1 5G-1．6G-1,2	
69図 91	杯身	11.9 14.5 4.1	自然釉の為不明	細粒若干、黒色破裂粒顕著。 良好 暗灰褐色を基調とする。	(内) I-2	ほぼ 完形	窯内 燃-4G-1	
92	杯身	12.2 — 4.0	底部 回転ヘラ削り	密、精良。 良好、堅緻。 灰褐色を基調とする。	(内) I-2	ほぼ 完形	窯内 燃-2G-1,2 4G-1,2	
93	杯身	11.9 14.3 3.9	底部 右回転ヘラ削り	細砂若干、砂粒破裂粒顕著。 良好。 灰褐色を基調とする。	(内) I-2	ほぼ 完形	窯内 燃-4G-1,2 6G-2	
94	杯身	12.1 14.1 3.7	付着物の為不明	精緻。良好。(内)灰褐色を基調とする。 (断面)青灰色。(外)自然釉付着の為、黄褐色を基調とする。	(内) I-2	半完形	窯内　燃-3G-1 4G-1,2 6G-2．8G-2	
95	杯身	12.2 14.3 4.0	付着物の為不明	細砂粒若干。良好堅緻。灰褐色を基調とするが内外面に自然釉付着の為茶褐色。	(内) I-2	完形	窯内 燃-2G-1,2 3G-1．4G-2 5G-1	
96	杯身	12.4 14.7 4.2	底部 回転ヘラ削り	細粒若干、内外面に黒色破裂粒。 良好、堅緻。 暗灰色を基調とする。自然釉の為黄褐色。	(内) I-2	口縁部 1/4欠失	窯内　燃-最終床 3G-2 4G-1,2	
70図 97	杯身	12.6 14.0 —	横ナデ	内外面に黒色破裂粒。良好。 灰褐色を基調とする。	(内) I-2	口縁部 1/4残存	窯内 燃-4G-1	
98	杯蓋	12.3 — 4.1	天井部 回転ヘラ削り	白色細粒若干、内外面に黒色破裂粒。 通有。 灰褐色を基調とする。	(内)II	口縁部 1/4欠失	窯内 燃-最終床 4G-灰．6G-2	
99	杯蓋	12.4 — 4.0	天井部 回転ヘラ削り	砂粒微量、内外面に黒色破裂粒。 良好。 暗灰褐色を基調とする。	(内)II	口縁部 ½欠失	窯内　燃-最終床 3G-灰．6G-1 8G-2	
100	杯蓋	12.5 — 4.4	天井部 回転ヘラ削り	細砂、砂粒微量、黒色微粒若干。 不良。 灰白色を基調とする。	(内)II	口縁部 1/3欠失	燃-最終床 4G-2,灰	
101	杯蓋	13.4 — 3.7	天井部 回転ヘラ削り	白色細粒若干、内外面に黒色破裂粒若干。 通有。 灰褐色を基調とする。	(内)II	ほぼ 完形	窯内　燃-最終床 3G-灰．4G-2 5G-1．6G-1,2	
102	杯蓋	13.8 — 4.2	天井部 右回転ヘラ削り	角閃石微量。 不良。 淡灰褐色を基調とする。	(内)II	完形	燃-最終床	
71図 103	杯身	11.2 13.5 4.0	底部 右回転ヘラ削り	細砂微量。 堅緻、良好。 明灰褐色を基調とする。	(内)II	完形	燃-6G-1	
104	杯身	11.3 13.5 3.7	底部 回転ヘラ削り	白色細粒多量、黒色破裂粒多量。良好、2次焼成。灰褐色を基調とするが、内面は褐色が強く、外面は黒色が多い。	(内)II	1/2残存	燃-5G-1．6G-1	

図版番号	器種	法量 口径 受部径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	ヘラ記号	残存度	出土地	備考
105	杯身	11.8 13.9 3.9	底部 回転ヘラ削り	細砂若干、黒色微粒やや多量。 良好、2次焼成。 灰褐色を基調とする。	(内)II	1/2残存	燃-6G-1,2	
106	杯蓋	13.3 — —	自然釉の為不明	白色細粒、内面に黒色破裂粒。 通有。 暗灰褐色を基調とする。		口縁部 1/6残存	窯内　燃-最終床 2G-1,2. 3G-1 4G-1. 5G-1	107とセット
107	杯身	11.8 13.9 3.5	底部 右回転ヘラ削り	内外面に黒色破裂粒。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	(内)II	ほぼ 完形	窯内　燃-最終床 2G-1,2. 3G-1 4G-1. 5G-1	106とセット
108	杯身	11.7 13.8 3.8	底部 右回転ヘラ削り	細砂若干。 堅緻、良好、2次焼成。 暗灰褐色を基調とする。	(内)III	底部1 部欠失	窯内 燃-2G-2 4G-1. 6G-2	
72図 109	杯蓋	13.6 — 3.7	天井部 右回転ヘラ削り	砂粒細砂微量、黒色微粒若干。 良好。 灰色から灰褐色を基調とする。	(外) ヘラ痕	口縁部 1/4欠失	窯内 燃-3G-1	
110	杯蓋	13.4 — 3.7	天井部 右回転ヘラ削り	砂粒ほとんど含まない、内外面に黒色破裂粒。良好。灰色を基調とする。	(外)II	ほぼ 完形	窯内　燃-最終床 3G-2 4G-1,2	
111	杯蓋	13.7 — 3.5	天井部 右回転ヘラ削り	石英粒若干、内外面に黒色破裂粒。 良好。 灰褐色を基調とする。	(外)II	口縁部 1/2欠失	燃-最終床 4G-1,2 6G-1	
112	杯蓋	13.6 — 3.8	天井部 右回転ヘラ削り	砂粒ほとんど含まない、内外面に黒色破裂粒。良好、2次焼成、焼き歪。	(外)II	口縁部 1/2欠失	窯内 燃-4G-1 6G-1	
113	杯蓋	13.4 — 3.5	天井部 右回転ヘラ削り	内外面に黒色破裂粒顕著。 通有、2次焼成。 灰褐色を基調とする。	(外)II	口縁部 1/4欠失	窯内 燃-4G-2	
114	杯蓋	13.8 — 3.5	天井部 右回転ヘラ削り	白色細粒若干、内外面に黒色破裂粒顕著。 通有、2次焼成。 灰褐色を基調とする。	(外)II	ほぼ 完形	窯内 燃-3G-2 4G-1. 8G-2	
73図 115	杯蓋	14.0 — 3.8	天井部 回転ヘラ削り	白色細粒若干、内外面に黒色破裂粒。 良好。 灰褐色を基調とする。	(外)II	ほぼ 完形	窯内　燃-最終床 3G-2. 4G-1,2 6G-1	
116	杯蓋	14.2 — 3.4	天井部 右回転ヘラ削り	白色細粒若干、内外面に黒色破裂粒。 良好。 灰褐色を基調とする。	(外)II	1/3欠失	窯内　燃-最終床 6G-1,2 3G-1. 4G-灰	
117	杯蓋	14.2 — 3.6	天井部 右回転ヘラ削り	砂粒をほとんど含まない。内外面に黒色破裂粒。良好。灰褐色を基調とする。	(外)II	ほぼ 完形	窯内 燃-最終床 6G-1,2	
118	杯蓋	14.0 — 2.5	天井部 右回転ヘラ削り	石英微量。内外面に黒色破裂粒。 良好。 灰褐色を基調とする。	(外)II	口縁部 1/2欠失	燃-最終床 6G-1,2 焚口前部灰層	
119	杯身	11.2 13.7 4.0	底部 右回転ヘラ削り	密、砂粒をほとんど含まない。黒色破裂粒。 良好。 暗灰色を基調とする。自然釉付着。	(外)II	1/5欠失	窯内　燃-最終床 2G-2 4G-1,2	
120	杯身	12.1 14.3 4.2	底部 右回転ヘラ削り	石英粒微量、内外面に黒色破裂粒。 良好。 灰褐色を基調とする。	(外)II	ほぼ 完形	窯内 燃-4G-1,2 6G-2	
74図 121	杯身	12.4 14.9 4.0	底部 右回転ヘラ削り	細砂微量。 良好、2次焼成。 灰褐色を基調とする。	(外)II	ほぼ 完形	窯内 燃-4G-1 5G-1	
122	杯身	12.6 14.8 3.8	底部 右回転ヘラ削り	細砂微量。 通有、2次焼成。 灰褐色を基調とする。	(外)II	ほぼ 完形	窯内　燃-最終床 3G-1. 4G-1. 6G-2. 灰原-F-I-24	
123	杯蓋	13.4 — 3.7	天井部 右回転ヘラ削り	石英、白色細粒若干。 良好、2次焼成。 灰褐色を基調とする。	(外)IV	口縁部 ～体部 1/2欠失	燃-最終床	
124	杯蓋	13.5 — 3.6	天井部 右回転ヘラ削り	良好、砂粒ほとんど含まない。内外面黒色破裂粒。良好。暗灰色を基調とする。	(外)IV	1/2残存	窯内 燃-3G-1 4G-1. 6G-1	
125	杯蓋	14.0 — 3.4	天井部 右回転ヘラ削り	石英粒若干。 良好、2次焼成。 暗灰色を基調とする。	(外)IV	口縁部 3/4欠失	窯内 燃-最終床 4G-2. 6G-2	

図版番号	器種	法量 口径 受部径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	ヘラ記号	残存度	出土地	備考
126	杯蓋	14.0 — 3.3	天井部 右回転ヘラ削り	白色細砂若干、内外面に黒色破裂粒。 良好。 暗灰色を基調とする。	(外)IV	口縁部1部欠失体部～底部1/2欠失	窯内　燃-最終床 3G-1．6G-1 8G-2	
75図 127	杯蓋	13.2 — 3.5	天井部 右回転ヘラ削り	石英粒若干、内外面に黒色破裂粒。 良好。 暗灰色を基調とする。	(外)V	口縁部 1/2欠失	窯内 燃-3G-1，2 4G-1．5G-1	
128	杯蓋	12.4 — 4.1	天井部 右回転ヘラ削り	石英微量。内面に黒色破裂粒。 良好。 暗灰褐色を基調とする。	(外)VI	1/3残存	窯内 燃-3G-2 4G-2	
129	杯蓋	13.2 — 3.4	天井部 右回転ヘラ削り	砂粒ほとんど含まない。内外面に黒色破裂粒。良好。暗灰色を基調とする。	(外)VI	口縁部 1/4欠失	燃-最終床．3G-2 4G-1，2 6G-1，2	
130	杯蓋	13.6 — 3.8	天井部 右回転ヘラ削り	石英粒若干、内外面に黒色破裂粒。 通有。 灰褐色を基調とする。	(外)VI	ほぼ 完形	窯内 燃-4G-1，2，灰 5G-1，2．6G-1	
131	杯蓋	14.0 — 3.6	天井部 右回転ヘラ削り	石英粒若干、内外面に黒色破裂粒。 良好。 灰色を基調とする。	(外)VI	1/3残存	窯内　燃-最終床 4G-1，2 6G-1，2	
132	杯蓋	13.5 — 3.5	天井部 右回転ヘラ削り	石英粒やや多量、内外面に黒色破裂粒。 通有。 灰褐色を基調とする。	(外)VII	1/2残存	窯内 燃-最終床	
76図 133	杯身	11.5 13.9 4.3	底部 右回転ヘラ削り	密、白色細粒若干、内外面に黒色破裂粒。 良好。 灰褐色を基調とする。	(内)IIの可能性	1/4欠失	燃-4G-1，2 6G-1	
134	杯身	12.5 14.4 3.7	自然釉の為不明	白色細粒若干。 良好、2次焼成。 灰褐色を基調とする。	(外)III	1/3欠失	窯内　燃-最終床 4G-2 6G-1，2	
135	杯身	12.3 14.4 3.5	底部 右回転ヘラ削り	白色細粒若干、黒色破裂粒顕著。 良好、2次焼成、焼き歪。 灰褐色を基調とする。	(外)III	口縁部～体部1部欠失	窯内 燃-最終床 4G-1，2	
136	杯身	12.0 14.1 3.5	底部 回転ヘラ削り	白色細粒若干、黒色破裂粒顕著。 良好。 灰褐色を基調とする。	(外)V	1/5欠失	窯内　燃-最終床 4G-1，2．5G-1，2 6G-2	
137	杯身	12.3 14.3 4.0	底部 右回転ヘラ削り	自然釉の為不明。 通有、2次焼成。 灰褐色を基調とする。	(外)IV	1/2残存	燃-3G-1，2 4G-2	
138	杯身	12.1 14.1 3.6	底部 右回転ヘラ削り	白色細粒若干、内外面に黒色破裂粒。通有。 (内)灰褐色を基調とする。 (外)黒灰褐色を基調とする。	(外)V	口縁部 1部欠失	窯内　燃-最終床 6G-1，2 8G-2	
77図 139	杯身	12.1 14.2 3.6	底部 右回転ヘラ削り	白色細粒若干、黒色破裂粒顕著。 良好。 灰褐色を基調とする。	(外)V	底部1部欠失	窯内 燃-最終床 6G-1	
140	杯身	11～12 13.5 5.2	底部 右回転ヘラ削り	細粒若干。 通有、2次焼成、焼き歪。 灰褐色を基調とする。	(外)VI	完形	窯内 燃-4G-1 6G-1	
141	杯身	11.5 13.6 3.7	自然釉の為不明	細砂微量。 良好。 灰褐色を基調とする。	(外)VI	3/4残存	燃-6G-2 8G-2	
142	杯身	12.0 14.4 4.2	自然釉の為不明	密、内面に黒色破裂粒。 良好。 灰褐色を基調とする。	(外)VI	ほぼ 完形	窯内 燃-3G-2 4G-1，2	
143	杯身	12.1 14.4 4.0	自然釉の為不明	内外面の自然釉、付着物のため不明、黒色破裂粒顕著。通有。灰褐色を基調とする。	(外)VI	1/4欠失	燃-最終床．1G-2 4G-2 6G-1，2	
144	杯身	12.3 14.1 3.8	底部 右回転ヘラ削り	細粒若干。 良好、2次焼成。 灰褐色を基調とする。	(外)VI	1/2残存	窯内	
78図 145	杯身	12.6 14.6 3.5	底部 右回転ヘラ削り	細砂微量。 良好、2次焼成。 灰褐色を基調とする。	(外)ヘラ記号不明確	ほぼ 完形	窯内 燃-3G-2 4G-1	
146	杯蓋	— — —	天井部 回転ヘラ削り	石英粒微量、白色細粒若干、内外面に黒色破裂粒。良好、2次焼成。暗灰色を基調とする。	(内)II	3/4欠失	窯内 燃-最終床 8G-2	

図版番号	器種	法量 口径 受部径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	ヘラ記号	残存度	出土地	備考
147	杯蓋	13.4 — 3.6	天井部 回転ヘラ削り	白色細砂微量。 通有。 灰褐色を基調とする。	Ⅷ	口縁部 1/4欠失	窯内　燃-3G-2 5G-2．6G-1	
148	杯蓋	13.6~14.0 — 3.9	天井部 回転ヘラ削り	白色細砂微量、内外面に黒色破裂粒。 やや不良、2次焼成。 灰色を基調とする。断面黒褐色。	Ⅷ	口縁部 1部欠失	窯内　燃-最終床 4G-1，2 5G-1	
149	杯蓋	13.7 — —	天井部 右回転ヘラ削り	白色細砂、内外面に黒色破裂粒。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	Ⅷ	天井部 欠失	窯内　燃-最終床 4G-1，2 6G-1，2	
79図 150	杯身	11.8 14.0 3.9	底部 回転ヘラ削り	精緻。良好。 青灰色を基調とし、外面に黄色っぽい付着物がある。	Ⅷ	ほぼ 完形	窯内　燃-最終床 3G-1	
151	杯身	11.9 13.9 4.1	底部 右回転ヘラ削り	細砂若干、黒色破裂粒顕著。 良好、2次焼成。 灰褐色を基調とする。	Ⅷ	2/3残存	窯内 燃-4G-1	
152	杯身	11.9 14.2 4.0	底部 右回転ヘラ削り	細砂若干、黒色破裂粒顕著。 良好。 灰褐色を基調とする。	Ⅷ	ほぼ 完形	窯内 燃-5G-2 6G-2	
153	杯身	12.1 14.2 3.9	底部 右回転ヘラ削り	白色細粒を小量含む、内外面に黒色破裂粒。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	Ⅷ	ほぼ 完形	窯内　燃-2G-1 4G-1．5G-1，2 6G-1	
154	杯身	11.5 13.8 3.6	底部 右回転ヘラ削り	細砂微量、黒色破裂粒顕著。 良好。 灰褐色を基調とする。	Ⅷ	ほぼ 完形	窯内 燃-4G-2 5G-1	
155	杯身	11.9 14.1 3.8	底部 回転ヘラ削り	細粒若干。 良好、堅緻。 灰褐色を基調とする。	無し	完形	窯内 燃-2G-1，2	
80図 156	杯蓋	11.2 — —	横ナデ	白色細粒微量。 通有。 灰褐色を基調とする。	無し	破片	燃-3G-灰	
157	杯蓋	— — —	天井部 右回転ヘラ削り	白色砂粒、内面に黒色破裂粒。良好。 (内)灰褐色を基調とする。 (外)黒灰褐色を基調とする。	無し	2/3欠失	窯内　燃-最終床 4G-1．8G-2	
158	杯蓋	12.9 — 4.1	天井部 右回転ヘラ削り	内外面に黒色破裂粒。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	無し	1/4欠失	窯内　燃-最終床 3G-1．4G-1 5G-1，2．8G-2	
159	杯蓋	— — —	横ナデ	砂粒はほとんど含まない。 良好。 暗灰色を基調とする。	無し	破片	燃-4G-1，2	
160	杯蓋	12.5 — 4.0	天井部 右回転ヘラ削り	細砂細粒若干、角閃石微量。 通有。 明灰褐色を基調とする。	無し	ほぼ完形	窯内 燃-3G-1，2	
161	杯蓋	12.7 — 3.8	天井部 右回転ヘラ削り	細粒細粒若干、黒色微粒子有り。 良好、口縁部外面に自然釉。 灰褐色を基調とする。	内面ヘラ痕	ほぼ 完形	窯内 燃-3G-1 4G-1	
162	杯蓋	13.0 — —	天井部 右回転ヘラ削り	白色細砂若干。 良好。 暗灰色を基調とする。	無し	1/3残存	燃-最終床	
163	杯蓋	13.8 — 3.6	天井部 回転ヘラ削り	石英粒微量、内外面に黒色破裂粒。 良好。 灰褐色を基調とする。	無し	口縁部 1/4残存 天井部 残存	窯内 燃-12G-2	
164	杯蓋	14.2 — 3.7	天井部 回転ヘラ削り	石英粒微量、外面に黒色破裂粒。 通有、2次焼成。 灰褐色を基調とする。	無し	口縁部 1/2欠失	窯内　燃-最終床 3G-1，2 4G-1．6G-2	
165	杯蓋	14.4 — —	横ナデ	白色細粒、内外面に黒色破裂粒。良好。 (内)淡灰褐色を基調とする。(外)灰褐色を基調とする。	無し	口縁部 2/3残存	窯内　燃-最終床 2G-1．5G-1	
166	杯蓋	12.5 — 3.1	天井部 右回転ヘラ削り	内外面に黒色破裂粒。良好。 (内)灰色を基調とする。 (外)暗灰褐色を基調とする。	無し	1/3欠失	窯内 燃-4G-1，2 5G-1．6G-1	
167	杯蓋	12.8 — 3.9	天井部 回転ヘラ削り	石英粒微量、良好。 良好。 灰褐色を基調とする。	無し	1/2残存	窯内 燃-4G-1 6G-2	

図版番号	器種	法量 口径 受部径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	ヘラ記号	残存度	出土地	備考
168	杯蓋	13.2 — 3.1	天井部 右回転ヘラ削り	白色細粒若干、内外面に黒色破裂粒。 良好。 暗灰褐色を基調とする。	無し	2/3欠失	窯内 燃-5G-1 6G-2	
169	杯蓋	— — 3.6	自然釉の為不明	白色砂粒有、内面に黒色破裂粒。良好。 (内)灰褐色を基調とする。(外)黒褐色を基調とする。	無し	2/3欠失	窯内 燃-3G．5G-1	
170	杯蓋	13.4 — —	横ナデ	内面に黒色破裂粒。 良好。 灰褐色を基調とする。	無し	天井部欠失	窯内　燃-3G-灰 4G-2,灰．5G-2 6G-1,2．8G-2	
171	杯蓋	12.9 — 4.1	回転ヘラ切り後手持ヘラ削り	白色細粒若干。 良好。 暗灰褐色を基調とする。	無し	口縁部1/4欠失	燃-3G-2,灰	
172	杯蓋	13.0 — —	天井部 右回転ヘラ削り	白色砂粒、内外面に黒色破裂粒。良好。 灰褐色を基調とする。	無し	口縁部1/3残存	窯内 燃-5G-1 6G-2	
173	杯蓋	13.7 — 3.6	天井部 回転ヘラ削り	石英粒微量、内外面に黒色破裂粒。 良好、2次焼成、焼き歪。 灰褐色を基調とする。	無し	ほぼ完形	窯内　燃-3G-2, 灰．4G-1,2 5G-1．6G-1,2	
81図 174	杯蓋	13.7 — 3.2	天井部 回転ヘラ削り	白色細粒若干、内外面に黒色粒付着。 良好。 暗灰色を基調とする。	無し	ほぼ完形	燃-3G-1 4G-1,2 6G-2	
175	杯蓋	13.8 — 3.5	天井部 回転ヘラ削り	白色細砂若干、内外面に黒色破裂粒。 良好。 灰色を基調とする。	無し	ほぼ完形	窯内　燃-最終床 3G-1,2．4G-2 5G-1．6G-2	
176	杯蓋	— — —	横ナデ	白色細粒若干。 通有。 灰褐色を基調とする。	無し	破片	燃-最終床	
177	杯蓋	12.4 — 3.7	天井部 右回転ヘラ削り	白色細粒、内外面に黒色破裂粒。良好。 (内)灰褐色を基調とする。(外)黒灰褐色を基調とする。	無し	口縁部1/6欠失	窯内　燃-最終床 3G-灰．4G-1, 灰．5G-1	
178	杯蓋	13.0 — 4.1	天井部 回転ヘラ削り	石英粒若干。 通有、2次焼成、焼き歪。 灰褐色を基調とする。	無し	ほぼ完形	窯内　燃-3G-1 4G-1,灰 6G-2	
179	杯蓋	13.0 — 3.8	天井部 右回転ヘラ削り	細砂若干、黒色微粒子多量。 良好、2次焼成。焼き歪。 灰褐色を基調とする。	無し	完形	燃-最終床 2G-1,2	
180	杯蓋	13.2 — —	横ナデ	白色砂粒、内外面に黒色破裂粒。良好。 (内)淡灰褐色を基調とする。(外)灰褐色を基調とする。	無し	口縁部1/2残存	燃-5G-1 6G-1,2	
181	杯蓋	13.2 — 4.2	天井部 右回転ヘラ削り	白色細粒微量。内外面に黒色破裂粒。良好(内)灰褐色を基調とする。(外)黒灰褐色を基調とする。	無し	1/3欠失	窯内　燃-最終床 3G-2．4G-1,2 5G-1．6G-1,2	
182	杯蓋	13.4 — —	横ナデ	白色細粒若干、内外面に黒色破裂粒。良好。(内)淡灰褐色を基調とする。(外)灰褐色を基調とする。	無し	口縁部1/2残存	燃-4G-1,2	
183	杯蓋	14.0 — 4.2	天井部 右回転ヘラ削り	白色細粒若干、内外面に黒色破裂粒。良好。灰褐色を基調とする。	無し	口縁部2/3欠失	窯内　燃-最終床 2G-2 6G-1,2	
184	杯蓋	14.4 — 3.5	天井部 右回転ヘラ削り	白色砂粒若干、内外面に黒色破裂粒。良好。灰褐色を基調とする。	無し	2/3欠失	窯内　燃-最終床 3G-2．4G-灰 6G-2	
185	杯蓋	13.6 — —	天井部 右回転ヘラ削り	白色細粒若干。 良好。 灰褐色を基調とする。	無し	2/3欠失	窯内　燃-最終床 5G-2．6G-2	
186	杯蓋	— — —	横ナデ	細砂微量。 良好。 灰色を基調とする。	無し	破片	燃-4G-1	
187	杯蓋	12.6 — —	横ナデ	白色細砂微量。 良好。 灰褐色を基調とする。	無し	破片	窯内 燃-5G-2	
188	杯蓋	— — —	横ナデ	細砂微量。 通有。 灰色を基調とする。	無し	破片	燃-8G-2	

図版番号	器種	法量 口径 受部径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	ヘラ記号	残存度	出土地	備考
189	杯蓋	— — —	横ナデ	細砂若干。 通有。 黒灰色を基調とする。	無し	破片	窯内 燃-5G-1 6G-2	
190	杯蓋	14.0 — —	天井部 回転ヘラ削り	白色細砂微量。 良好。 灰褐色を基調とする。	無し	破片	窯内	
191	杯蓋	— — —	横ナデ	白色細砂微量。 良好。 暗灰色を基調とする。	無し	破片	窯内 燃-3G-2	
82図 192	杯身	10.4 12.2 —	底部 右回転ヘラ削り	白色細粒、内面に黒色の砂。通有。 (内)灰褐色を基調とする。 (外)暗灰褐色を基調とする。	無し	底部1 部欠失	窯内　燃-最終床 3G-灰．6G-1 8G-2	
193	杯身	11.4 13.0 4.2	底部 右回転ヘラ削り	白色細砂、内面に黒色破裂粒。 通有。 黒灰褐色を基調とする。	無し	ほぼ 完形	燃-最終床 4G-1,2,灰	
194	杯身	11.8 14.2 4.2	自然釉の為不明	密、白色細砂、内外面に黒色破裂粒。良好。灰褐色を基調とする、黒色窯壁、自然釉付着。	無し	底部1 部欠失	窯内　燃-最終床 3G-1,2．4G-1,2 5G-1．6G-1,2	
195	杯身	12.0 — —	底部 回転ヘラ削り	白色砂粒若干、内外面に黒色破裂粒。 良好。 灰褐色を基調とする。	無し	口縁部 1/2底部 欠失	窯内 燃-4G-2,灰 6G-1,2	
196	杯蓋	12.7 — —	自然釉の為不明	白色細砂微量、内外面に黒色破裂粒顕著。 通有。 灰褐色を基調とする。	無し	口縁部 2/3欠失	窯内　燃-最終床 5G-2,灰．4G-1 6G-1,2	197とセット
197	杯身	11.3 — —	自然釉の為不明	白色細砂微量、内外面に黒色破裂粒顕著。 通有。 灰褐色を基調とする。	無し	口縁部 3/4残存	窯内　燃-3G-1 4G-1,2 6G-2	196とセット
198	杯身	11.0 13.2 4.2	自然釉の為不明	密、砂粒をほとんど含まない、黒色破裂粒有。 良好。 灰褐色を基調とする。	無し	体部1 部欠失	窯内　燃-2G-2 3G-2．4G-1,2 5G-1	
199	杯身	11.2 13.3 4.7	底部 回転ヘラ削り	密、砂粒をほとんど含まない。 良好。 灰色を基調とする。	無し	底部1 部欠失	窯内　燃-最終床 3G-2,灰．4G-1 5G-1．6G-1,2	
200	杯身	11.3 13.6 4.4	底部 右回転ヘラ削り	白色細砂微量、内外面に黒色破裂粒。 通有、2次焼成。 灰褐色を基調とする。	無し	体部～ 口縁部 1/4欠失	燃-最終床 4G-1,2．5G-1 6G-1,2	
201	杯身	11.4 14.0 4.2	底部 回転ヘラ削り	密、細砂微量、黒色破裂粒。 良好。 暗灰褐色を基調とする。	無し	ほぼ 完形	窯内　燃-2G-2 3G-2 4G-1,2	
202	杯身	11.4 13.7 4.4	底部 右回転ヘラ削り	白色細砂微量、内外面に黒色破裂粒。 通有。 灰褐色を基調とする。	無し	1/4欠失	窯内　燃-最終床 6G-2．7G-2 8G-2	
203	杯身	11.4 13.8 —	自然釉の為不明	明黄白色、黒褐色を基調とする。	無し	1/2残存	窯内 燃-3G-2	
204	杯身	11.4 — —	横ナデ	白色細砂微量、内外面に黒色破裂粒。 良好。 灰色を基調とする。	無し	口縁部 1/2残存	窯内 燃-4G-2,灰 6G-2	
205	杯身	12.0 14.4 —	底部 回転ヘラ削り	密、白色細砂微量。 良好、2次焼成。 灰色を基調とする。	無し	ほぼ 完形	燃-6G-1,2	
206	杯身	12.0 14.4 3.8	底部 右回転ヘラ削り	白色砂粒、内外面に黒色破裂粒。良好。 (内)灰褐色を基調とする。(外)灰白色を基調とする。	無し	1/3欠失	燃-4G-1	
207	杯身	12.2 14.4 4.0	底部 回転ヘラ削り	密、白色細砂微量。内面に黒色破裂粒。 良好。 灰褐色を基調とする。	無し	口縁部 ～体部 1部欠 失	燃-最終床 4G-2．6G-2	
208	杯身	12.2 — 4.1	横ナデ	白色細砂微量、内外面に黒色破裂粒。	無し	口縁部 ～底部 1/3残存	窯内　燃-最終床 4G-1	
209	杯身	12.3 14.6 3.8	自然釉の為不明	白色細砂微量、内外面に黒色破裂粒。 良好、2次焼成、焼き歪。 暗灰色を基調とする。	無し	口縁部 1/4欠失	窯内　燃-3G-2 4G-1,2 8G-2	

図版番号	器種	法量 口径 受部径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	ヘラ記号	残存度	出土地	備考
83図 210	杯身	12.4 14.3 4.1	底部 右回転ヘラ削り	白色細砂微量、内面に黒色破裂粒。 通有。 灰褐色を基調とする。	無し	ほぼ 完形	窯内　燃-3G-2 5G-2．6G-1	
211	杯蓋	13.6 — 4.0	天井部 右回転ヘラ削り	内面に黒色破裂粒。良好。 (内)灰褐色を基調とする。 (外)暗灰褐色を基調とする。	無し	1/4残存	窯内 燃-最終床	212とセット
212	杯身	— — —	自然釉の為不明	白色砂粒若干、内外面に黒色破裂粒。良好。灰褐色を基調とする。	無し	口縁部 2/3欠失	窯内 燃-最終床	211とセット
213	杯身	11.1 13.3 4.1	底部 右回転ヘラ削り	石英微量、白色細砂やや多量、内外面黒色破裂粒。良好。灰褐色を基調とする。	内面ヘラ痕	ほぼ 完形	窯内　燃-最終床 4G-1 6G-1,2	
214	杯身	11.2 — 4.4	底部 右回転ヘラ削り	白色細砂、内面に黒色破裂粒。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	無し	1/4欠失	窯内 燃-2G-1,2 3G-2	
215	杯身	11.2 13.5 4.3	自然釉の為不明	密。 良好、2次焼成。 黒灰褐色を基調とする。	無し	体部1 部欠失	燃-最終床 4G-1,2	
216	杯身	11.3 13.5 4.4	底部 右回転ヘラ削り	白色細砂、内外面に黒色破裂粒。 良好。 暗灰褐色を基調とする。	無し	完形	燃-最終床 3G-1,2．4G-1 5G-2	
217	杯身	11.4 13.5 4.6	自然釉の為不明	白色細砂、内面に黒色破裂粒。 通有。 灰褐色を基調とする。	無し	底部3/4 欠失	窯内 燃-4G-1 8G-2	
218	杯身	11.8 14.1 3.8	底部 右回転ヘラ削り	白色細砂、内面に黒色破裂粒。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	無し	ほぼ 完形	窯内 燃-4G-1,2 6G-1,2	
219	杯身	11.8 14.3 3.8	底部 右回転ヘラ削り	密、白色細砂微量、内外面に黒色破裂粒。 良好。 灰褐色を基調とする。	無し	体部1 部欠失	窯内 燃-4G-1,2 6G-2	
220	杯身	11.8 14.0 4.1	自然釉の為不明	密、白色細砂微量、内外面に黒色破裂粒。 良好。 暗灰褐色を基調とする。	無し	ほぼ 完形	窯内　燃-3G-2 4G-1,2 5G-1,2	
221	杯身	11.8 14.0 3.9	底部 右回転ヘラ削り	密、白色細砂微量、内外面に黒色破裂粒。 良好、外面に自然釉。 灰褐色を基調とする。	無し	ほぼ 完形	窯内 燃-3G-1 6G-1,2	
222	杯身	11.8 14.2 4.2	底部 右回転ヘラ削り	細砂微量、内外面に黒色破裂粒。 通有。 灰褐色を基調とする。	無し	口縁部 1/6欠失	窯内　燃-最終床 4G-1,2 3G-2．6G-1	
223	杯身	12.0 14.4 —	横ナデ	細砂微量、内外面に黒色破裂粒。 通有、2次焼成、焼き歪。 灰褐色を基調とする。	無し	底部 欠失	窯内　燃-最終床 3G-2．4G-1 6G-2	
224	杯身	12.0 14.4 —	底部 右回転ヘラ削り	白色細砂微量、内面に黒色破裂粒。 通有。 灰褐色を基調とする。	無し	1/2残存	窯内　燃-3G-1 6G-2．7G-2	
225	杯身	12.0 14.4 4.15	自然釉の為不明	白色細砂を少量含む、内面に黒色破裂粒。 良好。 灰褐色を基調とする。	無し	完形	窯内 燃-4G-1,2 6G-1,2	
226	杯身	12.0 — —	自然釉の為不明	白色砂粒微量、黒色破裂粒有。 良好。 灰褐色を基調とする。	無し	口縁部 1/2残存	燃-最終床 4G-2．6G-1	
84図 227	杯身	12.1 14.5 4.4	自然釉の為不明	白色細砂、内面に黒色破裂粒。 通有。 灰褐色～暗灰褐色を基調とする。	無し	ほぼ 完形	窯内 燃-3G-1,2 4G-2．5G-1 6G-1,2	
228	杯身	12.2 14.2 3.6	底部 右回転ヘラ削り	内面に黒色破裂粒。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	無し	ほぼ 完形	窯内　燃-最終床 3G-2．4G-2 5G-1．6G-1,2	
229	杯身	12.2 14.4 4.2	底部 右回転ヘラ削り	密、白色細砂微量、内面に黒色破裂粒顕著。 良好。 灰褐色を基調とする。	無し	ほぼ 完形	燃-6G-1,2	
230	杯身	12.2 14.5 4.5	底部 右回転ヘラ削り	白色細砂微量、内外面に黒色破裂粒。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	無し	ほぼ 完形	窯内　燃-最終床，3G-1 8G-1，4G-1,2,灰 5G-1，6G-1	

図版番号	器種	法量 口径 受部径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	ヘラ記号	残存度	出土地	備考
231	杯身	12.4 — —	自然釉の為不明	白色細砂微量、内外面に黒色破裂粒。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	無し	底部 欠失	窯内 燃-3G-1，2 4G-1．5G-2	
232	杯身	12.4 14.3 —	底部 右回転ヘラ削り	白色細砂少量、内面に黒色破裂粒。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	無し	ほぼ 完形	窯内　燃-4G-2 6G-1．8G-2	
233	杯身	12.4 15.2 4.5	自然釉の為不明	内面に黒色破裂粒。良好。 (内)灰褐色を基調とする。 (外)灰オリーブ色を基調とする。	無し	端部1 部欠失	窯内 燃-2G-1，2 6G-1	
234	杯身	12.4 14.6 3.8	自然釉の為不明	内面に白色細砂、口縁部外面に黒色破裂粒。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	無し	口縁部 1/3残存	燃-最終床 6G-1，2 8G-灰	
235	杯身	12.4 14.3 3.8	底部 右回転ヘラ削り	白色細砂。内面に黒色破裂粒。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	無し	ほぼ 完形	燃-最終床．3G-1 4G-1，2 5G-1．6G-2	
236	杯身	12.5 14.5 4.2	底部 右回転ヘラ削り	細粒微量、内外面に黒色破裂粒。 良好。 灰褐色を基調とする。	無し	ほぼ 完形	窯内　燃-最終床 3G-2．4G-1 6G-2	
237	杯身	12.5 14.2 3.5	底部 右回転ヘラ削り	白色細砂、内面に黒色破裂粒。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	無し	1/3欠失	窯内 燃-3G-1 5G-1	
238	杯身	12.5 14.2 3.5	底部 右回転ヘラ削り	砂粒ほとんど含まない。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	無し	1/2残存	窯内　燃-最終床 4G-1，2 6G-2	
239	杯身	12.6 14.6 3.7	底部 右回転ヘラ削り	白色砂粒微量含む、内外面に黒色破裂粒。 通有。 灰褐色を基調とする。	無し	1/2残存	燃-3G-灰 6G-1．8G-2	
240	杯身	12.8 15.0 3.5	自然釉の為不明	密、白色細砂微量、黒色破裂粒多量。 良好。 灰色を基調とする。	無し	ほぼ 完形	燃-6G-1，2	
241	杯身	13.0 15.0 3.8	自然釉の為不明	内面に黒色破裂粒。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	無し	ほぼ 完形	窯内 燃-最終床 4G-1，2	
242	杯身	11.9 14.1 —	横ナデ	白色細粒若干、黒色破裂粒。良好。 灰褐色を基調とする。	無し	口縁部 1/6残存	窯内	
243	杯身	11.8 14.8 —	横ナデ	黒色破裂粒、斜長石有。良好。 (内)灰褐色を基調とする。 (外)暗灰褐色を基調とする。	無し	口縁部 残存	窯内	
244	杯身	12.2 14.1 —	横ナデ	黒色破裂粒。良好。 灰褐色を基調とする。	無し	口縁部 残存	窯内	
85図 245	有蓋 高杯	12.5 — —	自然釉の為不明	細砂微量、良好、内外面に黒色破裂粒。 良好、2次焼成。 灰褐色を基調とするが自然釉の為黄褐色。		口縁部 若干欠 失脚部 1/2残存	窯内　燃-最終床 4G-1 6G-1，2	
246	高杯	9.6 — —	自然釉の為不明	細砂若干、黒色微粒やや多量。 堅緻にて良好、2次焼成。 灰褐色を基調とする。		脚端部 5/6欠失	燃-6G-1	
247	高杯	— — —	自然釉の為不明	細砂微量。 良好。 灰色を基調とする。		端部1 部残存	窯内　燃-4G-1 6G-1	
248	無蓋 高杯	11.7 — 4.1	横ナデ カキ目	細砂微量、良好。 堅緻にて良好、2次焼成。 暗灰色を基調とする。		杯部1/3 残存	燃-6G-1	
249	無蓋 高杯	14.7 — —	横ナデ カキ目	径0.1の細粒若干、細砂やや多量。良好、2次焼成。暗灰色を基調とするが自然釉の為黄褐色、暗灰色。		脚部 欠失	窯内 燃-3G-1，2 4G-1，2	
250	無蓋 高杯	— — —	横ナデ カキ目	白色細砂やや多量、良好。 堅緻にて良好。 暗灰色を基調とするが部分的に暗茶褐色。		底部、 脚上半 部残存	燃-3G-2 4G-1．5G-1	
251	高杯蓋	13.1 — 3.3	横ナデ カキ目	石英粒若干。 1部不良。 黄褐色～灰色を基調とする。		ほぼ 完形	窯内 燃-3G-1 4G-2	

図版番号	器種	法量 口径 受部径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	ヘラ記号	残存度	出土地	備考
252	高杯蓋	14.2 つまみ径2.9 4.2	横ナデ カキ目	径1.0弱の砂粒細粒やや多量、内外面に黒色破裂粒。通有、２次焼成。明灰色～暗灰色を基調とする。		ほぼ完形紐１部欠失	窯内　燃-３G-２ ５G-１，６G-１	
253	高杯蓋	14.1 — 4.5	横ナデ カキ目	細砂細粒若干、黒色微粒子やや多量。良好、２次焼成。灰褐色を基調とする。		完形	窯内 燃-３G-１，２ ５G-１，６G-２	
254	高杯蓋	14.2 — 3.6	横ナデ カキ目	細砂微量、黒色微粒子若干。良好、２次焼成。青灰色を基調とする。		1/3残存紐欠失	窯内 燃-３G-２	
255	瓶	12.4 — —	横ナデ 刺突文	細砂若干、黒色微粒若干。堅緻にて良好。灰褐色を基調とする。		口縁部1/4残存	窯内	
256	提瓶	— — —	カキ目	白色細砂若干。やや不良。短灰褐色を基調とする。		体部2/5残存	燃-最終床 ６G-１，２	
257	短頸壺蓋	12.8 — 3.8	自然釉の為不明	細砂若干。通有。暗灰色を基調とする。		ほぼ完形	窯内 燃-４G-１，２	
258	長頸壺蓋	9.3 — 2.7	付着物の為不明	砂粒若干。良好、２次焼成。明灰褐色～黒灰色を基調とする。		ほぼ完形	窯内 燃-最終床	
86図259	脚部	16.7 (脚部内径) —	横ナデ	白色細砂、斜長石粒、微量の角閃石粒。不良。灰白色を基調とする。		１部残存	燃-５G-灰	
260	甕	23.6 — —	横ナデ同心円当具痕	白色細砂。通有。灰褐色を基調とする。		口縁部１部残存	窯内	
261	甕	21.7 — —	回転カキ目 同心円 当具痕	白色細砂。通有。黒灰褐色を基調とする。		口縁部1/5残存	窯内	
262	甕	38.0 — —	ヘラ状工具による格子状施文 横ナデ	白色細砂。通有。暗灰褐色を基調とする。		口縁部1/5残存	窯内	
263	甕	36.8 — —	ヘラ状工具による格子状施文 カキ目	白色細砂。通有。暗灰褐色を基調とする。		口縁部破片	窯内	
264	甕	50.6 — —	櫛描平行文 木目直交平行タタキ　青海波文	白色細砂若干。良好。暗灰色を基調とする。		頸部口縁部１部残存	窯内 燃-２G-１ ４G-１	
87図265	杯蓋	13.0 — 3.5	天井部 右回転ヘラ削り	内外面に黒色破裂粒。良好。(内)灰褐色を基調とする。(外)暗灰褐色を基調とする。	(内)Ⅱ	口縁部2/3欠失	灰原 F-Ⅱ-７	
266	杯蓋	13.4 — —	天井部 右回転ヘラ削り	白色細砂若干、内外面に黒色破裂粒。良好。灰褐色を基調とする。	(内)Ⅱ	2/3残存	灰原 F-Ⅱ-７	
267	杯蓋	14.2 — 4.0	天井部 回転ヘラ削り	白色砂粒有、内面に黒色破裂粒。良好。(内)灰褐色を基調とする。(外)黒灰褐色を基調とする。	(内)Ⅱ	口縁部2/3欠失	灰原 F-Ⅱ-７ 最終灰-１	
268	杯身	10.4 12.8 3.3	底部 右回転ヘラ削り	白色細砂微量、口縁部外面に黒色破裂粒。通有。暗灰褐色を基調とする。	(内)Ⅱ	1/4残存	灰原 F-Ⅱ-７	
269	杯身	11.2 13.6 3.2	底部 右回転ヘラ削り	内外面口縁部に黒色破裂粒。通有。暗灰褐色を基調とする。	(内)Ⅱ	1/3残存	灰原 F-Ⅱ-７ F-Ⅱ-９	
270	杯身	11.2 13.5 3.6	底部 右回転ヘラ削り	内面に黒色破裂粒。通有。黒灰褐色を基調とする。	(外)Ⅱ	口縁部1/3残存	灰原 F-Ⅱ-７	
88図271	杯蓋	12.4 — 3.5	天井部 右回転ヘラ削り	白色細砂若干。良好。黒灰色を基調とする。	(外)外面ヘラ記号	口縁部1/6残存	灰原 F-Ⅱ-７	272とセット
272	杯身	11.4 — —	底部 右回転ヘラ削り	白色細砂。良好。黒灰色を基調とする。	(外)外面ヘラ記号	口縁部1/3残存	灰原 F-Ⅱ-７	271とセット

図版番号	器種	法量 口径 受部径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	ヘラ記号	残存度	出土地	備考
273	杯蓋	12.3 — 4.1	天井部 右回転ヘラ削り	内外面に黒色破裂粒。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	外面ヘラ記号	口縁部1/4残存	灰原 F-II-7	274とセット
274	杯身	11.2 13.6 3.9	底部 右回転ヘラ削り	内外面に黒色破裂粒。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	外面ヘラ記号	口縁部1/4残存	灰原 F-I-22 F-II-7	273とセット
275	杯蓋	13.0 — 3.7	天井部 右回転ヘラ削り	白色細粒若干。良好。 灰褐色を基調とする。	外面ヘラ記号	天井部及び口縁部の1部残存	灰原 F-II-2 F-II-7	
276	杯蓋	— — —	自然釉の為不明	石英若干。 通有。 暖灰色～淡灰色を基調とする。	外面ヘラ記号	天井部残存	灰原	
277	杯蓋	13.0 — 3.4	天井部 右回転ヘラ削り	内外面に黒色破裂粒。良好。 (内)灰褐色を基調とする。 (外)黒灰褐色を基調とする。	外面ヘラ記号	2/3残存	灰原 F-II-3 F-II-8	
278	杯身	11.4 13.0 3.2	底部 右回転ヘラ削り	内面に黒色破裂粒。 良好。 暗灰色を基調とする。	外面ヘラ記号	1/3残存	表採	
89図 279	杯蓋	13.2 — —	天井部 右回転ヘラ削り	白色細粒若干、内外面に黒色破裂粒。良好。灰褐色を基調とする。	無し	1/4残存	灰原 F-II-7	
280	杯蓋	13.2 — —	天井部 手持ヘラ削り	白色細粒、内面に黒色破裂粒。良好。 灰褐色を基調とする。	無し	1/5残存	表採	
281	杯蓋	13.4 — 4.0	天井部 回転ヘラ削り	内外面に黒色破裂粒。良好。 灰褐色を基調とする。	無し	口縁部5/6欠失	灰原 F-II-7 表採	
282	杯蓋	13.6 — —	天井部 右回転ヘラ削り	白色細粒若干有。良好。 淡灰褐色を基調とする。	無し	天井部及び口縁部2/3欠失	灰原 F-II-7 F-II-8 F-II-9	
283	杯蓋	12.6 — —	天井部 右回転ヘラ削り	自然釉の為不明。 良好。 灰褐色を基調とする。	無し	1/4残存	灰原 F-II-7	
284	杯蓋	13.6 — 4.4	天井部 右回転ヘラ削り	白色細粒若干、内外面に黒色破裂粒。良好。灰褐色を基調とする。	無し	1/3残存	灰原 F-II-7	
285	杯蓋	13.4 — 2.4	天井部 右回転ヘラ削り	白色細粒若干、内外面に黒色破裂粒。良好。灰褐色を基調とする。	内面ヘラ痕	1/3残存	灰原	
286	杯身	11.2 13.4 3.6	底部 右回転ヘラ削り	白色細砂微量、外面に黒色破裂粒。 通有。 灰褐色を基調とする。	無し	1/4残存	表採	
287	杯身	11.2 14.0 4.1	底部 右回転ヘラ削り	白色細砂。 通有。 灰褐色を基調とする。	無し	口縁部1/3残存	灰原 F-II-3 F-II-8	
288	杯身	11.2 13.2 —	底部 右回転ヘラ削り	———。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	無し	口縁部1/3残存	灰原 F-II-2 F-II-7	
289	杯身	11.6 14.0 —	底部 右回転ヘラ削り	口縁部外面に黒色破裂粒若干。 良好。 黒灰褐色を基調とする。	無し	口縁部1/2残存	灰原 F-II-2	
290	杯身	— — 3.9	底部 右回転ヘラ削り	白色細砂微量、内外面に黒色破裂粒。 通有。 灰褐色を基調とする。	無し	口縁部1部残存	灰原 F-II-3	
291	杯身	12.8 — 3.6	底部 回転ヘラ削り	白色砂粒若干、黒色破裂粒。 良好。 暗灰褐色を基調とする。	無し	1/4残存	灰原	
292	杯身	12.0 16.4 3.95	底部 右回転ヘラ削り	内面に黒色破裂粒。 通有。 暗灰褐色を基調とする。	無し	口縁部1/4残存	灰原 F-II-7	
90図 293	高杯蓋	14.0 — 4.6	横ナデ カキ目	白色細粒若干、内外面に黒色破裂粒。良好。灰褐色を基調とする。		1/3残存	灰原 F-II-8	

図版番号	器種	法量 口径 受部径 器高	整形・調整手法の特徴	胎土・焼成・色調	ヘラ記号	残存度	出土地	備考
294	高杯蓋	— — —	横ナデ カキ目	内外面に黒色破裂粒。良好。 (内)灰褐色を基調とする。 (外)赤灰褐色を基調とする。		1/4残存	灰原 F-II-3 F-II-7	
295	高杯蓋	— — —	天井部 右回転ヘラ削り	内外面に黒色破裂粒。良好。 (内)褐色を基調とする。 (外)灰褐色を基調とする。		1/4残存	灰原 F-II-7 表採	
296	無蓋高杯	10.0 — —	自然釉の為不明	内外面に黒色破裂粒、内面に自然釉付着。良好。 灰褐色を基調とする。		破片	灰原 F-II-7	
297	無蓋高杯	— — —	自然釉の為不明	内面に黒色破裂粒、内外面に自然釉。良好。灰褐色を基調とする。		破片	灰原 F-II-3	
298	短頸壺	— — —	横ナデ 平行タタキ 同心円当具痕	白色細砂微量、黒色破裂粒有。 通有。 暗灰色を基調とする。		口縁部1部残存上半部1/3残存	灰原 F-I-22	
299	脚部	内径30.2 外径32.5 (脚部)	自然釉の為不明	白色細砂。 通有。 灰褐色を基調とする。		脚部1/6残存	表採	
300	甕	24.0 — —	横ナデ	白色細砂。 通有。 暗灰褐色を基調とする。		破片	灰原 F-II-2	
301	甕	13.8 — —	横ナデ	白色細砂。 通有。 暗灰褐色を基調とする。		口縁部1/4残存	灰原 F-I-22	
302	甕	— — —	横ナデ	白色細砂。通有。 (内)灰褐色を基調とする。 (外)黒灰色を基調とする。		破片	灰原 F-II-8	
303	甕	— — —	櫛描波状文 横ナデ	白色細砂。通有。 (内)暗灰褐色を基調とする。 (外)橘褐色を基調とする。		口縁部1部残存	灰原	